山梨県韮崎市

坂井南遺跡Ⅲ

東京エレクトロン株式会社進入道路建設にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書

1997

韮崎市教育委員会
韮崎市遺跡調査会
東京エレクトロン株式会社

山梨県韮崎市

坂井南遺跡Ⅲ

東京エレクトロン株式会社進入道路建設にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書

1997

韮崎市教育委員会
韮崎市遺跡調査会
東京エレクトロン株式会社

序　文

韮崎市では、公共事業などの大規模開発、また民間開発や宅地造成による発掘調査にともない、数多くの遺跡が発掘調査されて、貴重な埋蔵文化財が年々増加しております。

この度発刊された本報告書は、そのようななかで民間開発にかかり平成4・5・7年度に発掘調査された坂井南遺跡の報告であります。

坂井南遺跡は、多くの歴史遺産がある七里岩台地上にあり、広大な遺物包蔵地として知られる坂井遺跡の南に位置しております。遺跡の時代は古墳時代前期で、竪穴式住居や方形周溝墓が数多く発見されています。これまでの３次にわたる調査もふくめると、当時の集落の景観・墓制のありかたなどがうかがえる貴重な発見となっています。

遺跡は文化遺産として永く後世に伝えていかなければならないものであり、報告書はそれらの文化財を記録にとどめたものです。本書がわれわれの先人の生活と歴史を解き明かすための手助けになればと願っております。

末筆ですが、遺跡の発掘調査ならびに報告書作成に伴い、多大なる御理解と御協力を賜った関係諸機関および関係者の皆様方に深く感謝を申し上げます。

平成９年３月３１日

韮崎市遺跡調査会　　韮崎市教育委員会

会長 秋山幸一　　教育長 口野道男

例　　言

1．本書は、山梨県韮崎市藤井町北下条字大原に位置する坂井南遺跡の発掘調査報告書である。

2．本調査は東京エレクトロン株式会社の進入道路建設工事に伴う事前調査であり、会社からの委託を受け、韮崎市遺跡調査会により、過去数次にわたって調査が実施されたものである。

3．今回ここに報告するのは第４次（平成４年）・第５次（平成５年）・第６次（平成７年）の調査成果である。各調査年次の調査組織は別に示すとおりである。

4．発掘調査・出土品等の整理は第４・５次調査を韮崎市教育委員会社会教育課山下孝司が、第６次調査を韮崎市遺跡調査会調査員伊藤正彦がそれぞれ行った。

5．本書の編集は山下孝司の総括のもと伊藤正彦がそれを補助し、執筆については第Ⅰ章，第Ⅵ章を山下が、第Ⅱ章，第Ⅴ章第２節を伊藤が、第Ⅲ，Ⅳ章については調査担当者が執筆・作成した。なお、遺構等の説明に関して細かな点については表現上の統一は行っていない。

6．本書にたいして下記の方々より玉稿を頂戴した深甚より感謝申し上げたい。

第Ⅴ章第１節　小林健二（山梨県埋蔵文化財センター）

第Ⅴ章第３節　赤塚次郎（愛知県埋蔵文化財センター）

7．石器の石材鑑定では山梨地学会副会長　樋口　正氏のお手を煩わせた。記して感謝申し上げたい。

8．発掘調査及び報告書作成に際して、多くの方々から御指導・御協力を頂いた。一々御芳名を上げることは遺漏あることを怖れ、避けさせて頂くが厚く御礼申し上げる次第である。

9．航空写真測量は株式会社シン航空写真に委託した。

10．本報告書にかかわる出土品及び記録図面、写真などは一括して韮崎市教育委員会に保管してある。

凡　例

1．本書の挿図縮尺は、各挿図ごとに示した。

2．遺構断面図の水糸レベルは海抜高（m）を示す。なお、穴内の数字は深さを表わす。

3．挿図断面図の ▨ は石をあらわす。

4．住居址実測図、写真図版の遺物番号は、挿図中の番号と対応する。

5．遺構番号は当初各調査ごとに発掘現場で付けたが、本書編集の段階で調査年次順に通し番号にした。

6．本書で用いるスクリーントーンは以下の通りである。

遺構実測図中ドットは焼土の範囲、土器実測図中アミは赤彩部分を表示している。

目　次

序　　文
例言・凡例
目　　次
挿図目次
図版目次
写真図版目次

第Ⅰ章　発掘調査の経緯と概要 …… 1
　第１節　発掘調査に至る経緯 …… 1
　第２節　発掘調査の概要 …… 1
　第３節　調査組織 …… 2

第Ⅱ章　遺跡の概観 …… 4
　第１節　地理的環境 …… 4
　第２節　周辺の遺跡と歴史的環境 …… 5

第Ⅲ章　遺　構 …… 11
　第１節　住　居 …… 11
　第２節　周溝墓 …… 39
　第３節　その他の遺構 …… 48

第Ⅳ章　遺　物 …… 53

第Ⅴ章　考　察 …… 105
　第１節　坂井南遺跡出土土器について …… 105
　第２節　坂井南集落－藤井平から七里岩台地へ－ …… 114
　第３節　山梨県韮崎市坂井南遺跡の東海系文化から …… 117

第Ⅵ章　まとめ …… 123
写真図版

挿　図　目　次

図　坂井南遺跡第４次～第６次調査部分 …… 3
第１図　坂井南遺跡①と周辺の遺跡 …… 8
第２図　坂井南遺跡調査位置図 …… 9
第３図　坂井南遺跡第4次～第6次調査全体図 …… 10
第４図　１号住居址遺物出土状態 …… 11
第５図　１号住居址平・断面図 …… 12
第６図　２号住居址平・断面図 …… 13
第７図　３号住居址平・断面図 …… 14
第８図　４号住居址平・断面図 …… 15
第９図　５号・６号住居址平・断面図 …… 17
第10図　７号住居址平・断面図 …… 18
第11図　８号住居址平・断面図 …… 18
第12図　９号住居址平・断面図 …… 19
第13図　10号住居址平・断面図 …… 20
第14図　11号住居址平・断面図 …… 22
第15図　12号住居址平・断面図 …… 23
第16図　12号住居址遺物出土状態 …… 24
第17図　12号住居址炉平・断面図 …… 24
第18図　13号住居址平・断面図 …… 25
第19図　14号住居址平・断面図 …… 26
第20図　14号住居址遺物出土状態 …… 27
第21図　14号住居址炉平・断面図 …… 27
第22図　15号住居址・６号溝平・断面図 …… 29
第23図　16号住居址平・断面図 …… 30
第24図　17号住居址平・断面図 …… 31
第25図　18号住居址平・断面図 …… 33
第26図　19号住居址平・断面図 …… 34
第27図　20号住居址平・断面図 …… 35
第28図　21号住居址平・断面図 …… 36
第29図　22号住居址平・断面図 …… 37
第30図　23号住居址平・断面図 …… 38
第31図　１号周溝墓平・断面図 …… 40
第32図　２号周溝墓平・断面図 …… 41
第33図　３号周溝墓平・断面図 …… 42
第34図　４号周溝墓平・断面図 …… 43
第35図　４号周溝墓遺物出土状態 …… 44
第36図　５号周溝墓平・断面図 …… 45
第37図　６号周溝墓平・断面図 …… 46
第38図　７号周溝墓平・断面図 …… 47
第39図　１号・２号溝平・断面図 …… 49
第40図　３号溝平・断面図 …… 50
第41図　４号・５号溝平・断面図 …… 51
第42図　７号・８号溝平・断面図 …… 52
第43図　１号土坑・断面図 …… 52
第44図　１号住居址出土遺物 …… 65
第45図　２号住居址出土遺物 …… 66
第46図　５号住居址出土遺物 …… 66
第47図　６号住居址出土遺物 …… 66
第48図　６号住居址出土遺物 …… 67
第49図　７号住居址出土遺物 …… 67
第50図　８号住居址出土遺物 …… 68
第51図　９号住居址出土遺物 …… 68
第52図　10号住居址出土遺物 …… 68
第53図　10号住居址出土遺物 …… 69
第54図　11号住居址出土遺物 …… 69
第55図　11号住居址出土遺物・土製品・石器 …… 70
第56図　12号住居址出土遺物 …… 70
第57図　12号住居址出土遺物 …… 71
第58図　12号住居址出土遺物・土製品 …… 72
第59図　12号住居址出土石器 …… 73
第60図　13号住居址出土遺物 …… 74
第61図　14号住居址出土遺物 …… 74
第62図　14号住居址出土遺物・石器 …… 75
第63図　15号住居址出土遺物 …… 76
第64図　16号住居址出土遺物 …… 76
第65図　17号住居址出土遺物・土製品 …… 77
第66図　18号住居址出土遺物・石器 …… 77
第67図　19号住居址出土遺物・石器 …… 78
第68図　20号・22号住居址出土遺物 …… 78
第69図　22号住居址出土石器 …… 79
第70図　23号住居址出土遺物 …… 79
第71図　１号周溝墓出土遺物 …… 79
第72図　２号周溝墓出土遺物 …… 91
第73図　２号周溝墓出土遺物 …… 92
第74図　２号周溝墓出土遺物・石器 …… 93
第75図　３号周溝墓出土遺物 …… 93
第76図　４号周溝墓出土遺物 …… 94
第77図　４号周溝墓出土遺物 …… 95
第78図　４号周溝墓出土遺物 …… 96
第79図　４号周溝墓出土遺物 …… 97
第80図　４号周溝墓出土遺物 …… 98
第81図　５号周溝墓出土遺物 …… 99
第82図　６号周溝墓出土遺物 …… 99
第83図　７号周溝墓出土遺物 …… 100
第84図　３号溝出土遺物 …… 103
第85図　６号溝出土遺物 …… 103
第86図　７号溝出土遺物 …… 103
第87図　８号溝出土遺物 …… 104
第88図　遺構外出土遺物 …… 104
第89図　坂井南遺跡住居址出土土器
　　主要器種変遷図 …… 109
第90図　坂井南遺跡全体図 …… 115
第91図　東海系のトレース
　　（Ｓ字甕Ａ類新段階と東海系と
　　銅鏃である多孔銅鏃の分布） …… 122

写 真 図 版 目 次

図版１　１号住居址、２号住居址、３号住居址

図版２　４号住居址、５号・６号住居址、７号住居址

図版３　８号住居址、９号住居址、10号住居址

図版４　遺跡近景、11号住居址、12号住居址

図版５　12号住居址遺物出土状態、13号住居址、発掘風景

図版６　14号住居址、14号住居址遺物出土状態

図版７　15号住居址・６号溝、16号住居址、17号住居址

図版８　18号住居址、19号住居址、21号住居址

図版９　22号住居址、23号住居址、遺跡近景

図版10　１号周溝墓、２号周溝墓遺物出土状態、２号周溝墓

図版11　３号周溝墓、４号周溝墓、５号周溝墓・３号溝

図版12　４号周溝墓遺物出土状態

図版13　遺跡近景、６号周溝墓、７号周溝墓・７号溝・８号溝

図版14　１号溝、２号溝、４号・５号溝、１号土坑、測量風景

図版15　１号住居址出土遺物、２号住居址出土遺物、５号住居址出土遺物、７号住居址出土遺物

図版16　８号住居址出土遺物、９号住居址出土遺物、10号住居址出土遺物、11号住居址出土遺物

図版17　12号住居址出土遺物、15号住居址出土遺物、16号住居址出土遺物、17号住居址出土遺物、18号住居址出土遺物、19号住居址出土遺物

図版18　14号住居址出土遺物、22号住居址出土遺物、23号住居址出土遺物

図版19　１号周溝墓出土遺物、２号周溝墓出土遺物

図版20　４号周溝墓出土遺物

図版21　４号周溝墓出土遺物、５号周溝墓出土遺物、６号周溝墓出土遺物、７号周溝墓出土遺物、遺構外出土遺物

図版22　遺跡空中写真

第Ⅰ章　発掘調査の経緯と概要

第１節　発掘調査に至る経緯

坂井南遺跡は、昭和57年(1982)に当時株式会社テルメックの変電所建設に伴い初めて本格的に発掘調査が行われたことに端を発し、その後東京エレクトロン株式会社の工場拡張・福利厚生施設建設並びに駐車場整備に伴い昭和58年・60年に大規模な発掘調査が実施された。これら調査の成果は、昭和59年８月１日に第１次・２次を『坂井南遺跡』、昭和63年３月31日に第３次を『坂井南』と題して報告書にまとめられている。今回の報告書は平成４年(1992)・５年・７年に東京エレクトロン株式会社の進入道路建設にかかり調査されたものである。

平成３年11月東京エレクトロン株式会社より進入道路建設にかかり、埋蔵文化財に関して韮崎市教育委員会に紹介があった。当該地域は昭和60年に発掘調査を実施した駐車場の道路を挟んだ東側にあたり、昭和58年には一部試掘が行われ、当然遺跡の存在が予想されたので、試掘調査を実施することになった。試掘調査は、平成３年11月25日～12月６日に行い、遺物の出土や遺構が確認され遺跡の存在が明らかになり、本調査必要の旨を会社側に伝えた。発掘調査を実施するにあたり会社と市教育委員会で協議を行い、調査主体を韮崎市遺跡調査会として調査を行い記録に留め永く後世に伝えることとした。

発掘調査は、平成４年５月25日～10月22日（第４次）に県道から西側の長さ約120mの範囲を行い、翌平成５年にその西側の長さ約60mを実施することになった。しかし、平成５年４月５日から入った調査（第５次）は、会社側の設計で道路の予定路線が変更されることになり西側の長さ約30mの範囲を部分的に掘ったのみで４月27日に一旦調査を中断した。会社側から再び調査の依頼があったのは平成７年４月13日であった。この時の計画では道路建設にあわせて周辺の駐車場整備が盛り込まれていたので、４月19日に山梨県学術文化課と会社と市教育委員会の三者で協議をし駐車場に関しては土盛りにより遺跡の埋没保存を行うこととし、道路部分の発掘調査を実施することになった。調査は平成７年８月７日～10月４日（第６次）に行った。整理作業は平成８年度内において行った。

第２節　発掘調査の概要

第４次調査　平成４年５月25日～10月22日。

調査は長さ約120m面積約2400m²の範囲を、まず重機により厚さ20～40cmの耕作土を排土し、測量の基準として地形を考慮し任意に東西方向に５m方眼を設定し、ローム土層面を鋤簾等により遺構確認の後、掘り下げを行った。また随時遺構確認用補助的試掘溝を設定し掘り下げを行い調査を実施した。遺構の掘り下げは調査区域西側から掘りはじめ、東側へと進んだ。

第５次調査　平成５年４月５日～４月27日

基本的に第４次調査と同様に、調査区域内を重機によって耕作土を排土し、５m方眼を設定し、ローム土層面を鋤簾等により遺構確認の後、随時補助的試掘溝を設定し掘り下げを行った。調査区域西側から掘りはじめ、約360m²の範囲で竪穴住居址３軒を掘り下げたところで中断した。

第６次調査　平成７年８月７日～10月４日

調査は長さ70m、幅15m、面積約1000m²の範囲を、まず重機によりバラス・旧耕作土を排除し、以下を人力で掘り下げていった。遺構確認作業は土色の識別が困難だったため、約３～５m間隔に16本のトレンチを南北方向に西側から設定して、順次東下して遺構確認につとめた。調査区域西側と東側では遺構の重複が顕著であり、遺構の検出が困難であった。

遺構は、第４次調査では古墳時代前期の竪穴住居址７軒、方形周溝墓５基、溝状遺構４条が発見された。第５次調査では古墳時代前期の竪穴住居址３軒が発見された。第６次調査では古墳時代前期の竪穴住居址13軒、方形周溝墓３基（うち１基は第５次調査時に東側3/4を発掘済み）などが発見された。

第３節　調査組織

第４次調査

①　調査主体　韮崎市遺跡調査会

②　調査担当　山下孝司（韮崎市教育委員会社会教育課）

③　調査参加者

岡本嘉一・小沢治代・小沢千代子・小田切昭子・小沢久江・長島昌子・小田切絹江・小沢高恵・岡本保枝・小沢栄子・志村冴子・五味ゆき子・石原ひろみ・有賀京子・三井福江・清水由美子・深沢真知子・小野初美・作地秀二

④　事務局　韮崎市教育委員会社会教育課

教育長　功刀幸丸、課長　福田国夫、課長補佐　長野栄太、係長　深沢義文、筒井清重・雨宮智子

第５次調査

①　調査主体　韮崎市遺跡調査会

②　調査担当　山下孝司（韮崎市教育委員会社会教育課）

③　調査参加者

岡本嘉一・小沢治代・小沢千代子・小田切昭子・小沢三千子・小沢久江・長島昌子・小田切絹江・小沢高恵・岡本保枝・小沢栄子・志村冴子・五味ゆき子・石原ひろみ・有賀京子・三井福江・清水由美子・深沢真知子・小野初美・青山みち枝

④　事務局　韮崎市教育委員会社会教育課

教育長　秋山利良、課長　福田国夫、課長補佐　長野栄太、係長　中嶋尚夫、野口文香・梅川昭代

第６次調査

①　調査主体　韮崎市遺跡調査会

②　調査担当　伊藤正彦（韮崎市遺跡調査会）

③　調査参加者

岡本嘉一・小沢治代・小沢千代子・小田切昭子・小田切絹江・小沢高恵・岡本保枝・小沢栄子・五味ゆき子・志村冴子・乙黒きくゑ・大柴欣子・上野理江・阿部由美子・平賀えみ子・樋口浩子

④　事務局　韮崎市教育委員会社会教育課

教育長　志村良典、課長　深谷　卓、課長補佐　深沢義文、係長　内藤晴人、野口文香

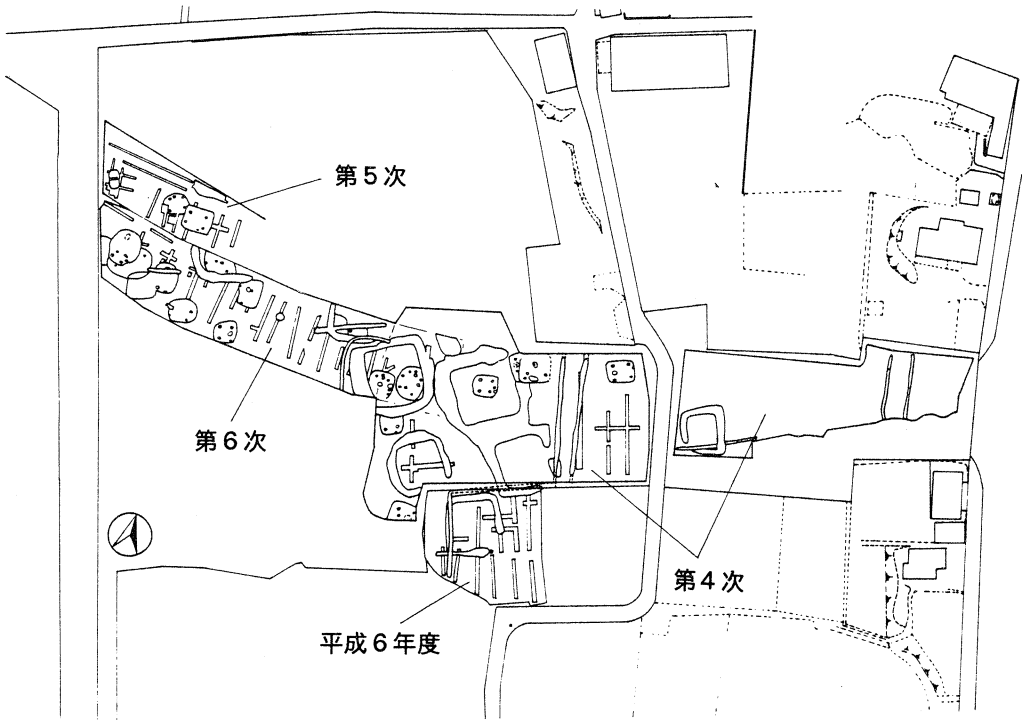


図　坂井南遺跡第４次～第６次調査部分（1/1500）

第II章　遺跡の概観

第１節　地理的環境

坂井南遺跡は山梨県韮崎市藤井町北下条字大原地内に位置する。

韮崎市は山梨県の北西部、甲府市より北西12kmのところに位置し、南東側は三角形をした甲府盆地の一角にあたる。西側には南アルプスの前衛巨摩山地が走り、東側には秩父山地の前衛茅ヶ岳から続く緩やかな裾野が穂坂丘陵として広大な広がりを見せている。北側は八ヶ岳から韮崎まで30kmに及ぶ韮崎台地があり、その先端は舌状の台地となり本市中心にまで達している。この台地をはさんで東側には秩父山地から塩川が、西側には南アルプスに源を発す釜無川が南流し、本市南側にて合流し甲府盆地へ向かって流れ出している。このように韮崎市は西・東・北の三方を山で囲まれ、南には平野が開けた地理的環境にある。

遺跡立地の地形は大きく台地上と比較的低地となる河岸段丘上に分けられる。具体的には４地域をあげられる。(1) 茅ヶ岳南麓の穂坂丘陵、(2) 塩川右岸の河岸段丘上、通称藤井平と呼ばれる地域、(3) 本市中央部にある韮崎台地、通称「七里岩」と呼ばれ釜無川・塩川の両河川に挟まれた細長い台地上、(4) 釜無川右岸の河岸段丘上である。

坂井南遺跡はこのうち(3)の韮崎台地上に位置する。韮崎台地はあたかも甲府盆地に楔を打ち込むかのように、八ヶ岳から本市の中央部まで延長30km以上に及ぶ。この台地は八ヶ岳の山体崩落期の韮崎岩屑流の活動により形成されたものであり、遠く甲府盆地南側の曽根丘陵から鰍沢町付近まで及んでいたという。やがて台地両側を流れる釜無川・塩川によって侵食が進み、現在では釜無川左岸に高さ40～150m、塩川右岸で60～100mを測る断崖となっている。台地上には「流れ山」と呼ばれる直径100～150m、比高20～150mの円頂丘が点在する特異な地形があり、武田家最後の居城として知られる新府城はこうした「流れ山」を利用して築かれている。台地上には久保（窪）・沢と呼ばれる地名もあり湧水が豊かで古くから集落が発達している。

遺跡周辺は西側が急崖、北側は沢となり、更にその北側に坂井の集落が発達する。東側へは漸次傾斜し、南側は新興住宅地となっている。初めてこの遺跡に組織的調査のメスが入れられた十数年前、遺跡周辺は桑園と果樹園が広がる長閑かな農村風景であったが、現在では新興住宅地となりその様相が一変している。遺跡はこの台地の先端近くの微高地上に位置し、釜無川と塩川の結節点に位置するとともに、眼下にはかつて「藤井五千石」と称されたほど肥沃な穀倉地帯であった藤井平が、また晴れた日には遠く甲府盆地が一望できる。

第２節　周辺の遺跡と歴史的環境

近年、韮崎市では公共事業・民間開発事業等に伴って、遺跡調査の必要に迫られている。市内では縄文～中近世に至るまでの遺跡が確認されている。ここでは七里岩台地上・藤井平・釜無川右岸と市内３地区について各々時代順に見てみる。

七里岩台地上では特に学史的に著名で、本遺跡の遺跡名の由来ともなった坂井遺跡②がまずあ

げられる。坂井遺跡は大正14年の土器発見を契機として昭和31年まで故志村滝蔵氏を中心に地道な発掘調査が実施され、現在出土品は坂井考古館に保存展示されている。また坂井遺跡の北側に位置する天神前遺跡③も同様に志村滝蔵氏によって調査されたものであるが、縄文前期後半諸磯期を中心とした遺物が出土している。更に山梨県埋蔵文化財センターによって調査された宿尻遺跡⑩からは中期から後期にかけての遺物が大量に出土している。かつて昭和初年に行われた県道（現在の穴山停車場線）工事中に完形の土器が見つかった穴山小学校前遺跡⑪とは本来同一の遺跡になるであろう。縄文時代では他に中条上野１遺跡⑤・中条上野２遺跡⑥・伊藤窪第２遺跡⑧がある。古墳時代では坂井南遺跡①の他に伊藤窪第２遺跡・宿尻遺跡から住居址の検出がある。平安時代では坂井南遺跡から住居址の検出が、宿尻遺跡から遺物の出土が見られる。中世では武田氏最後の居城として有名な新府城④を始め、武田氏の北方の防衛拠点とされた能見城⑦、他に堂ヶ坂の砦⑨・重久の烽火台⑫などがある。いずれも前述したこの台地に特有の「流れ山」を利用して築かれている。

最も組織的調査のメスが入れられている藤井平では縄文時代前期後半から平安時代・中世までの住居址が検出されている。藤井平で人々の生活の痕跡が確実に確認できるのは縄文時代前期後半～末である。宮ノ前遺跡㊳では前期末住居址１軒と土坑が、上本田遺跡㊽でも前期末住居址が検出されている。山影遺跡㉖では中期初頭五領ヶ台式期の住居址が２軒発見されている。中期後半曽利式期は後田㉞、北後田㊱、中田小学校遺跡㊹などから住居址や配石遺構の検出がある。後期では称名寺～堀之内期の住居址３軒が宮ノ前遺跡から発見されている。中本田遺跡㊼からは後期を中心として晩期までの土器が出土している。晩期では住居址１軒が発見された中道遺跡㊺、及び溝状遺構から縄文晩期～弥生前期にかけての土器が多数出土した宮ノ前遺跡がある。弥生時代では宮ノ前遺跡から弥生前期の水田を検出している。弥生時代後期になると遺跡数の増加が見られ、北下条遺跡㉘で住居址１軒、沢を挟んでその反対側に位置する下横屋遺跡㉙で８軒、後田第２遺跡㉚で６軒、後田堂ノ前遺跡㉛で５軒、堂の前遺跡㉟で４軒、中田小学校遺跡で３軒の検出がある。いずれも櫛描波状文を主体とした土器が出土しているが、東海地方の影響を受けたものも見られる。古墳時代では前期の住居址を検出した後田遺跡、立石遺跡㊶がある。また、七里岩台地上には今回報告する坂井南遺跡が展開しており、藤井平が大きな生産基盤となっていたことが窺われる。古墳時代中期では現在の塩川段丘崖近く、藤井町相垈に住居址２軒を検出した枇杷塚遺跡㉗がある。地下水位が高く、調査時には次々に水が湧き出す遺跡であった。古墳時代後期では後田堂ノ前遺跡から住居址が３軒、また道路を挟んで反対側に位置する坂井堂ノ前遺跡㉜からも住居址２軒が検出されており、次段階への土器変遷を把握するのに良好な遺跡となろう。両遺跡から南方300mに位置する後田第２遺跡からも住居址６軒を検出しており、坏・甕など当該期の良好な資料がある。最後に後期古墳と思われる火雨塚古墳㉝がある。地元藤井町にはこの古墳に関する伝承が伝わっており、それによるとかつてこの周辺には群をなして「つか」が存在したことが窺われるが、現在残っているのはこの１基のみである。現状では墳丘の盛土は失われ

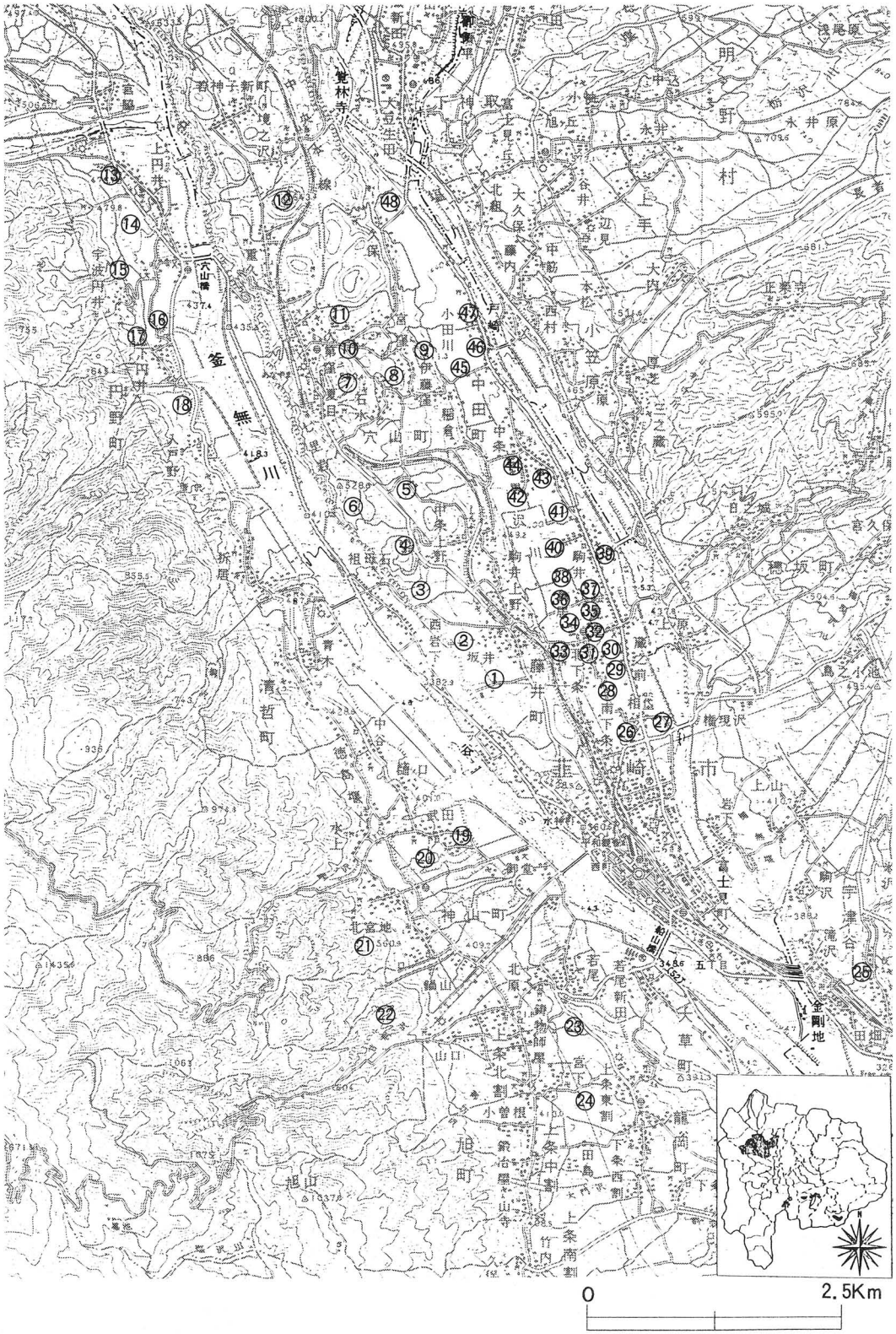
石室の石が一部残るのみである。奈良・平安時代では爆発的な住居址の増加がみられ宮ノ前遺跡の竪穴住居址417軒・掘立柱建物址54棟を始め、北後田遺跡の52軒、中田小学校遺跡の18軒、堂の前遺跡の16軒、他に北下条遺跡、下横屋遺跡、坂井堂ノ前遺跡、後田遺跡、立石遺跡、宮ノ前第３遺跡㊲、駒井遺跡㊴、宮ノ前第２遺跡㊵、前田遺跡㊸、下木戸遺跡㊻など多くの遺跡から住居址の検出がある。また宮ノ前第２遺跡からは仏堂と考えられる掘立柱建物址が検出され瓦塔や鬼瓦片が、宮ノ前第３遺跡からは県内初の漆紙文書が出土している。中世では中田小学校遺跡から住居址３軒が検出されている。他に金山遺跡㊷などもある。また蔵の前塁址、殿田屋敷、相垈塁址、三光寺塁址などの館跡も知られている。

釜無川右岸の河岸段丘上には縄文時代中期初頭の五領ヶ台式土器が出土した宇波円井遺跡⑮、住居址22軒が検出され縄文時代前期後半諸磯期から晩期までの土器が出土している石之坪遺跡⑭、縄文中期の住居址３軒を検出した北堂地遺跡⑬、縄文後期の土器が主体的に出土した新田遺跡⑳がある。弥生時代では遺構に伴わないものの二反田遺跡⑯、新田遺跡、大輪寺東遺跡㉔から土器の出土が見られる。古墳時代では、初めてこの釜無川右岸の河岸段丘上に組織的調査のメスが入れられ、住居址４軒が検出された久保屋敷遺跡㉓がある。平安時代では住居址６軒を検出した新田遺跡、住居址２軒を検出した大輪寺東遺跡、住居址２軒と水田址が検出された二反田遺跡等がある。中世から戦国時代にかけては先の大輪寺東遺跡の調査で溝等で囲まれた建物群の存在や、各種の陶磁器類や漆製品が出土し居館の存在が確認されている。戦国武将武田氏の家臣甘利氏の居館が文献資料などにより有力ではあるが断定にまで到っていない。その北方には市指定史跡武田信義館跡⑲がある。武田信義館跡から南西に約1.3kmには武田信義の要害城といわれる白山城㉑がある。このように本遺跡の周辺には、縄文時代から中世の館跡・城郭まで多数の遺跡が存在する。

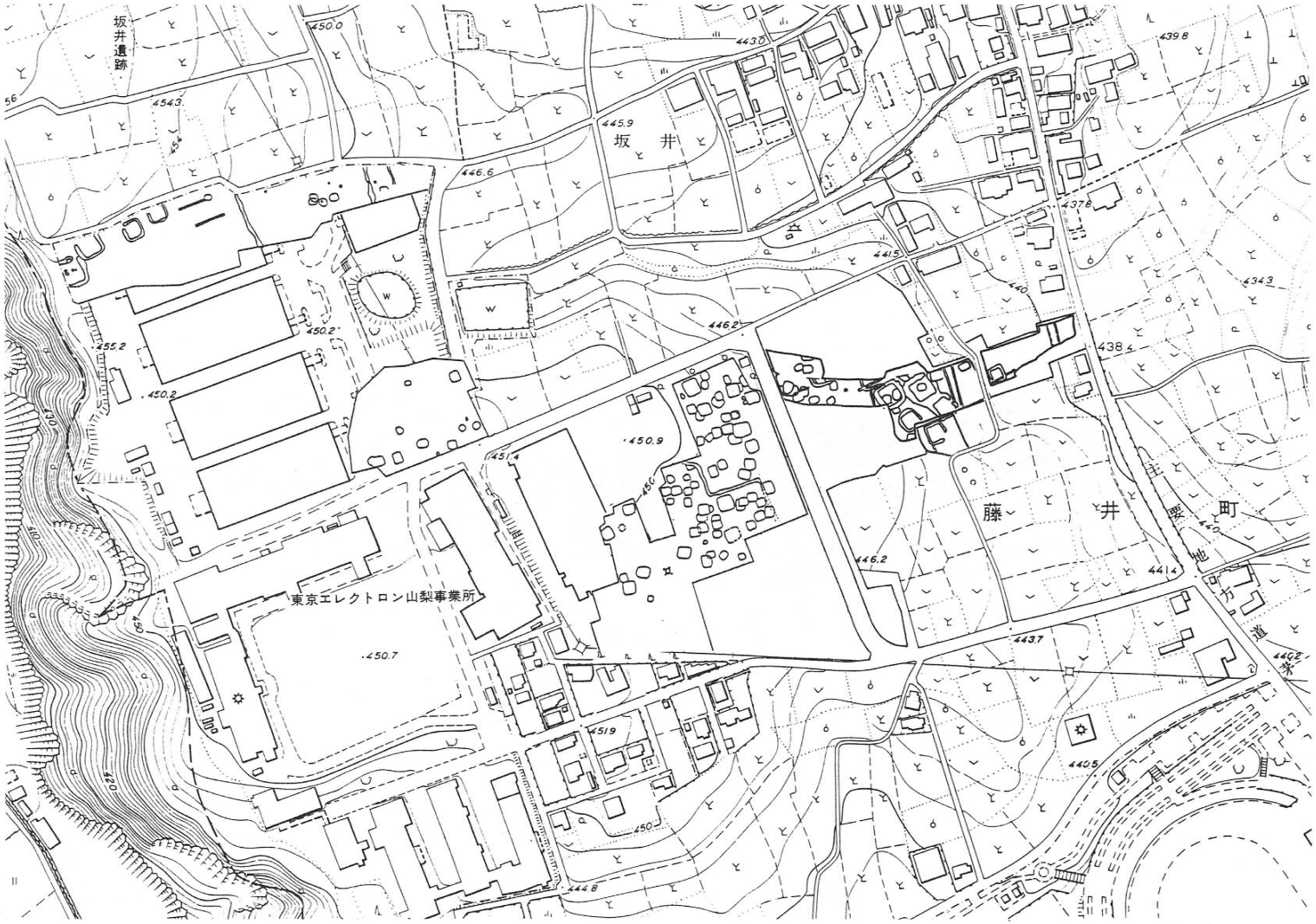
第１図中に示した遺跡の内訳は、以下のごとくである。

① 坂井南遺跡　（縄文中期、古墳前期、平安）
② 坂井遺跡　（縄文前期～中期）
③ 天神前遺跡　（縄文）
④ 新府城　（中世）
⑤ 中条上野１遺跡　（縄文）
⑥ 中条上野２遺跡　（縄文）
⑦ 能見城　（中世）
⑧ 伊藤窪第２遺跡　（縄文、古墳、中世）
⑨ 堂ヶ坂の砦　（中世）
⑩ 宿尻遺跡　（縄文、古墳、平安）
⑪ 穴山小学校遺跡　（縄文）
⑫ 重久の烽火台　（中世）

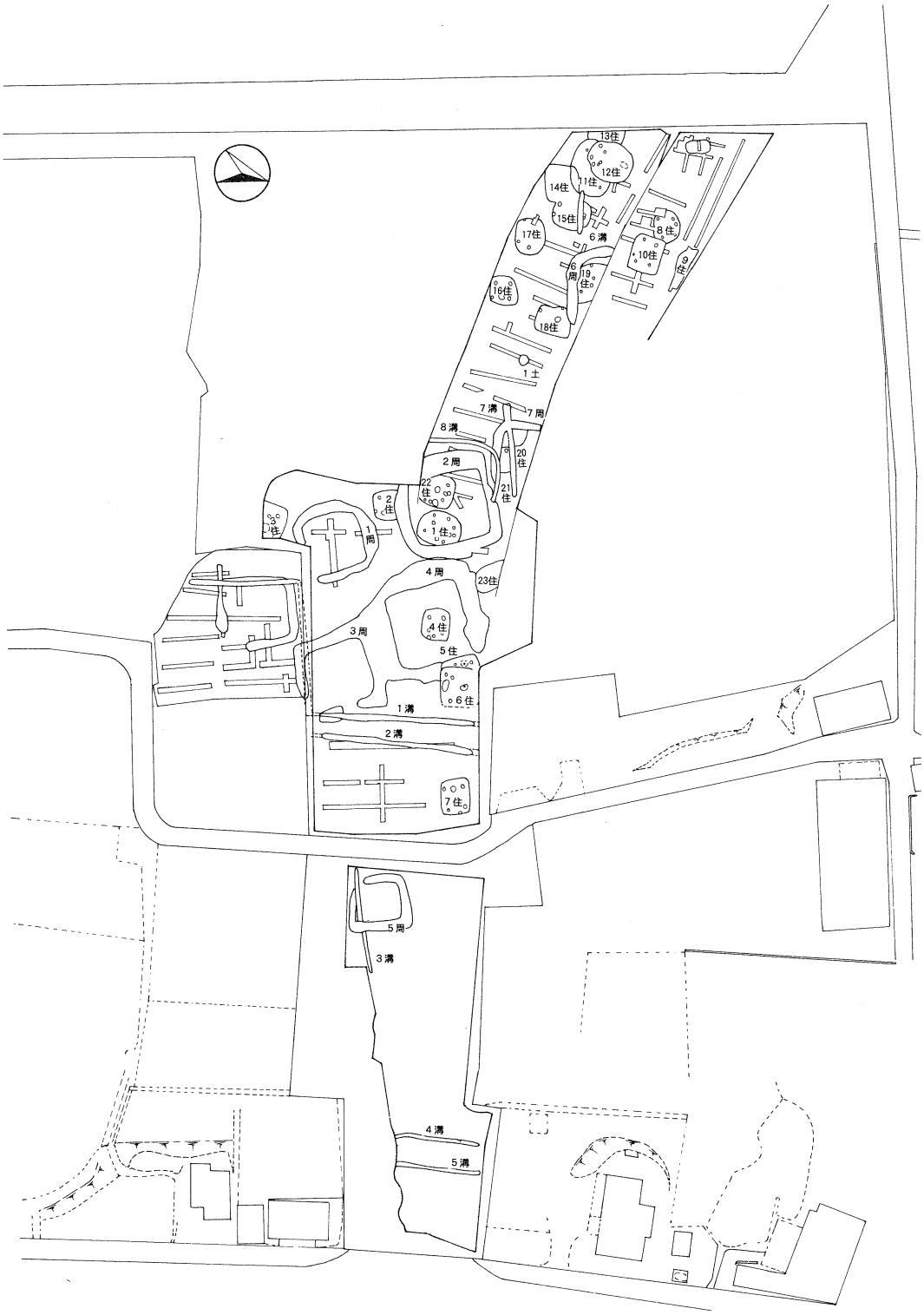
⑬ 北堂地遺跡　(縄文中期、平安、中世・近世)
⑭ 石之坪遺跡　(縄文、古墳、平安、中世)
⑮ 宇波円井遺跡　(縄文)
⑯ 二反田遺跡　(弥生、奈良・平安)
⑰ 水無遺跡　(平安)
⑱ 半縄田遺跡　(奈良・平安)
⑲ 武田信義館跡　(中世)
⑳ 新田遺跡　(縄文後期、平安)
㉑ 白山城　(中世)
㉒ ムク台烽火台　(中世)
㉓ 久保屋敷遺跡　(縄文、古墳)
㉔ 大輪寺東遺跡　(弥生、平安、中世)
㉕ 唐松遺跡　(縄文)
㉖ 山影遺跡　(縄文中期初頭)
㉗ 枇杷塚遺跡　(古墳中期)
㉘ 北下条遺跡　(弥生後期、奈良・平安)
㉙ 下横屋遺跡　(弥生後期、平安)
㉚ 後田第２遺跡　(弥生後期、古墳後期)
㉛ 後田堂ノ前遺跡　(弥生後期～平安)
㉜ 坂井堂ノ前遺跡　(古墳、奈良)
㉝ 火雨塚古墳　(古墳後期)
㉞ 後田遺跡　(縄文中期、古墳前期、奈良・平安)
㉟ 堂の前遺跡　(弥生後期、平安)
㊱ 北後田遺跡　(縄文中期、奈良・平安)
㊲ 宮ノ前第３遺跡　(平安)
㊳ 宮ノ前遺跡　(縄文前期末～晩期、弥生前期、奈良・平安)
㊴ 駒井遺跡　(奈良)
㊵ 宮ノ前第２遺跡　(奈良・平安)
㊶ 立石遺跡　(古墳前期、平安)
㊷ 金山遺跡　(中世～近世)
㊸ 前田遺跡　(奈良・平安)
㊹ 中田小学校遺跡　(縄文中期、弥生後期、奈良・平安)
㊺ 中道遺跡　(縄文晩期、平安)
㊻ 下木戸遺跡　(平安)
㊼ 中本田遺跡　(縄文)
㊽ 上本田遺跡　(縄文、平安)



第１図　坂井南遺跡①と周辺の遺跡



第２図　坂井南遺跡調査位置図（1/3750）



第３図　坂井南遺跡第４次～第６次調査全体図（1/1000）

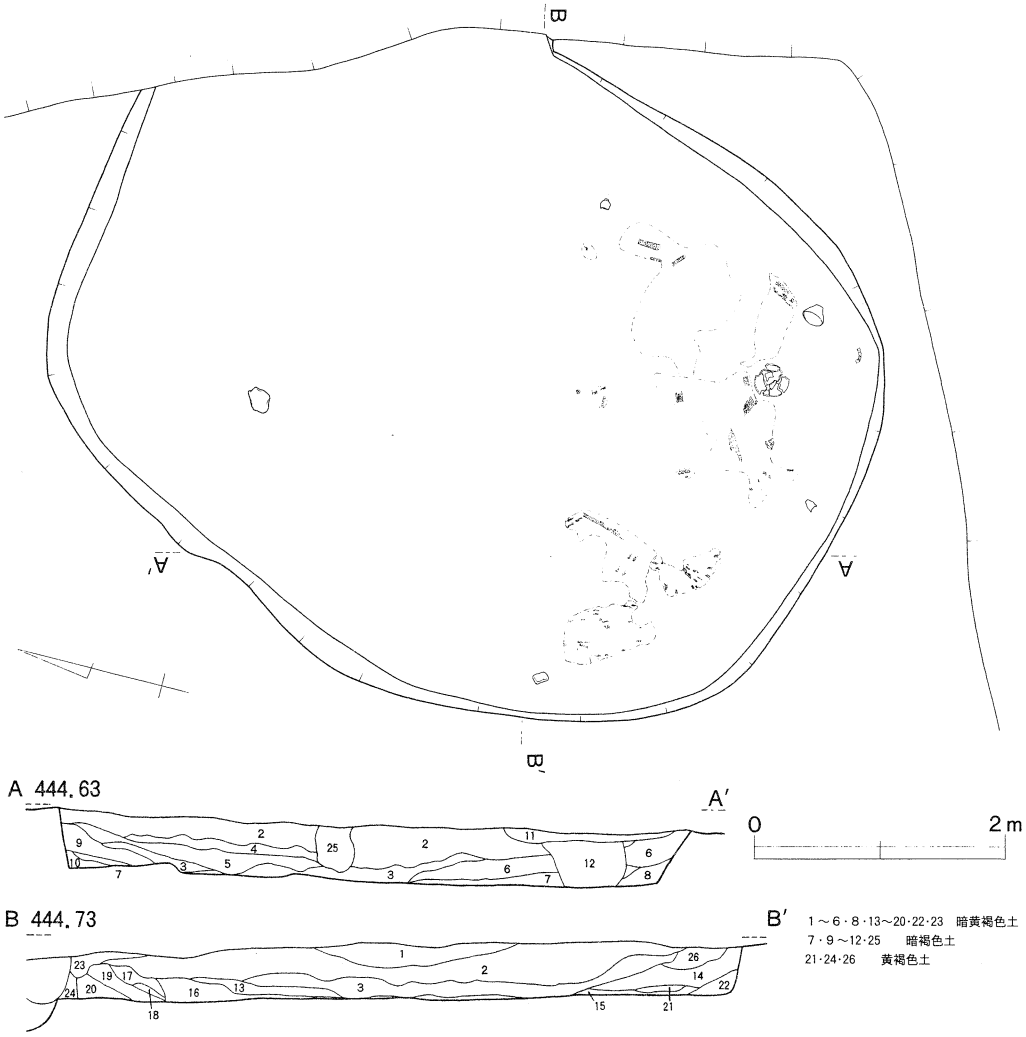
第Ⅲ章　遺　　構

調査の結果発見された遺構は、古墳時代前期の竪穴住居址23軒、方形周溝墓７基、溝遺構８条、土坑１基が発見された。

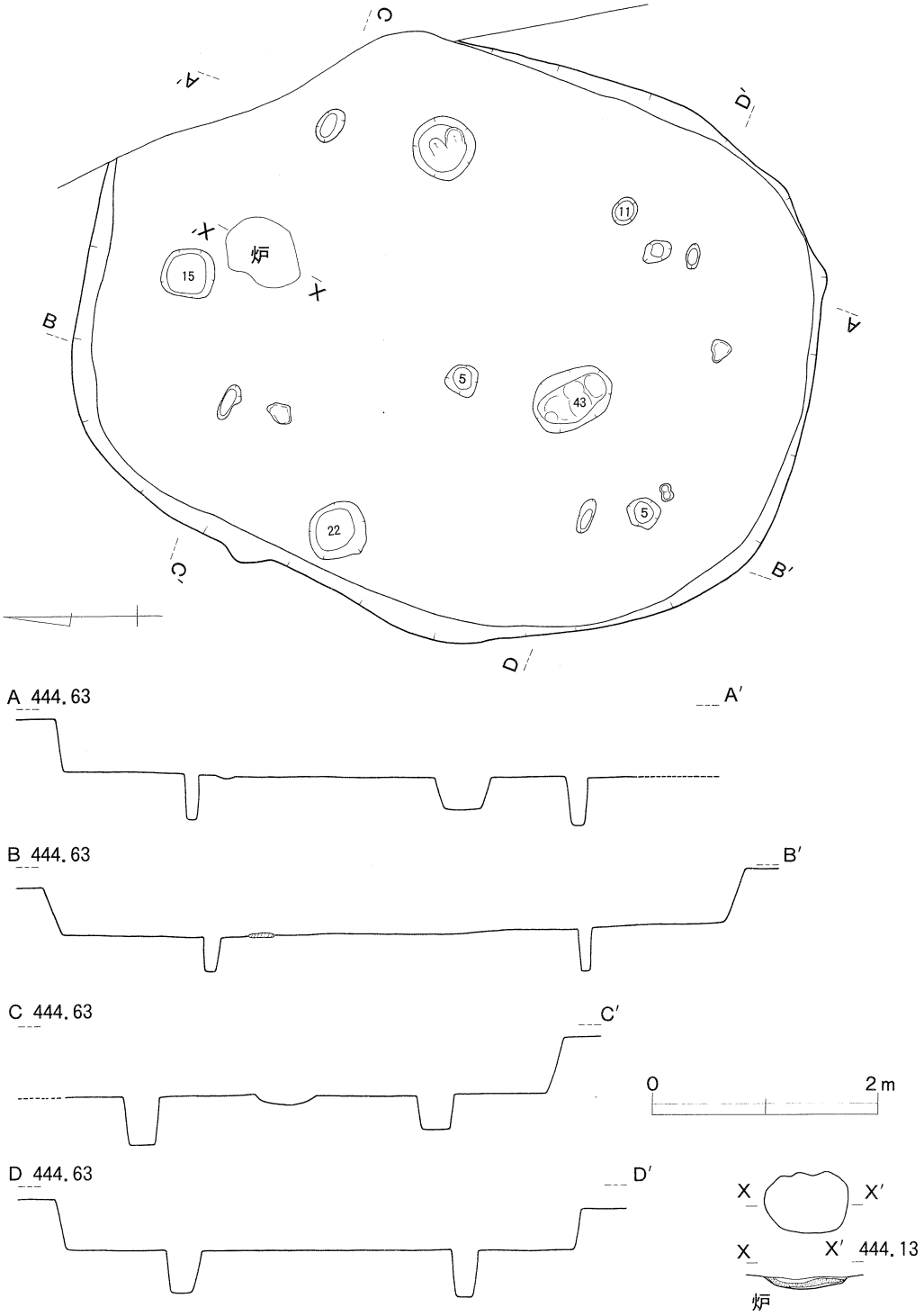
第１節　住　居

＜１号住居址＞（第４・５図）

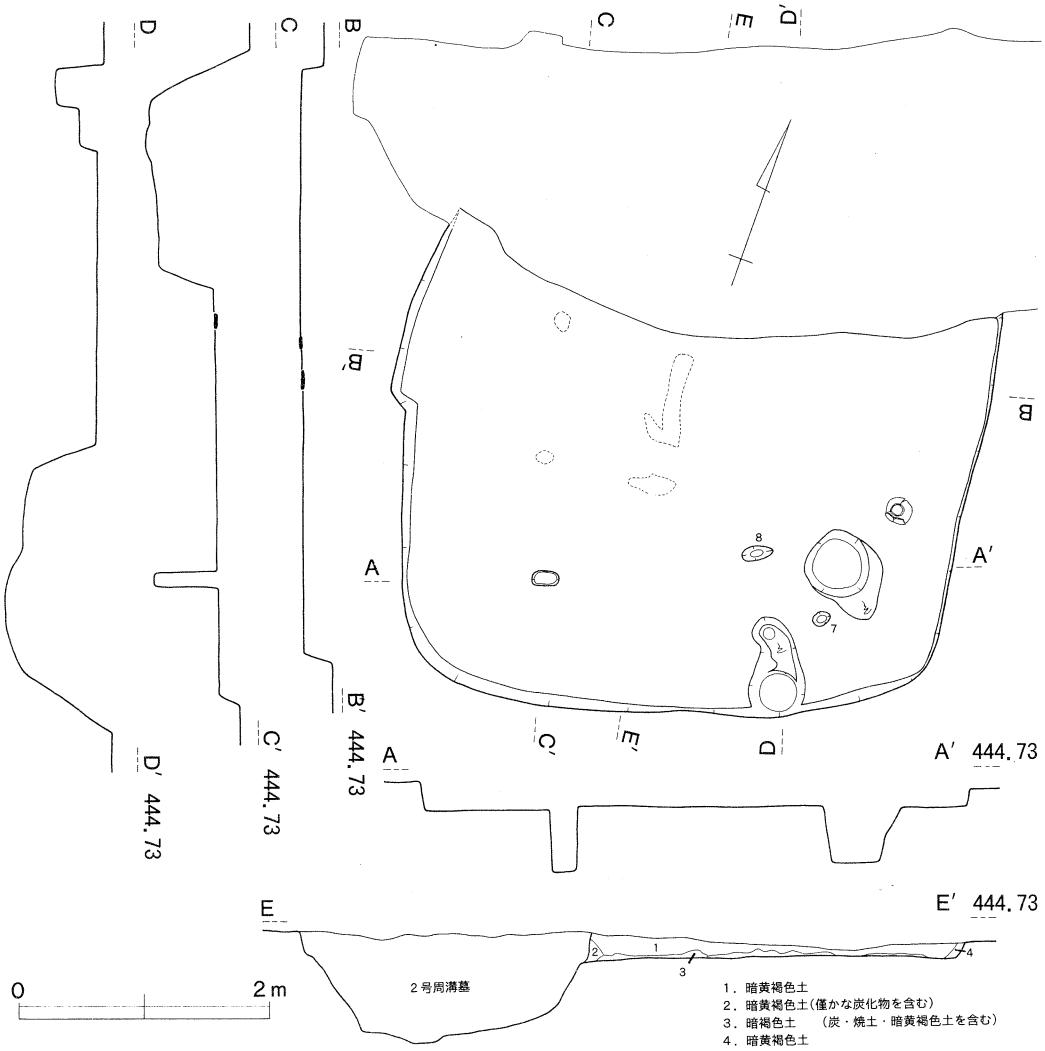
調査区域中央に位置する。黄褐色土中に暗黄褐色の落ち込みを発見して掘り下げる。北東側は２号周溝墓に切られており、その部分の壁は遺存していない。規模は、東西5.07m、南北6.50mで、小判形の平面形態を呈する。長軸方面はN－31°－E。覆土は暗黄褐色土・暗褐色土・黄褐色土の３層に大きく分かれ、暗褐色土中には焼土や炭化物の混入がみられた。壁はやや外傾しながら立ち上がり、高さは45cm前後。床面はほぼ平坦。柱穴は、幅10cm程、長さ30cm前後の東



第４図　１号住居址遺物出土状態（1/60）



第5図　1号住居址平・断面図（1/60）



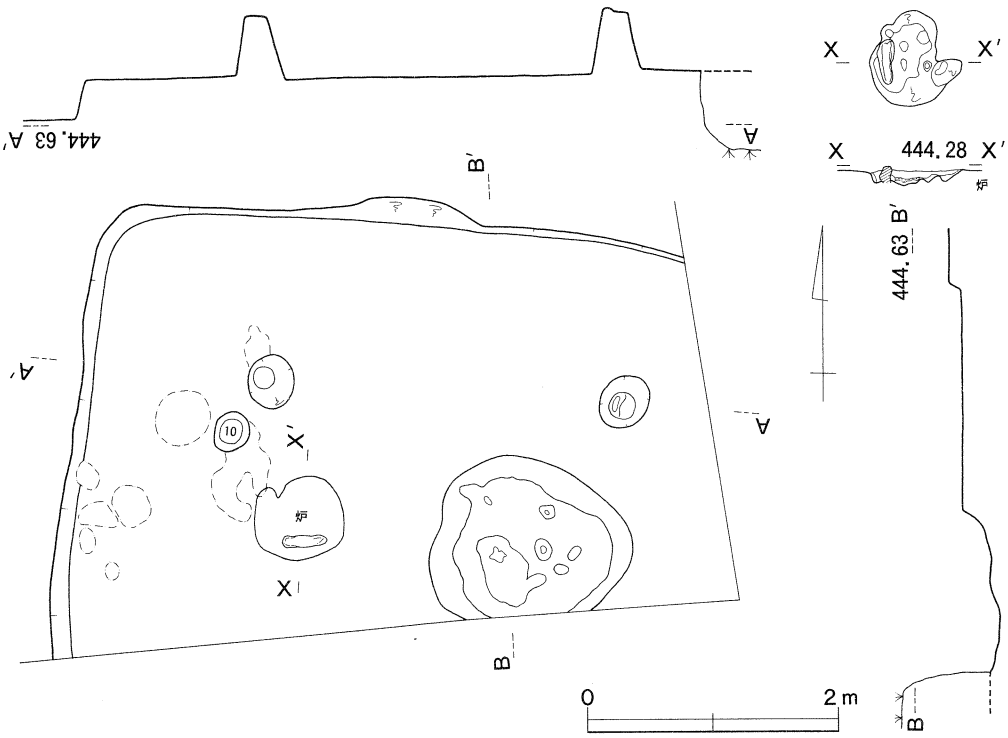
第６図　２号住居址平・断面図（1/60）

西方向に長い楕円形の４本で、床面からの深さ40cm前後となっている。炉は地床炉で、北側２本の柱穴を結ぶ線上の中央部分にあり、約50×70cmの範囲の不整形で、厚さ８cm程に形成された焼土の堆積がみられた。

遺物は南半分に集中しており、土器のほかには炭・焼土が散在していた。

〈２号住居址〉（第６図）

調査区域中央に位置する。黄褐色土中に暗黄褐色の落ち込みを発見し掘り下げる。北側半分は２号周溝墓に切られており遺存していない。残存部分での規模は東西で4.5mあり、平面形は本来南北方向に長い隅円長方形を呈すると思われるが不明。推定長軸方向はN－13°－E。覆土は暗黄褐色土・暗褐色土・黄褐色土で、暗褐色土中には焼土や炭化物が混入しており、床面北側（本来の住居では中央部分）には炭と焼土の集中がみられた（図中破線部分）。壁は外傾しながら立ち上がり、高さは20cm前後。床面はほぼ平坦。柱穴は、南西側に検出された床面からの深



第７図　３号住居址平・断面図（1/60）

さ50cm程で、幅12cm長さ22cmの東西方向に長い長楕円形の穴がそれと思われるが、１カ所のみしか確認されなかった。炉は遺存部分には無い。

遺物の出土は少なく、東寄りに壺破片などが出土している。

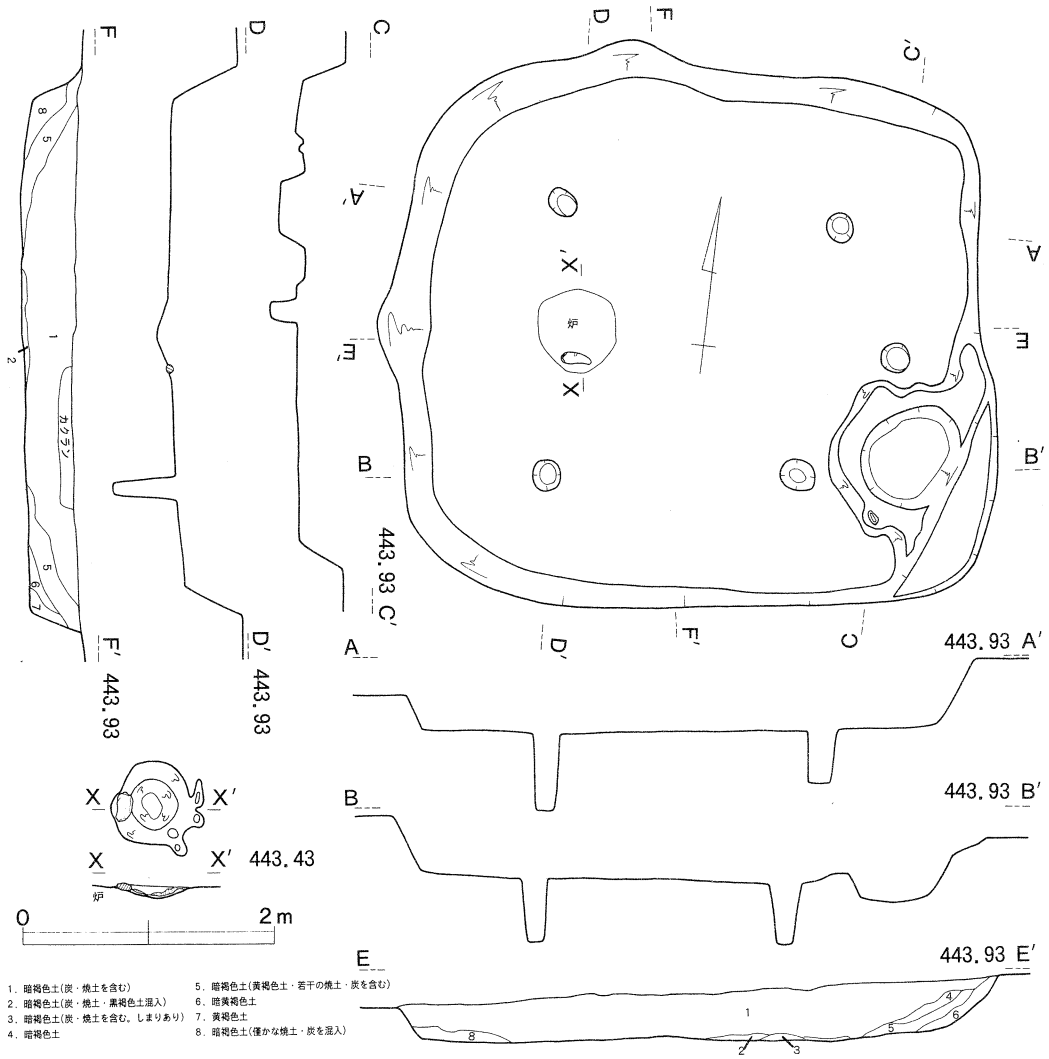
〈３号住居址〉（第７図）

調査区域中央南端に位置する。黄褐色土中に暗褐色の落ち込みを発見し掘り下げる。南側と東側は調査区域外で、完掘できなかった。規模などは不明であるが、平面形態は東西方面に長い隅円長方形を呈するものと思われる。壁から推測すれば、長軸方向はN－87°－Wとなろう。壁は外傾しながら立ち上がり、高さは10～30cm前後。床面はほぼ平坦。柱穴は、北側に検出された、径35×45cmの不整円形をした床面からの深さ50cm程の２つの穴があたると思われる。炉は西側柱穴の南側にあり、55×70cmの不整形で、南側に長さ35cm、幅10cmの枕石をともない、焼土の厚さは３cm前後であった。床面南東側には撹乱と思われる大きな凹みがあった。

遺物の出土は破片のみで極端に少ない。

〈４号住居址〉（第８図）

調査区域中央に位置する。黄褐色土中に暗褐色の落ち込みを発見し掘り下げる。規模は、東西4.75m、南北4.5mで、平面形は隅円方形を呈する。長軸方向はN－98°－W。覆土は焼土・炭化物を若干含む暗褐色土が主体となっている。壁は外傾しながら立ち上がり、高さは20～50cm前後。床面はほぼ平坦。柱穴は、住居址内に規則的に方形に配された４本の小穴が主柱穴となり、



第８図　４号住居址平・断面図（1/60）

別に東壁寄りに１箇所小穴がある。４本主柱穴は径20cm程で床面からの深さは40～60cm、東寄りの小穴は径・深さとも20cm前後となっている。炉は西側柱穴を結ぶ線上から住居址中央にかけてあり、52×66cmの不整な円形の範囲で形成され焼土は厚さ６cm程度、南側には長さ23cm幅12cmの枕石をともなう。東壁南側際には、深さ20cm程で、75×86cmの不整楕円形をした、周囲に土手のめぐる穴がある。

遺物の出土は非常に少なく、図化出来るものは無かった。

〈５号住居址〉（第９図）

調査区域中央東側に位置する。４号周溝墓北東隅に黒褐色の落ち込みを発見し掘り下げる。東側は６号住居址に切られ遺存していない。南側は４号周溝墓と重複しており、不明瞭であった。規模は、南北方向で約4.5mある。残存部分が少ないため推測になるが、平面形は小判形を呈していたと思われる。覆土は焼土・炭化物を含む黒色土と暗黄褐色土に大きくわけられる。壁は外

傾しながら立ち上がり、高さは30cm～35cm前後。床面はほぼ平坦。柱穴は北と南にあり、北側のものは径33cm床面からの深さ45cm、南側は径25cm深さ35cm。炉はその柱穴を結ぶ線上の中央部分にあり、74×95cmの不整形の範囲で形成され焼土は厚さ６cm程度、中央には長さ27cm幅14cmと長さ20cm幅15cmの枕石をともなう。

遺物の出土は少ない。炉の北西側に甑が出土している。

〈６号住居址〉（第９図）

調査区域中央東側に位置する。４号周溝墓北東隅に黒褐色の落ち込みを発見し掘り下げる。西側は５号住居址・４号周溝墓を切っており重複し壁が不明瞭であり、東側は耕作等による削平が著しく壁は確認されなかった。北側は調査区域外で完掘できなかった。床面は西から東にかけて緩やかに傾斜している。柱穴は南側の東と西に２本あり、東側のものは径35cm床面からの深さ40cm、西側は径40cm深さ30cm。北側に柱穴が検出されなかったことからして、平面形は隅円方形を呈し、規模は推測で一辺７m程と思われる（図中破線は推定線）。覆土は焼土を含む黒色土と暗黄褐色土・黄褐色土に大きくわけられる。壁は外傾しながら立ち上がるが、高さは南壁で15cm前後。炉は床面中央にあり、長さ１m20cm幅80cmの不整形の範囲に焼土が散り、焼土は厚さ５cm程度、南端には長さ33cm幅10cmの枕石をともなう。南壁には、１m50cm、幅90cmの範囲に穴が検出された。

遺物の出土は少ない。いずれも破片資料である。

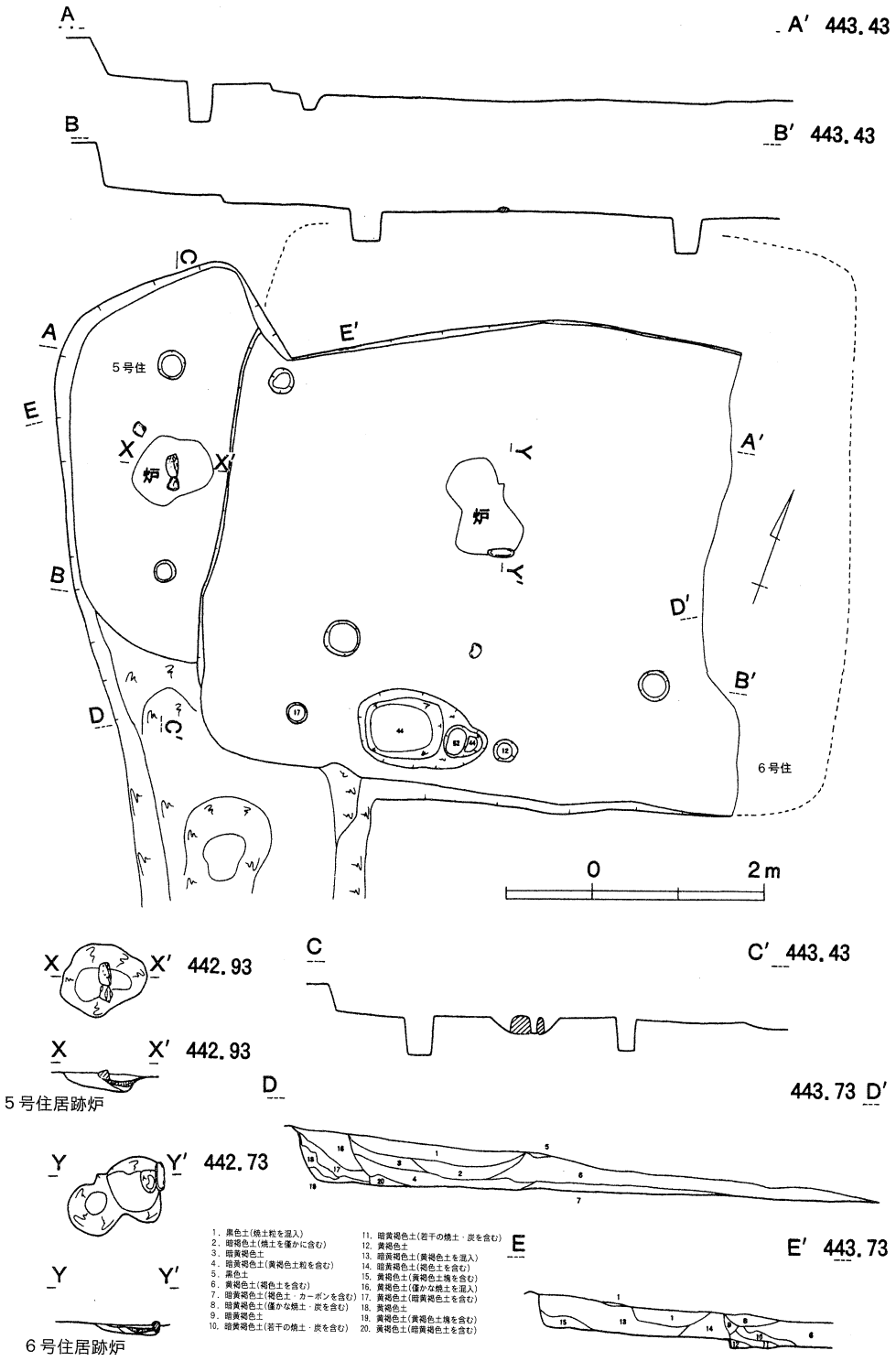
〈７号住居址〉（第10図）

調査区域東側に位置する。黄褐色土中に暗褐色の落ち込みを発見し掘り下げる。規模は、東西5.56m、南北4.63mで、平面形は隅円方形を呈する。長軸方向はN－73°－E。壁は外傾しながら立ち上がり、高さは25～50cm前後。床面はほぼ平坦。柱穴は、住居址内に規則的に方形に配された４本の小穴が主柱穴となり、径30cm程で床面からの深さは55～70cm。東壁際北寄りに径48cm床面からの深さ24cmの穴がある。炉は西側柱穴を結ぶ線上から住居址中央にかけてあり、60×70cmの不整な楕円形の範囲で形成され、焼土は厚さ６cm程度、東側には長さ25cm幅10cmの枕石をともなう。

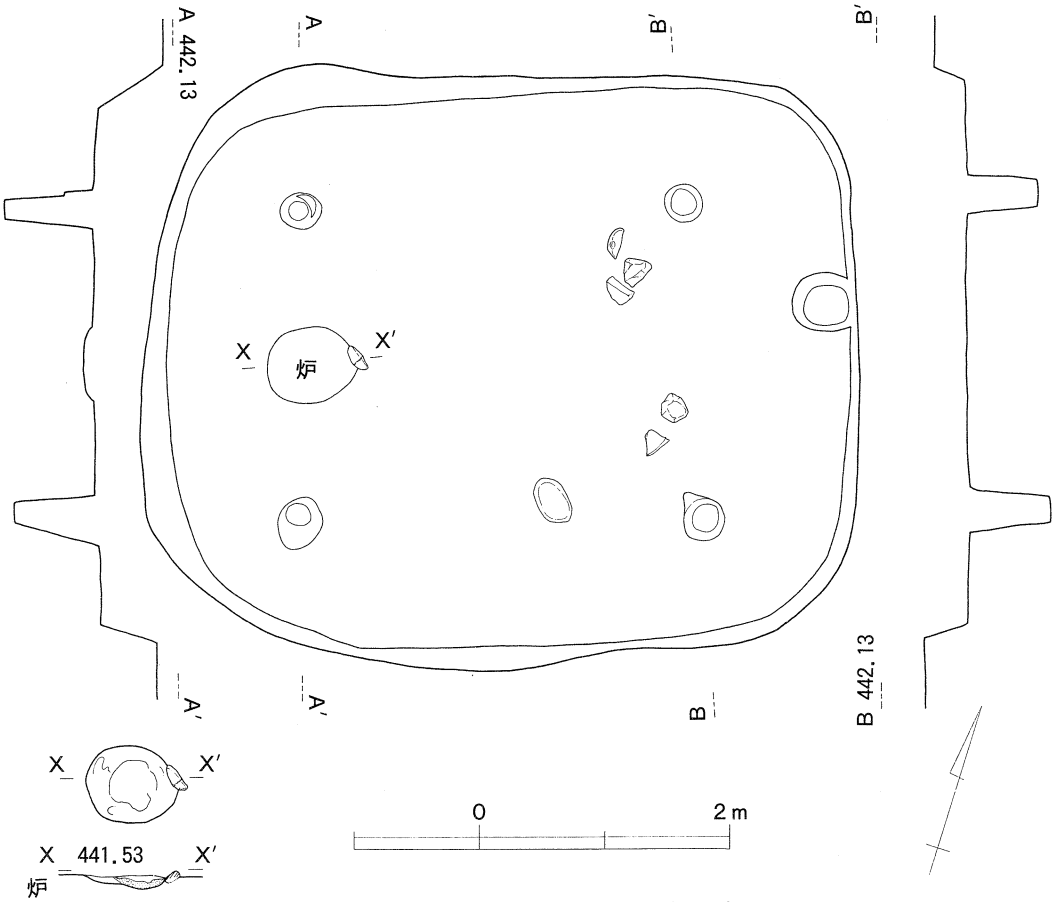
覆土中から壺・甕類が出土しており、特殊なものとして石包丁が出土している。

〈８号住居址〉（第11図）

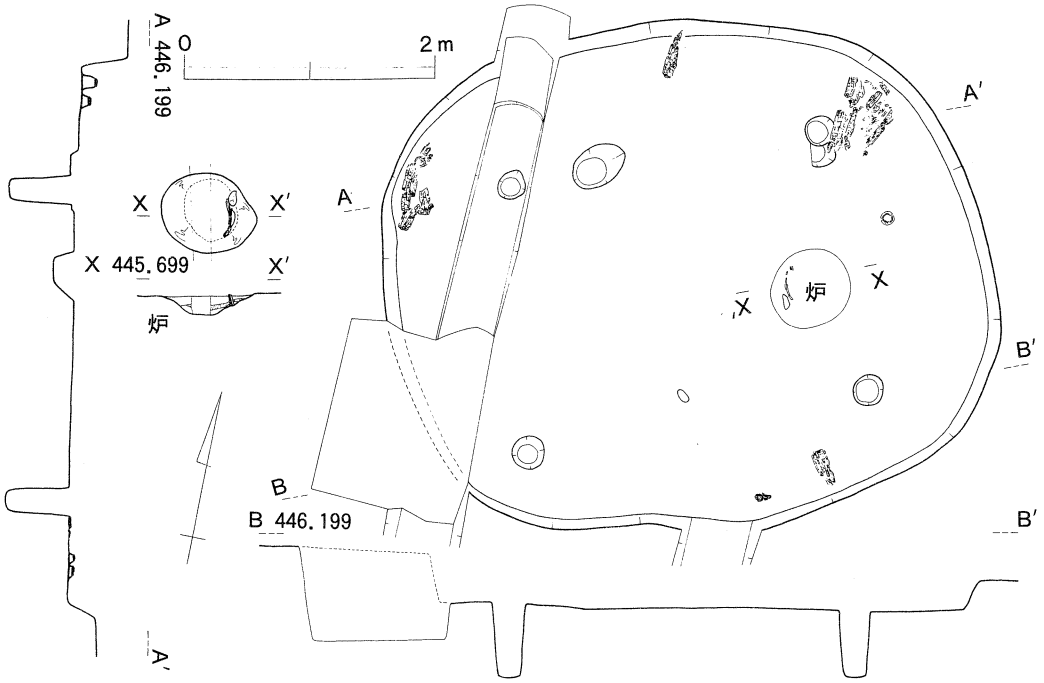
調査区域西側北半分に位置する。黄褐色土中に暗褐色の落ち込みを発見し、補助的試掘溝を設定して掘り下げる。長芋の畑であったらしく、70～80cmの間隔で南北方向にトレンチャーによるさくが掘られていた。南西側角は方形の撹乱が入りこんでいた（図中の破線は住居の推定線）。規模は東西4.25m、南北４mで、平面形は小判形を呈する。長軸方向はN－80°－E。壁は外傾しながら立ち上がり、高さは25～35cm前後。床面はほぼ平坦。柱穴は、住居址内に規則的に長方形に配された４本の小穴が主柱穴となり、径25cm程で床面からの深さ50～60cm。炉は東側柱穴を結ぶ線上から住居址中央にかけてあり、60×64cmの不整な円形の範囲で形成され、中心部分がトレンチャーによる撹乱を受けていたが、焼土は厚さ４cm程度、東側には長さ13cm幅６cmの枕石と甕の破片がともなっていた。



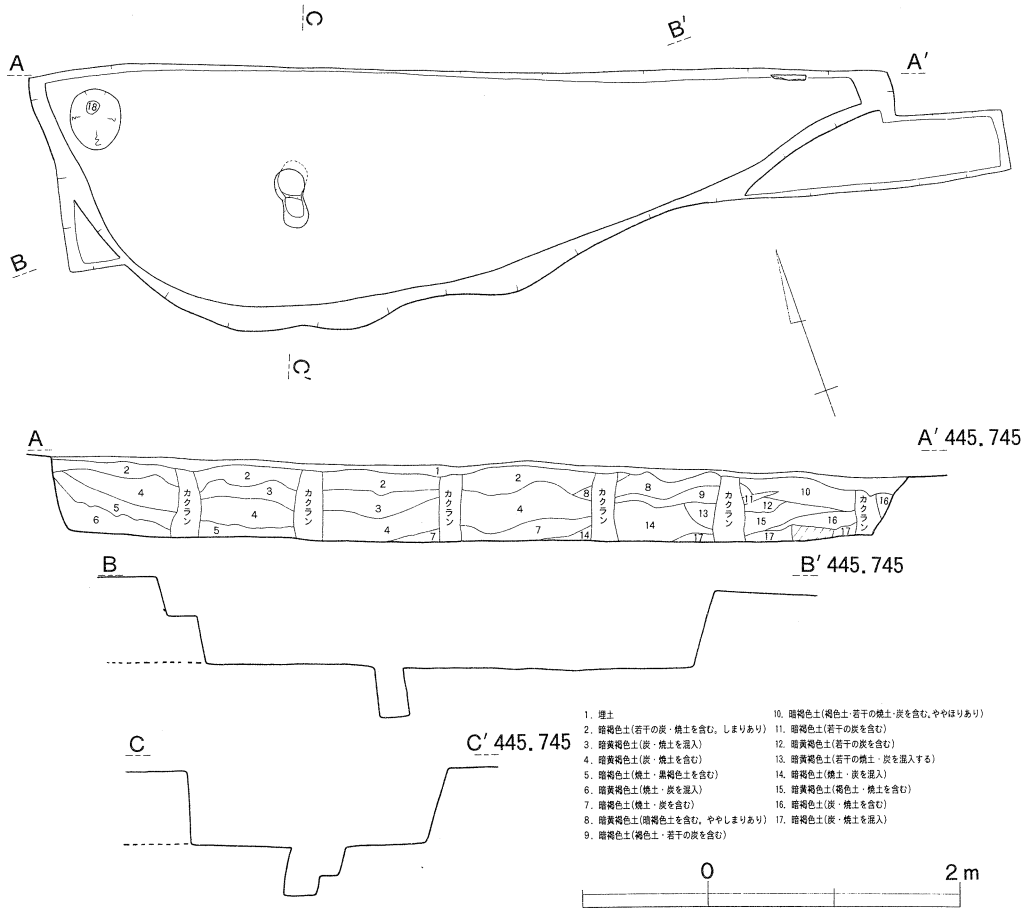
第９図　５号・６号住居址平・断面図（1/60）



第10図　７号住居址平・断面図（1/60）



第11図　８号住居址平・断面図（1/60）



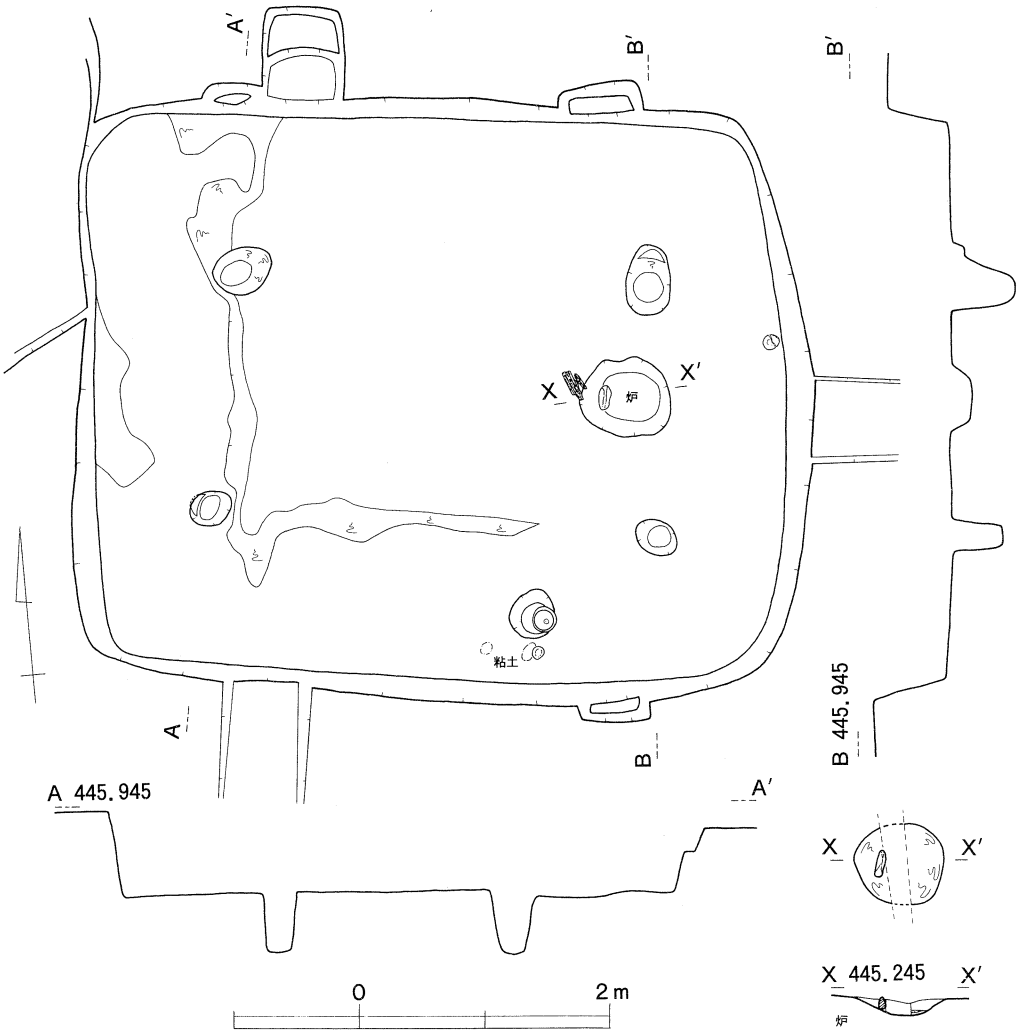
第12図　9号住居址平・断面図（1/60）

本住居址は焼失住居であるらしく、壁際に構築部材と思われる炭化材がみられた。

〈9号住居址〉（第12図）

調査区域西側北半分に位置する。黄褐色土中に暗褐色の落ち込みを発見し、補助的試掘溝を設定して掘り下げる。長芋の畑であったらしく、70～90cmの間隔で南北方向にトレンチャーによるさくが掘られていた。北側は調査区域外で完掘できなかった。覆土は暗褐色土と暗黄褐色土に大きくわけられ、全体に焼土と炭化物の混入がみられた。規模は、東西6.35mであろうか、平面形は隅円長方形と思われるが、詳細は不明。壁は外傾しながら立ち上がり、高さ50cm前後。床面はほぼ平坦。柱穴は、径25cm床面からの深さ38cmの住居址内南西側の小穴であろう。炉は発掘部分では検出されなかった。

発掘部分が少ないためであろう、遺物の出土も少なかった。



第13図　10号住居址平・断面図（1/60）

〈10号住居址〉（第13図）

調査区域西側北半分に位置する。黄褐色土中に暗褐色の落ち込みを発見し、補助的試掘溝を設定して掘り下げる。長芋の畑であったらしく、70cm～１m20cmの間隔で南北方向にトレンチャーによるさくが掘られていた。北西側角は８号住居址と部分的に重複していた。規模は、東西5.25m、南北4.8mで、長方形を呈する。長軸方向はN－97°－E。壁はやや外傾しながら立ち上がり、高さは50～60cm前後と比較的深い竪穴となっている。柱穴は、住居址内に規則的に長方形に配された４本の小穴が主柱穴となり、径30cm前後で床面からの深さは40～50cm。床面は西側柱穴から南側柱穴にかけての柱穴外側が、住居中央部分よりも５～６cm程一段高くなっている。炉は東側柱穴を結ぶ線上から住居址中央にかけてあり、65×70cmの不整な円形の範囲で形成され、中心部分がトレンチャーによる撹乱を受けていたが、焼土は厚さ３cm程度、西側には長さ21cm幅７cmの枕石がともなっていた。炉西際には炭化材が出土。床面南端には、径35cm前後、

床面からの深さ18cmの小穴があった。

遺物は台付甕・高坏・小型壺・坏などのほか、紡錘車が出土している。南端小穴からは台付甕（第52図３）に小型壺（第52図２）が伏せられた状態で出土しており、周辺には粘土と石器（第53図16）がみられた。

〈11号住居址〉（第14図）

調査区域の西端に位置する。遺構確認用のトレンチ掘り下げ時に、黄褐色土中に焼土粒・炭化物の混じる暗黄褐色土の落ち込みを確認する。12･13･14号住居址及び６号溝と重複している。12号住に切られており、土層堆積からは11住→12住→13住の順に作られたことが理解できた。主軸方向N－84°－Eとなる。規模は東西8.40m、南北6.20mを測る大型の住居址となり、形態は小判形を呈する。覆土は３層からなるが、覆土の大部分は暗黄褐色土となる。覆土下層には焼土・炭化物が多量に混じり、特に床面は全体に赤く硬化していた。住居掘り込みは北壁から東壁にかけて約40cm、南壁から西壁にかけて約15cm前後を測り、壁の立ち上がりは比較的垂直となる。ピットは７つ確認された。この内、柱穴となるものはP１～３であろう。いずれも規模・形態ともに同様で、東西22cm、南北25cm前後を測り、深さは約45cmとなる。方形に配された４本主柱となろう。炉址は検出されなかった。

遺物の出土は大型の住居址であったものの多くなかった。１～３の壺が床面直上から出土する以外、覆土中からの出土となる。遺物の出土は特に住居西側から多くみられた。

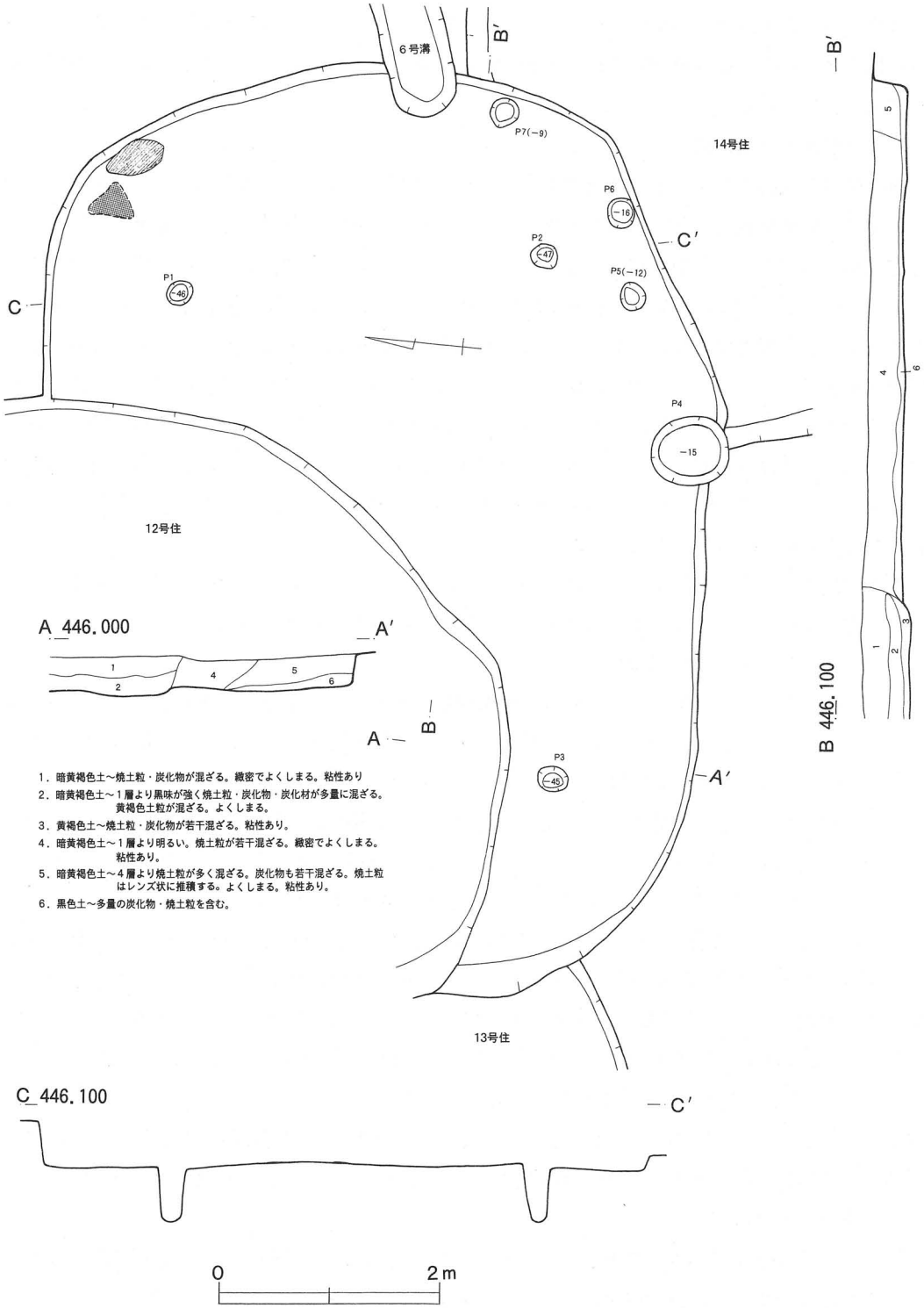
〈12号住居址〉（第15･16･17図）

遺構確認用のトレンチ掘り下げに際して暗黄褐色土の広がりと落ち込みを確認した。調査区域の西端に位置する。11･13号住居址と重複関係にある。11号住を切り、13号住に切られる。主軸方向N－６°－Wとなる。規模は東西5.62m、南北6.92mを測るやや不整の小判形である。覆土は暗黄褐色土を主体とし、壁際と床面直上に茶褐色土・黄褐色土が堆積する程度であった。全体に焼土粒・炭化物が多く混じり、炭化材も見られた。壁高は西壁で50cm、北壁で44cmを測り外傾して立ち上がり、南壁から東壁にかけては10cm程度を確認したのみで、立ち上がりも比較的緩やかとなる。内部施設はピットが10ヶ確認されたが、いずれも住居南側に片寄って検出された。住居中央に不整長楕円形をしたP１があり、径125×71cmを測る。P２とP８以外、壁に沿って検出された。P４とP５は規模・深さとも同様で、住居出入口に伴うものであろうか。ピットの規模はそれぞれP２が径42×38cm、P３は径38×43cm、P４は径41×33cm、P５は径40×37cm、P６は径35×40ｃｍ、P７は径61×51cm、P８は径38×41cm、P９は径44×46cm、P10は径38×30cmを測る。炉は住居北側に設けられていた。三方に礫が配された石囲炉となる。礫は被熱により割れ、底には焼土が10cm堆積していた。長軸124cm・短軸72cm・深さ24cmを測り、平面長楕円形となる。

出土した土器は住居南側に集中して出土した。特に第56図１と第57図９の土器は一ケ所から重なって検出された。大部分の遺物が床面直上から若干浮いた状態であった。

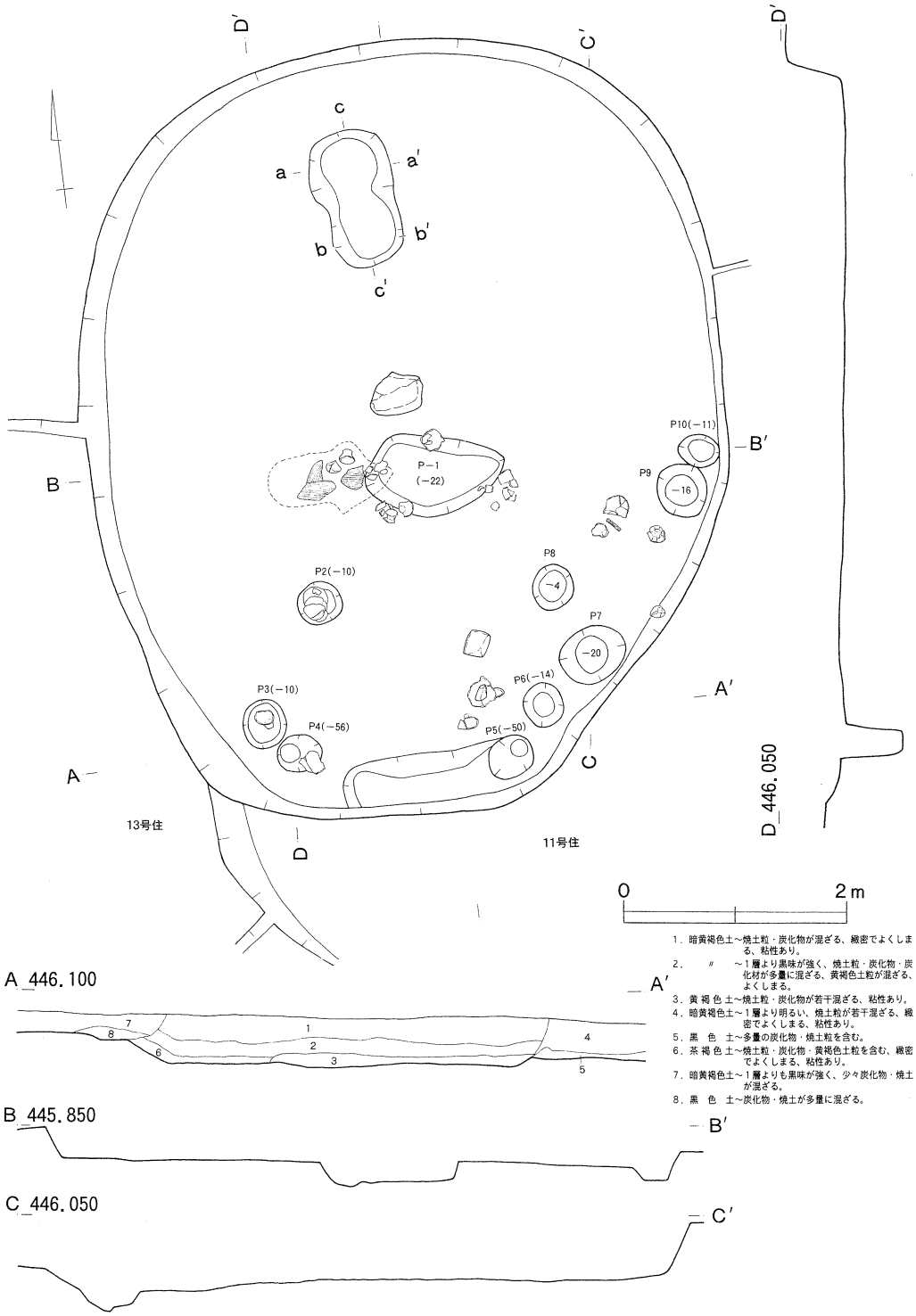
〈13号住居址〉（第18図）

調査区域西端に位置する。遺構確認用のトレンチ掘り下げに際して暗黄褐色土の広がりと掘り



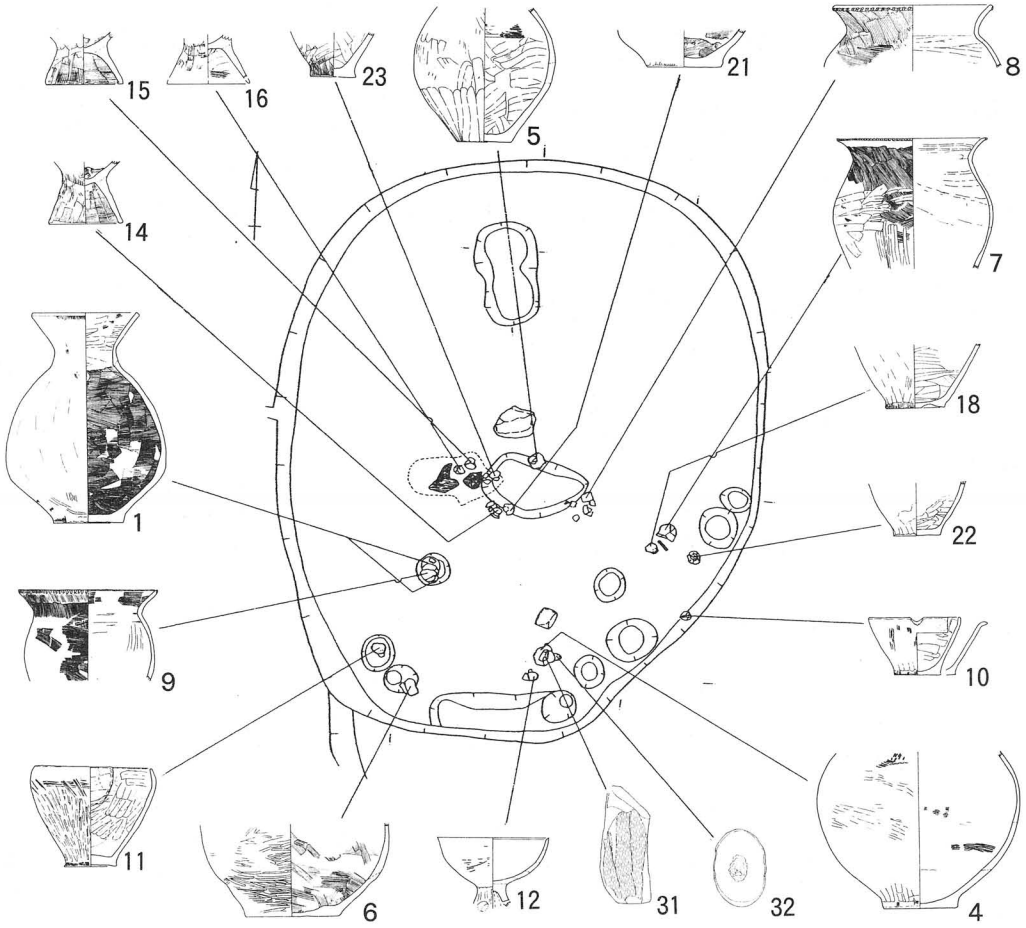
1．暗黄褐色土～焼土粒・炭化物が混ざる。緻密でよくしまる。粘性あり
2．暗黄褐色土～1層より黒味が強く焼土粒・炭化物・炭化材が多量に混ざる。黄褐色土粒が混ざる。よくしまる。
3．黄褐色土～焼土粒・炭化物が若干混ざる。粘性あり。
4．暗黄褐色土～1層より明るい。焼土粒が若干混ざる。緻密でよくしまる。粘性あり。
5．暗黄褐色土～4層より焼土粒が多く混ざる。炭化物も若干混ざる。焼土粒はレンズ状に推積する。よくしまる。粘性あり。
6．黒色土～多量の炭化物・焼土粒を含む。

第14図　11号住居址平・断面図（1/60）

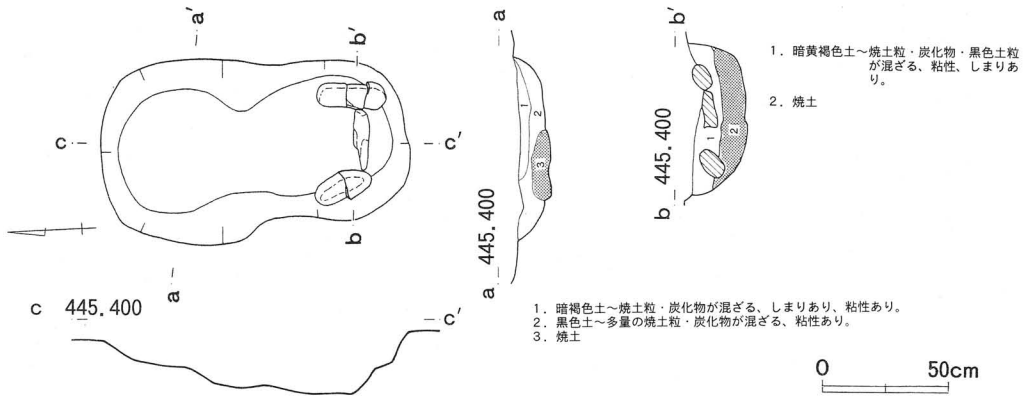


1. 暗黄褐色土～焼土粒・炭化物が混ざる、緻密でよくしまる、粘性あり。
2. 〃 ～1層より黒味が強く、焼土粒・炭化物・炭化材が多量に混ざる、黄褐色土粒が混ざる、よくしまる。
3. 黄褐色土～焼土粒・炭化物が若干混ざる、粘性あり。
4. 暗黄褐色土～1層より明るい、焼土粒が若干混ざる、緻密でよくしまる、粘性あり。
5. 黒　色　土～多量の炭化物・焼土粒を含む。
6. 茶褐色土～焼土粒・炭化物・黄褐色土粒を含む、緻密でよくしまる、粘性あり。
7. 暗黄褐色土～1層よりも黒味が強く、少々炭化物・焼土が混ざる。
8. 黒　色　土～炭化物・焼土が多量に混ざる。

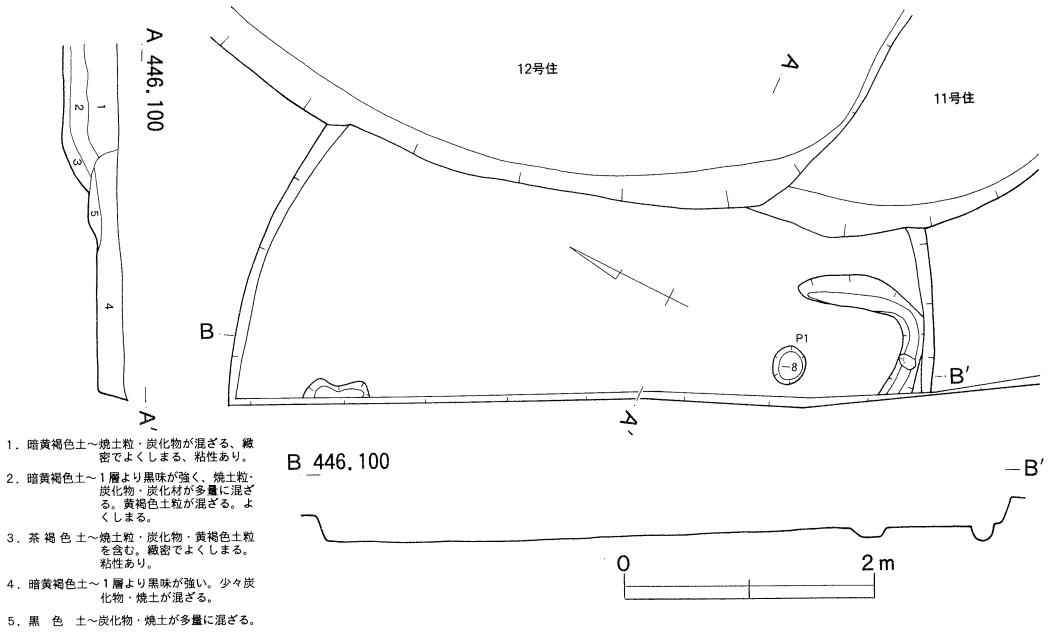
第15図　12号住居址平・断面図（1/60）



第16図　12号住居址遺物出土状態



第17図　12号住居址炉平・断面図（1/30）



第18図　13号住居址平・断面図（1/60）

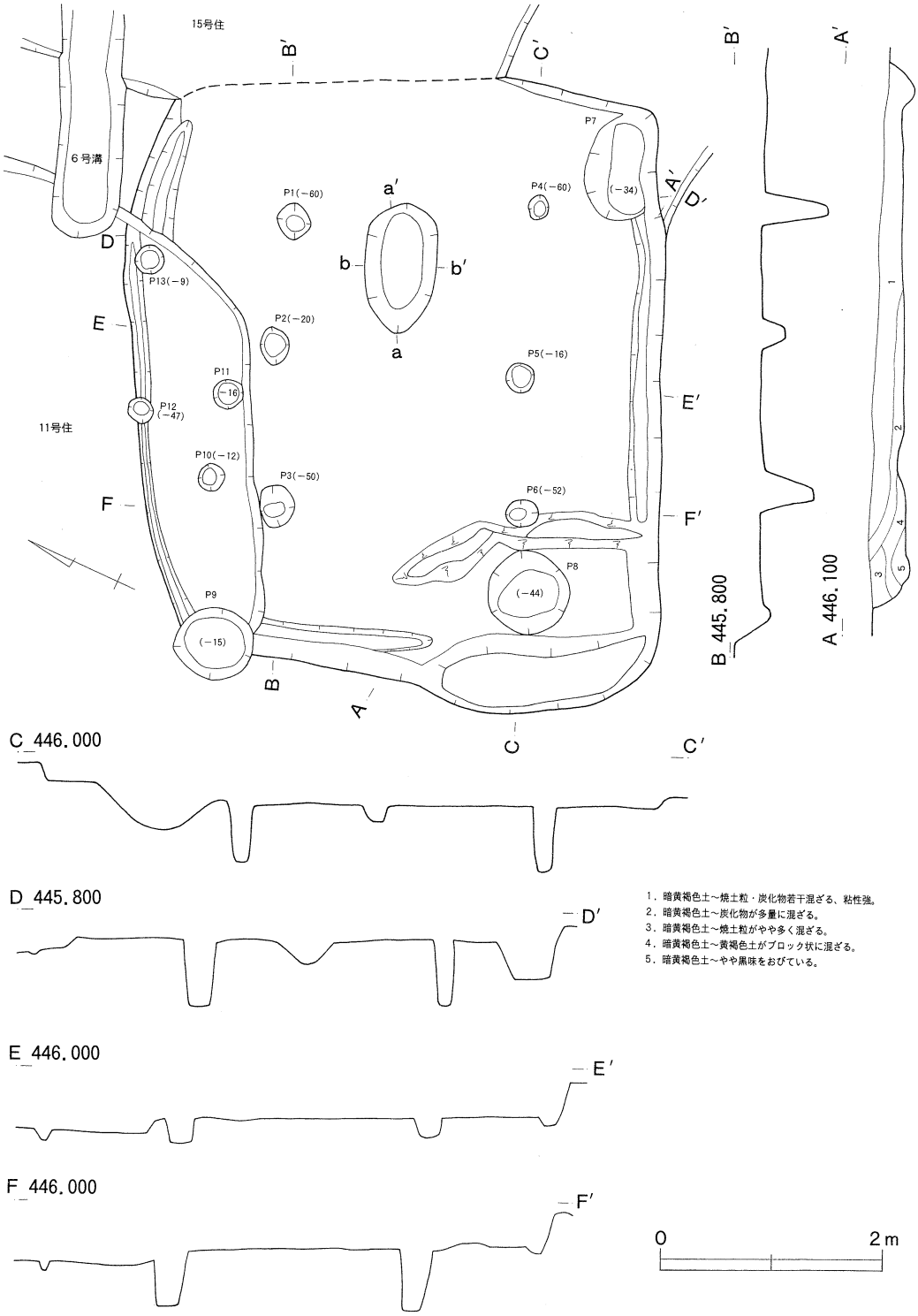
込みを確認した。11・12号住と重複関係にあり、11・12号住を切る。遺構の大部分は調査区域外に広がる。南北方向5.60m、東西方向1.78mを検出したにすぎず、形態は不明である。掘り込みは20cm程度、覆土は２層のみである。暗黄褐色土を主体とした覆土で焼土・炭化物の混入が認められた。内部施設は平面円形をした径30×26cmのピットが１基と、周溝らしき溝が検出された。最大幅28cm・深さ10cm程度を測り、壁際から90°方向を変えている。床面には特に硬化した部分は認められなかった。

遺物の出土は非常に少なく、２点のみの出土であった。いずれも覆土中から細片となって出土したものである。第60図１は二重口縁壺の口縁部片、２壺底部片である。

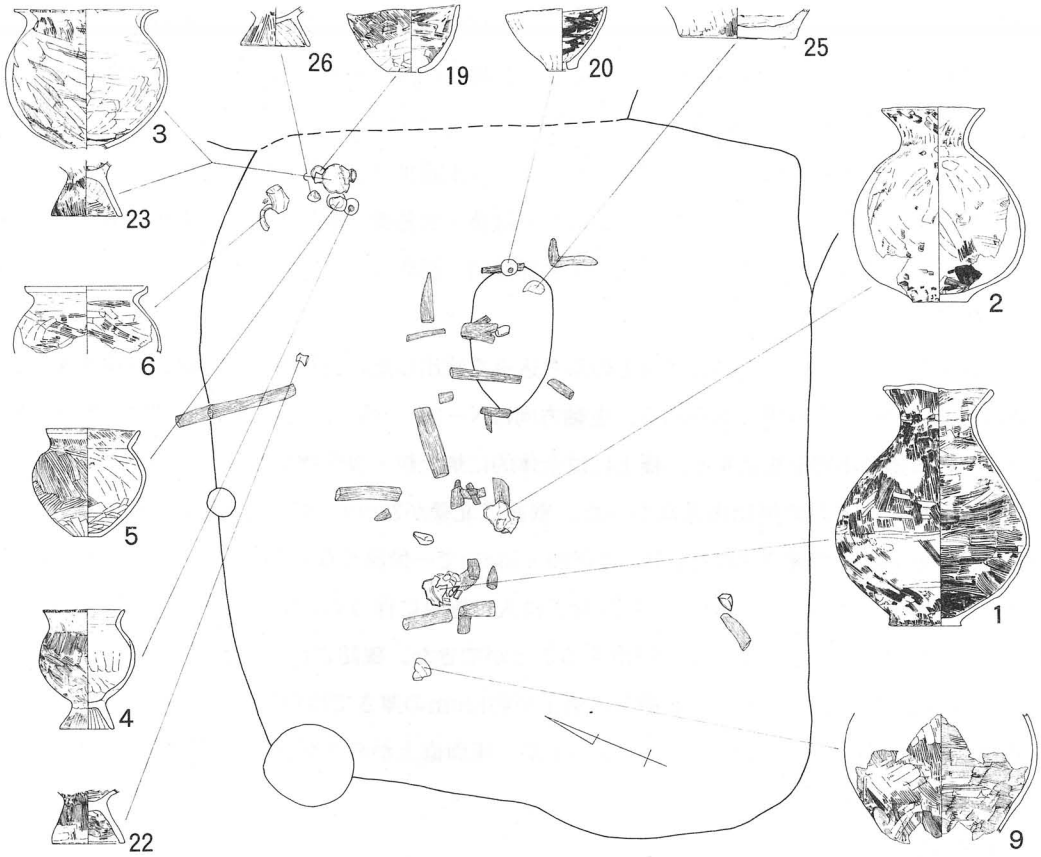
〈14号住居址〉（第19・20・21図）

遺構確認用のトレンチ掘り下げに際して確認した。11・15号住と重複関係にあり、11号住に切られ、15号住を切る。床面直上から多くの遺物の出土が見られると伴に、覆土中には焼土粒・炭化材が多く混じることから焼失住居と考えられよう。主軸方向はN－72°－Eをとる。住居址規模は東西5.70m、南北4.90mを測り、平面方形を呈する。柱穴は炉を挟んで東西方向に３つ並ぶＰ１～Ｐ６となろう。四隅に位置するP1,3,4,6が床面より50cm以上の掘り込みを持ち主柱穴となり、中央に位置するP2,5は深さ20cm程度と浅く支柱穴となろう。周溝は東壁を除く三方の壁から検出されている。幅29～10cm、深さ10cm程度を測る。住居南西隅には土手状の高まりに囲まれて径74×66cm、深さ44cmを測るピット８がある。更にその後方は床面より１段棚状に高くなっている。

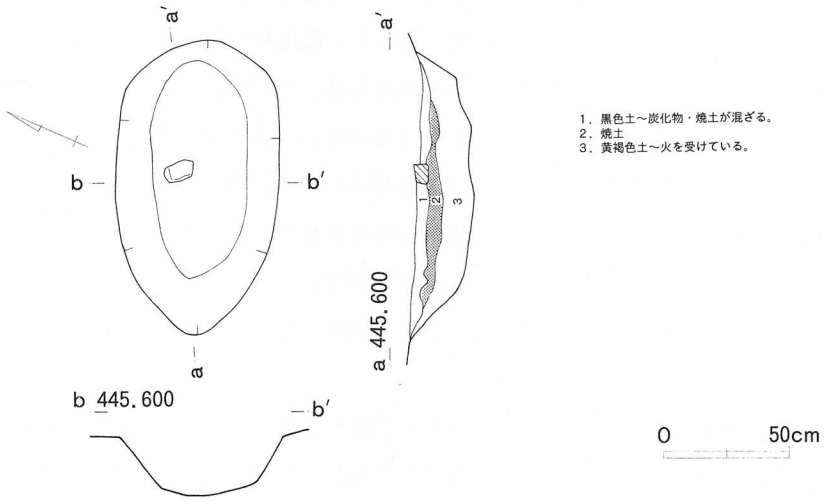
壁高は西壁が32cm、南壁では10cmを測り、比較的緩やかに立ち上がる。床面はほぼ平坦で、



第19図　14号住居址平・断面図（1/60）



第20図　14号住居址遺物出土状態



第21図　14号住居址炉平・断面図（1/30）

全体的にやや硬化していた。炉は住居中央よりやや東壁寄りに、長軸方向を主軸方向に合せて床面に掘り込まれている。焼土が約10cm堆積し、長軸116cm、短軸66cmを測る。やや掘りすぎてしまったが床面からの掘り込みは46cmを測る。

前述したように床面直上あるいは略直上から多くの土器が出土する。特に住居北東コーナーと中央部に集中が見られる。住居北東コーナーからは甕・台付甕・甑が出土し、中央部からは壺が出土する。尚、第61図３の甕と第62図23の脚台部は同一個体の台付甕となる。

〈15号住居址〉（第22図）

トレンチ掘り下げに際して暗黄褐色土の落ち込みを検出した。14号住・６号溝と重複する。土層堆積から14号住・６号溝に切られる。主軸方向はN－20°－Wとなる。東西4.47m、南北5.65mを測り、形態は小判形を呈する。覆土には全体的に焼土粒・炭化物が混じっていた。西壁の一部は重複関係にあるため検出出来なかった。壁高は北壁が22cm、東壁は８cm程度を測るだけである。ピットは３つ確認された。Ｐ１は径60×53cmで一段深くなる部分がある。Ｐ２は径40×39cm、Ｐ３は径27×26cmとなる。P1,P2などは入口施設に伴うものであろうか。炉は６号溝に切られていたが、住居址北壁寄りで検出することができた。確認された規模で東西71cm、南北42cm、床面からの掘り込み19cmを測る。焼土が約12cmの厚さで堆積していた。

遺物の出土は非常に少なかった。Ｐ１から１が、床面直上から３が出土する以外、他は覆土中から細片となって出土した。

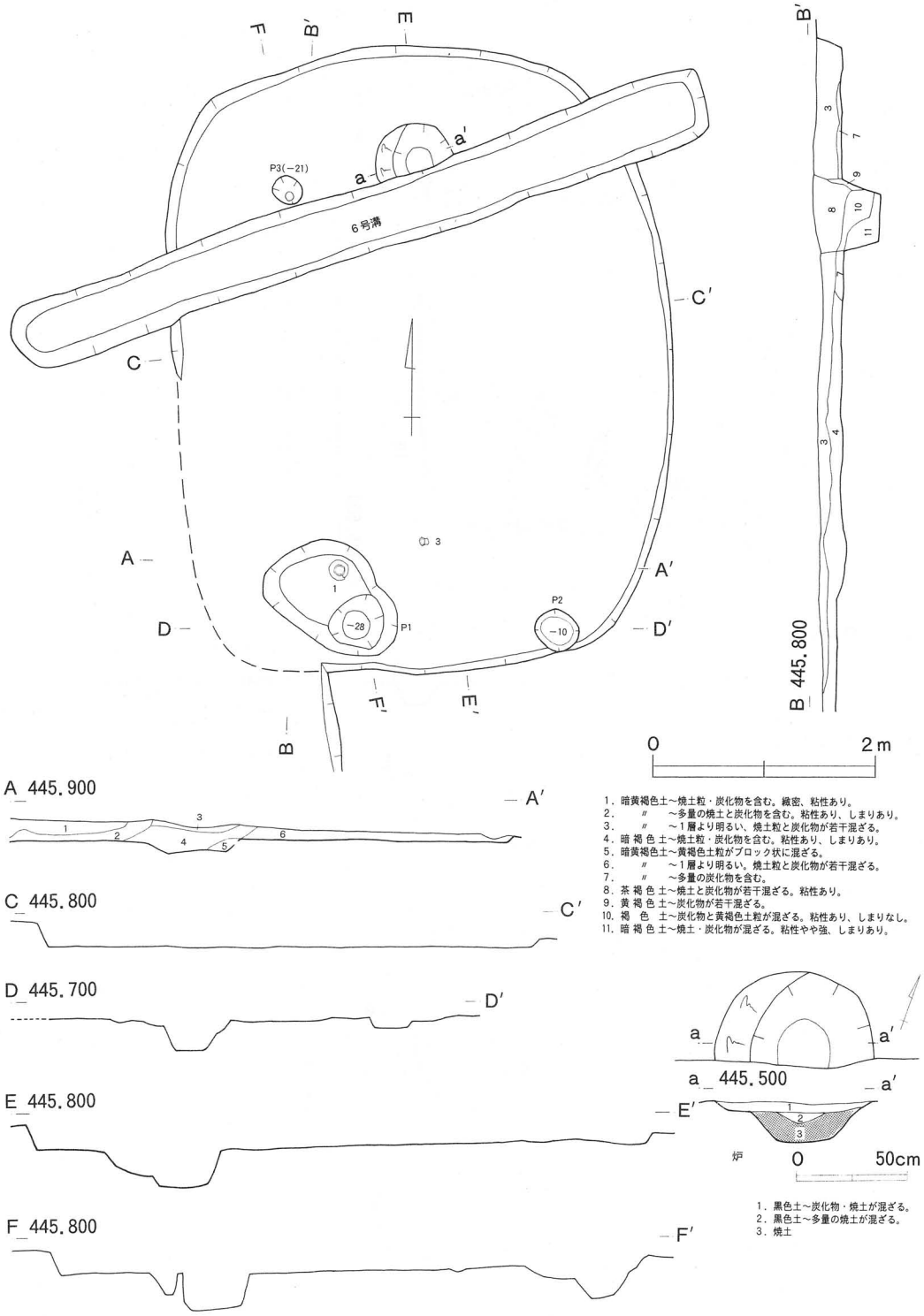
〈16号住居址〉（第23図）

遺構確認時に炭化物を多量に含む暗黄褐色土の広がりを確認した。炉が確認されたため住居址と判断したが、遺物の出土・掘り込みは僅かであり、住居址南東コーナーと北西コーナーの立ち上がりは確認出来なかった。調査区域西側の南端に位置する。主軸方向はN－66°－Wとなる。東西方向4.60m、南北方向3.70mを測り、形態はやや不整な方形を呈する。覆土は大部分が暗黄褐色土となる。床面近くには焼土・炭化物が多く混じり、炭化材も認められた。床面は全体に踏み固められ硬化していた。壁高は東壁で12cmを測る以外、他は10cm以下となる。柱穴は４つ確認された。柱穴方向が住居址主軸とはやや異なるものの、４本主柱となろう。P1は径44×42cm、P2は径37×37cm、P3は径31×30cm、P4は径33×32cmとなり、いずれも規模・平面形態とも同様である。炉は住居中央よりやや東壁側から検出された。炉の中には壺底部片と胴部片が据え付けてあり、長軸１m、短軸62cm、床面からの掘り込み19cmを測る。

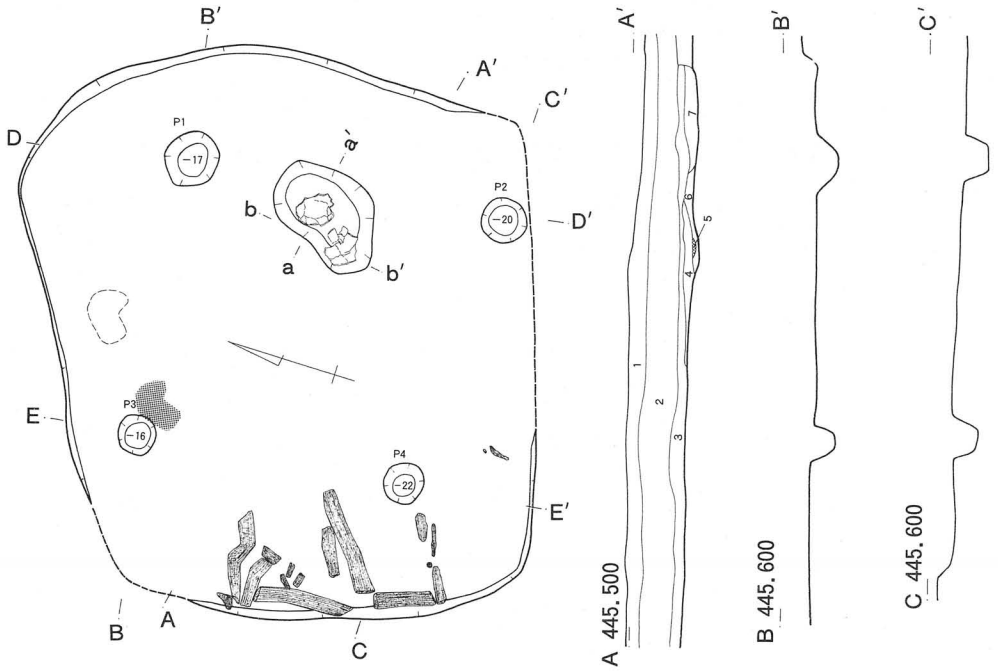
すでに前述したように遺物の出土は非常に少なく、図化したものは炉体土器の壺のみである。

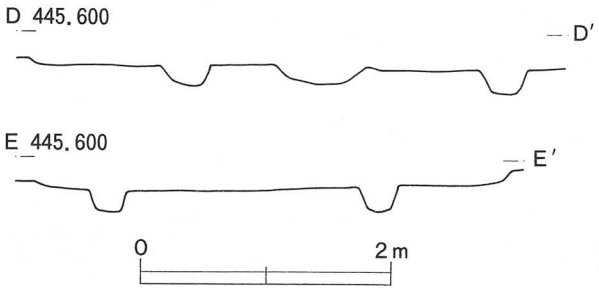
〈17号住居址〉（第24図）

遺構確認時に炭化物が多量に混じる暗黄褐色土の広がりを確認する。炭化材が検出され、焼失住居であったと思われるが、すでに覆土の大部分は失われていた。調査区域西側に位置し、主軸方向N－88°－Eとなる。規模は東西方向5.30m、南北方向4.40mを測り、隅円方形を呈する。床面は全体的に硬化しており、住居中央がやや高くなっている。壁高は南壁から西壁にかけて21

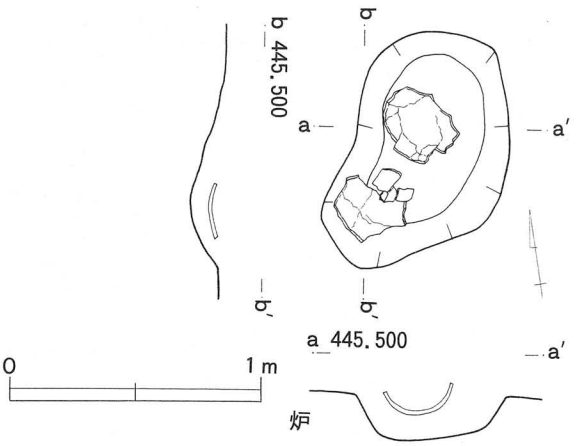


第22図　15号住居址・6号溝平・断面図（1/60）（1/30）

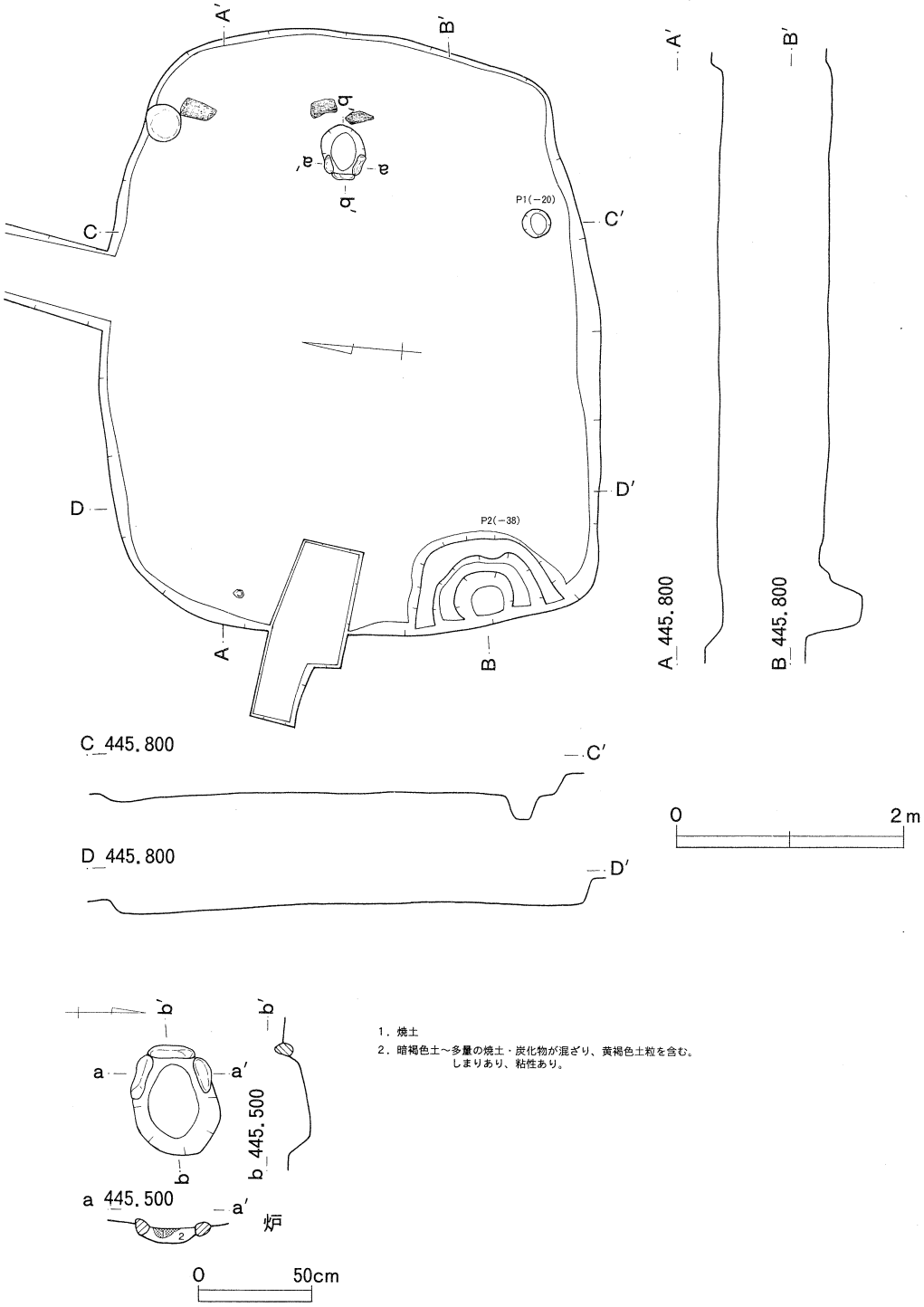




1. 砕　　石
2. 暗黄褐色土～耕作土、焼土粒・炭化物が若干混ざる。粘性強くよくしまり、乾くとかたい。
3. 暗黄褐色土～炭化物・焼土粒が多量に混ざり、特に中央から西側にかけて多く認められる。粘性、しまりあり。
4. 暗黄褐色土～黒色土、黄褐色土が混ざり、焼土・炭化物はわずかに混ざる程度。粘性あり、しまりあり。
5. 焼　　土
6. 暗黄褐色土～黄褐色土がブロック状に混ざる。粘性あり、しまりあり。
7. 褐　色　土～黄褐色土粒が均一に混ざる。粘性あり、しまりあり。



第23図　16号住居址平・断面図（1/60）（1/30）



第24図　17号住居址平・断面図（1/60）（1/30）

～16cmを測りやや高くなるが、それ以外では10cm程度を測るのみであった。ピットは２ヶ確認されただけであった。Ｐ１は住居南壁近くから検出され、径30×28cmを測り、平面円形となる。Ｐ２は住居西壁に接し、土手状の高まりが巡っている。炉は住居中央より東側から検出された。三方に礫が配された石囲炉となり、長軸48cm、短軸36cmを測る。床面から18cm掘り込んであり、焼土が約５cm堆積していた。

遺物の出土は非常に少なく、小片が数点出土したのみであった。

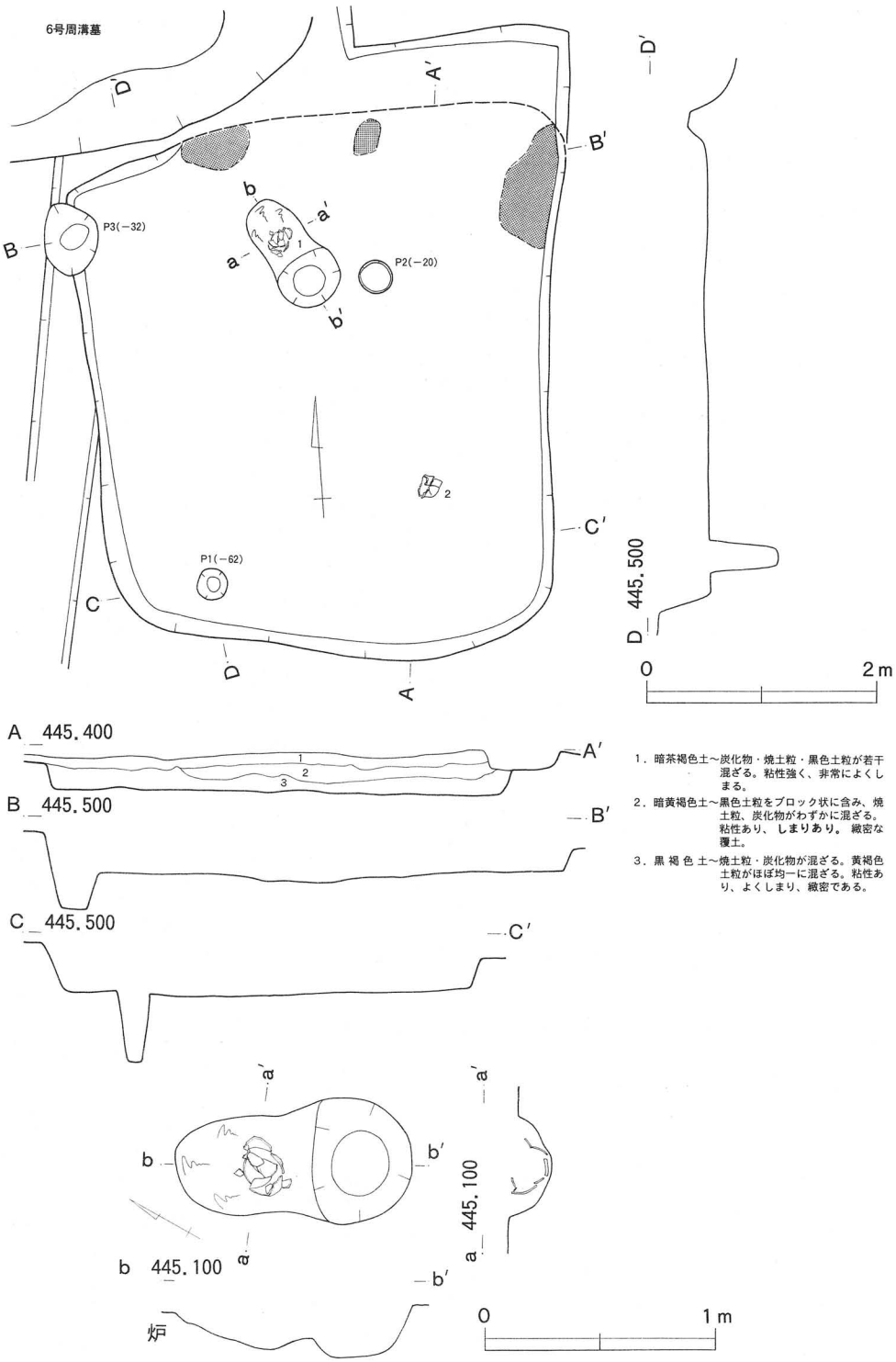
〈18号住居址〉（第25図）

遺構確認用のトレンチ掘り下げに際して、黄褐色土中に焼土粒・炭化物が混じる暗黄褐色土の広がりを確認した。調査区域西側に位置し、６号周溝墓と近接する。主軸N－５°－Wをとる。規模は東西4.25m、南北4.18mを測り、方形を呈する。覆土は３層からなる。覆土全体に焼土・炭化物が混じり、特に住居北側には焼土の堆積も見られた。住居掘り込みは南西コーナー付近で約42cmを測る以外、他は25cm程度となる。壁は外傾して立ち上がる。床面は全体的に踏み固められていた。ピットは３ヶ確認された。P1は径26×28cm、P2は径40×30cm、P3は径46×62cmの規模となる。炉は住居中央よりやや北側に寄って検出された。平面長楕円形となり、長軸102cm・短軸46cm・床面からの深さ36cmを測る。断面は摺鉢状に落ち込むと伴に、一段低くなる。

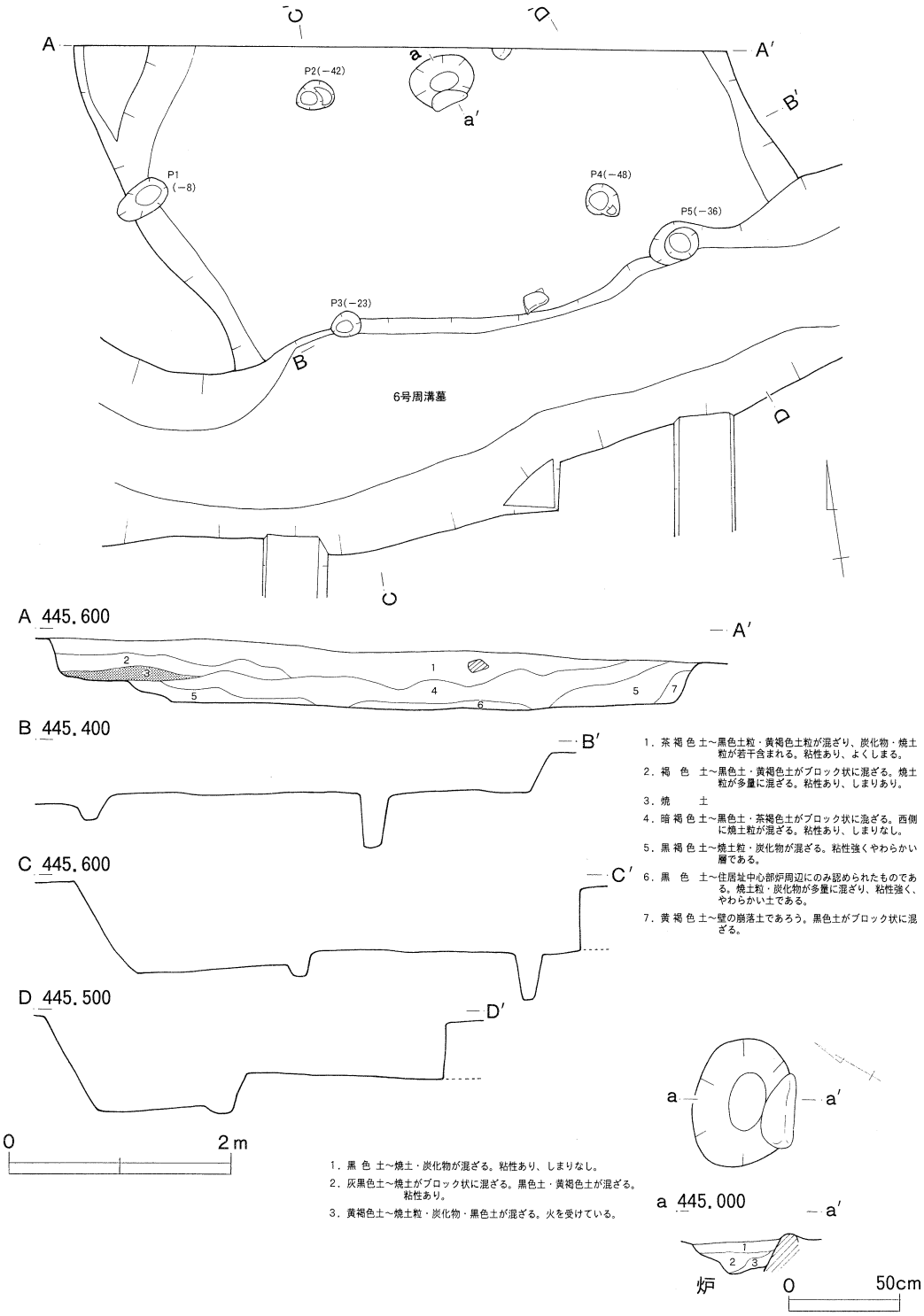
本住居址からの出土遺物は非常に少なく、ある程度器形が分かる土器が炉内（第65図１）及び床面直上（第65図２）から１点づつ出土する以外、他は細片と化したものばかりであった。

〈19号住居址〉（第26図）

６号周溝墓を調査中に方台部側溝壁の立ち上がりができなかったため他の遺構と重複しているものと考え、掘り進めた結果、炉が検出されたことから住居址と認定したものである。遺構の時間的前後関係は、周溝が住居址床面を掘り込んでいることから本住居址が６号周溝墓に先行すると考える。検出した範囲で規模は東西5.22m、南北3.20mを確認する。覆土は７層からなる。覆土全体に焼土・炭化物が混じり、特に下層ほどそれら混入の度合いは顕著であった。また住居西側の床面より20cm程度一段高く棚状となる部分には焼土の堆積が見られ、土層観察からはすでに住居の埋没がある程度進行した段階で焼土が堆積していることが理解出来た。住居掘り込みは西側で55cm、東側で35cmを測る。壁は外傾して立ち上がり、床面は全体的に踏み固められていた。ピットは５ヶ確認された。Ｐ１は径28×20cm・深さ８cmと浅く、覆土中に掘り込まれていたため本住居址には伴わないものであろう。Ｐ２～Ｐ５の４つが住居址に伴うものであろうが、深さ・位置関係から全てを柱穴と考えてよいか躊躇する。それぞれの規模は、Ｐ２が径25×17cm・深さ42cm、Ｐ３は径18×15cm・深さ23cm、Ｐ４は径19×18cm・深さ48cm、Ｐ５は径20×19cm・深さ36cmを測る。炉はかろうじて調査区内から検出された。１つのみであるが、礫を配した石囲炉となる。平面円形となり、長軸58cm・短軸45cm・床面からの深さ15cmを測る。明確な焼土層は形成していないが、覆土全体に焼土・炭化物を含み、底面には被熱により硬化し



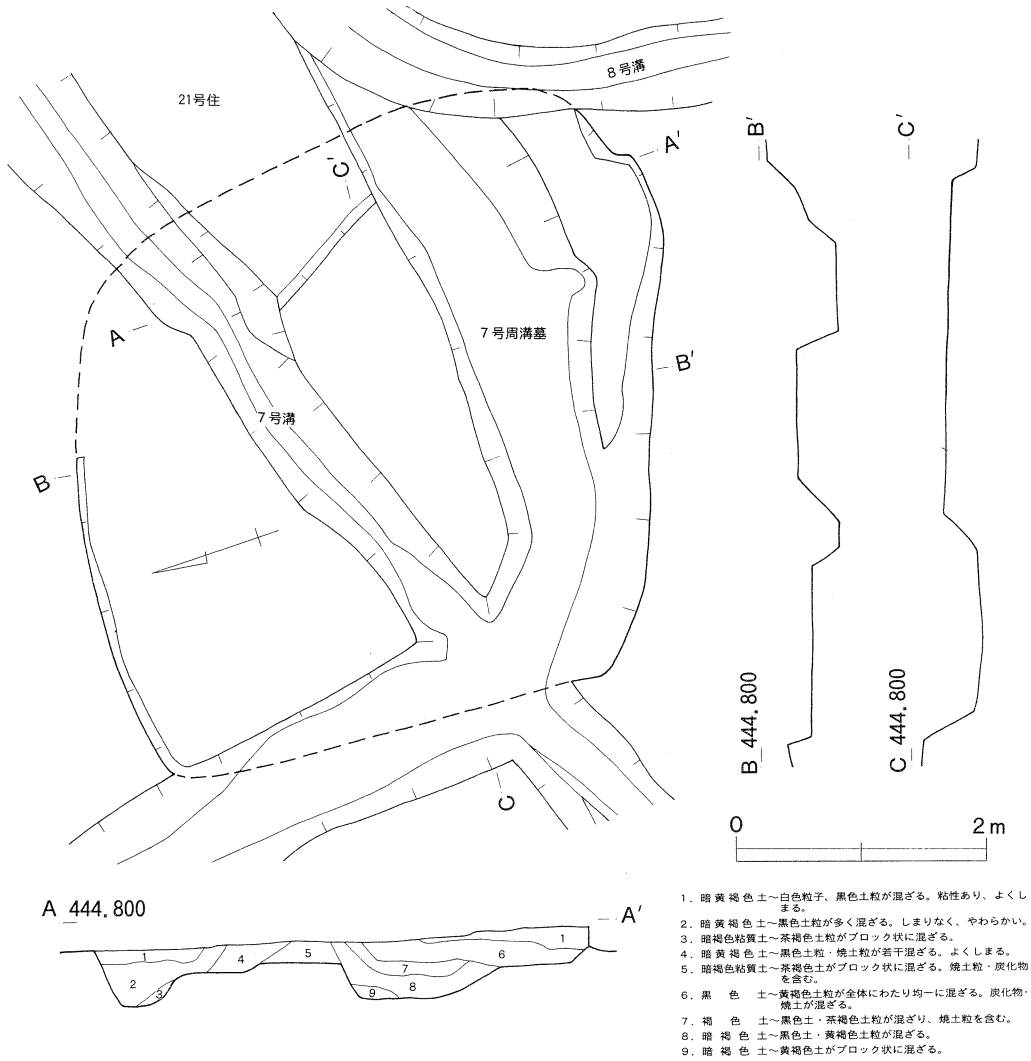
第25図　18号住居址平・断面図（1/60）（1/30）



1. 茶褐色土～黒色土粒・黄褐色土粒が混ざり、炭化物・焼土粒が若干含まれる。粘性あり、よくしまる。
2. 褐　色　土～黒色土・黄褐色土がブロック状に混ざる。焼土粒が多量に混ざる。粘性あり、しまりあり。
3. 焼　　土
4. 暗褐色土～黒色土・茶褐色土がブロック状に混ざる。西側に焼土粒が混ざる。粘性あり、しまりなし。
5. 黒褐色土～焼土粒・炭化物が混ざる。粘性強くやわらかい層である。
6. 黒　色　土～住居址中心部炉周辺にのみ認められたものである。焼土粒・炭化物が多量に混ざり、粘性強く、やわらかい土である。
7. 黄褐色土～壁の崩落土であろう。黒色土がブロック状に混ざる。

1. 黒　色　土～焼土・炭化物が混ざる。粘性あり、しまりなし。
2. 灰黒色土～焼土がブロック状に混ざる。黒色土・黄褐色土が混ざる。粘性あり。
3. 黄褐色土～焼土粒・炭化物・黒色土が混ざる。火を受けている。

第26図　19号住居址平・断面図（1/60）（1/30）



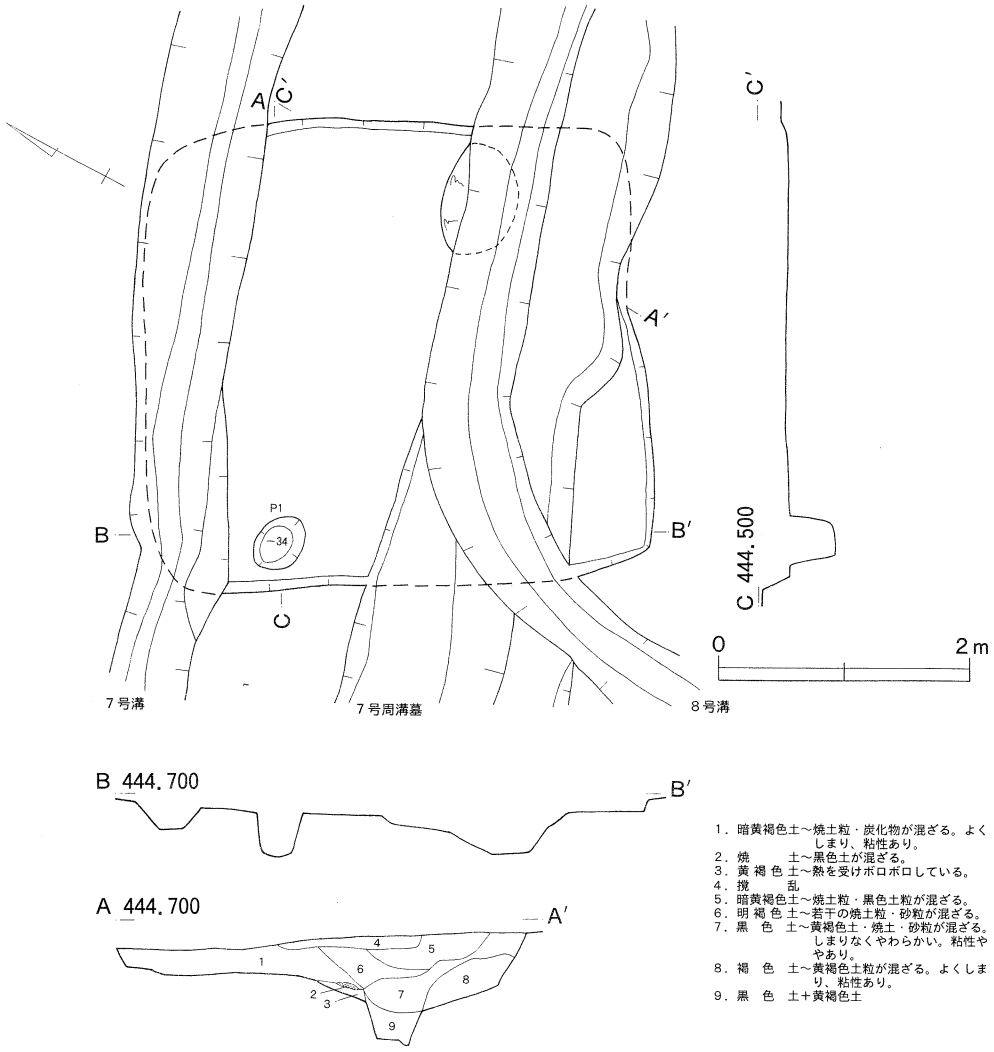
第27図　20号住居址平・断面図（1/60）

ている個所も見られた。

本住居址からの出土遺物は非常に少なく、細片と化した土器が覆土中より出土している。

〈20号住居址〉（第27図）

遺構確認用のトレンチ掘り下げ時に、僅かな掘り込みと床面らしき硬化した面を確認したことから住居址と認定したものであるが、21号住・７号周溝墓及び７・８号溝と激しく重複しているため規模・形態等その他ほとんどの属性を知り得ず、更には炉・柱穴等が確認できず住居址と認定出来るか不安が残るものである。土層堆積からは７号溝及び７号周溝墓に切られていることは明白であった。規模は推定であるが、東西４m、南北3.50m程度を測り、形態は方形を呈するであろうか。北壁の一部を検出したのみで、掘り込みは20cmを測る。床面は全体に硬化していた。ピット・炉址は検出されなかった。遺物の出土は僅かに器台片が１点出土したのみであった。

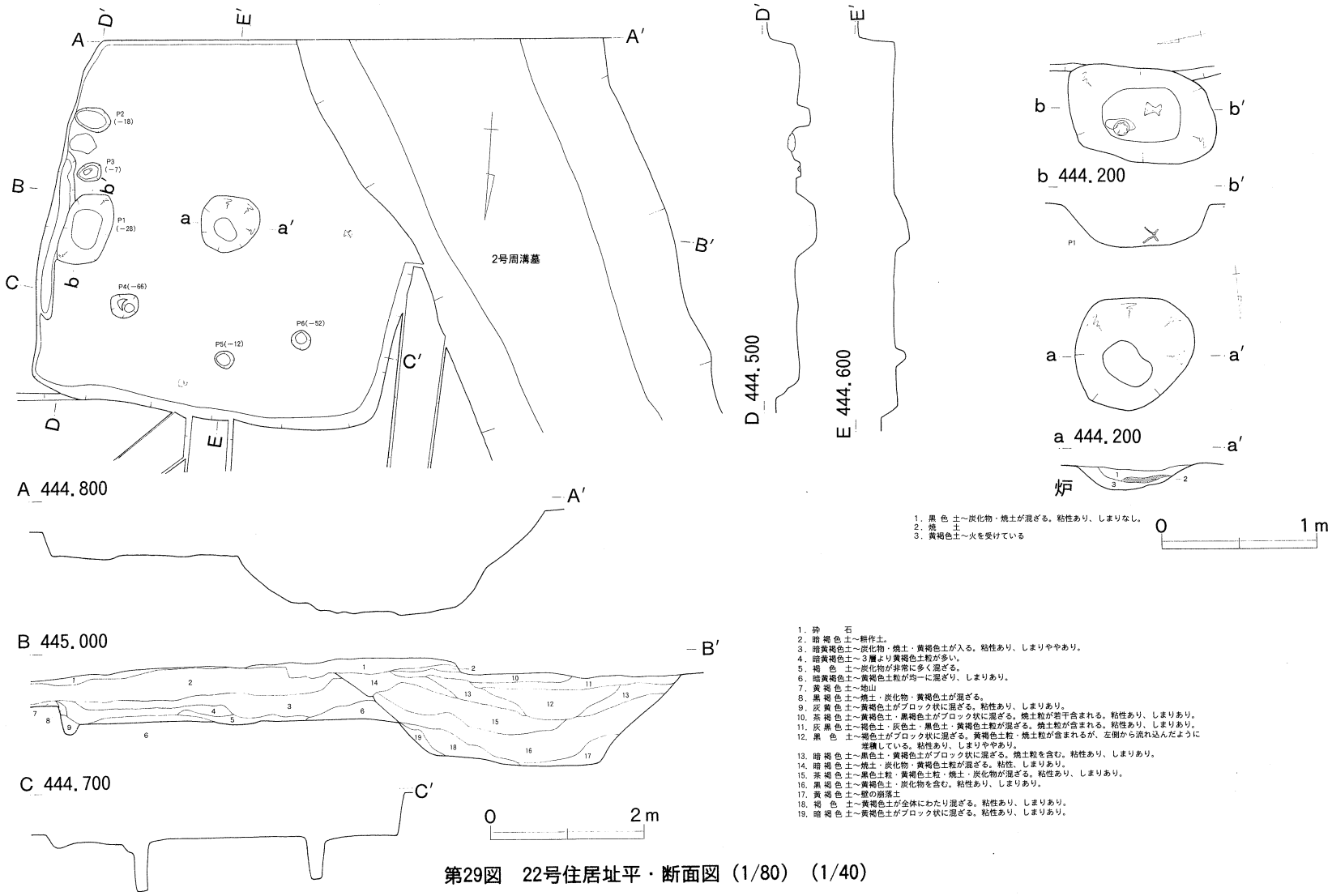


第28図　21号住居址平・断面図（1/60）

＜21号住居址＞（第28図）

遺構確認用のトレンチ掘り下げに際して落ち込み中に焼土の堆積を確認した。７号周溝墓・7,8号溝に切られる。推定規模は東西3.71m、南北４mを測る、方形の住居址となろう。覆土は１層が住居址覆土となり焼土・炭化物を含む暗黄褐色土であった。２～３層が炉址の覆土となる。４～９層が７号周溝墓及び８号溝の覆土となる。壁は東・西・南壁の一部が検出されただけで、北壁は７号溝に切られ検出できなかった。壁高は西壁がやや高く22cmを測る以外、他は10cm程度を確認するのみである。内部施設は西壁際からピットが１ヶ確認された、径40×40cmを測る。炉は８号溝によってその大部分が削られていたが、かろうじて一部が確認された。東西方向約90cm、掘り込みが15cm程度検出でき、焼土の堆積が約５cm認められた。

激しい重複関係にあったため、遺物の出土はなかった。



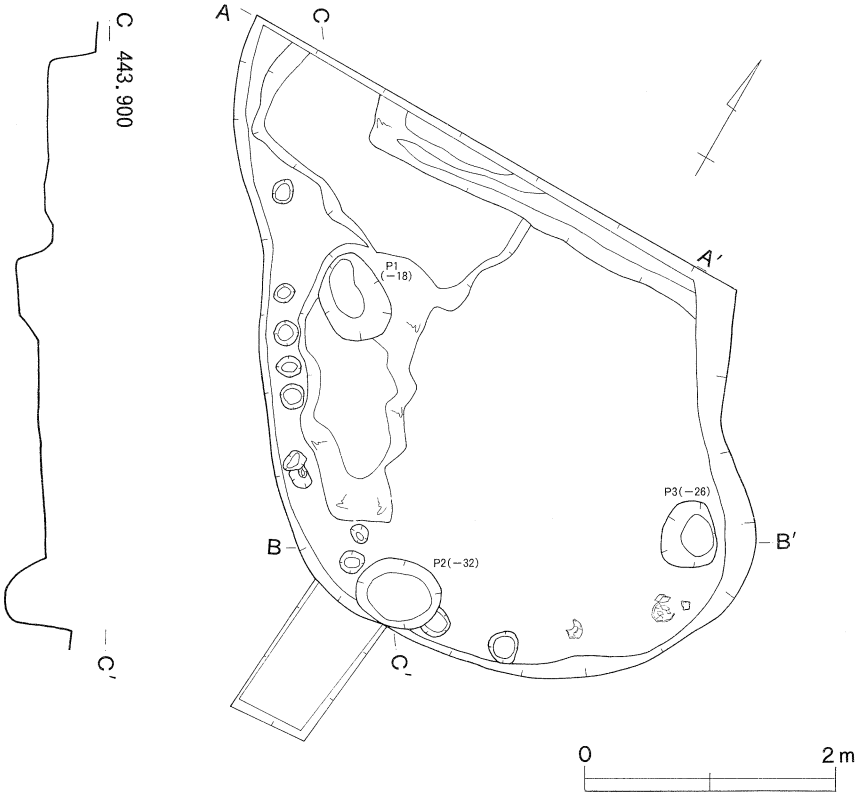
1．黒 色 土～炭化物・焼土が混ざる。粘性あり、しまりなし。
2．焼　土
3．黄褐色土～火を受けている

1．砕　　石
2．暗 褐 色 土～耕作土。
3．暗黄褐色土～炭化物・焼土・黄褐色土が入る。粘性あり、しまりややあり。
4．暗黄褐色土～３層より黄褐色土粒が多い。
5．褐　色　土～炭化物が非常に多く混ざる。
6．暗黄褐色土～黄褐色土粒が均一に混ざり、しまりあり。
7．黄 褐 色 土～地山
8．黒 褐 色 土～焼土・炭化物・黄褐色土が混ざる。
9．灰 黄 色 土～黄褐色土がブロック状に混ざる。粘性あり、しまりあり。
10．茶 褐 色 土～黄褐色土・黒褐色土がブロック状に混ざる。焼土粒が若干含まれる。粘性あり、しまりあり。
11．灰 黒 色 土～褐色土・灰色土・黒色土・黄褐色土粒が混ざる。焼土粒が含まれる。粘性あり、しまりあり。
12．黒　色　土～褐色土がブロック状に混ざる。黄褐色土粒・焼土粒が含まれるが、左側から流れ込んだように堆積している。粘性あり、しまりややあり。
13．暗 褐 色 土～黒色土・黄褐色土がブロック状に混ざる。焼土粒を含む。粘性あり、しまりあり。
14．暗 褐 色 土～焼土・炭化物・黄褐色土粒が混ざる。粘性、しまりあり。
15．茶 褐 色 土～黒色土粒・黄褐色土粒・焼土・炭化物が混ざる。粘性あり、しまりあり。
16．黒 褐 色 土～黄褐色土・炭化物を含む。粘性あり、しまりあり。
17．黄 褐 色 土～壁の崩落土
18．褐　色　土～黄褐色土が全体にわたり混ざる。粘性あり、しまりあり。
19．暗 褐 色 土～黄褐色土がブロック状に混ざる。粘性あり、しまりあり。

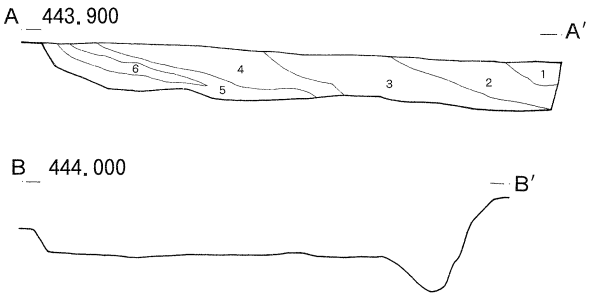
第29図　22号住居址平・断面図（1/80）（1/40）

<22号住居址>（第29図）

調査区域中央に位置する。遺構確認用のトレンチ掘り下げに際して暗黄褐色土の広がりと掘り込みを確認した。2号周溝墓に切られる。遺構の約半分は調査区域外に広がる。主軸N－6°－Eをとる。確認できた範囲で規模は東西方向4.75m、南北方向4.96mを測り、形態は長方形となる。土層堆積から2号周溝墓に切られていることは明瞭だった。住居址覆土は9層からなる。暗黄褐色土を主体とした覆土で、全体に焼土・炭化物の混入が認められた。床面は全体的に硬化していた。ピットは6つ確認され、この内、深さ50cm以上を測るP4,P6が柱穴となろう。P4は径35×32cm、深さ66cmを測り平面略円形を呈する。P6は径26×24cm、深さ52cmを測り、平面円形を呈する。P4,P6の間に径25×22cm、深さ12cmを測るP5が位置する。位置関係・浅い掘り込みなどから支柱穴となるであろうか。他に住居址東壁際からピットが3つ並んで確認された。



1．茶褐色土～黒色土・黄褐色土粒を含み、焼土粒・炭化物が若干混ざる。粘性あり、しまりあり。
2．茶褐色土～1層より黒色土・黄褐色土粒が大きく多量に含む。焼土粒・炭化物が混ざる。粘性あり、しまりあり。
3．茶褐色土～黒色土・黄褐色土がブロック状に混ざり、なおかつレンズ状の堆積となる。焼土粒がわずかに含まれる。粘性あり、しまりあり。
4．褐 色 土～黒色土がブロック状に混ざり、焼土粒が含まれる。黄褐色土がレンズ状の堆積となる。
5．黒褐色土～炭化物・焼土が混ざる。黄褐色土ブロックがレンズ状の堆積となる。粘性あり、しまりあり。
6．黄褐色土



第30図　23号住居址平・断面図（1/60）

径60×95cm、深さ28cmを測るP1からは第68図１の小型壺と、４の赤彩された器台及び第69図８の石器が出土している。住居址東壁際からは幅20cm、深さ８cmを測る周溝が約2.2mにわたり部分的に検出されている。炉は住居中央付近から径76×74cm、床面からの深さ14cmを測る地床炉が検出された。僅かであるが焼土の堆積が認められ、底は被熱を受け硬化していた。

出土土器には小型の壺・甕あるいは器台などが出土する。一般的な住居址出土土器とは異なった様相を見せる。

＜23号住居址＞（第30図）

遺構確認用のトレンチ掘り下げに際して確認した。調査区域中央北辺に位置し、一部調査区域外に広がる。覆土は明瞭なレンズ状の堆積を呈し、焼土粒が全体に混じっていた。住居址規模は検出した範囲で東西3.71m、南北5.24mを測り、平面小判形を呈する。床面は全体的に軟弱で、不整形をした掘り込みが確認された。柱穴は比較的大きな掘り込みを持つP1～P3が主柱穴となるであろうか。その他、住居址南壁から西壁際にかけて巡る小ピットがある。壁高は西壁が18cm、南壁では20cmを測り、比較的緩やかに立ち上がる。炉は検出されなかった。

出土遺物は床面直上から２点の土器が出土した。どちらも壺となるものである。

第２節　周溝墓

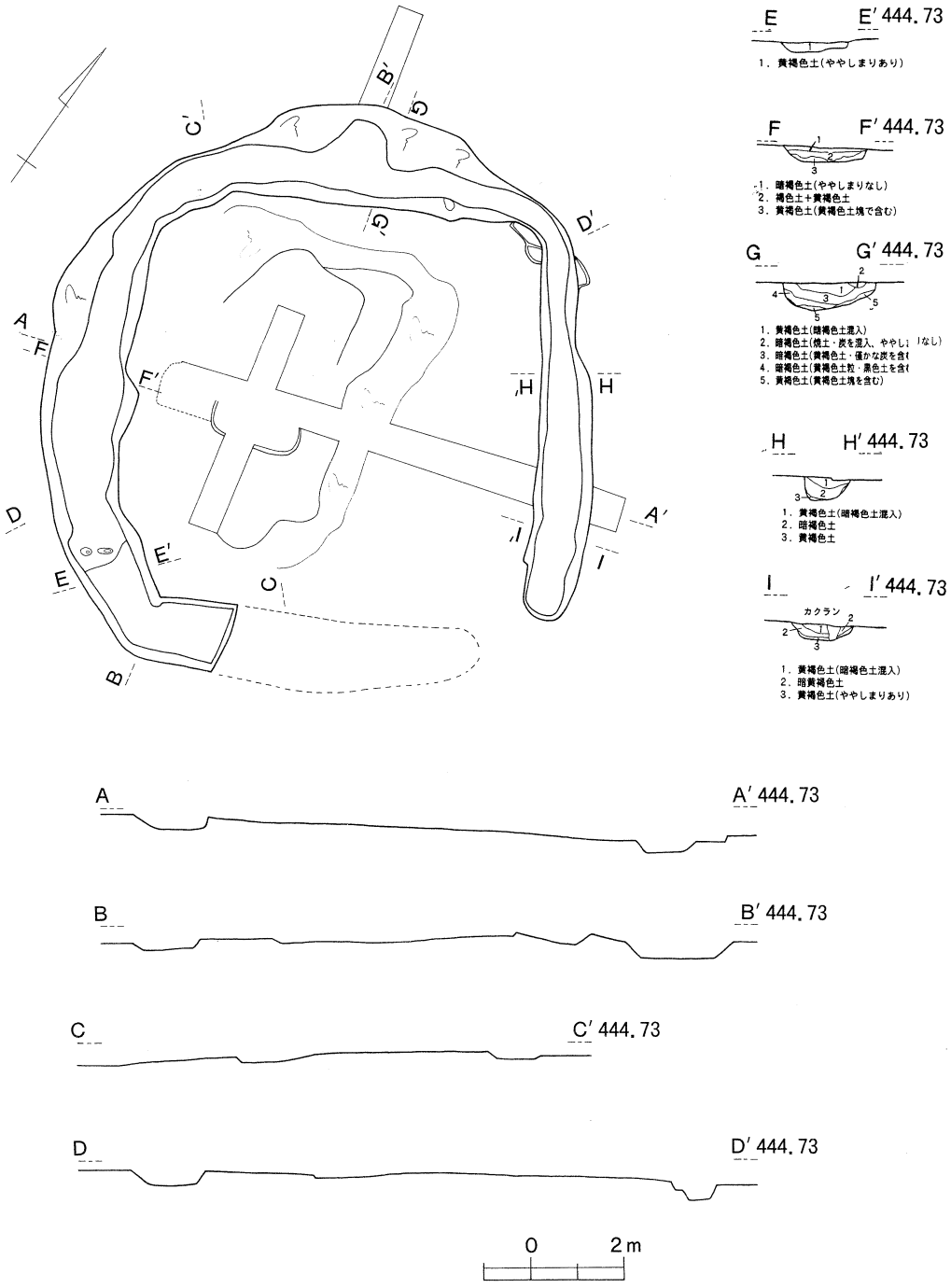
＜１号周溝墓＞（第31図）

調査区域中央南端に位置する。黄褐色土中に暗褐色土の落ち込みを発見し、補助的試掘溝を設定して掘り下げた。南側は調査区域外で完掘はできなかった。規模は東西約11m70cm、南北約12m、方台部は８m80cm四方。周溝の幅は60cm～２mで、各辺の中央部分で外側に広がり、角では反対に幅が狭くなっている。東辺南端で溝が終わっているので、南東角にブリッジをもつ形態の周溝墓と思われる（図中破線部分は推定線）。溝断面は雨樋の形を呈し、壁の立ち上がりは内側が急で外側がなだらかとなっている。方台部は西側が若干高く、部分的に暗褐色土がみられたので、埋葬主体部が遺存している可能性を考えて補助的試掘溝を設定して掘り下げをおこなったが、耕作による撹乱であることがわかり、埋葬主体部は検出されなかった。

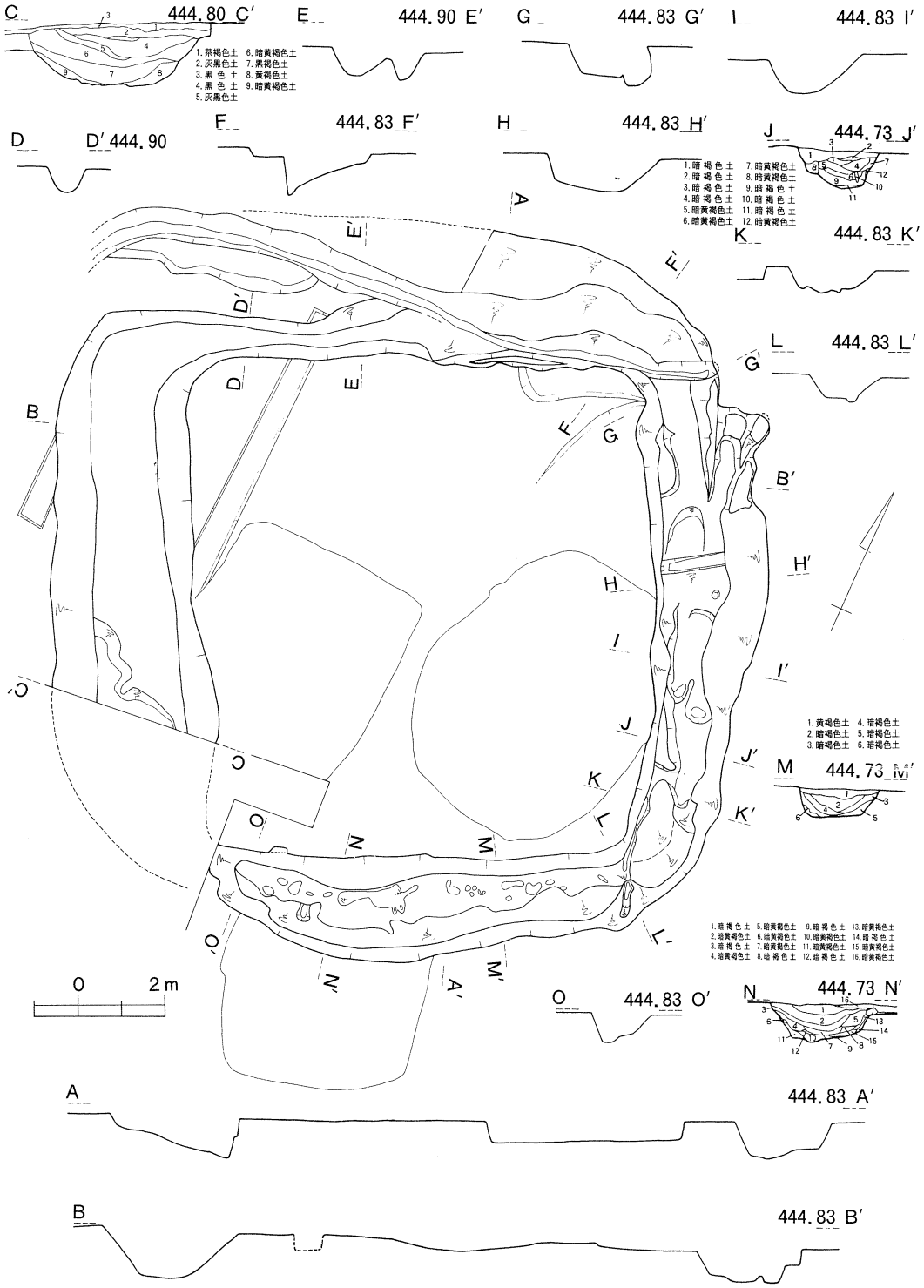
遺物は壺・台付甕・小型壺・高坏・器台・蓋などがみられ、東辺の周溝覆土中からの出土が目立った。

＜２号周溝墓＞（第32図）

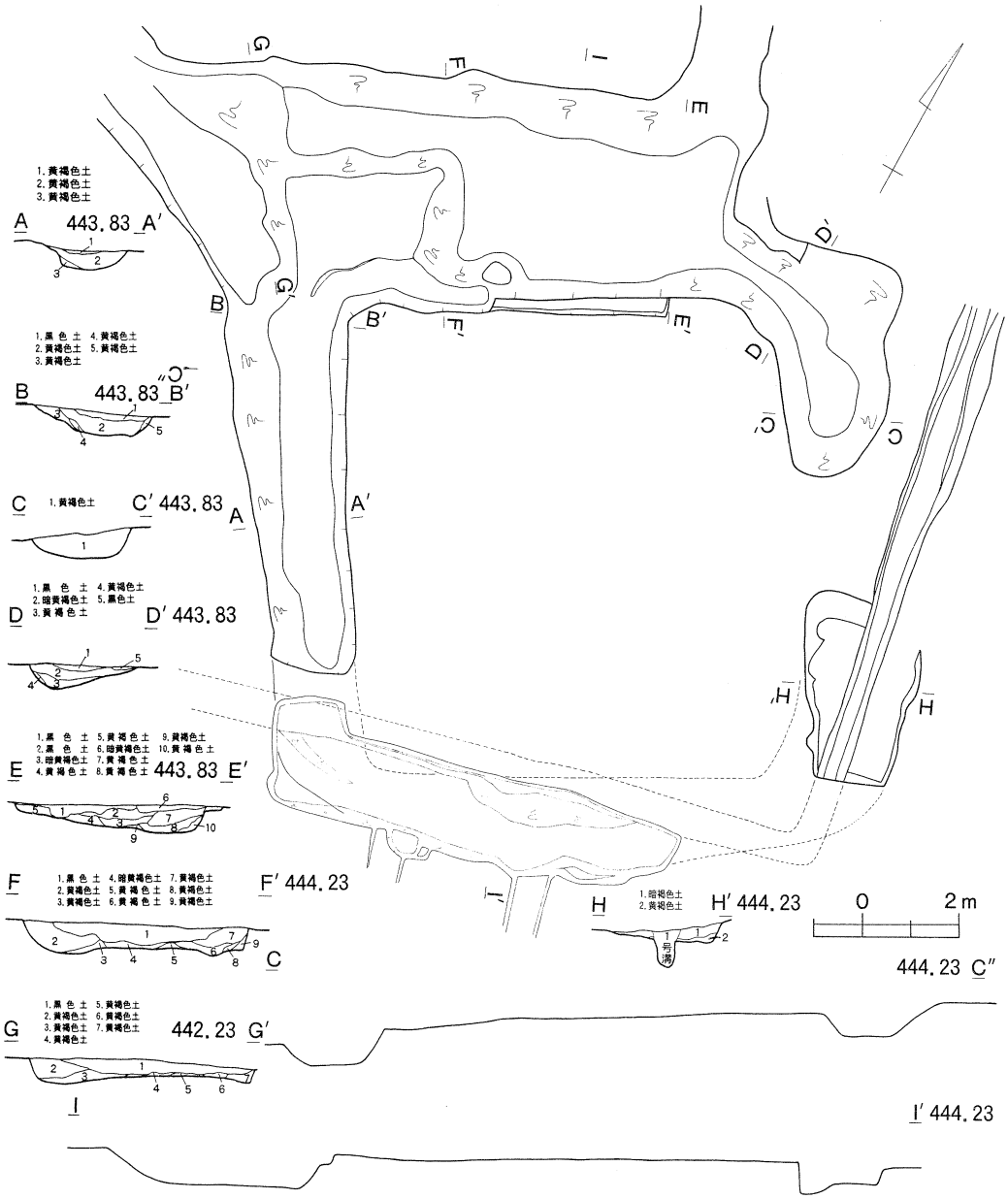
調査区域中央西側に位置する。黄褐色土中に暗褐色土の落ち込みを発見し掘り下げる。東側は第４次、西側は第６次調査時に発掘。南西角は調査区域外で完掘できなかった。また、１号・２号・22号住居址を切っている。北辺をなす周溝は部分的に７号周溝墓や８号溝が重なり、遺構が不明瞭となっている。東辺周溝には溝状の撹乱が入り込んでいる。規模は東西・南北約16mの方形で、方台部は東西約10m50cm、南北約11m50cmの長方形を呈する。確認面からの深さは、60cm～１m40cm程あり、周溝底面は一様に平らではない。周溝の幅は約80cm～３mで、基本的には各辺の中央部分で外側に広がりをもち、逆に角では幅が狭くなっている。南西角が調査区



第31図　1号周溝墓平・断面図（1/150）



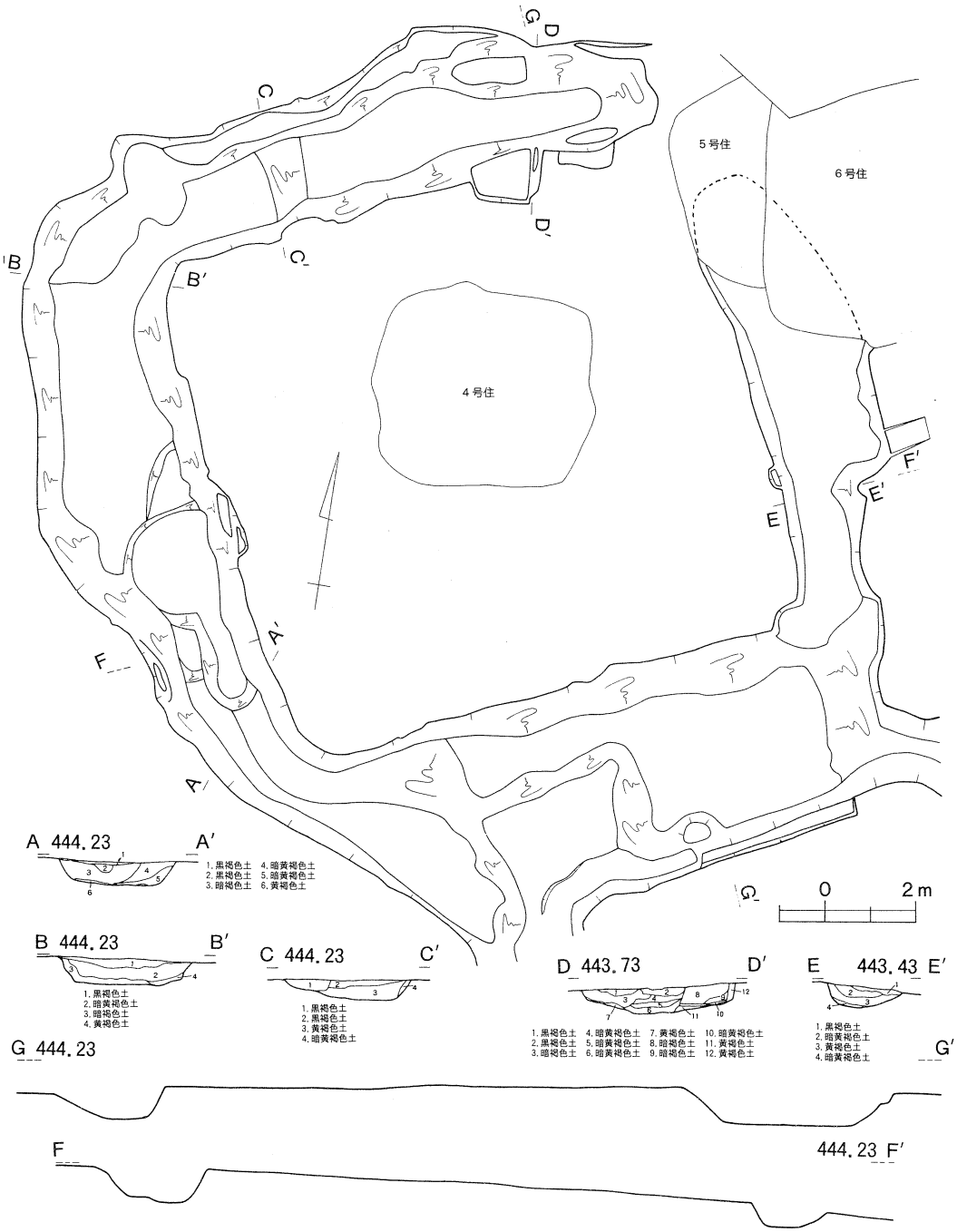
第32図　２号周溝墓平・断面図（1/150）



第33図　３号周溝墓平・断面図（1/150）

域外であり、この部分にブリッジをもつ形態なのか、周溝が全周するものなのか定かではない（図中破線部分は推定線）。溝断面は雨樋の形を呈し、壁の立ち上がりは東側半分では内側が急で外側がなだらかとなっている。方台部の埋葬主体部は検出されなかった。

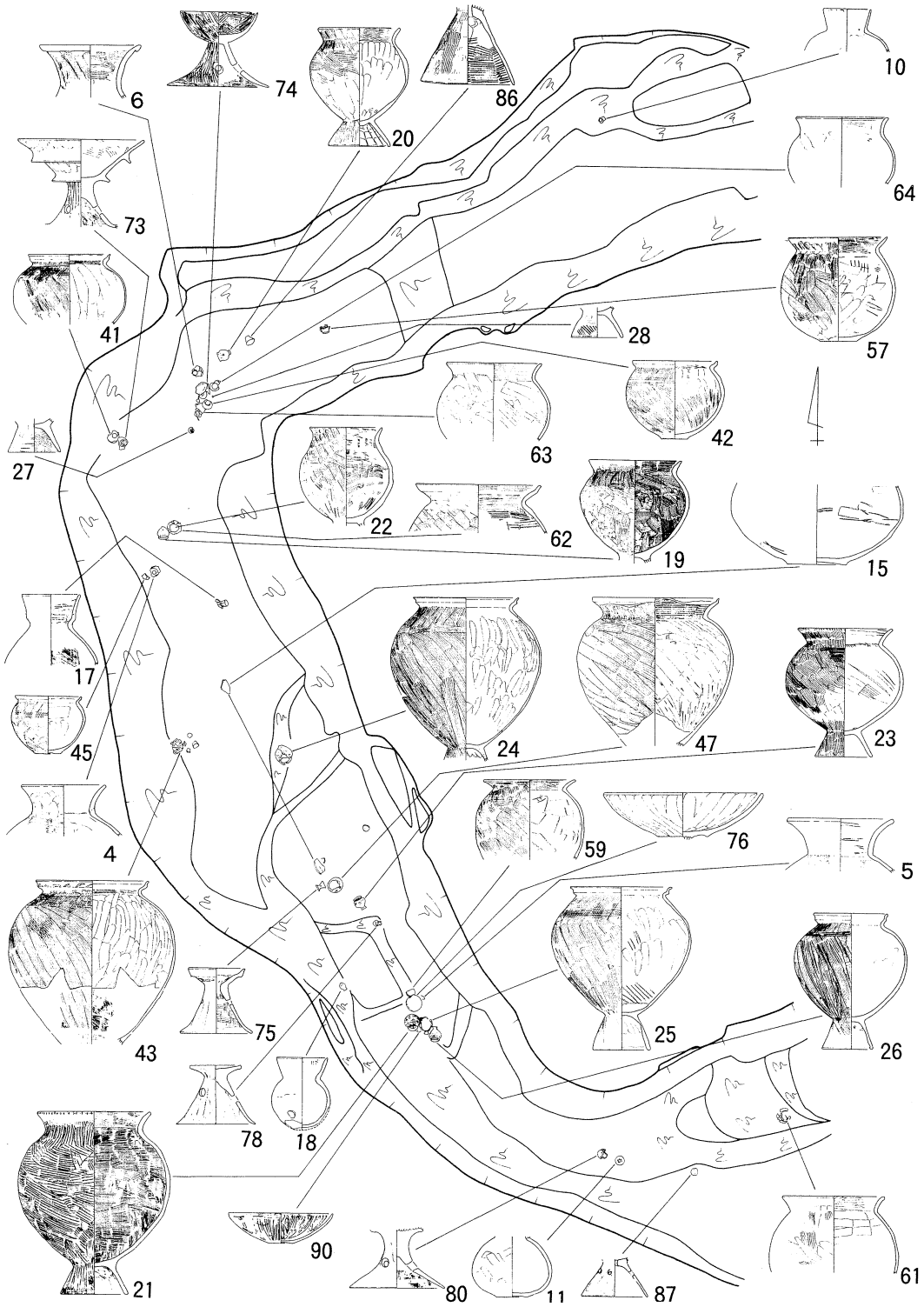
遺物は壺・台付甕・小型壺・高坏・器台などがみられ、南辺の周溝覆土中最下層からの出土が顕著であった。



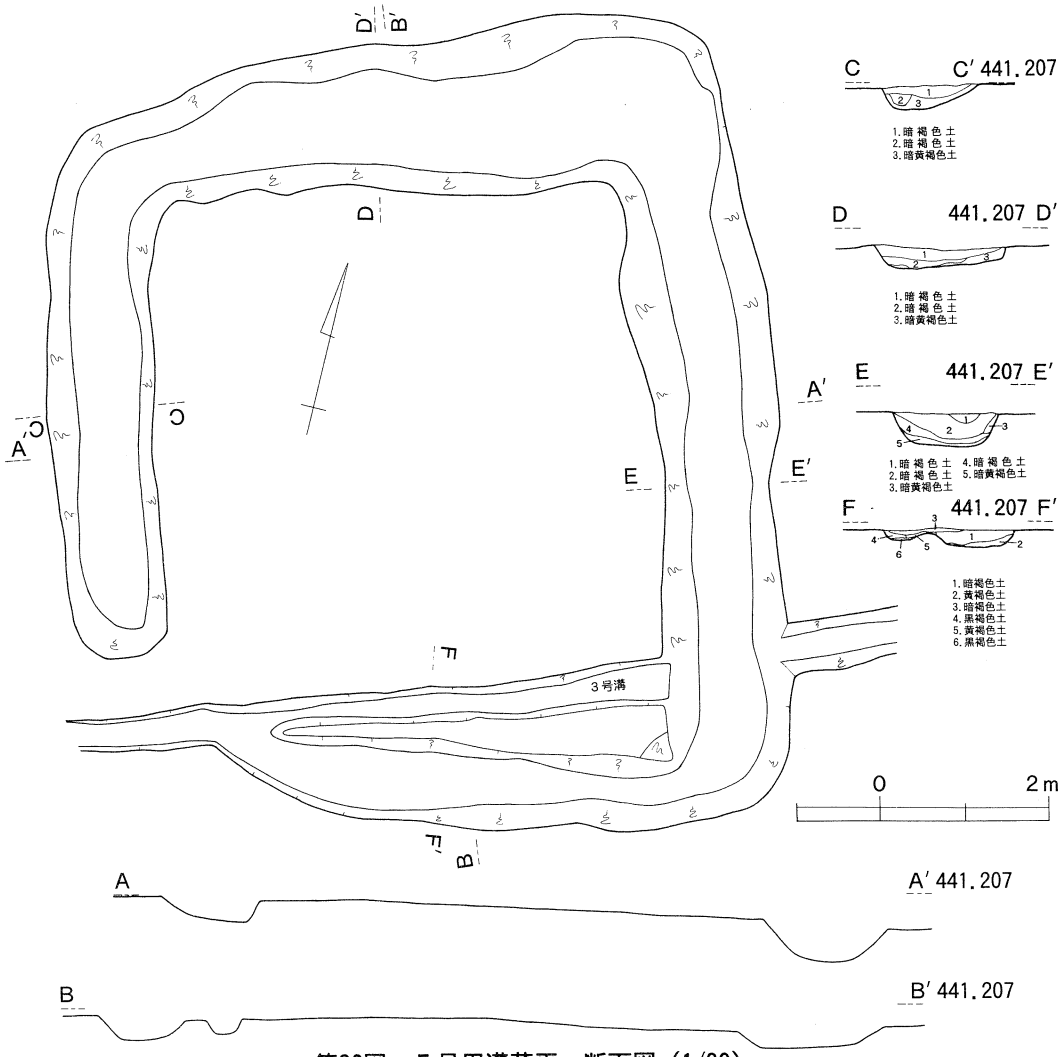
第34図　４号周溝墓平・断面図（1/150）

＜３号周溝墓＞（第33図）

調査区域中央南東側に位置する。黄褐色土中に黒色土の落ち込みを発見し掘り下げる。覆土は黒色土と黄褐色土にわけられる。北側は４号周溝墓と重複しており壁が明瞭ではなかったが、土層断面観察の結果、本周溝墓は４号周溝墓に切られていることがわかった。南側は調査区域外であるが、平成６年度に個人住宅建設にかかり発掘調査が行われ方形周溝墓の南辺部分が発見され



第35図　４号周溝墓遺物出土状態（1/100）



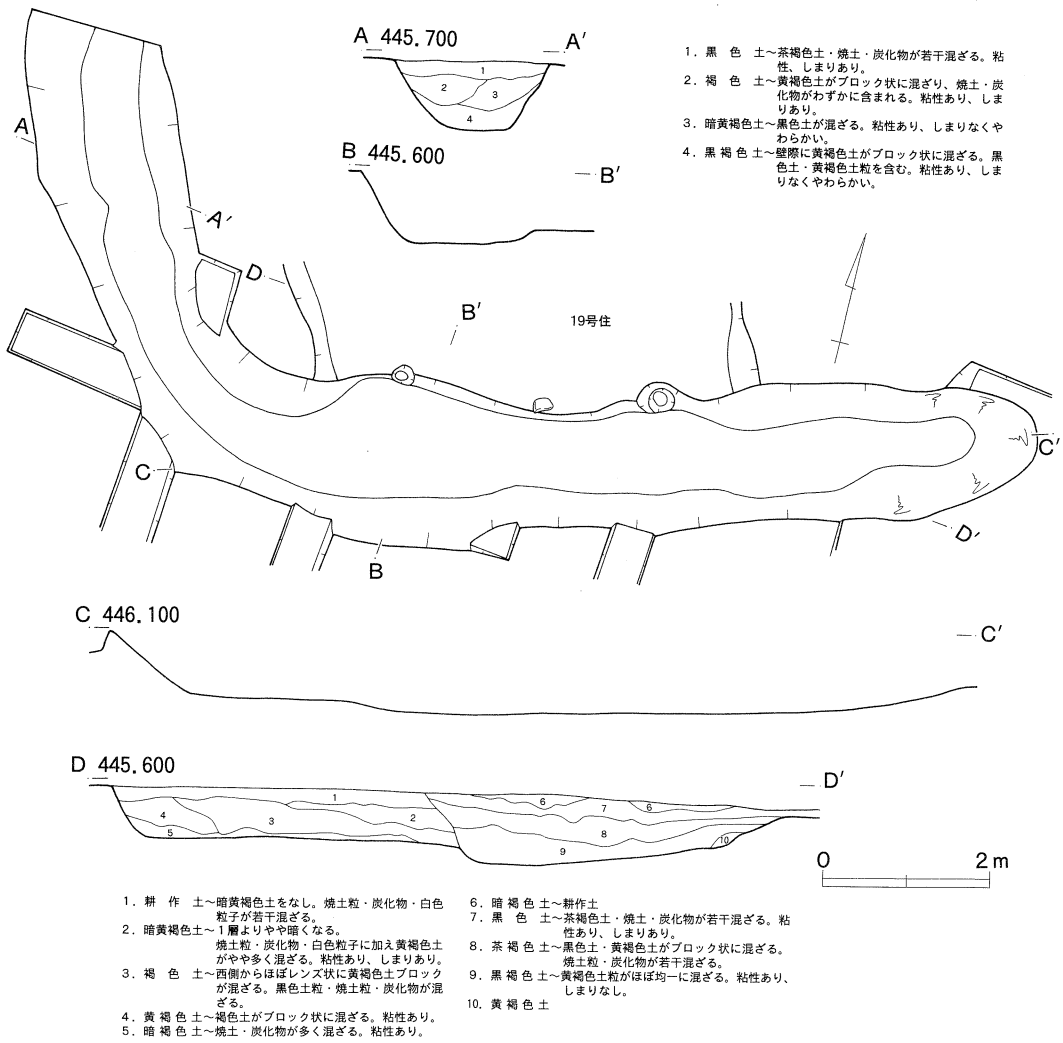
第36図　5号周溝墓平・断面図（1/90）

ている。規模は東西・南北約13mの方形で、方台部は東西約９m、南北は推定約９m50cmの方形を呈する。周溝墓は地形に沿って緩やかに西から東にかけて傾斜している。確認面からの深さは、50～60cm程度で、周溝底面は一様に平らではない。周溝の幅は約１m50cm～２m50cmで、基本的には角の部分の幅が狭くなるようである。南東角が調査区域境界でありこの部分が不明瞭ではあるが、東側周溝の中央部に幅約２mのブリッジが存在する形態の周溝墓となろう（図中破線部分は推定線）。溝断面は雨樋の形を呈し、壁の立ち上がりは内側が急で外側がなだらかとなっている。方台部の埋葬主体部は検出されなかった。南東側の溝は、中央部分に１号溝が通じている。

遺物の出土は非常に少なかった。

＜４号周溝墓＞（第34・35図）

調査区域中央北側に位置する。黄褐色土中に黒褐色土の落ち込みを発見し掘り下げる。南側は３号周溝墓と重複しており壁が明瞭ではなかったが、土層断面観察の結果、本周溝墓は３号周溝

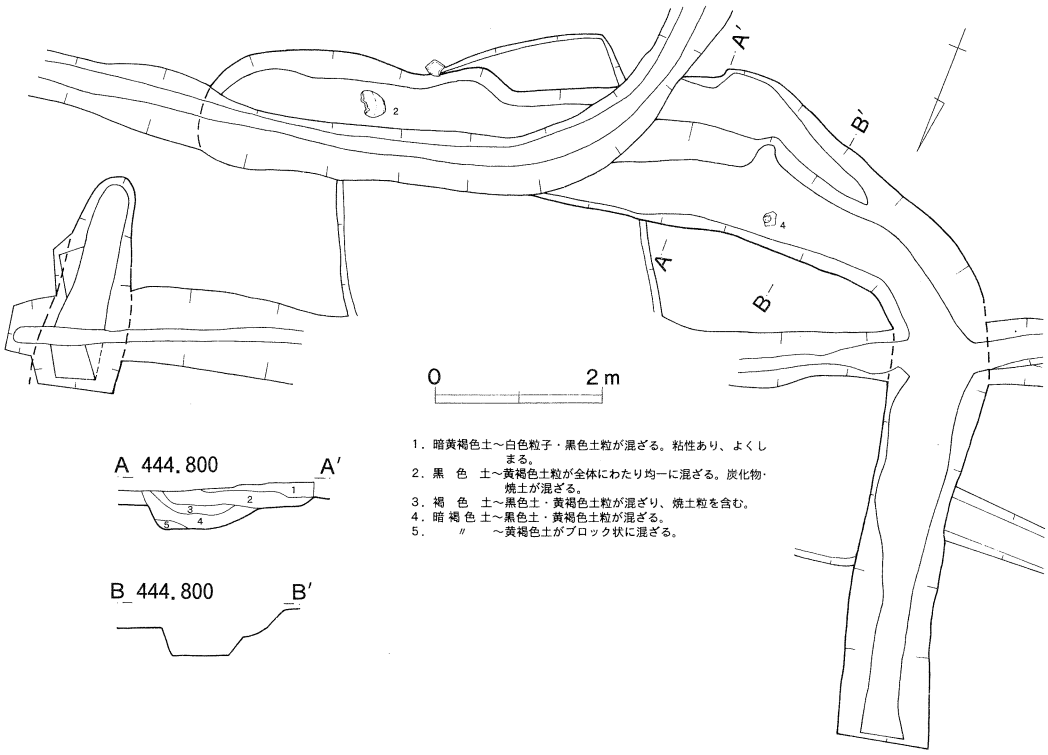


第37図　6号周溝墓平・断面図（1/90）

墓を切っていることがわかった。北東側は5号・6号住居址に切られ遺存していない。覆土は黒褐色土・暗褐色土・暗黄褐色土・黄褐色土にわけられる。規模は東西約18m50cm、南北約17mの方形で、方台部は東西約12m、南北約11mの方形を呈する。周溝墓は地形に沿って緩やかに西から東にかけて傾斜している。確認面からの深さは、50～80cm前後で、周溝底面は一様に平らではなく段差がみられる。周溝の幅は約1m40cm～4mで、基本的には各辺の中央部分で外側に広がりをもち、逆に角では幅が狭くなっている。北辺周溝が東側で切れているので、北東角にブリッジをもつ形態の周溝墓と思われる（図中破線部分は推定線）。溝断面は雨樋状の形を呈し、壁の立ち上がりは基本的には内側が急で外側がなだらかとなっている。方台部には4号住居址がつくられていたが、埋葬主体部となるような遺構は検出されなかった。

西辺周溝を中心に遺物が集中しており、壺・小型壺・甕・鉢・台付甕・S字状口縁台付甕・高坏・器台など豊富に出土した。これら遺物は周溝底面から10～30cm程浮いて出土している。

＜5号周溝墓＞（第36図）



第38図　7号周溝墓平・断面図（1/90）

調査区域東側に位置する。黄褐色土中に暗褐色土の落ち込みを発見し掘り下げる。周溝南側を3号溝が東西方向に通っている。覆土は暗褐色土・暗黄褐色土などにわけられる。規模は東西約8m70cm、南北約9m30cmの方形で、方台部は東西約6m、南北約6m50cmの方形を呈する。周溝墓は地形に沿って緩やかに西から東にかけて傾斜している。確認面からの深さは20～40cm前後。周溝の幅は約80cm～2mで、北東隅部分の幅が広い。3号溝に切られやや不明瞭ではあるが、南西角に幅1m30cmのブリッジをもつ形態の周溝墓となろう。溝断面は雨樋状の形を呈する。方台部には埋葬主体部となるような遺構は検出されなかった。

出土遺物は少ないが、条痕文の土器片が出土している。

＜6号周溝墓＞（第37図）

遺構確認のトレンチ掘り下げに際して黒色土の広がりと落ち込みを検出した。調査区域西側から検出し、南側周溝と西側周溝の一部を確認した。19号住居址と重複し、土層堆積からは19号住居址を切っていることが明瞭に観察できた。覆土は比較的上層に焼土粒・炭化物の混入が認められた。規模は南側周溝で長さ10.26m、幅1.5～2m、深さ80cmを測り、一辺10mほどの方形プランを呈するであろう。周溝断面は逆台形となり、周溝中あるいは底から、いわゆる溝内土坑などは確認出来ず一様に平坦な溝底となる。ブリッジは調査範囲からは判然としなかったが南東隅

に位置するであろう。

遺物の出土は覆土の上層から下層にかけてすでに多くが破片となって、土器の出土が見られた。出土状況等に供献行為を想定する様相は見られなかった。

＜７号周溝墓＞（第38図）

遺構確認のトレンチ掘り下げに際して黒色土の広がりと落ち込みを検出した。調査区域中央西側に位置し、南側周溝と西・東側周溝の一部を確認した。20･21号住居址及び7･8号溝とが重複し、特に南側周溝部分で重複が著しかった。土層堆積からは21号住居址を切り、7･8号溝に切られていることが明瞭に観察できた。覆土には比較的上層に焼土粒・炭化物の混入が認められた。規模は南側周溝で長さ9.26m、幅１m程度、深さ60～90cmを測り、一辺９mほどの方形プランを呈するであろう。周溝断面は逆台形となり、周溝中あるいは底から溝内土坑などは確認出来ず一様に平坦な溝底となる。ブリッジは南東隅に位置する。

出土土器は覆土の上層から下層にかけて多くが破片となって出土した。出土状況等に供献行為を想定する様相は見られなかった。

第３節　その他の遺構

＜１号溝＞（第39図）

調査区域中央東側に位置する南北方向の溝。南側で３号周溝墓を部分的に切っている。規模は、幅１m前後、発掘した部分の長さはおよそ23m。確認面からの深さは70～90cmで、南側が深くなる。断面は上半分が広く下半分が狭くなる形態で、基本的にはＹ字形となる。本溝は北と南へまだ続いており、南側で西に直角に曲がり、平成６年度に個人住宅建設にかかり発掘調査が行われた区域へとつながっている。根切りの溝かと思われるが、詳細は不明。遺物の出土は無い。

＜２号溝＞（第39図）

調査区域中央東側に位置し、１号溝の東側にあり、１号溝と平行に南北方向にはしる。幅70cm前後、発掘した部分の長さはおよそ23m。確認面からの深さは約１mで、断面は上半分が広く下半分が狭くなる形態で、基本的にはＹ字形となる。本溝は北と南へまだ続いており、根切りの溝かとも思われるが、詳細は不明。遺物の出土は無い。

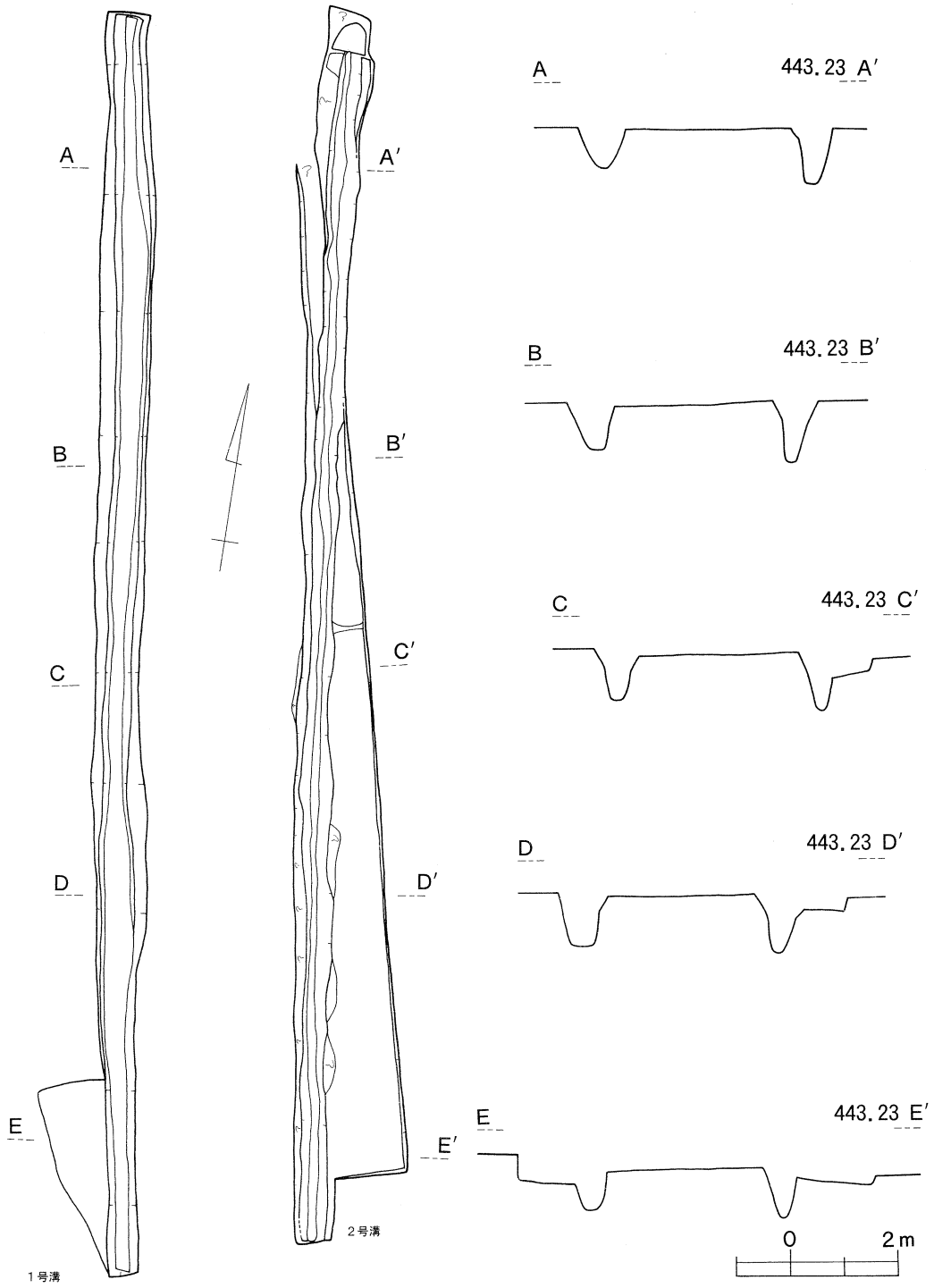
＜３号溝＞（第40図）

調査区域東側南端に位置し、５号周溝墓の南側を切っている。幅60cm前後、途中途切れるが発掘した部分の長さは28m程度。確認面からの深さは５～15cm前後、断面はＵ字を呈する。本溝は東西方向にのびているが、詳細は不明。縄文時代の石器が出土している。

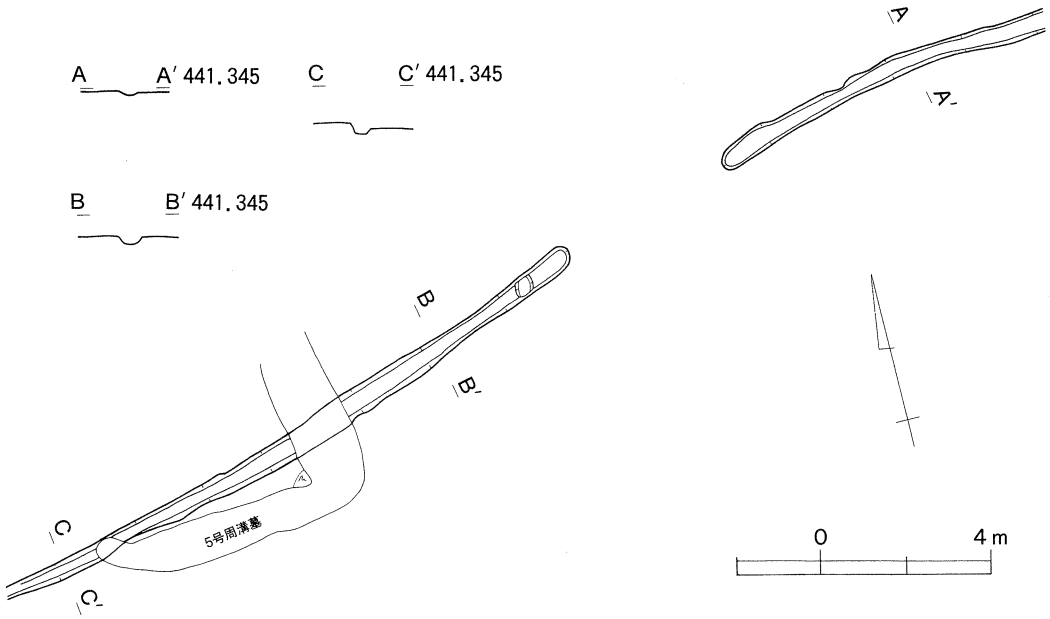
＜４号溝＞（第41図）

調査区域東端に位置する南北方向の溝。規模は、幅60cm前後、発掘した部分の長さは約13m50cm。確認面からの深さは５～20cmで、若干ではあるが南側が深くなるようである。断面はコの字形。本溝は南へまだ続いているが、詳細は不明。遺物の出土は無い。

＜５号溝＞（第41図）



第39図　1号・2号溝平・断面図（1/125）



第40図　３号溝平・断面図（1/180）

調査区域中央東端に位置し、４号溝の東側にあり、４号溝と平行に南北方向にはしる。幅約60cm、発掘した部分の長さはおよそ12m50cm。確認面からの深さは10～30cm前後で、断面は逆台形状を呈する。本構は南へまだ続いているが、詳細は不明。遺物の出土は無い。

＜６号溝＞（第22図）

調査区域西側に位置し、15号住居址と重複関係にある。15号住を調査時に確認したもので、土層堆積から15号住を切っていたのは明瞭に観察できた。幅60cm、深さ58cmの断面箱状を呈し、長さ6.60mを測り、幅・深さともほぼ一定で東西方向に走る。いわゆる根切りの溝と呼ばれるもので、時期は現代に位置付けられる。

遺物の出土は非常に少なく、小片となった土器が数点出土したのみであった。いずれも古墳時代初頭に位置付けられるもので、第15号住居址からの混入であろう。

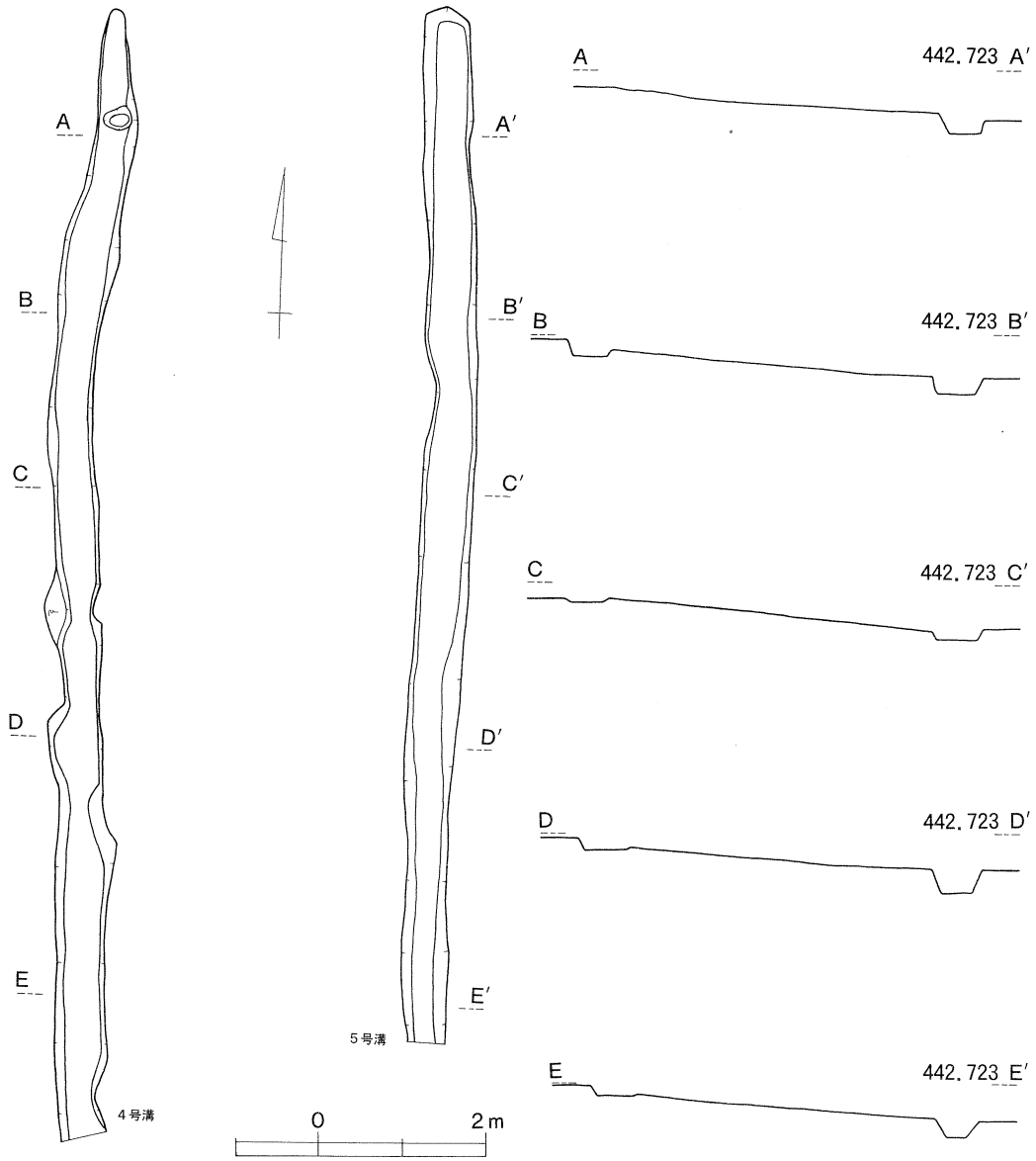
＜７号溝＞（第42図）

調査区域中央西側に位置し、20,21号住居址及び７号周溝墓と重複関係にあり、土層堆積からその全てを切っていたのは明瞭であった。幅94～50cm、深さ46cmの断面逆台形を呈し、長さ14.30mを測る。幅・深さともほぼ一定で７号周溝墓の南西コーナーから東周溝にかけて東西方向に走る。遺構の時期は現代に位置付ける。いわゆる根切りの溝と呼ばれるものであろう。

遺物の出土は小片となった土器が出土した。いずれも古墳時代初頭に位置付けられるもので、重複する遺構からの混入であろう。

＜８号溝＞（第42図）

調査区域中央西側に位置し、21号住居址及び2･7号周溝墓と重複関係にある。土層堆積からその全てを切っていた。幅60cm、深さ90cmで断面Ｖ字状を呈し、長さ約17.50mを測る。幅・深



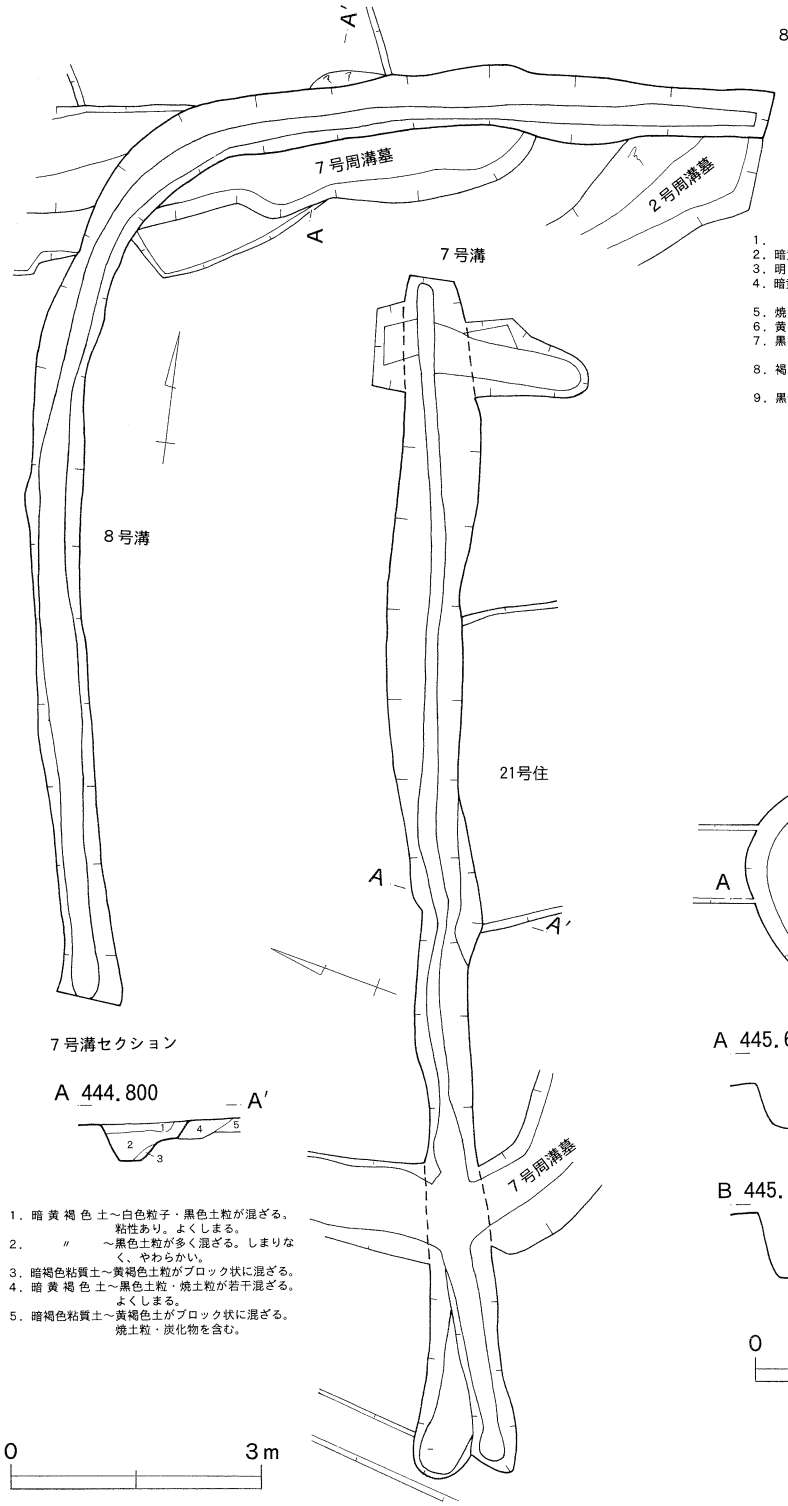
第41図　4号・5号溝平・断面図（1/90）

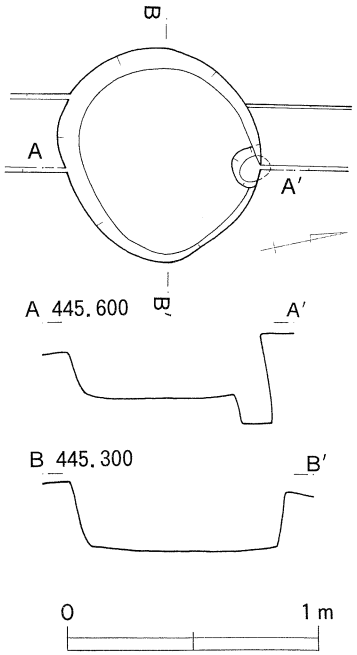
さともほぼ一定で東西方向に走り、7号周溝墓と重複した地点から方向を90°変え南北方向に走る。遺構の時期は現代に位置付ける。いわゆる根切りの溝と呼ばれるものである。

遺物の出土は非常に少なく、小片となった土器が数点出土したのみであった。いずれも古墳時代初頭に位置付けられるもので、重複した遺構からの混入であろう。

＜1号土坑＞（第43図）

調査区域西側に位置する。規模は長径82cm、短径76cm、深さ26cmを測る。平面ほぼ正円形、断面箱形を呈する。坑底はほぼ平坦であるが、北側部分はピット状に深くなる。壁の立ち上がりは急激な立ち上がりとなる。遺物の出土はなかった。





第42図　7号・8号溝平・断面図（1/90）

第43図　1号土坑・断面図（1/30）

第Ⅳ章　遺　　物

各遺構から出土した遺物は、古墳時代のものが中心となっている。出土概要は遺構とともに示しておいたので、遺物の観察は以下に小節を設けず前章に準じて住居址から一覧表で示す。

＜1号住居址出土遺物＞（第44図）

（単位 cm）

番号	器種	法量等／胎土／色調 整形・特徴・その他
1	壺	口径14.0、口縁部破片／白色粒子を含む／内面－にぶい橙色。外面－橙色 内面－刷毛目。外面－口縁部と凸帯部に押圧文。
2	甕	底径7.0、胴部～底部破片／白色粒子と金雲母を含む／明黄褐色、一部黒変 内外面ともに刷毛整形。
3	甕	口径14.5、口縁部～胴部破片／雲母、白・黒色粒子を含む／にぶい橙色 内面－刷毛目，撫で。外面－刷毛目
4	甕	底径8.7、底部破片/粗い白・黒・赤色粒子を含む/内面－橙色～明赤褐色。外面－橙色～にぶい褐色 内面－横撫で。外面－胴部に条痕文。底部－ヘラ？削り。
5	小型甕	器高8.1、口径8.2、底径3.9、完形／雲母、白色粒子を含む／にぶい黄橙色 内面－撫で。外面－刷毛目。底部－削り。歪んでいる。
6	鉢	器高10.1、口径18.8、底径7.3、完形／雲母、白・赤色粒子を含む／にぶい黄橙色 内面－撫で、みがき。外面－撫で、刷毛目、削り。底部－削り
7	片口鉢	器高6.2、口径9.3、底形4.5、略完形／雲母、白・赤色粒子を含む／にぶい黄橙色 内面－撫で、刷毛目。外面－撫で、削り。底部－削り
8	鉢	底形9.5、胴下部破片／雲母、白・赤色粒子を含む／にぶい黄橙色 内面－撫で。外面－撫で、刷毛目。底部－削り
9	石器	長さ9.2，巾6.5，厚さ3.5，石材安山岩
10	石器	長さ13，巾8.6，厚さ4.5，石材砂岩
11	石器	長さ11.0，巾6.3，厚さ4.5，石材片岩 編み石か？
12	石器	厚さ0.8，石材片岩 打製石斧

＜2号住居址出土遺物＞（第45図）

（単位 cm）

番号	器種	法量等／胎土／色調 整形・特徴・その他
1	壺	口径18.2，口縁部のみ残存／雲母、白・赤・黒色粒子（やや密）／にぶい黄橙色 内面－刷毛目の後、撫で。外面－撫でと条痕がみられる。 小孔が何ヵ所かあけられている。
2	壺	口径17.8，口縁部～胴部破片／雲母、白・赤・黒色粒子（密）／にぶい橙色 内面－工具による撫で。外面－撫で、折り返し口縁。

＜5号住居址出土遺物＞（第46図）

（単位 cm）

番号	器種	法量等／胎土／色調 整形・特徴・その他
1	甕	口径13.0,口縁部～胴部破片／雲母、白色粒子を含む／にぶい黄橙色 内、外面は撫でられている。
2	高坏	底径12.1,脚部破片／雲母、白・赤色粒子を含む／にぶい黄橙色 内面－撫で、刷毛目。外面－撫で、円孔有り。
3	甑	器高9.0,口径16.0,底部4.0,完形／雲母、白・赤色粒子を含む／橙色 内面－撫で、刷毛目。外面－撫で
4	甕	破片／白・赤・黒色粒子を含む／にぶい黄橙色 内・外面ともに条痕文
5	甕	破片／白・黒色粒子を含む／にぶい黄橙色 外面－条痕文
6	甕	破片／白・赤・黒色粒子を含む／にぶい黄橙色 外面－条痕文
7	甕	破片／雲母、白・黒色粒子を含む／にぶい黄橙色 外面－綾杉状の条痕文
8	甕	破片／雲母、白・黒色粒子を含む／にぶい黄橙色 外面－綾杉状の条痕文
9	甕	破片／白・黒色粒子を含む／にぶい黄橙色 外面－縦方向の条痕文
10	紡錘車	器高1.4,底径3.8,孔径1.0,完形／雲母、白色粒子を含む／にぶい黄橙色
11	石器？	長さ4.2,巾3.5,厚さ2.1,石材凝灰岩
12	石器	長さ14.5,巾8.2,厚さ3.4,石材安山岩 石斧

＜6号住居址出土遺物＞（第47.48図）

（単位 cm）

番号	器種	法量等／胎土／色調 整形・特徴・その他
1	壺	頸部～胴部破片／雲母、白・赤色粒子を含む／にぶい橙色 内面－頸部、磨き。胴部、横方向刷毛目。 外面－頸部、撫で。胴上部に工具による刺突がある。
2	壺	頸部～胴部破片／雲母、白・赤・黒色粒子を含む／にぶい橙色 内面－撫で、刷毛目。外面－撫で、刷毛目調整の後、磨き。
3	甕	口径20.0,口縁部破片／雲母、白・黒色粒子を含む／にぶい黄橙色 内面－撫で。外面－撫で、口唇部に刻み目。
4	甕	口径18.0,口縁部破片／白・黒色粒子を含む。／浅黄橙色 内面－撫で、横方向刷毛目。外面－撫で。
5	高坏	底径10.0,脚部破片／雲母、白色粒子を含む／にぶい黄橙色 内面－斜方向刷毛目。外面－撫で。円孔有り。

番号	器種	法量等／胎土／色調 整形・特徴・その他
6	?	?／雲母、白・赤色粒子を含む／にぶい黄橙色 内外面－撫で。
7	小型甕	底径5.7,底部破片／雲母、白色粒子を含む／橙色 内外面－撫で。
8	甕	底径8.8,底部破片／雲母、白色粒子を含む／内面－黒褐色。外面－灰黄褐色 内面－刷毛目。外面－撫で、刷毛目。　黒色土器
9	甕	破片／雲母、白・赤色粒子を含む／にぶい黄橙色 外面－条痕文
10	甕	破片／白・赤・黒色粒子を含む／にぶい黄橙色 外面－条痕文
11	甕	破片,／白・黒色粒子を含む／橙色 外面－条痕文

〈7号住居址出土遺物〉（第49図）

（単位 cm）

番号	器種	法量等／胎土／色調 整形・特徴・その他
1	壺	口径17.4,口縁部破片／白・黒色粒子を含む／にぶい黄橙色 内外面－刷毛整形の後、撫で、磨きが施されている。
2	壺	口径25.6,口縁部破片／白・赤色粒子を含む／にぶい褐色 折り返し口縁で楕円形浮文がある。小円孔あり。内面・外面－刷毛目の後、撫で。
3	壺	口径16.0,口縁部破片／雲母、白色粒子を含む／橙色 口唇部にきざみが施されている。内・外面－撫で
4	甕	口径13.8,口縁部破片／雲母、白・赤色粒子を含む／にぶい橙色 内面－刷毛目。外面－撫で、刷毛目
5	甕	口径19.6,口縁部～胴部破片／雲母、白・赤・黒色粒子を含む／にぶい黄橙色 内、外面－刷毛整形の後、撫で。口唇部－きざみが施されている。
6	甕	口径20.8,口縁部～胴部破片／雲母、白・赤色粒子を含む／橙色 内面－刷毛目、胴部に磨きが見られる。外面－刷毛目
7	甕	口径9.0,口縁部破片／雲母、白色粒子を含む／にぶい橙色 内面－撫で、刷毛目。外面－刷毛目
8	甕	底径6.2,底部破片／白色粒子を含む／橙色 内面－撫で。外面－刷毛目の後撫で
9	甕	口径18.0,口縁部破片／雲母、白・赤色粒子を含む／浅黄橙色 内・外面－撫で
10	甕	底径7.0,底部破片／雲母、白色粒子を含む／にぶい黄橙色 内・外面－撫で、一部黒変している。
11	甕	底径7.2,底部破片／白・黒色粒子を含む／橙色 内面－撫で。外面－刷毛目、撫で
12	甕	底径9.0,底部破片／雲母、白・黒色粒子を含む／内面－黒色。外面－橙色 内面－撫で。外面－刷毛目の後,撫でられている。

番号	器種	法量等／胎土／色調 整形・特徴・その他
13	甕	底径11.0,底部破片／雲母、白色粒子を含む／明赤褐色 内・外面－刷毛目の後、撫でられている。
14	甕	底径7.0,底部破片／雲母、白色粒子を含む／内面－黒褐色。外面－にぶい橙色 内・外面－撫でられている。
15	甕	底径6.0,底部破片／白色粒子を含む／にぶい黄橙色 内面－撫でられている。外面－刷毛目の後撫で
16	甕	破片／白・黒色粒子を含む／橙色 外面－条痕文
17	甕	破片／白・黒色粒子を含む／にぶい黄橙色 外面－条痕文
18	甕	破片／白・赤色粒子を含む／にぶい黄橙色 外面－条痕文
19	石器	長軸－8.1,短軸－3.3,厚さ－0.7,石材玄武岩 石包丁。穿孔１個あり。但し隣に中途で止めた穴痕が１ヶ所ある。
20	石器	長さ5.8,巾5.2,厚さ4.7,石材安山岩 丸石。黒煙痕がある。よく磨かれている。

〈８号住居址出土遺物〉（第50図）

（単位 cm）

番号	器種	法量等／胎土／色調 整形・特徴・その他
1	甕	口径18.1,口縁部～胴部破片／白色粒子を含む／内面－橙色。外面－明黄褐色 内面－頸部～胴部に横位、斜位の刷毛目がみられる。 外面－刷毛目
2	甕	口径14.6、口縁部破片／砂粒を含む／にぶい橙色 口唇部に刻み、内面－横刷毛目。外面－縦刷毛目がみられる。
3	高坏	口径16.3,4/5残／赤・白色粒子と雲母を含む／内面－暗赤褐色。外面－明赤褐色～にぶい赤褐色 内面－体部横撫で、脚部に横刷毛目。外面－撫でと磨きがみられる。

〈９号住居址出土遺物〉（第51図）

（単位 cm）

番号	器種	法量等／胎土／色調 整形・特徴・その他
1	手捏土器	器高2.8、口径3.7、底径2.7、口縁部一部欠損／やや粗い砂粒を含む／浅黄橙色～にぶい橙色 内外面に指頭による整形痕がみられる。
2	紡錘車	直径3.6、厚さ2.0、孔径0.5、完形／白色粒子の目立つ砂粒を含む／橙色 ヘラ削りの後、撫で。　土製品
3	紡錘車	直径3.8、厚さ1.2、孔径0.6、完形／－／灰黄色 全体角度を変えてよく擦って作られている。　石製品

〈10号住居址出土遺物〉（第52．53図）

（単位 cm）

番号	器種	法量等／胎土／色調 整形・特徴・その他
1	壺	口径13.4,口縁部破片／雲母、白色粒子を含む／橙色 内面－横刷毛目。外面－縦刷毛目。
2	小壺（坩）	器高16.4、口径8.6、底径3.6、口縁部－部欠損／やや粗い砂粒を含む／浅黄橙色～にぶい橙色 内面－横方向の磨き。外面－刷毛整形の後、磨きふうの撫で、底部手持ちヘラ削り
3	台付甕	口径16.7,脚台部欠損／雲母、白色粒子を含む／浅黄橙色 内面－口縁細かい刷毛撫での後、横方向の磨き、胴上部刷毛目の上に撫で、他は撫で 外面－口唇部刻み目が施される、縦斜め方向刷毛目
4	台付甕	胴部～脚台部破片／雲母、白色粒子を含む／にぶい褐色 脚台部内面－横刷毛目。外面－胴下部に縦斜め刷毛目
5	台付甕	底径8.2、脚台部破片／白・黒色粒子を含む／内面－橙色。外面－にぶい橙色 内面－撫で 外面－脚台部上半に縦刷毛目が施され脚台部縁が一部内側に折り返っている
6	台付甕	底径9.0、脚台部破片／白色粒子を含む／にぶい橙色 脚台部内面－撫で。脚台部外面－ヘラ撫で。甕底内面は剥落している
7	甕	口径16.7、口縁部破片／多めの白色粒子と雲母、黒色粒子を含む／明赤褐色～にぶい橙色 口唇部に刻み目。内面－刷毛目らしきものがみられるが摩滅により不鮮明
8	甕	口径15.3、口縁～胴部破片／雲母、白色粒子を含む／口縁部－にぶい橙色,胴部－橙色 内面－横方向刷毛整形の後、口縁上部横撫で、胴部は磨き。 外面－口縁上半部横方向刷毛整形の後、横撫で。胴部縦方向刷毛目
9	小型甕	口径11.0、2/3残／白色粒子が目立つ／にぶい赤褐色 内面－指頭痕、輪積痕が目立つ 外面－口縁部横撫で、頸部横刷毛目、胴部は縦斜め方向の刷毛目がみられる
10	器台	底径5.2、脚部破片／雲母、白・赤色粒子を含む／にぶい橙色 内面－ヘラ削り。外面－刷毛目後撫で
11	鉢	器高5.6,口径14.2、底径5.4、3/5残／粗い砂粒を含む／内面－明黄褐色,外面－黄橙色 内・外面－雑な撫でと輪積み痕がみられる
12	坏	口径16.0口縁部破片／雲母、白色粒子を含む／明赤褐色 内面－暗文があるが不鮮明
13	坏？	口径12.0、口縁部破片／雲母を含む／赤色 内・外面－磨かれているが剥落している
14	紡錘車	直径3.4、厚さ約0.9、孔径約0.55、完形／雲母、白色粒子を含む／にぶい黄橙色,一部黒変 表面はヘラ撫で？　土製品
15	紡錘車	直径5.0、厚さ約2.2、孔径約0.7、1/2残／雲母、白・黒・赤色粒子を含む／にぶい黄橙色 表面はヘラ撫で？　土製品
16	石器	長さ9.4、巾9.4、厚さ7.1 磨石　石材砂岩
17	石器	長さ9.8、巾9.4、厚さ2.3 打製石斧（刃部欠損？）　石材安山岩

〈11号住居址出土遺物〉（第54.55図）

（単位 cm）

番号	器種	法量等／胎土／色調 整形・特徴・その他
1	壺	頸部～胴部破片／赤・黒色粒子、長石、雲母を含み粗い／にぶい褐色
		内面－指撫で。外面－撫での後ヘラ磨き
2	壺	底径9.0、胴下半以下1/2残／小礫、雲母を少量含み粗い／内面－橙色。外面－にぶい橙色
		内面－刷毛目。外面－刷毛目の上を撫で。底部－撫で
3	壺	頸部～胴部破片／赤・黒色粒子・長石・角閃石を含み粗い／内面－黒褐色。外面－灰褐色
		内面－刷毛目。外面－頸部刷毛目。胴部ヘラ撫で ボタン状の貼付が３つずつ２ヶ所残っている、３ヶ所あったと思われる
4	壺	口径18.6、口縁部破片／赤・黒色粒子・長石・角閃石を含みやや粗い／内面－浅黄色、一部黒褐色。外面－にぶい黄橙色、一部黒褐色
		内面－撫で。外面－口縁部撫で、頸部刷毛目の後撫で
5	壺	口縁部破片／赤色粒子、長石を含み粗い／内面－赤色。口唇部－橙色。外面－赤色
		内面－撫で，赤彩されている。外面－刷毛目、撫で，口唇部に刻み 折り返し部以下赤彩されている。
6	台付甕	口縁部破片／赤・白色粒子、雲母、長石、石英を含みやや粗い／内面－にぶい橙色。外面－灰黄褐色
		内面－撫で、刷毛目。外面－撫で、刺突文、刷毛目の後横沈線　　Ｓ字状口縁
7	甑	器高6.3，口径11.0，底径4.5，1/4残／赤色粒子・長石・石英・小礫を含みやや粗い／内面－橙色。外面－黄橙色
		内面－撫で。外面－刷毛目後撫で　　摩滅が著しい。
8	器台	脚部破片／赤・黒色粒子、長石、雲母を含む／内面－橙色。外面－明赤褐色，一部橙色
		内面－ヘラ磨き，脚部撫で。外面－ヘラ磨き，脚上部に刷毛目
9	甕	底径6.8，底部破片／赤・黒色粒子、長石、小礫、雲母少量含み粗い／内面－にぶい黄橙、一部赤色。外面－明黄褐色
		内外面－撫で。底部－ヘラ削り　　内面赤彩されている
10	甕	底径6.3，底部破片／黒色粒子、長石を含みやや粗い／内面－浅黄色一部黒褐色。外面－黒褐色
		内面－ヘラ撫で。外面－撫で，底部－ヘラ削り
11	深鉢	口縁部破片／赤・白色粒子、長石を含みやや粗い／内面－にぶい黄橙色。外面－浅黄橙色、一部褐灰色
		内面－撫で。外面－撫で、１本沈線
12	深鉢	口縁部破片／赤・白・黒色粒子を含みやや粗い／内面－灰黄褐色。外面－灰白
		内面－撫で，２本沈線。外面－撫で，２本沈線
13	紡錘車	厚さ2.9、直径4.3、孔径0.7，略完形／白色粒子を含む／黒色
		ヘラ撫で
14	紡錘車	厚さ2.6、直径4.4、孔径0.6，略完形／白色粒子を含む／黒色
		ヘラ撫で
15	石器	長さ1.32、幅2.02、厚さ0.42、重量0.6g，石材黒曜石
		凹基無茎石鏃
16	石器	長さ1.00、幅1.60、厚さ0.37、重さ0.3g，石材黒曜石
		凹基有茎石鏃
17	石器	長さ1.91、幅1.11、厚さ0.30、重量0.5g，石材黒曜石
		石鏃
18	石器	長さ14.2、幅3.4、厚さ2.8、重量275g，石材珪質砂岩
		砥石

〈12号住居址出土遺物〉（第56.57.58.59図）

（単位 cm）

番号	器種	法量等／胎土／色調 整形・特徴・その他
1	壺	器高27.1、口径14.0、底径9.0、2/3残／赤・白・黒色粒子、雲母、小礫を含む／橙色 内面－口唇部刷毛目後ヘラ磨き，胴部刷毛目 外面－口唇部刷毛目、口縁部～胴下半ヘラ撫で、底部刷毛目後ヘラ磨き。表面スス付着
2	壺	口縁部破片／赤・白・黒色粒子、雲母、小礫を含み密／橙色 内面－撫で。外面－刷毛目。外面部分的に赤彩，折り返し口縁
3	壺	口径16.4，口縁部破片／赤・白・黒色粒子、雲母を含み密／橙色 内面－刷毛目後ヘラ磨き。外面－刷毛目後ヘラ磨き、一部撫で
4	壺	底径9.8，1/3残／白・黒色粒子、雲母、小礫を含み密／橙色 内面－刷毛目後撫で。外面－ヘラ磨き底部ヘラ撫で
5	壺	底径7.0，胴部以下4/5残／赤・白・黒色粒子を含み密／橙色 内面－胴上半刷毛目後磨き，胴下半横位のヘラ撫で 外面－胴上半刷毛目後磨き，胴下半縦位のヘラ撫で
6	壺	底径12.0，胴下半～底部／赤色粒子、長石、小礫を含みやや粗い／内面－にぶい黄橙色。外面－橙色 内面－刷毛目後撫で。外面－ヘラ磨き，底部木葉痕あり
7	甕	口径19.4，1/4残／赤・白・黒色粒子、雲母を含み密／にぶい黄橙色 内面－ヘラ撫で。外面－刷毛整形後、ヘラ撫で、磨き。 刻み口縁、外面にスス付着
8	甕	口径20.0，1/3残／長石、雲母を含み粗い／浅黄橙色 内面－ヘラ撫で。外面－刷毛目。口縁部に刻み目がめぐる。
9	甕	口径18.0，2/5残／赤・白・黒色粒子、雲母、小礫を含み密／にぶい黄橙色 内面－刷毛目、撫で。外面－刷毛目。刻み口縁
10	片口鉢	器高7.5，口径11.8，底径6.0，略完形／白・黒色粒子、雲母、小礫を含み密／にぶい黄橙色 内面－ヘラ撫で。外面－刷毛目後ヘラ磨き，底部木葉痕あり。
11	鉢	器高13.0，口径14.9，底径6.8，4/5残／白・黒色粒子、雲母、小礫を含み密／内面－にぶい黄橙色部分的に赤色。外面－赤色 内面－ヘラ撫で部分的に赤彩されている。 外面－刷毛目後磨き赤彩されている。底部木葉痕あり。
12	高坏	口径14.4，坏部完形／赤・白・黒色粒子を含み密／にぶい黄橙色部分的に黒変 内面－撫で。外面－刷毛目の後ヘラ磨き 脚部に穿孔３個あり，内外とも黒変箇所あり。
13	器台	脚部破片／赤・白・黒色粒子、雲母を含み密／橙色 内面－ヘラ撫で。外面－撫でヘラ磨き。脚部に穿孔３個あり。
14	台付甕	底径9.3，脚部のみ／赤・白・黒色粒子、長石、雲母を含みやや粗い／内面－明黄褐色、黒褐色（脚内部）橙色。外面－明黄褐色 内外面－刷毛目
15	台付甕	底径10.0，脚部のみ／白・黒色粒子、石英、長石を含みやや粗い／内面－橙色・褐灰色。外面－黄橙色 内外面－撫で刷毛目，脚内面－刷毛目
16	台付甕	脚部破片／赤色粒子、長石、石英、小礫、雲母を含みやや粗い／橙色 内面－撫で。外面－刷毛目
17	壺	底径6.6，底部破片／白・黒色粒子、雲母を含み密／橙色，一部黒変 内面－指撫で。外面－縦位ヘラ撫で。内外赤彩あり。
18	壺	底部7.6，胴下部～底部／白色粒子、角閃石を含み粗い／浅黄橙色，一部黒変している 内面－ヘラ撫で。外面－刷毛目後撫で。底部ヘラ削り

番号	器種	法量等／胎土／色調 整形・特徴・その他
19	壺	底径6.4,底部破片／赤・白・黒色粒子、雲母を含み密／にぶい黄橙色 内外面－撫で,底部ヘラ撫で。内外面・底部、部分的に赤彩。
20	壺	底径11.6,底部破片／赤・白色粒子、雲母少量、小礫を含み粗い／内面－にぶい黄橙色。外面－にぶい橙色。 内面－刷毛目撫で。外面－細かいヘラ磨き。底部木葉痕。
21	壺	底径9.7,底部破片／長石を含みやや粗い／橙色（朱がかかっている） 内外面－刷毛目、撫で,底部－ヘラ削り。外面赤彩されている。
22	壺	底径6.2,底部破片/白色粒子、角閃石、石英を含み粗い/内面－黄橙色。外面－黒褐色・黄橙色 内面－ヘラ撫で。外面－刷毛目後撫で。底部ヘラ撫で
23	壺	底径5.8,底部破片／長石、雲母を含みやや粗い／内面－にぶい黄橙色。外面－橙色 内面－ヘラ撫で。外面－撫で刷毛目。底部木葉痕あり。
24	紡錘車	厚さ2.2,直径4.1,孔径0.55,完形／赤・白・黒色粒子を含む／にぶい褐色
25	紡錘車	厚さ1.5,直径3.2,孔径0.5,完形／白色粒子を含む／にぶい黄橙色
26	紡錘車	厚さ2.2,1/3残／赤・白・黒色粒子を含む／にぶい橙色
27	紡錘車	厚さ2.1,幅2.4,長さ4.6,孔径0.6cm,1/2残／白・黒色粒子を含む／にぶい橙色
28	紡錘車	厚さ2.1,1/2残／白色粒子を含む／にぶい黄褐色
29	紡錘車	厚さ2.0,1/3残／赤・白・黒色粒子を含む／にぶい橙色
30	勾玉	厚さ2.3,幅1.9,長さ4.1,3/4残／白・黒色粒子、雲母を含み密／にぶい橙色 土製品
31	石器	長さ15.3,幅6.4,厚さ6.1,重さ820g,石材輝石安山岩 砥石
32	石器	長さ10.2,幅6.8,厚さ4.4,重さ440g,石材アプライト 敲打痕,両面、側面（２ヶづつ）,磨面,全体 凹石
33	石器	長さ2.35,幅1.80,厚さ0.76,重さ2.68,石材黒曜石 石錐
34	石器	長さ2.10,幅1.14,厚さ0.41,重さ0.8g,石材黒曜石 石錐

〈13号住居址出土遺物〉（第60図）

（単位 cm）

番号	器種	法量等／胎土／色調 整形・特徴・その他
1	壺	口径13.6,口縁部破片／赤・白・黒色粒子を含む／橙色 内面－ヘラ撫で。外面－刷毛目後ヘラ撫で。
2	壺	底径12.0,底部破片／赤・白・黒色粒子を含む／内面－にぶい黄橙色。外面－明赤褐色 外面－ヘラ撫で。底部に木葉痕。

〈14号住居址出土遺物〉（第61.62図）

（単位 cm）

番号	器種	法量等／胎土／色調 整形・特徴・その他
1	壺	器高30.7,口径13.8,底径9.6,2/3残／白色粒子、黒色雲母を含みやや粗い／にぶい黄橙色
		内面－粗い刷毛目。外面－撫で、刷毛目、指頭調整。底部に木葉痕
2	壺	器高25.3,口径13.5,底径7.0,1/2残／赤・黒色粒子、長石、小礫を含み粗い／内面－にぶい黄橙色。外面－黄橙色、褐灰色
		内面－刷毛目後ヘラ磨き、ヘラ撫で。外面－刷毛目後ヘラ削り、撫で。底部－ヘラ削り
3	台付甕	口径18.5,1/3残／赤・白色粒子、雲母、長石、石英を含み粗い／内面－橙色。外面－にぶい黄橙、明黄褐色、明赤褐色
		内面－刷毛目後撫で。外面－口縁部刻み目,胴部刷毛目
4	台付甕	器高15.0,口径10.6,底径6.0,4/5残／黒色粒子、長石、石英、雲母を含み粗い／内面－にぶい褐色。外面－にぶい橙色、一部黒褐色
		内面－撫で。外面－口唇部刻み目、頸部刷毛目後横撫で、胴部刷毛目、台部縦刷毛目 底部－台内部ヘラ撫で
5	甕	器高14.0,口径12.2,底径3.6,略完形／赤・黒色粒子、雲母、長石、角閃石、小礫を含みやや粗い／内面－橙色、灰褐色。外面－橙色、にぶい褐色
		内面－刷毛目、下部ヘラ撫で、指撫で 外面－口縁部刷毛目後横撫で、刷毛目、ヘラ削り。底部－ヘラ削り
6	甕	口径16.0,1/4残／赤・白・黒色粒子、雲母、小礫を含みやや粗い／橙色、にぶい褐色
		内面－口縁部刷毛目後撫で、刷毛目後ヘラ撫で。外面－口縁部撫で、刷毛目後ヘラ撫で
7	甕	口径17.4,口縁部片／赤・白色粒子、長石、雲母、石英を含み粗い／内面－明黄褐色。外面－灰黄褐色、明黄褐色
		内面－刷毛目後撫で。外面－口唇部刻み目、刷毛目後撫で
8	甕	口径18.0,口縁部片／赤・白・黒色粒子、雲母、小礫・角閃石を含みやや粗い／内面－にぶい黄橙色。外面－明黄橙色、にぶい黄橙色
		内面－刷毛目後撫で。外面－口唇部刻み目、刷毛目後横撫で、胴部刷毛目
9	甕	胴部片／赤・白・黒色粒子、雲母、長石、石英を含み粗い／内面－にぶい黄橙色、褐灰色,外面－にぶい黄橙色
		内面－刷毛目。外面－刷毛目後ヘラ撫で
10	小型甕	口径14.0,1/3残／赤・白・黒色粒子、長石、雲母を含みやや粗い／内面－黒褐色、にぶい黄褐色。外面－黒褐色
		内面－横撫で、細かい刷毛目、指撫で。外面－横撫で刷毛目。刷毛目後撫で
11	小型甕	口径10.0,2/3残／赤・黒色粒子、長石、雲母を含み粗い／内面－にぶい黄橙色、褐灰色。外面－にぶい黄橙色
		内面－口縁部刷毛目後撫で。外面－撫で、刷毛目後ヘラ削り
12	壺	底径8.0,底部片／白・黒色粒子、雲母、石英、小礫を含み粗い／内面－橙色、にぶい橙色。外面－にぶい黄橙色
		内面－ヘラ撫で。外面－ヘラ磨き。底部－ヘラ撫で
13	高坏	1/5残／赤・白・黒色粒子、雲母、石英、長石を含み粗い／内面－にぶい黄橙色。外面－浅黄橙色
		内面－撫で。外面－撫で、磨き。底部－指頭痕
14	器台	器高7.3,口径7.5,底径10.4,略完形／密／にぶい黄褐色
		内面－ヘラ磨き、ヘラ撫で。外面－刷毛目後磨き　脚部に３孔あり
15	器台	脚部片／赤・黒色粒子、長石、雲母、石英を含みやや粗い／内面－にぶい黄褐色。外面－黒褐色、にぶい黄橙色
		内面－ヘラ撫で。外面－ヘラ撫で　脚部に３孔あり
16	器台	脚部片／赤・白・黒色粒子、雲母、長石を含みやや粗い／内面－にぶい黄褐色、高台内側褐灰色。外面－にぶい黄橙色
		内面－底部のみ撫で。外面－ヘラ撫で。底部－高台内側刷毛目,脚部に３孔あり
17	蓋	鈕部径2.8,鈕部片／赤・黒色粒子、長石、雲母、角閃石を含みやや粗い／内面－にぶい黄橙色。外面－にぶい黄橙色、灰黄褐色
		内面－指頭痕。外面－磨き　裾部に３孔あく
18	小型鉢	底径3.0,1/3残／赤・白・黒色粒子、雲母、長石、石英を含み粗い／内・外面赤色。底部にぶい橙色
		内・外面－ヘラ削り　内・外とも朱彩

番号	器種	法量等／胎土／色調 整形・特徴・その他
19	甑	器高8.8,口径14.7,底径6.0,略完形／赤色粒子、雲母、長石、石英、小礫を含みやや粗い／内面－橙色、にぶい黄橙色。外面－にぶい黄橙色一部黒褐色
		内面－刷毛目後撫で。外面－刷毛目後手持ちヘラ削り。底部－撫で
20	甑	器高－8.3,口径13.0,底径4.0,略完形／赤・白色粒子、雲母、長石、石英を含みやや粗い／にぶい黄橙色
		内面－細かい刷毛目。外面－撫で、ヘラ撫で
21	壺	底径4.6,底部片／赤色粒子、長石、雲母を含み粗い／にぶい黄橙色,底部－灰黄褐色
		内面－撫で。外面－ヘラ撫で
22	台付甕	底径9.4,脚部のみ／長石、雲母、小礫を含みやや粗い／内面－黄橙色一部黒変。外面－橙色
		内面－ヘラ撫で脚内刷毛目。外面－刷毛目後撫で
23	台付甕	底径9.2,脚部のみ／赤色粒子、長石、雲母、小礫を含み粗い／内面－黄橙色。外面－橙色
		内面－撫で、刷毛目。外面－刷毛目
24	台付甕	脚部片/長石、角閃石、雲母を含みやや粗い/橙色
		内面－ヘラ撫で、刷毛目。外面－撫で刷毛目
25	壺	底径14.6,底部半分／赤・白色粒子、長石を含み粗い／内面－橙色。外面－橙色、にぶい黄橙色
		内面－撫で？剝離している。外面－刷毛目後撫で。底部－中心部ヘラ削り？ほとんど摩滅
26	台付甕	底径9.0,脚部のみ／角閃石、長石、小礫、雲母を含み粗い／内面－橙色。外面－にぶい黄橙色
		内面－ヘラ撫で。外面－刷毛目
27	石器	長さ7.8,幅4.2,厚さ1.1,重量52g,石材,砂岩片岩
		打製石斧

〈15号住居址出土遺物〉（第63図）

（単位 cm）

番号	器種	法量等／胎土／色調 整形・特徴・その他
1	壺	2/3残／赤・白・黒色粒子を含みやや粗い／黄橙色
		内面－ヘラ撫で。外面－ヘラ磨き　部分的に黒変
2	甕	口径20.3,口縁部片／白・黒色粒子、雲母を含み密／にぶい黄橙色
		内面－刷毛目。外面－口縁部横撫で,胴部刷毛目後撫で　外面スス付着
3	台付甕	底径6.0,底部片／赤・白・黒色粒子を含み密／にぶい黄褐色
		内面－ヘラ撫で。外面－体部ヘラ撫で、脚部刷毛目
4	甕	1/3残／白・黒色粒子、雲母、小礫を含み密／内面－黒褐色。外面－明黄褐色、一部赤褐色
		内面－ヘラ撫で刷毛目。外面－ヘラ撫で刷毛目
5	台付甕	底径10.0,脚部片／白・黒色粒子、雲母を含み密／内面－にぶい黄橙色。外面－黒褐色
		内面－撫で。外面－ヘラ撫で
6	壺？	底径5.8,底部片／赤・白・黒色粒子、雲母、小礫を含み密／にぶい黄橙色
		内面－撫で。外面－刷毛目,底部撫で
7	壺？	底径4.0,底部片／白・黒色粒子を含み密／橙色一部黒褐色
		内面－刷毛目。外面－ヘラ撫で
8	壺？	底径7.8,底部片／赤・白・黒色粒子、雲母、小礫を含み密／橙色
		内面－横撫で。外面－刷毛目後縦撫で。底部ヘラ撫で

〈16号住居址出土遺物〉（第64図）

（単位 cm）

番号	器種	法量等／胎土／色調 整形・特徴・その他
1	壺	底径13.0，胴下半以下／赤・白・黒色粒子、雲母、小礫を含み密／内面－浅黄橙色。外面－橙色
		内面－刷毛目。外面－刷毛目後ヘラ磨き，底部撫で
2	壺	胴部分／赤・白・黒色粒子、雲母を含み密／内面－明黄褐色。外面－明黄褐色一部明赤褐色
		内面－ヘラ撫で、刷毛目。外面－ヘラ磨き

〈17号住居址出土遺物〉（第65図）

（単位 cm）

番号	器種	法量等／胎土／色調 整形・特徴・その他
1	甕	口径20.6，口縁部片／白・黒色粒子、小礫を含みやや粗い／にぶい黄橙色
		内面－刷毛目。外面－横撫で後刷毛目
2	甕	口径20.2，口縁部片／白・黒色粒子を含み密／にぶい黄橙色
		内面－ヘラ撫で。外面－刷毛目後撫で，口唇部刻み目
3	高坏	坏部片／白・黒色粒子を含み密／にぶい橙色
		内面－ヘラ撫で。外面－ヘラ撫で
4	器台	1/5残／赤・白・黒色粒子を含み密／橙色
		内面－ヘラ撫で。外面－ヘラ磨き。底部－ヘラ撫で　脚部３孔あり
5	甑	底径4.8，底部片／白・黒色粒子、雲母を含み密／橙色
		内面－指撫で。外面－磨き、指頭痕。底部，ヘラ撫で
6	壺	口縁部片／赤・白・黒色粒子、雲母を含み密／にぶい黄橙色
		外面－刷毛目
7	壺	底径7.4，底部片／赤・白・黒色粒子、雲母を含み密／橙色
		内面－刷毛後ヘラ撫で。外面－ヘラ撫で
8	勾玉	厚さ1.3，幅1.0，長さ3.1，略完形／白・黒色粒子を含み密／にぶい橙色
		土製品

〈18号住居址出土遺物〉（第66図）

（単位 cm）

番号	器種	法量等／胎土／色調 整形・特徴・その他
1	壺	底径8.6，2/3残／赤・白・黒色粒子、雲母を含み密／褐色
		内面－ヘラ撫で。外面－ヘラ撫で。底部，木葉痕あり
2	甕	口径13.9，底部欠損以外略完形／赤・白・黒色粒子、雲母を含み密／にぶい黄橙色
		内面－ヘラ撫で、指撫で。外面－ヘラ撫で
3	甕	口径19.8，口縁部片／赤・白・黒色粒子、雲母、小礫を含みやや粗い／橙色
		内面－刷毛目後撫で。外面－撫で
4	甕	口縁部片／赤・白・黒色粒子、雲母を含み密／褐色
		外面－口唇部刻み目。櫛歯状工具による調整
5	石器	長さ1.47，幅1.25，厚さ0.45，重さ0.5g，石材黒曜石
		凹基有茎式石鏃

〈19号住居址出土遺物〉（第67図）

（単位 cm）

番号	器種	法量等／胎土／色調 整形・特徴・その他
1	甕	口径20.0,口縁部片／白・黒色粒子、雲母を含み密／明黄褐色
		内面－横撫で。外面－横撫で後刷毛目　刻み口縁
2	甕	口径13.6,口縁部片／赤・白・黒色粒子、雲母、小礫を含み密／橙色
		内面－刷毛目後撫で。外面－撫で
3	甕	口径14.6,口縁部片／赤・白・黒色粒子、雲母を含み密／橙色
		内面－刷毛目後撫で。外面－撫で
4	台付甕	口径11.4,口縁部片／赤・白・黒色粒子、雲母を含み密／橙色
		内面－刷毛目、撫で。外面－刺突文、刷毛目
5	甕？	底径5.4,底部片／赤・白・黒色粒子、雲母を含み密／内面－にぶい黄橙色。外面－黒褐色
		内面－撫で。外面－刷毛目
6	甕？	底径2.6,底部片／赤・白・黒色粒子を含み密／にぶい黄褐色
		内外面－撫で
7	壺？	底径4.0,底部片／白・黒色粒子、小礫を含み密／橙色
		内面－刷毛目。外面－ヘラ撫で。底部撫で　内黒、赤彩あり
8	手捏土器	底径3.4,底部片／赤・白色粒子を含み密／にぶい黄橙色
		内面－指撫で。外面－撫で指頭痕あり底部ヘラ撫で
9	石器	長さ13.0,幅7.1,厚さ5.5,重さ80.8g,石材,輝石安山岩
		磨石

〈20号住居址出土遺物〉（第68図）

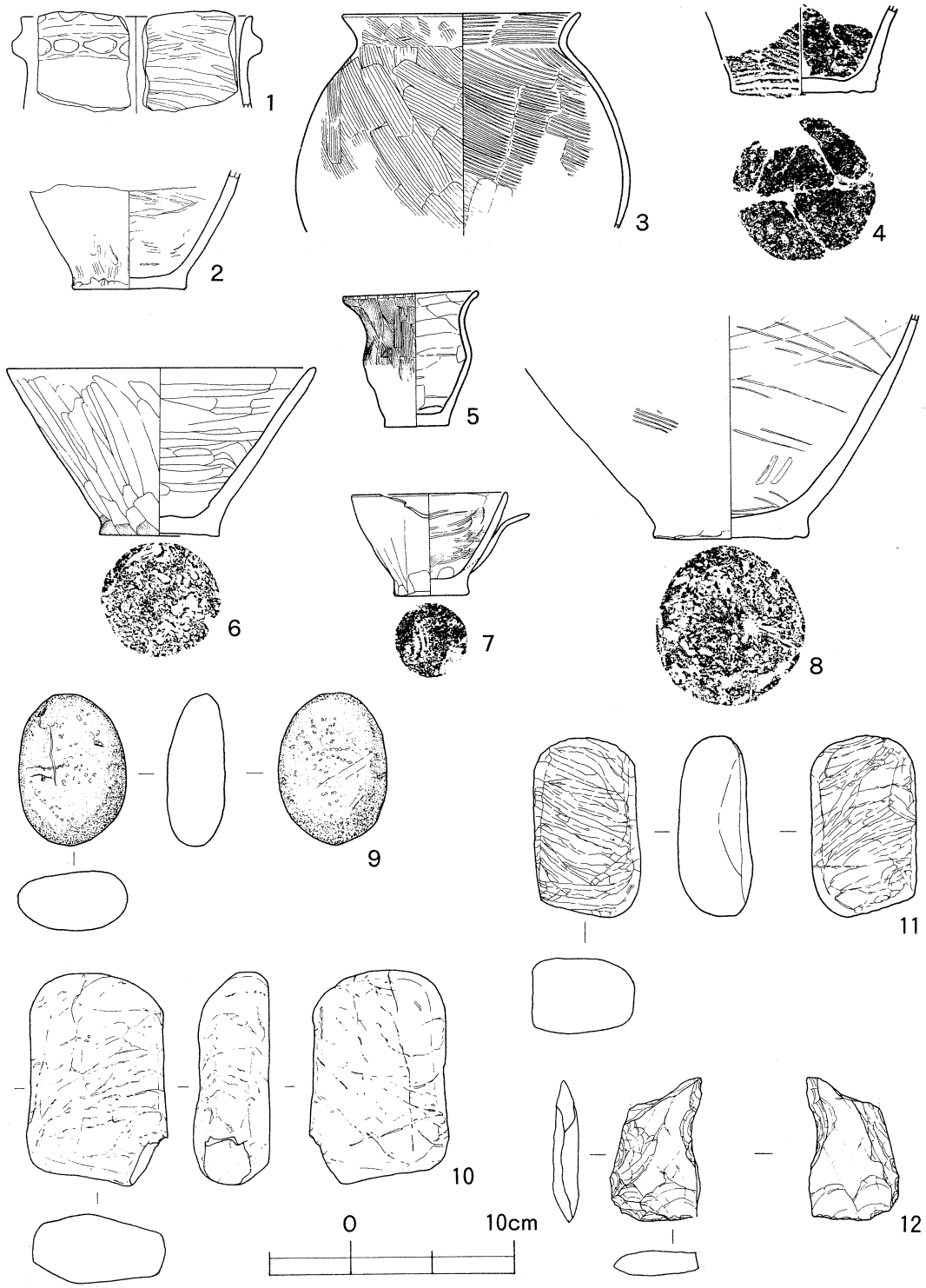
（単位 cm）

番号	器種	法量等／胎土／色調 整形・特徴・その他
1	器台	口径9.0,坏部片／赤・白・黒色粒子、雲母、角閃石、長石を含み密／浅黄橙色
		内面－撫で沈線。外面－口縁部横撫で,坏部撫で後ヘラ磨き

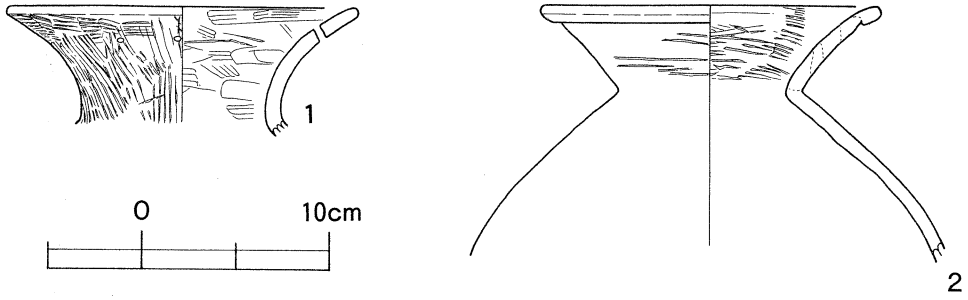
〈22号住居址出土遺物〉（第68.69図）

（単位 cm）

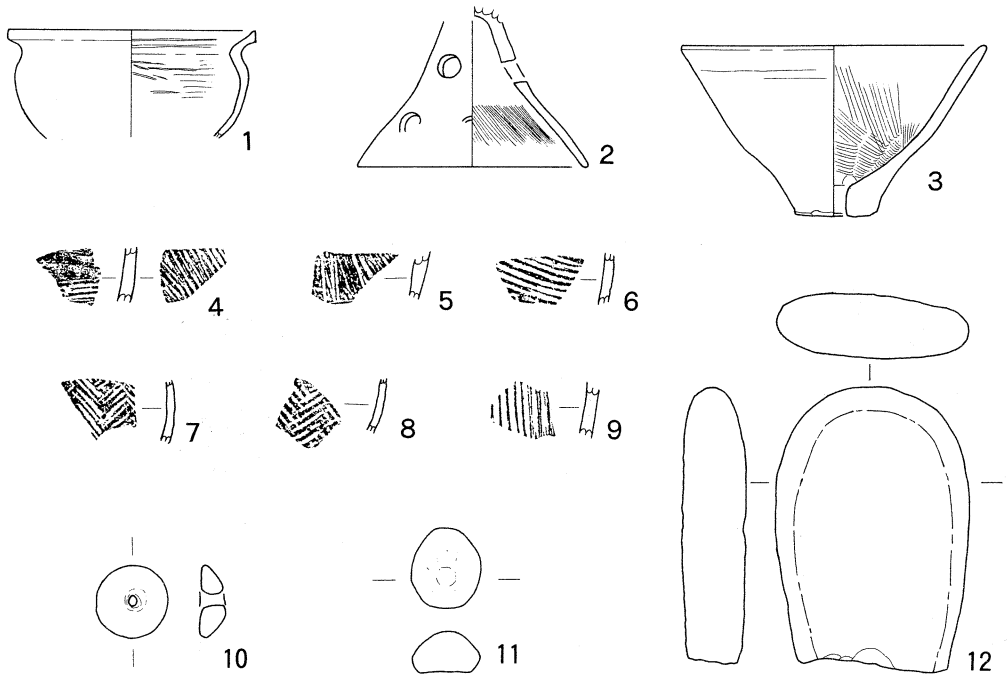
番号	器種	法量等／胎土／色調 整形・特徴・その他
1	小型壺	底径3.4,口縁部欠損略完形／赤色粒子、長石、雲母、角閃石を含みやや粗い／内面－黒褐色・灰褐色。外面－褐色・橙色
		内面－上部撫で下部刷毛目。外面－刷毛目底部ヘラ削り
2	小型壺	口径7.0,1/3残／赤色粒子、長石、石英、角閃石、雲母を含みやや粗い／内面－にぶい黄褐色。外面－にぶい黄褐色、一部明赤褐色
		内面－刷毛目後撫で、指頭痕あり。外面－撫で
3	小型甕	器高12.7,口径11.3,底径1.2,2/3残／赤・白色粒子を含みやや粗い／内面－にぶい橙色,にぶい赤褐色
		内面－頸部刷毛目痕、胴部撫で。外面－刷毛目、上部刷毛目後撫で
4	器台	器高8.8,口径7.6,底径10.1,略完形／赤・白色粒子、小礫、雲母少量を含みやや粗い／内面－橙色一部赤色。外面－赤色
		内面－ヘラ磨き脚部撫で。外面－ヘラ磨き　器受部底に単孔、脚部に４孔があく 内外面赤彩されている、脚内部にも一部赤彩が残っている
5	器台	器高8.6,口径8.0,底径10.6,3/5残／黒色粒子、長石、雲母少量含みやや密／内面－橙・褐色。外面－にぶい黄橙色
		内面－撫で。外面－刷毛整形後撫で脚部ヘラ磨き
6	器台	器高8.7,口径7.3,底径9.3,脚部一部欠損／赤色粒子、長石、細かい雲母を含み密／内面－橙色。外面－明赤褐色・橙色
		内面－刷毛目後横撫で,脚部撫で刷毛目,ヘラ削り後横撫で 外面－横撫で,脚部撫で後ヘラ磨き



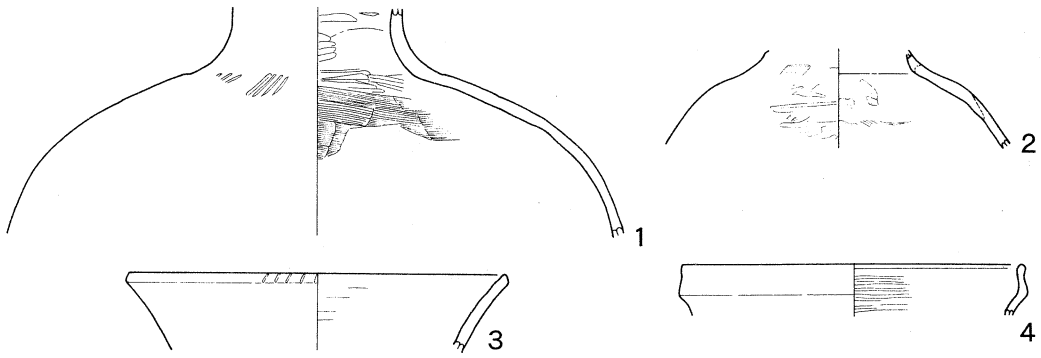
第44図　1号住居址出土遺物（1/4）



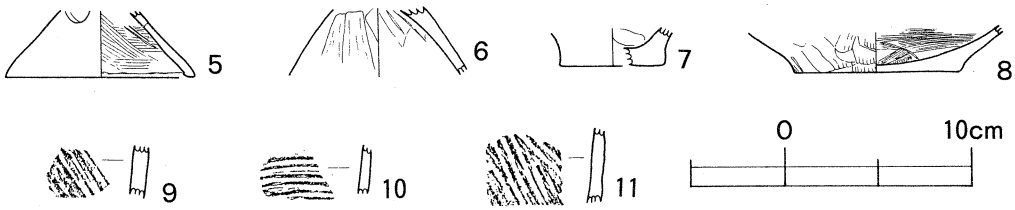
第45図　２号住居址出土遺物（1/4）



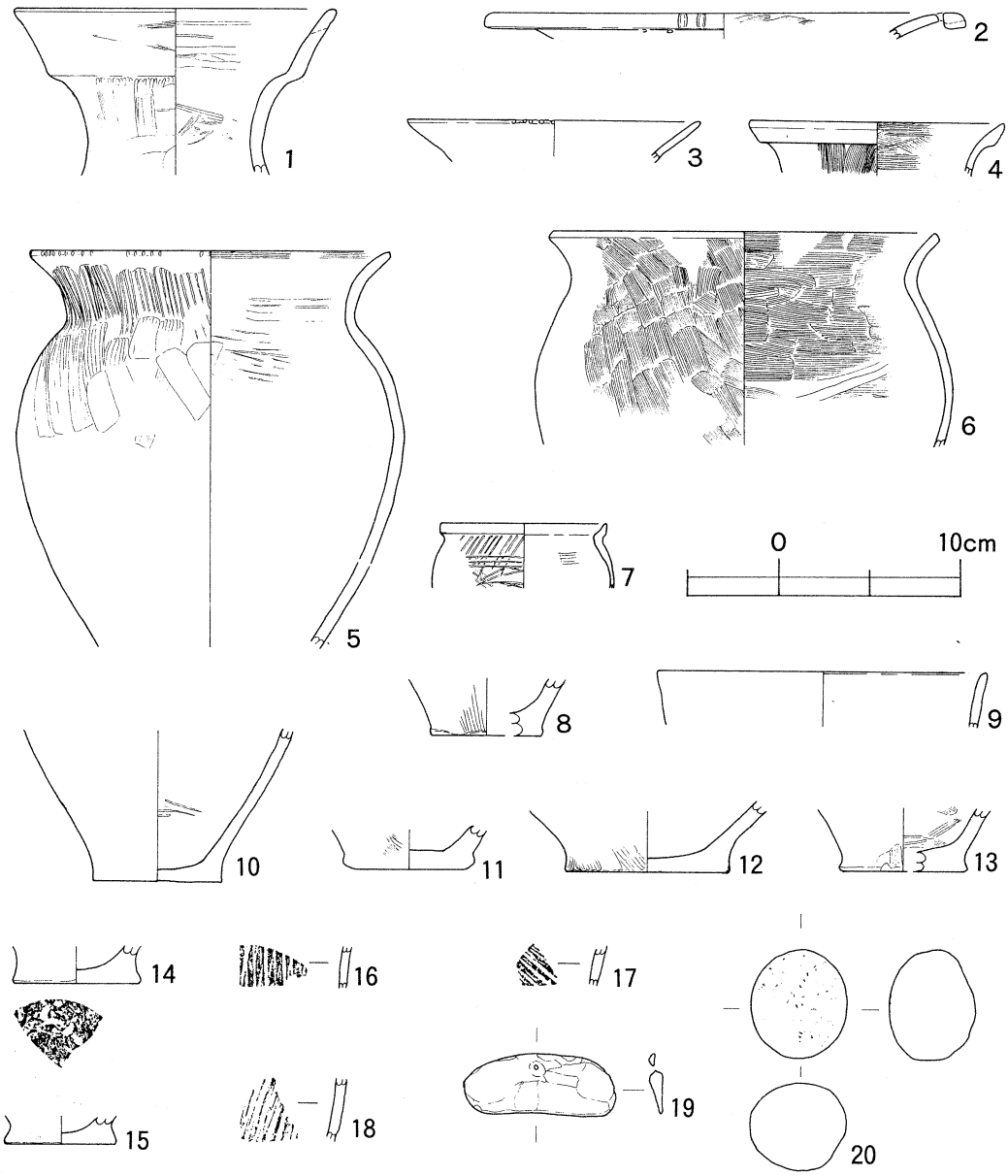
第46図　５号住居址出土遺物（1/4）



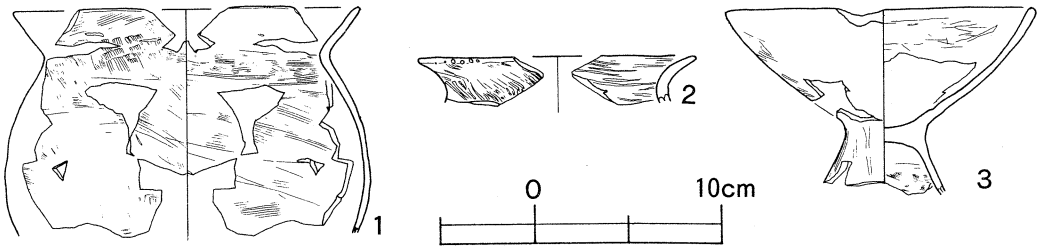
第47図　６号住居址出土遺物（1/4）



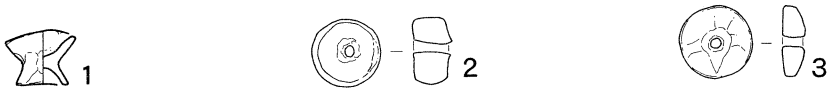
第48図　6号住居址出土遺物（1/4）



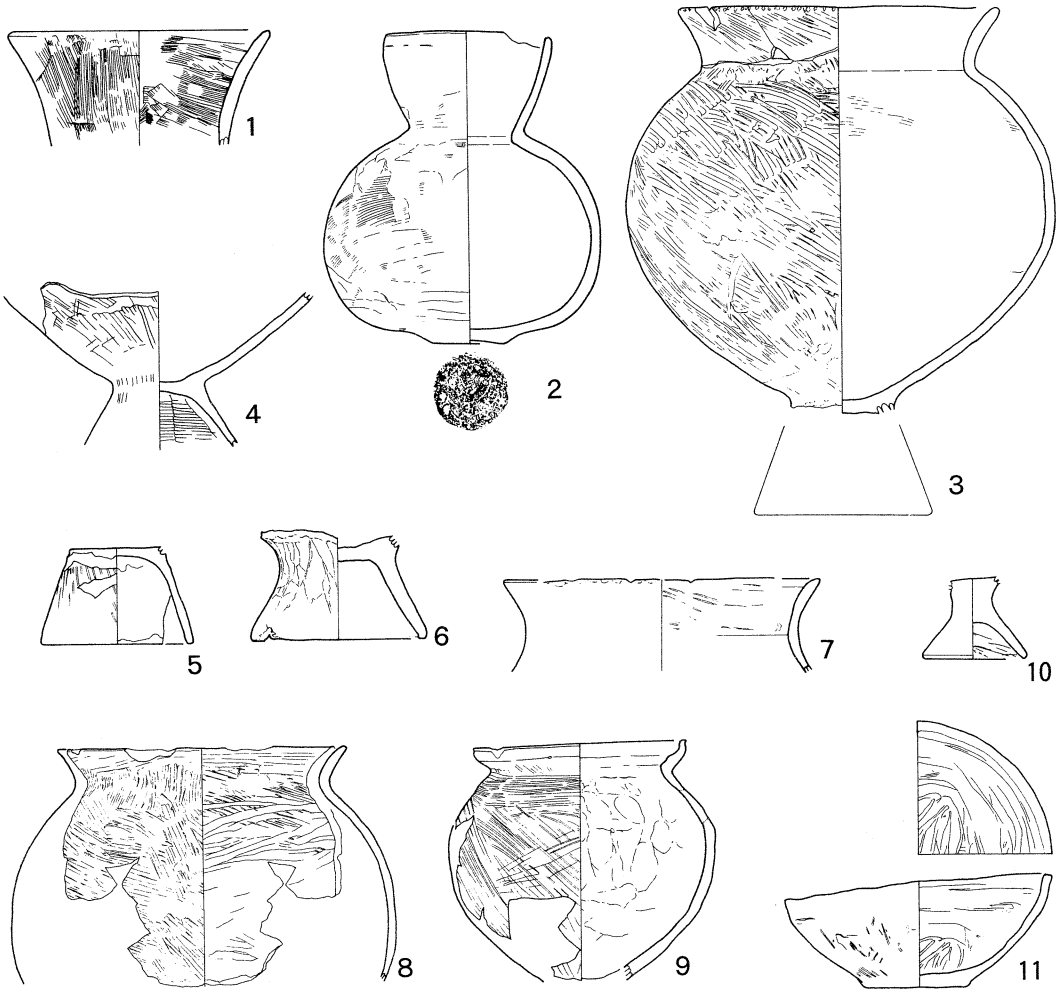
第49図　7号住居址出土遺物（1/4）



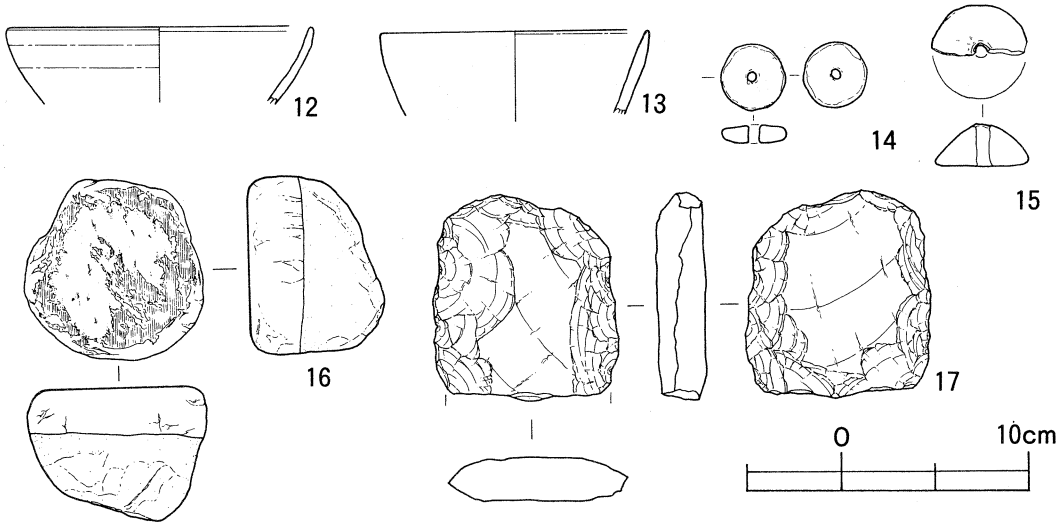
第50図　８号住居址出土遺物（1/4）



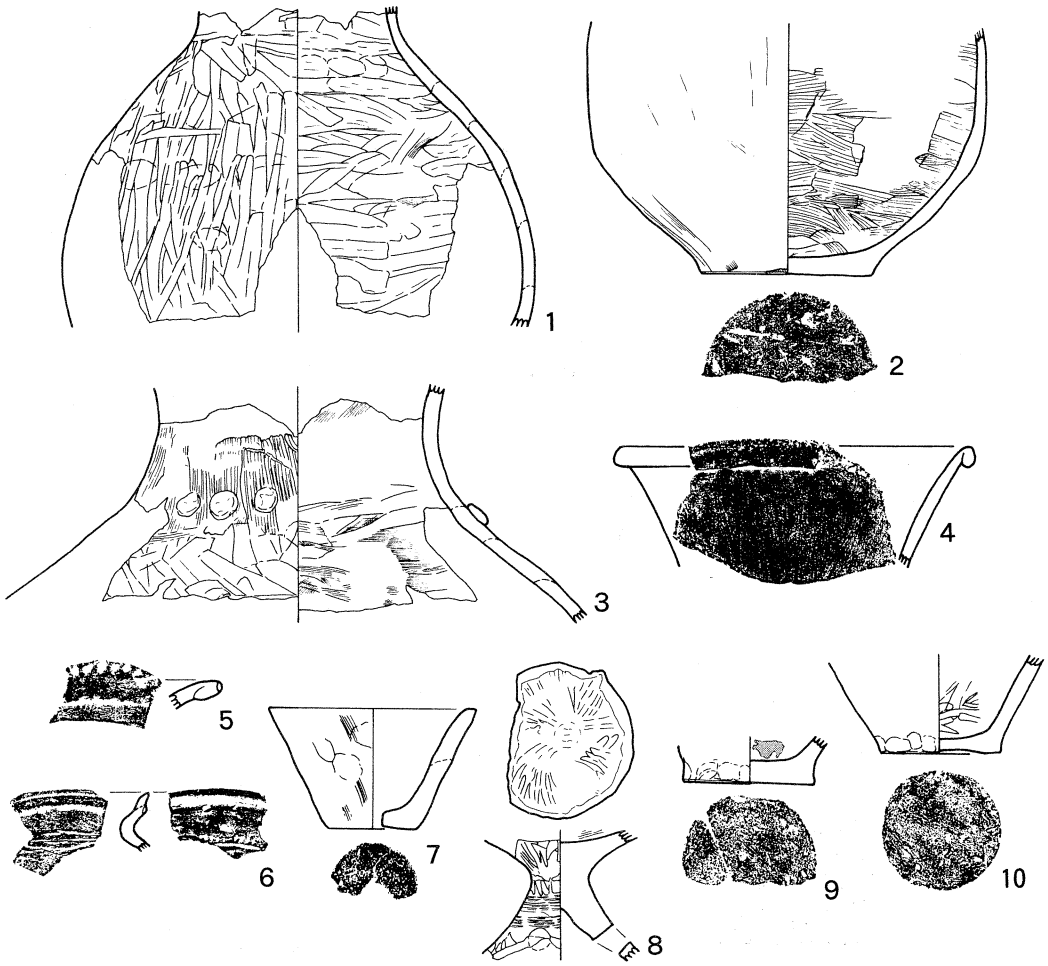
第51図　９号住居址出土遺物（1/4）



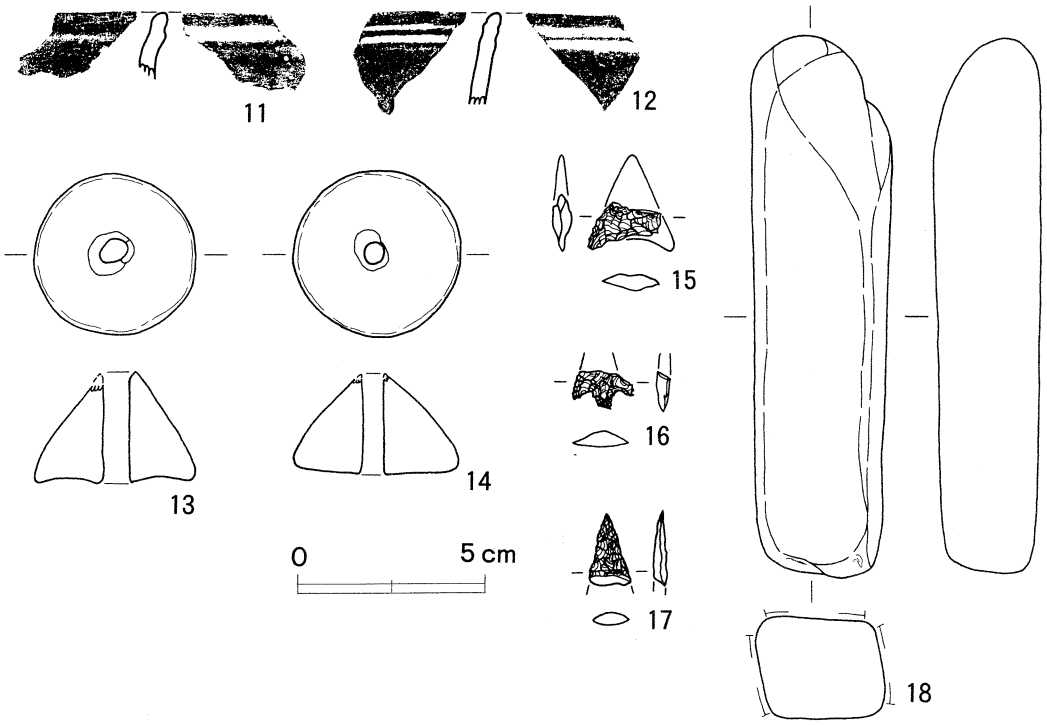
第52図　10号住居址出土遺物（1/4）



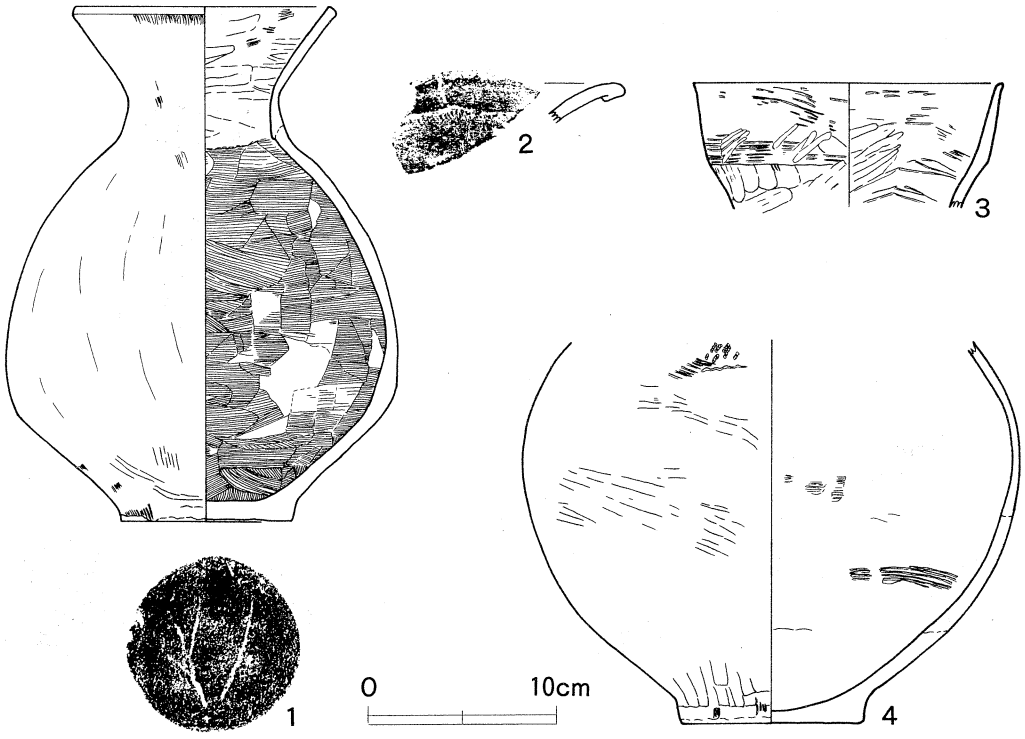
第53図　10号住居址出土遺物（1/4）



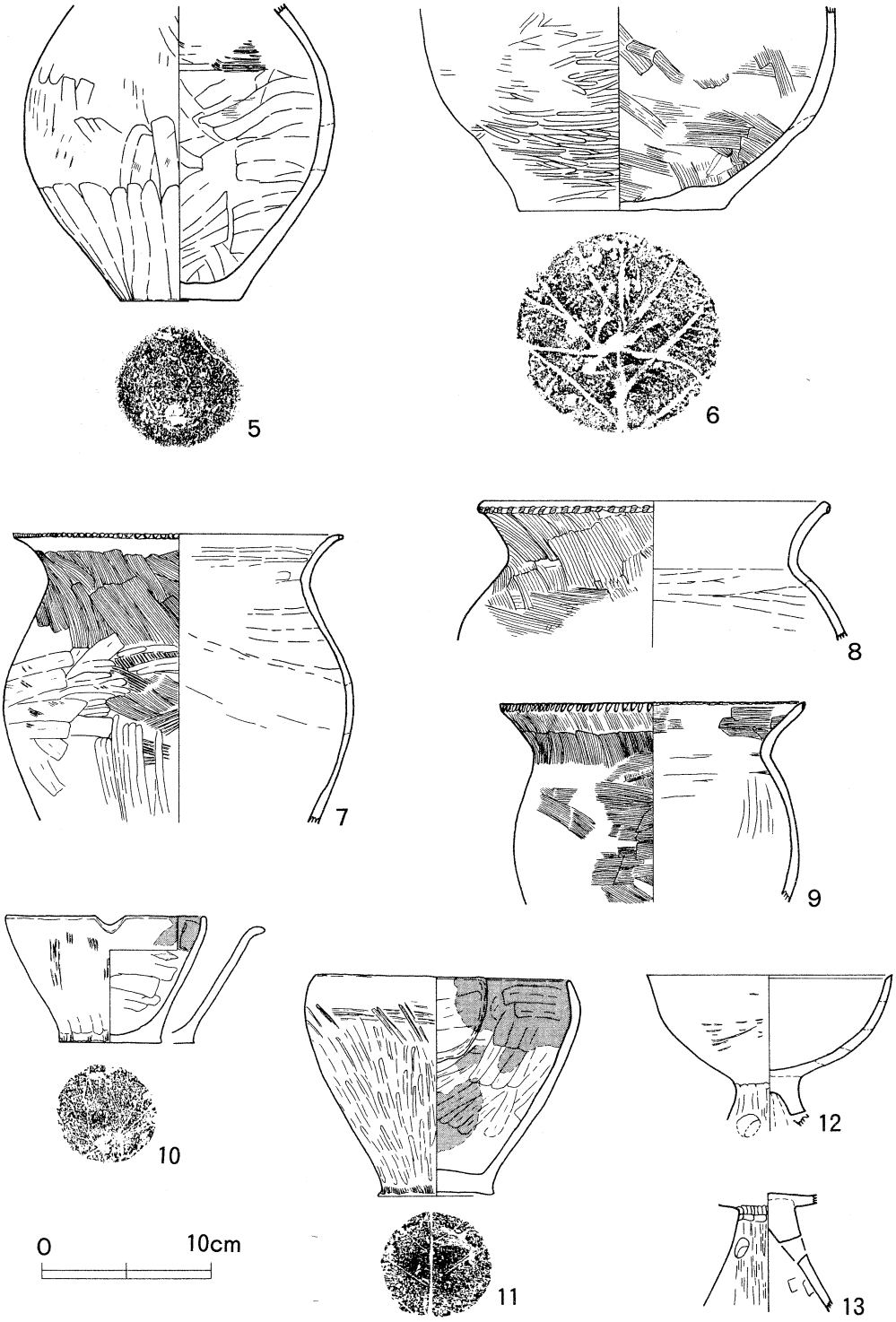
第54図　11号住居址出土遺物（1/4）



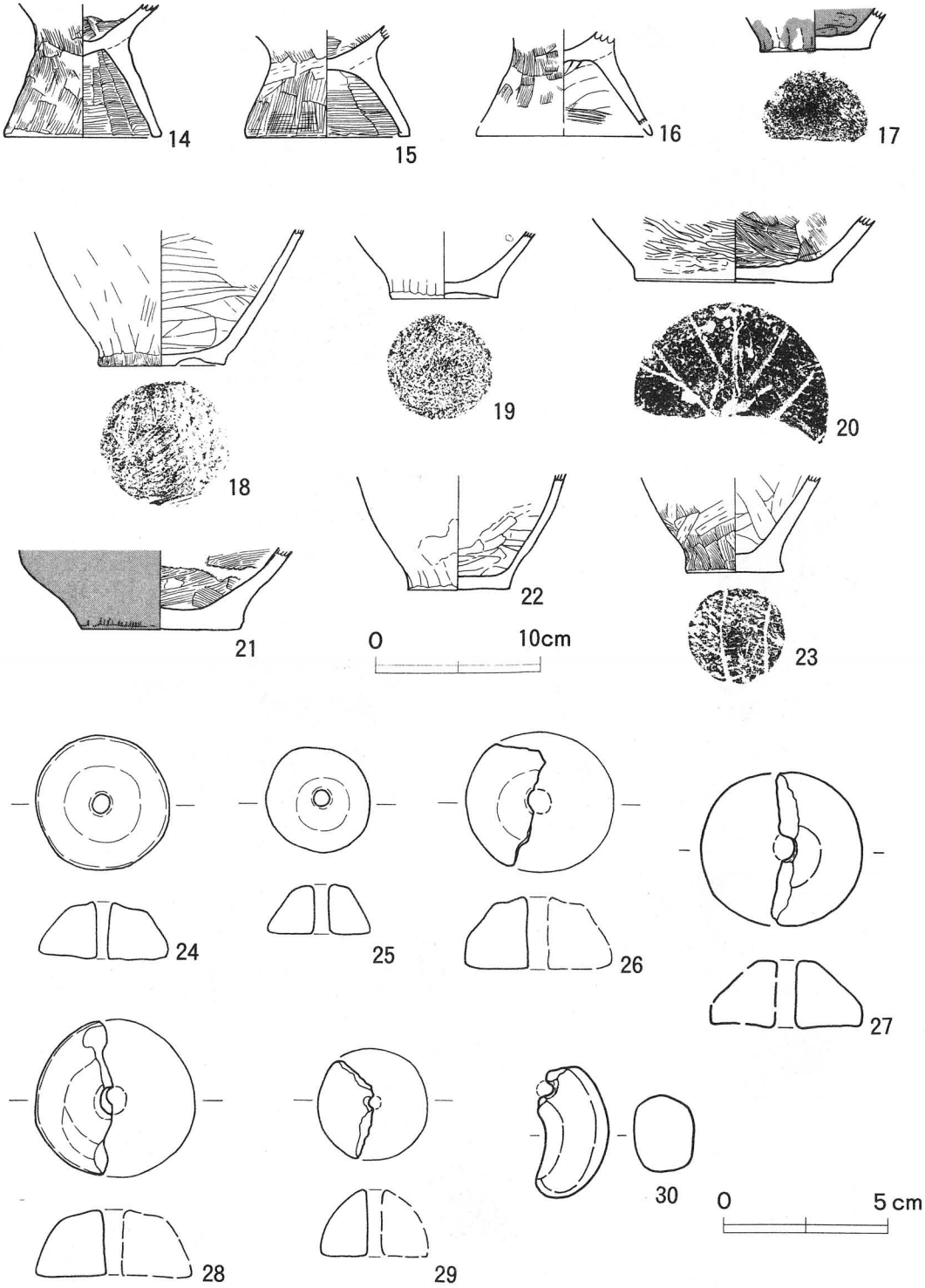
第55図　11号住居址出土遺物（1/4）・土製品・石器（1/2）



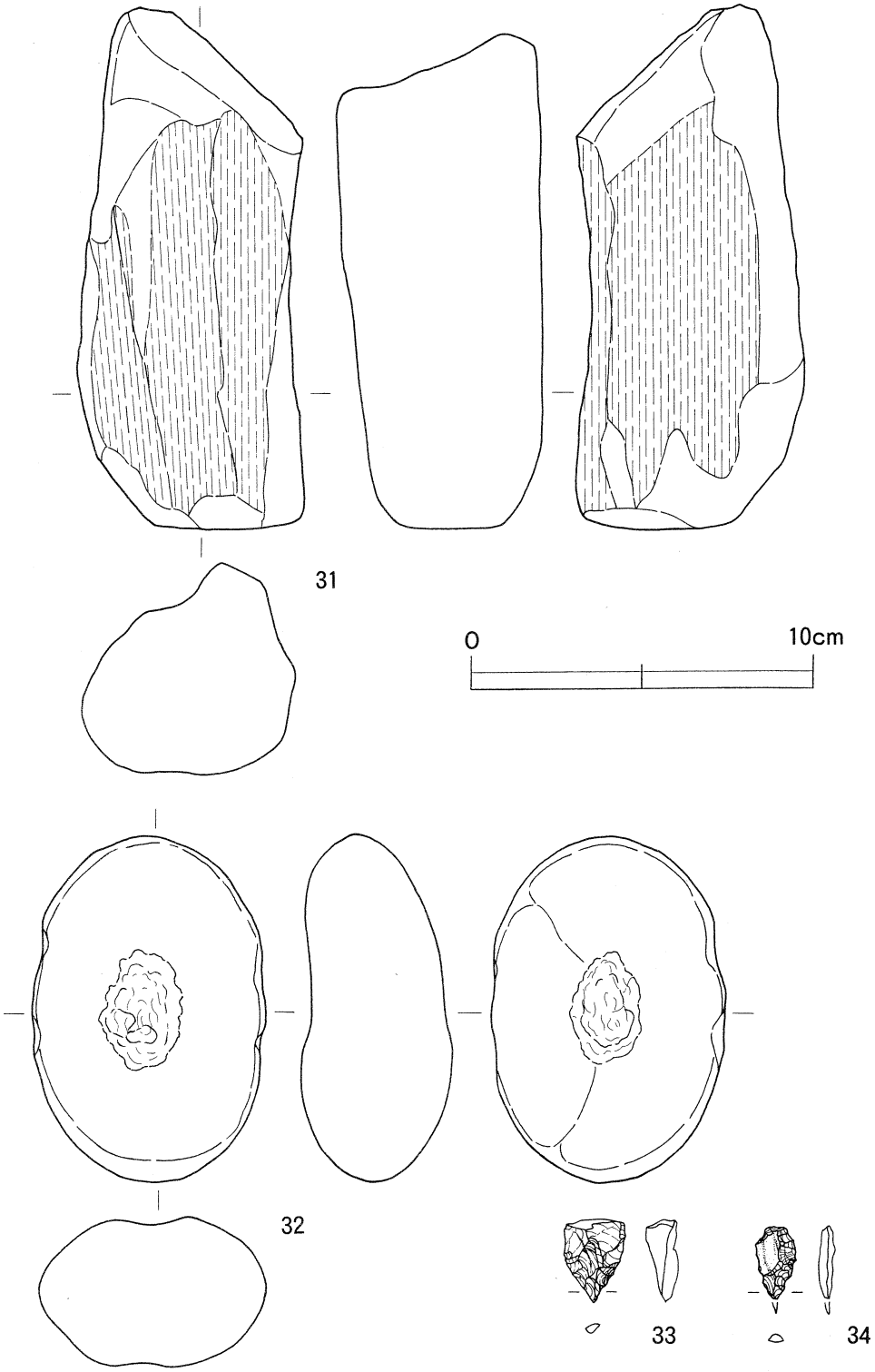
第56図　12号住居址出土遺物（1/4）



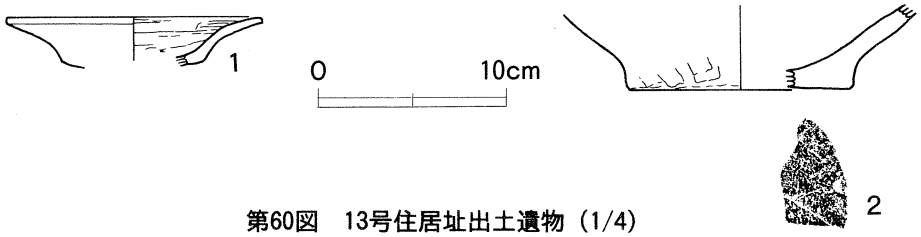
第57図　12号住居址出土遺物（1/4）



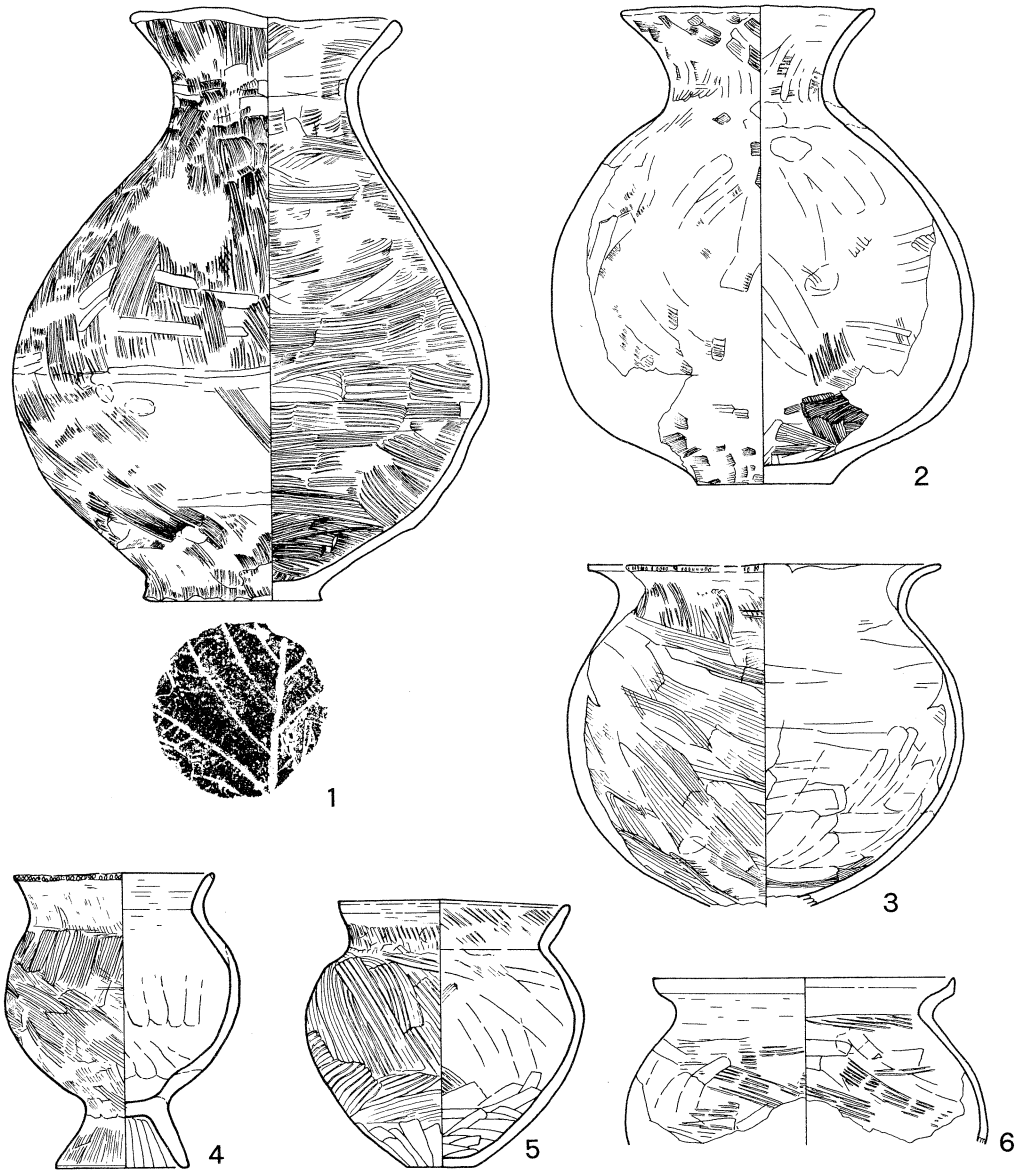
第58図　12号住居址出土遺物（1/4）・土製品（1/2）



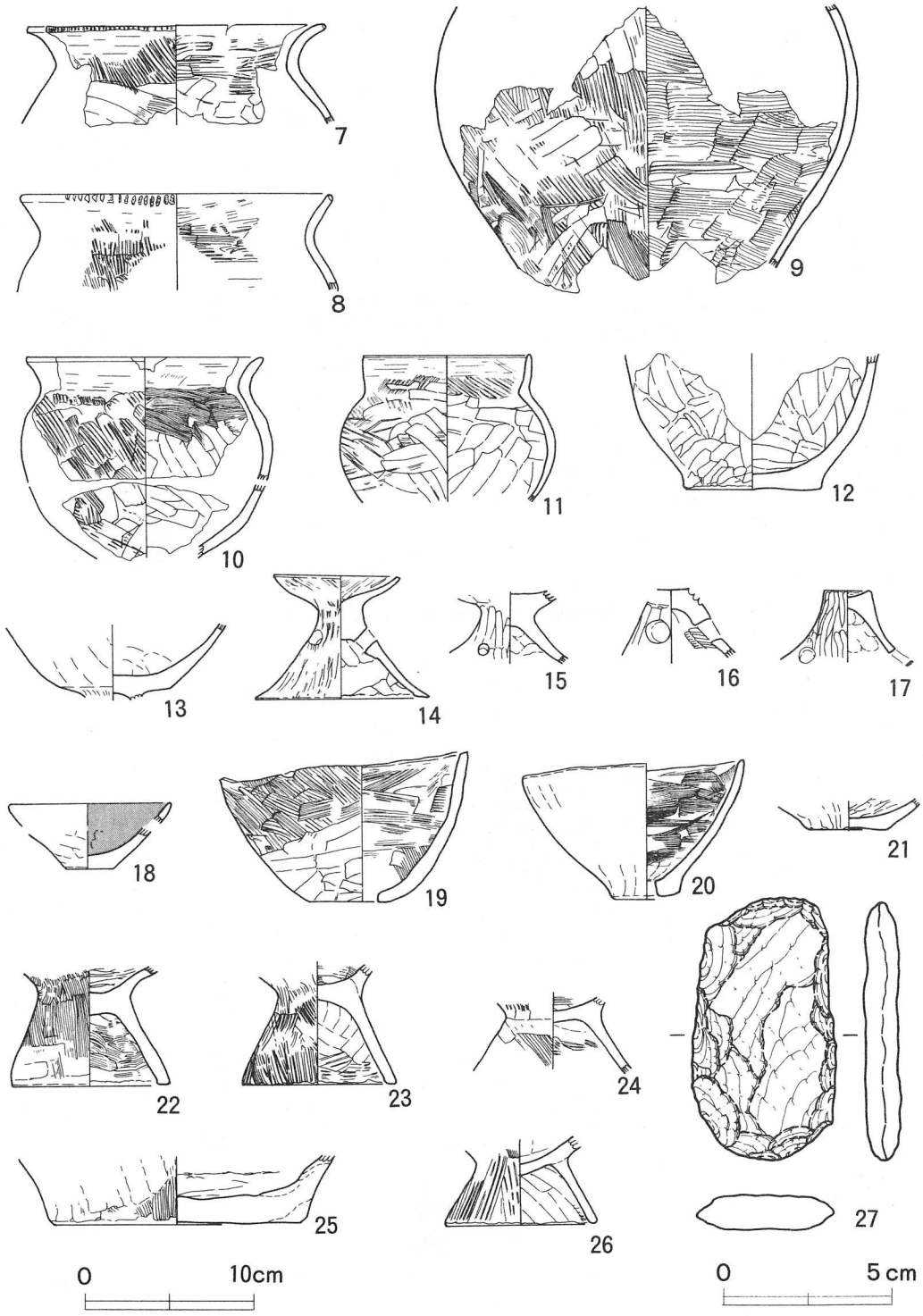
第59図　12号住居址出土石器（1/2）



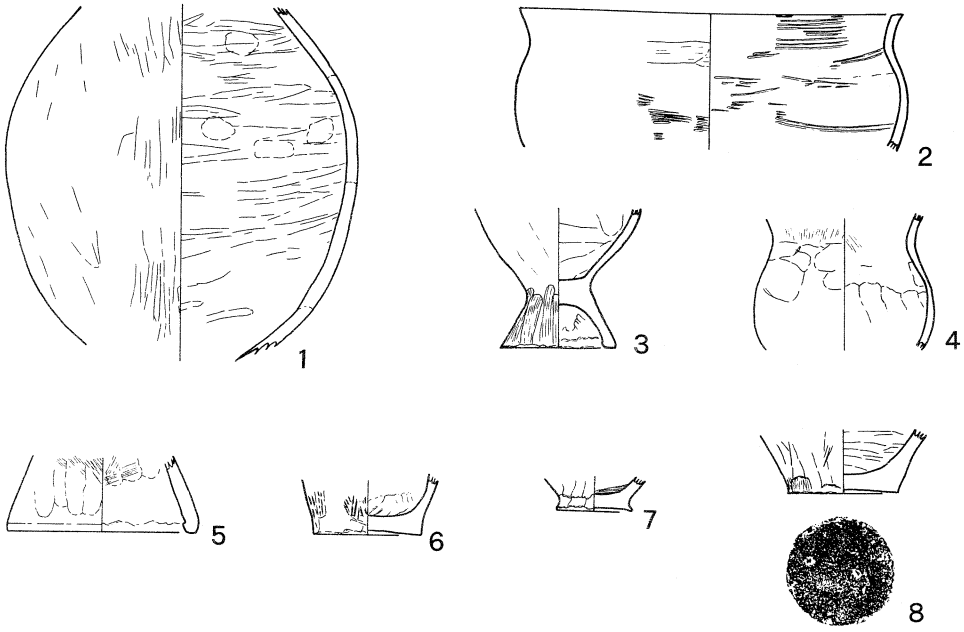
第60図　13号住居址出土遺物（1/4）



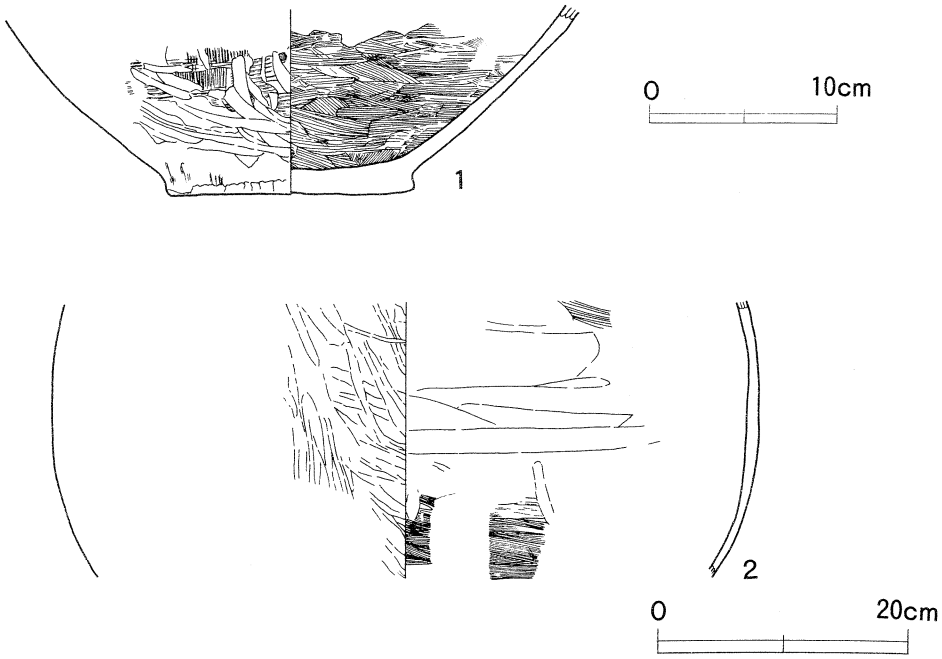
第61図　14号住居址出土遺物（1/4）



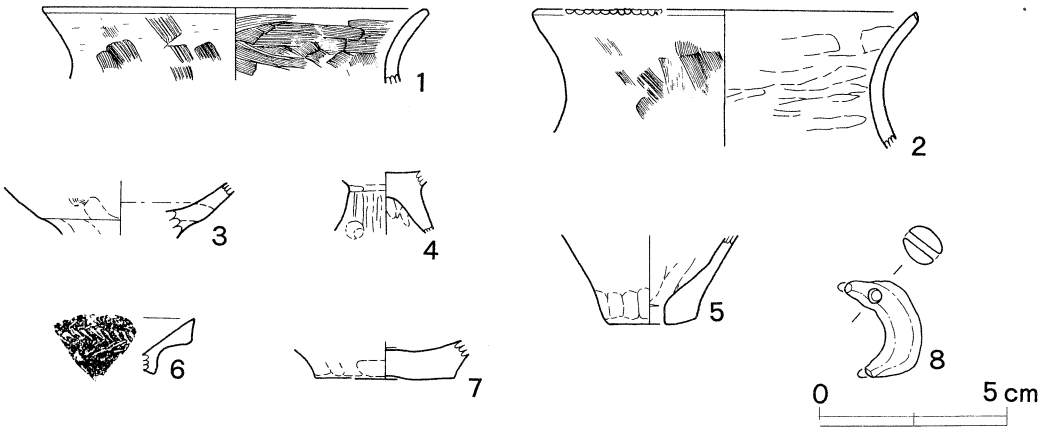
第62図　14号住居址出土遺物（1/4）・石器（1/2）



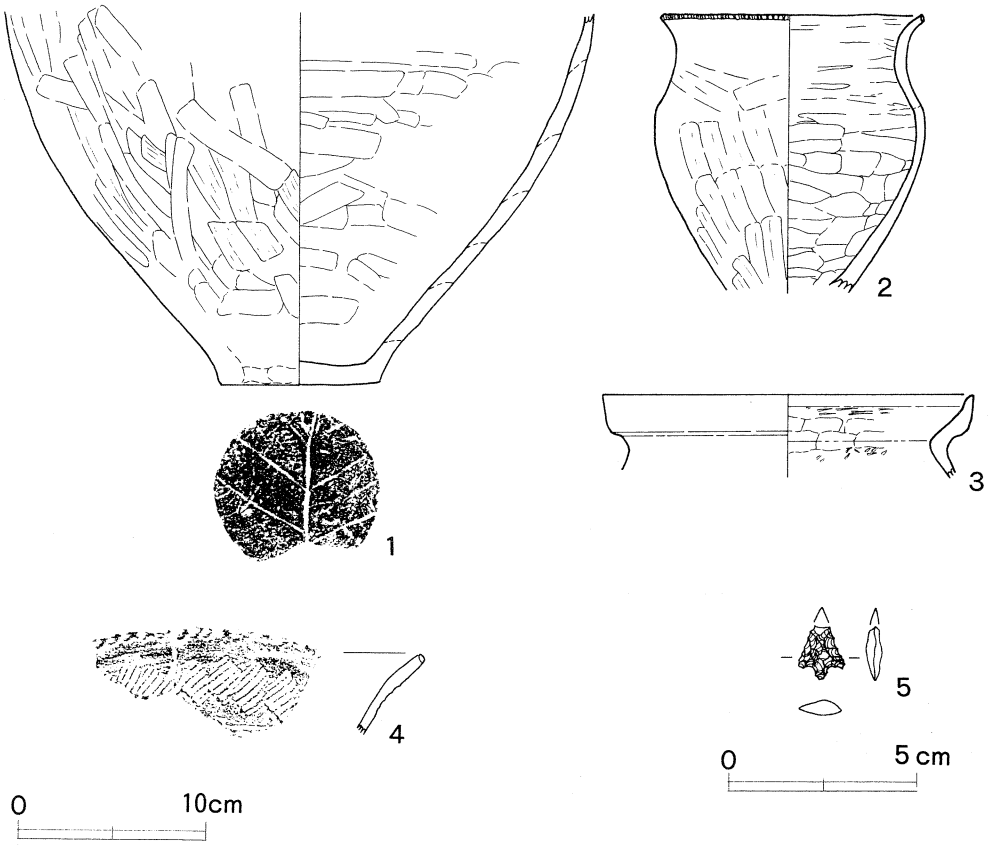
第63図　15号住居址出土遺物（1/4）



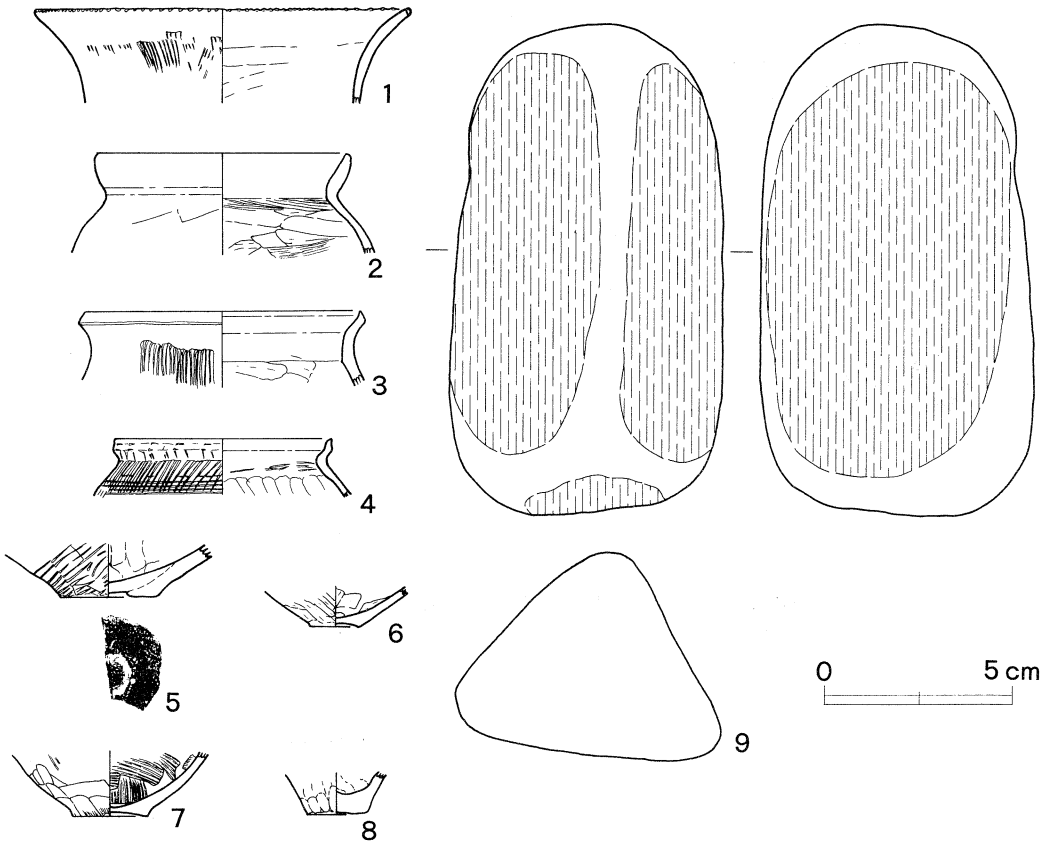
第64図　16号住居址出土遺物（1/4，1/6）



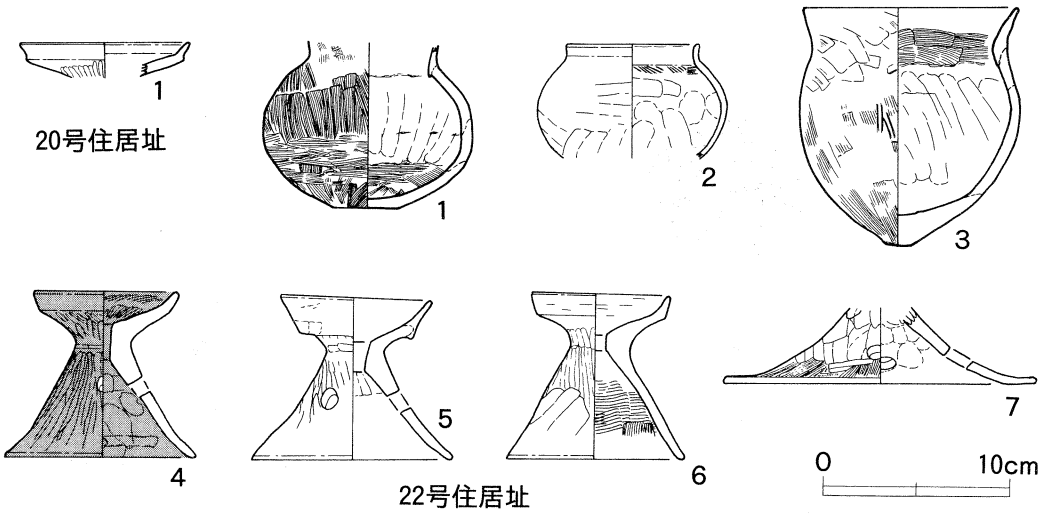
第65図　17号住居址出土遺物（1/4）・土製品（1/2）



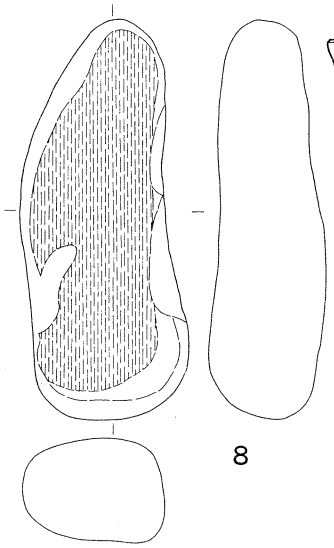
第66図　18号住居址出土遺物（1/4）・石器（1/2）



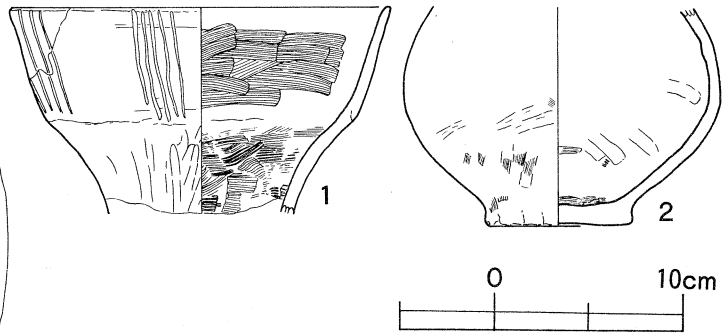
第67図　19号住居址出土遺物（1/4）・石器（1/2）



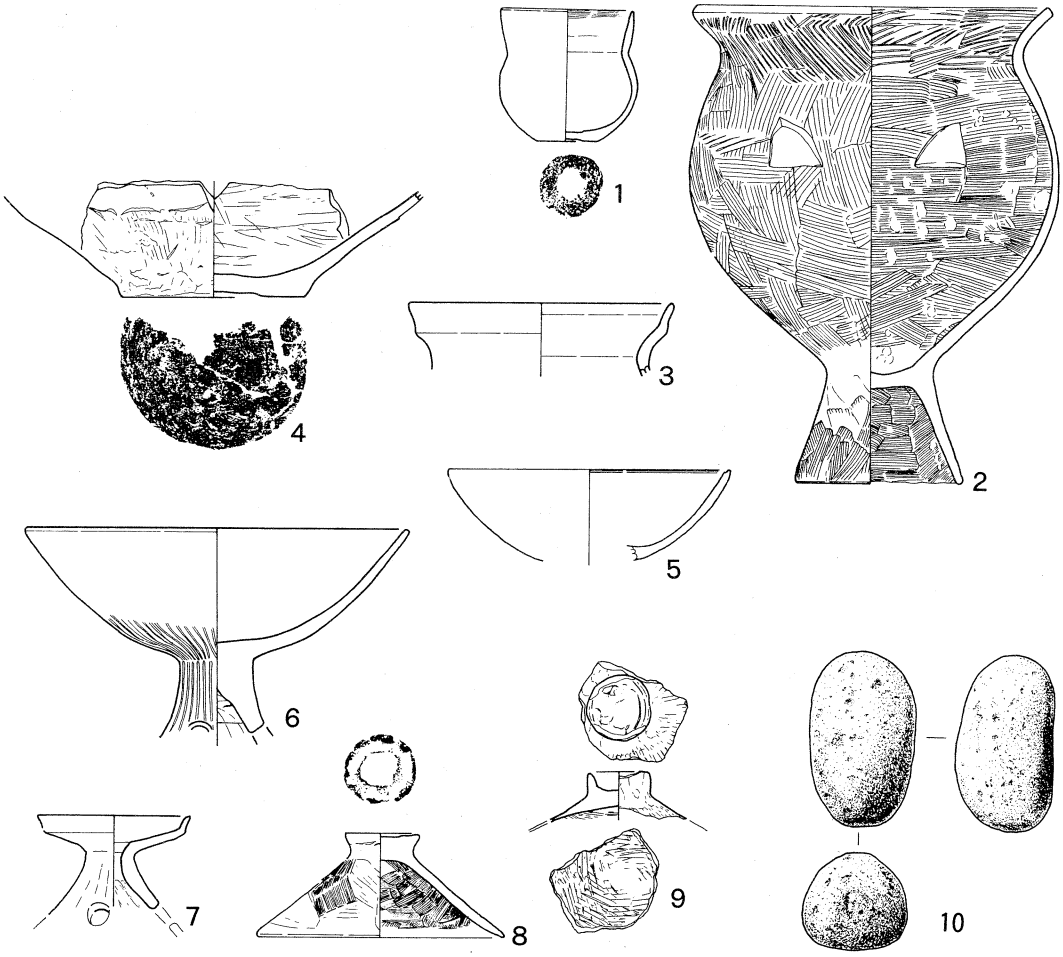
第68図　20号・22号住居址出土遺物（1/4）



第69図　22号住居址出土石器（1/4）



第70図　23号住居址出土遺物（1/4）



第71図　1号周溝墓出土遺物（1/4）

番号	器種	法量等／胎土／色調 整形・特徴・その他
7	高坏	底径16.8,脚部半分／赤色粒子、長石を含み密／にぶい黄橙色
		内面－指頭痕、横撫で。外面－刷毛目後ヘラ削り、ヘラ削り
8	石器	長さ21.0,巾8.3,厚さ5.5,重さ1,530g ,石材硬質砂岩
		磨石

〈23号住居址出土遺物〉（第70図）

（単位 cm）

番号	器種	法量等／胎土／色調 整形・特徴・その他
1	壺	口径20.0,口縁部片／白・黒色粒子、雲母、長石を含み密／橙色
		内面－横撫で、細かい刷毛目。外面－横撫で後４本１単位（２ヶ所）５本１単位の沈線 頸部刷毛目後ヘラ磨き
2	壺	底径7.4,胴部～底部片／赤・白色粒子、長石、石英、雲母、角閃石を含みやや粗い／内面－にぶい黄橙色・灰黄褐色。外面－橙色
		内面－刷毛目後撫で。外面－刷毛目後撫で。底部ヘラ撫で

〈１号周溝墓出土遺物〉（第71図）

（単位 cm）

番号	器種	法量等／胎土／色調 整形・特徴・その他
1	小型壺	器高7.0、口径6.8、底径3.3、完形／雲母、白・黒色粒子を含む／にぶい黄橙色
		内面－撫で、みこみ部に指圧痕がみられる。外面－頸部削りの痕跡あり、その後撫でている 胴部一部黒変、底部は削られている
2	台付甕	器高25.1、口径18.7、底径8.9、2/3残／密、雲母、赤色粒子を含む／橙色
		内面－横刷毛目。外面－縦方向の刷毛目（胴中央一部横刷毛目） 内、外面一部黒変している
3	甕	口径13.7、口縁部破片／粗い白色粒子が目立つ砂粒を含む／橙色～にぶい橙色
		内・外面－横撫で
4	甕	底径9.6、底部破片／やや粗い砂粒を含む／内面－にぶい褐色。外面－橙色～にぶい橙色
		内面－横撫で。外面－縦刷毛目、胴接合部が剝離している、底部は撫で
5	坏	口径14.9、口縁部～体部破片／雲母、白色粒子を含む／橙色
		内・外面－横撫で
6	高坏	口径20.2、体部～脚部破片／密、雲母、白色粒子を含む／明赤褐色
		内面－撫で。外面－撫で磨き、脚部に円孔あり
7	器台	口径8.0、1/2残／粗い赤色粒子の目立つ砂粒を含む／にぶい黄橙色
		内・外面－磨きが施されたと思われるが摩滅により不鮮明　脚部に円孔あり
8	蓋	器高5.5、口径12.9、鈕径3.9、ほぼ完形／雲母、赤・白色粒子を含む／橙色
		内面－刷毛目。外面－刷毛目と撫で、鈕部は撫で
9	蓋	鈕径3.1、鈕部破片／金雲母、白色粒子を含む／にぶい黄橙色
		内面－横刷毛目。外面－縦刷毛目がみられる　雑な整形
10	石器	長さ9.3、巾5.6、厚さ5.2／石材安山岩

〈２号周溝墓出土遺物〉（第72.73.74図）

（単位 cm）

番号	器種	法量等／胎土／色調 整形・特徴・その他
1	壺	底径6.4,口縁部欠損／雲母、赤・白・黒色粒子を含みやや密／橙色 内面－撫で。外面－櫛歯状工具痕、条痕、撫で、黒煙痕。内側－もろく剥落あり
2	壺	口径14.0,口縁部破片／赤・白・黒色粒子を含みやや密／にぶい黄橙色 内面－撫で。外面－口縁部指頭押圧文、条痕
3	壺	口径16.7,口縁部破片／雲母、白・黒色粒子を含みやや密／橙色 内面－撫で。外面－撫で、櫛歯状工具痕
4	壺	底径7.0,口縁部欠損／雲母、赤・白・黒色粒子を含みやや密／橙色 内面－撫で、刷毛目。外面－撫で、磨き
5	台付甕	口径19.2,口縁部～体部破片／砂粒を含む／にぶい黄橙色 内面－縦撫で。外面－頸部～肩部、体部に斜位の刷毛目が施され、肩部に２本の刷毛目が横走している
6	甕	口径15.3,2/3残／雲母、赤・白色粒子を含み密／にぶい黄橙色 内面－撫で、刷毛目。外面－口縁部撫で、胴部刷毛目
7	台付甕	底径8.8,口縁部欠損／雲母、赤・白色粒子を含み密／にぶい橙色 内面－撫で。外面－刷毛目
8	器台	器高7.9,口径7.9,底径12.6,完形／雲母、赤・白色粒子を含みやや粗／にぶい黄橙色 内面－撫で。外面－撫で、刷毛目。底部、撫で、刷毛目
9	鉢	口径26.0,口縁部のみ／雲母、白・黒色粒子を含みやや密／橙色 内面－磨き。外面－刷毛目
10	壺	器高26.7,口径12.0,底径7.8,口縁一部欠損略完形／長石、石英、白色粒子を含み密／橙色 内面－刷毛目後撫で磨き。外面－刷毛目後ヘラ磨き、底部はヘラ磨き、部分的黒変 胴部下方に単孔あり
11	壺	器高17.3,口径10.6,底径4.0,略完形／角閃石、雲母を含みやや密／浅黄橙色 内面－磨き。外面－ヘラ磨き。底部－ヘラ削り
12	壺	器高15.0,口径8.2,底径3.0,完形／角閃石、雲母、小礫を含みやや粗／内面－にぶい黄橙色。外面－浅黄橙色 内面－撫で、指頭痕あり。外面－ヘラ磨き、撫で、部分的に赤彩されている。底部に単孔あり
13	壺	口径22.2,2/3残／赤・白色粒子、長石、石英、角閃石、雲母を含みやや粗／内面－浅黄橙色、にぶい橙色。外面－にぶい橙色 内面－撫で後磨き、刷毛目後磨き、胴部刷毛目。外面－口縁部撫で後磨き、頸・胴部刷毛目後磨き
14	壺	口径16.0,口縁部破片／黒色粒子、長石を含みやや粗い／橙色 内面－ヘラ撫で。外面－刷毛目後ヘラ撫で
15	壺	器高46.4,口径21.8,底径10.0,4/5残／雲母、白・黒・赤色粒子を含みやや密／橙色 内面－口縁部撫でられるが刷毛目痕もみられる。　胴部は細かい刷毛目痕 外面－肩部が撫でられ他は刷毛目が顕著である
16	壺	底径3.4,4/5残／赤色粒子、雲母、小礫、石英を含みやや密／浅黄橙色 内面－刷毛目、ヘラ撫で。外面－ヘラ磨き、胴部に黒変あり、底部はヘラ削り
17	甕	口径16.0,口縁部破片／黒色粒子、長石を含みやや粗い／明黄褐色 内面－横撫で、刷毛目。外面－横撫で、刺突文
18	甕	口径12.8,口縁部破片／角閃石、長石を含みやや密／暗赤褐色 内・外面－磨き、赤彩されている
19	甕	口径22.0,口縁部破片／赤・白・黒色粒子、雲母を含み密／橙色 内面－刷毛目、横撫で。外面－刷毛目、撫で

番号	器種	法量等／胎土／色調 整形・特徴・その他
20	甕	口径21.0,口縁部破片／赤・白・黒色粒子、雲母を含み密／にぶい橙色 内面－口縁部横撫で、刷毛目。外面－口縁部横撫で刺突文、刷毛目
21	甕	口径11.0,口縁部破片／白色粒子、石英、雲母を含みやや粗い／内面－橙色。外面－明褐色 内面－横撫で、指撫で。外面－横撫で、刷毛目
22	壺	口径10.0,口縁部破片／白・黒色粒子、雲母、小礫を含み密／にぶい黄橙色 内面－撫で。外面－口唇部刻み目,胴部刷毛目
23	高坏	口径24.0,1/3残／白色粒子・長石を含みやや粗／内面－明赤褐色。外面－赤褐色 内面－刷毛目、ヘラ撫で。外面－刷毛目、刷毛目後撫で。　内・外面全体赤彩
24	器台	器高8.4,口径8.5,底径12.6,4/5残／赤・白・黒色粒子、雲母、小礫を含み密／橙色 内面－ヘラ撫で。外面－口縁横撫で、ヘラ磨き。脚部穿孔３ヶ所施される、中央にも穿孔あり
25	器台	1/5残／白・黒色粒子、雲母、小礫を含み密／にぶい黄橙色 内面－ヘラ撫で。外面－ヘラ撫で、ヘラ磨き、穿孔あり
26	台付甕	脚部片／赤色粒子、長石を含みやや粗い／橙色 内面－撫で。外面－撫で。底部－刷毛状工具にて撫で
27	高坏	底径14.0,脚部片／長石、角閃石を含みやや粗い／にぶい黄橙色 内面－ヘラ撫で。外面－ヘラ撫で磨滅している　　穿孔あり
28	高坏	底径13.0,脚部片／長石、雲母を含みやや粗い／浅黄橙色 内面－刷毛目。外面－刷毛目後ヘラ磨き
29	台付甕	脚台部片／長石、角閃石、雲母を含みやや粗い／明黄褐色 内面－撫で。外面－刷毛目
30	器台	脚部片／長石、雲母、角閃石を含みやや粗い／脚内面－橙色。外面－黄橙色 内面－撫で。外面－刷毛目後撫で磨滅している。　穿孔４ヶ所あり
31	鉢	器高4.5,口径14.0,底径3.0,1/3残／長石、砂粒を含みやや粗い／浅黄橙色 内・外面－撫で。底部－ヘラ削り
32	鉢	口径12.0,口縁部片／白・黒色粒子を含みやや密／明黄褐色 内面－撫で磨き。外面－横撫でヘラ撫で
33	壺	頸部片／白色粒子を含みやや粗い／内面－灰黄褐色。外面－にぶい黄褐色 内面－撫で。外面－刷毛目、撫で
34	甕	胴部片／白・黒色粒子、角閃石、長石、雲母を含み粗い／内面－黄褐色。外面－黄橙色 内面－撫で。外面－櫛歯状工具による波状文
35	甕	口縁部片／角閃石、長石、石英、雲母を含み粗い／内面－明黄褐色。外面－褐色 内面－撫で,刷毛目。外面－刷毛目後撫で
36	深鉢	破片／黒色粒子、長石を含みやや粗い／内面－褐色。外面－橙色 内面－ヘラ撫で。外面－櫛歯状工具による波状文と短線文
37	壺	頸部片／白色粒子、長石、石英を含み粗い／内面－黄褐色。外面－橙色 内面－撫で。外面－撫で,ボタン状貼付文が施されている
38	深鉢	胴部片／黒色粒子、長石を含み粗い／内面－明黄褐色。外面－黒褐色 内面－撫で。外面－半截竹管による沈線、押し引き文
39	深鉢	胴部片／白・黒色粒子、角閃石、長石を含み粗い／にぶい黄橙色 内面－撫で。外面－磨消縄文単節LR,半截竹管による沈線

番号	器種	法量等／胎土／色調 整形・特徴・その他
40	深鉢	口縁部片／赤色粒子、長石、角閃石を含みやや粗／褐色 内面－撫で。外面－刺突文
41	石器	長さ14.4,巾9.0,厚さ3.6,重さ380g,石材粘板岩 打製石斧

〈３号周溝墓出土遺物〉（第75図）

（単位 cm）

番号	器種	法量等／胎土／色調 整形・特徴・その他
1	甕	口径28.0 口縁部～頸部破片／雲母、白・赤色粒子を含む／にぶい黄橙色 内面は、口縁部横撫で、胴部横刷毛目。外面は刷毛目の後、撫で

〈４号周溝墓出土遺物〉（第76,77,78,79,80図）

（単位 cm）

番号	器種	法量等／胎土／色調 整形・特徴・その他
1	壺	口径14.1 口縁部破片／雲母、白・赤・黒色粒子を含む／橙色 内、外面ともに刷毛目の後撫で。
2	壺	口径14.0 口縁部破片／雲母、白・黒色粒子を含む／にぶい黄橙色 内、外面ともに撫で。
3	壺	口径14.0 口縁部破片／雲母、白・黒・赤色粒子を含む／にぶい黄橙色 内、外面ともに撫で。
4	壺	口径12.4 口縁部破片／雲母、白色粒子を含む／にぶい橙色 内面－横撫で。外面－撫での後、ヘラけずり、刷毛目
5	壺	口径15.8 口縁部破片／雲母、白・黒色粒子を含む／にぶい橙色 内面－撫での後、磨き。外面－刷毛目調整の後、撫で。
6	壺	口径15.2 口縁部破片／雲母、白・赤・黒色粒子を含む／にぶい橙色 内面－横撫で、刷毛目。外面－折り返し口縁部下側は縦位刷毛目調整の後、ヘラ撫で。
7	壺	口径7.9 口縁部～胴部破片／白・黒色粒子を含む／橙色 内、外面ともに撫で,全体に鉄錆がかかっている。
8	壺	口縁頸部破片／雲母、白・黒色粒子を含む／にぶい橙色 内面－撫で。外面－口縁有段部外側、及び頸部下に櫛歯状工具による押引き刺突文。
9	壺	口縁頸部破片／白・黒色粒子を含む／橙色 内面－刷毛目、撫で。外面－幅広の口縁外側に縦位の沈線が刻まれている。 頸部－刷毛目と撫でが見られるがかなり磨滅している。
10	壺	口径7.2 口縁部破片／雲母、白・黒色粒子を含む／橙色 内面－撫で。外面－刷毛目調整の後、撫で
11	壺	底径4.7 口縁部欠損／雲母、白・黒色粒子を含む／浅黄橙色 内面－撫で。外面－ヘラ削りの後、撫で
12	壺	頸部～胴上部破片／雲母、白色粒子を含む／にぶい黄橙色 内面、頸部－撫での後みがかれている。外面－刷毛目の後、撫で。
13	壺	底径8.8 底部破片／白・黒色粒子を含む／橙色 内・外面ともに刷毛目の後、撫で。

番号	器種	法量等／胎土／色調 整形・特徴・その他
14	壺	口径15.6 底径9.0 器高34.3 完形／砂粒を含む／黄褐色 内面－横刷毛目整形、頸部以下胴部上半ヘラ磨き、剝落多い。口縁部横撫で。 外面－縦刷毛目整形後、頸部以下ヘラ磨き。底部,植物体(モミ？)による圧痕あり
15	壺	底径9.0 胴下部～底部破片／白・赤色粒子を含む／にぶい橙色 内面－ヘラ撫で。外面－撫で、磨き。底部ヘラ削り。一部黒変している。
16	壺	口径11.0 口縁部破片／雲母、白・黒色粒子を含む／にぶい黄橙色 内・外面ともに撫で。ひさご形土器？
17	壺	口径8.8 口縁部～胴上部破片／雲母、白・赤色粒子を含む／にぶい橙色 内面－口縁部は磨きのような撫で。胴部は撫で,刷毛目 外面－撫で。ひさご形土器
18	小型甕	口径7.6 略完形／雲母、白色粒子を含む／橙色 内面－口縁部刷毛目の後撫で、胴部は撫で。外面は撫で、胴下部から底部剝落している。
19	台付甕	口径14.0 底部欠損／雲母、白・黒色粒子を含む／橙色 内面－口縁部は刷毛目の後撫で。胴部は刷毛目 外面－撫で、刷毛目。磨滅している。
20	台付甕	口径12.2底径9.3器高17.8、底部一部欠損／白・赤色粒子を含む／にぶい橙色 内面－口縁部刷毛目の後手撫で。外面－口縁部から胴上半部刷毛目。 胴下部はヘラ削り。脚部は刷毛目。口唇部に刻目がめぐる。
21	台付甕	口径17.0 底径10.2 器高27.4 略完形／雲母、白色粒子を含む／橙色 内面－刷毛目。脚部内面は刷毛目の後撫で。外面－顕著な刷毛目。口唇部に刻目がめぐる。 内外面一部煤けている。
22	台付甕	口径10.8 脚台部のみ欠損／白・赤・黒色粒子を含む／にぶい橙色 内外面ともに刷毛目。胴上部煤けている。
23	台付甕	口径14.2 底径8.8 器高19.4 完形／雲母、白色粒子を含む／にぶい橙色 内面－撫で。外面－刷毛目。口唇部に刻目がめぐる。内外面一部煤けている。
24	台付甕	口径16.0 脚台部のみ欠損／雲母、白・赤色粒子を含む／にぶい橙色 S字状口縁部横撫で。内面－指撫で。外面－刷毛目が施され、肩部の刷毛目は横走する。 内外面一部煤けている。
25	台付甕	口径15.4 底径8.7 器高24.6 略完形／雲母、白色粒子を含む／にぶい橙色 S字状口縁部横撫で。内面－指撫で。 外面－明瞭な刷毛目。肩部の刷毛目は横走する。内外面一部煤けている。
26	台付甕	口径11.0 底径7.8 器高20.5 完形／雲母、白色粒子を含む／にぶい黄橙色 内面－撫で。外面－口縁部は横撫で,胴部、櫛歯状工具による明瞭な条線で撫でてある。 肩部の条線は横走する。
27	台付甕	底径7.9 脚台部破片／雲母、白色粒子が多い／にぶい橙色 胴底部内面及び脚台部内面は刷毛目。脚台部外面は刷毛目の後、撫で
28	台付甕	底径7.8 脚台部破片／雲母、白色粒子を含む／橙色 脚台部内面は撫で。脚台部外面は刷毛目の後撫で
29	台付甕	脚台部破片／雲母、白・黒色粒子を含む／内面－にぶい黄橙色。外面－橙色 胴底部内面及び脚台部内面は撫で。脚台部外面は刷毛目
30	台付甕	底径9.9 脚台部破片／雲母、白・赤・黒色粒子を含む／にぶい橙色 胴底部内面及び脚台部内面は撫で。外面は刷毛目
31	台付甕	脚台部破片／雲母、白・赤色粒子を含む／にぶい褐色 脚台部内面は撫で。胴底部内面と脚台部外面は刷毛目
32	台付甕	脚台部破片／雲母、白色粒子を含む／にぶい黄橙色 内面－撫で。外面－刷毛目の後、撫で
33	台付甕	脚台部破片／雲母、白・赤色粒子を含む／橙色 脚台部内面－刷毛目。脚台部外面－刷毛目の後撫で

番号	器種	法量等／胎土／色調 整形・特徴・その他
34	台付甕	脚台部破片／雲母、白・赤色粒子を含む／内面－にぶい黄橙色。外面－橙色
		脚台部内外面ともに刷毛目の後撫で。
35	甕	口径12.0 口縁部破片／雲母、白・黒色粒子を含む／にぶい黄橙色
		S字状口縁部横撫で。外面－頸部下には刷毛目が施されている。
36	甕	口径11.0 口縁部破片／雲母、白・赤・黒色粒子を含む／にぶい黄橙色
		S字状口縁部は横撫で。外面－頸部下には刷毛目が施されている。
37	甕	口径12.0 口縁部破片／雲母、白・赤・黒色粒子を含む／明赤褐色
		S字状口縁部は横撫で。内面－頸部には横位の刷毛目。 外面－頸部下より刷毛目が施され肩部の刷毛目は横走する。
38	甕	口径16.0 口縁部破片／雲母、白・黒色粒子を含む／にぶい黄橙色
		S字状口縁部は横撫で。外面－工具による刺突がめぐる。 内面－頸部には横位の刷毛目が施されている。
39	甕	口径14.0 口縁部破片／雲母、白・赤色粒子を含む／明黄褐色
		S字状口縁部横撫で。頸部下内面に指頭圧痕が見られる。 外面－頸部下より刷毛目が施され、肩部の刷毛目は横走する。
40	甕	口径16.0 口縁部破片／雲母、白・黒色粒子を含む／にぶい黄橙色
		S字状口縁部は横撫で。外面－工具による刺突がめぐる。 内面－頸部には横位の刷毛目が施されている。
41	甕	口径12.5 口縁部～胴部破片／雲母、白・赤色粒子を含む／にぶい橙色
		S字状口縁部内面は横撫で、内面－頸部刷毛目、胴部撫でと圧痕がみられる。外面－頸部直下に横刷毛目と縦刷毛目、胴部には斜位の刷毛目が施されている。一部煤けている。
42	甕	口径12.8 底径4.0 器高11.8 略完形／雲母、白・赤色粒子を含む／にぶい橙色
		S字状口縁部は横撫で、内面－撫で。外面－頸部直下は縦刷毛目、肩部付近に横位刷毛目、胴部は斜位の刷毛目が施されている。底部は撫で、剥離がみられる。
43	甕	口径16.8 口縁部～胴部破片／雲母、白色粒子を含む／にぶい黄橙色
		S字状口縁部内面横撫で、頸部刷毛目、胴部撫で。口縁部外面横撫で後刺突文がめぐる。外面頸部から肩部に縦刷毛目後、横刷毛目がめぐり、胴部には斜位刷毛目が施されている。外面一部煤けている。
44	甕	口径14.7 口縁部～胴部破片／白・赤・黒色粒子を含む／橙色
		S字状口縁部横撫で、内面－頸部刷毛目、圧痕がみられる。口縁部外面には横撫で後工具による刺突文が連続する。 外面－頸部～肩部に工具による横刷毛目と縦刷毛目がみられる。胴部には斜位刷毛目がみられる。外面一部煤けている。
45	甕	口径10.0 底径3.8 器高9.7 略完形／雲母、白色粒子を含む／にぶい橙色
		内面－雑な撫でで浅い凹みがみられる。口縁部は横撫で。外面－頸部直下は縦刷毛目、肩部付近は横位の刷毛目、胴部は斜位の刷毛目が施されている。底部はヘラ削り、内外面全体煤けている。
46	甕	口径15.2 口縁部～胴部破片／雲母、白・黒色粒子を含む／にぶい黄橙色
		内面－撫で。外面－撫でと刷毛目が施されている。外面煤けている。
47	甕	口径19.0 口縁部～胴部破片／雲母、白・黒色粒子を含む／にぶい橙色
		口縁部内面－横撫でと横刷毛目、内面胴部斜位刷毛目。口縁部外面－縦刷毛目、胴部斜位刷毛目がみられる。内・外面一部煤けている。
48	甕	口径15.6 口縁部破片／白・黒色粒子を含む／にぶい黄橙色
		口縁部横撫で頸部内面刷毛目。外面－撫で
49	甕	口径14.0 口縁部破片／白・赤・黒色粒子を含む／にぶい黄橙色
		口縁部－横撫で。内面－撫で。外面－刷毛目
50	甕	頸部破片／雲母、白色粒子を含む／にぶい橙色
		内・外面－撫で
51	甕	口径12.0 口縁部破片／雲母、白・黒色粒子を含む
		内・外面－横撫で
52	甕	口径15.8 口縁部～頸部破片／雲母、白・赤・黒色粒子を含む／にぶい黄橙色
		口縁部内面－横撫で、口縁部外面－横撫で、頸部刷毛目痕がみられる
53	甕	口径15.0 口縁部～頸部破片／雲母、白・赤色粒子を含む／にぶい黄橙色
		口縁部横撫で、頸部内面－斜位刷毛目。頸部外面－横撫でと縦刷毛目が施されている。

番号	器種	法量等／胎土／色調 整形・特徴・その他
54	甕	口径15.7 口縁部破片／白・黒色粒子を含む／橙色 口縁部～頸部内面、横撫で、器面若干ザラついている。 外面口縁部～頸部にかけてタール痕がみられる。
55	甕	口径30.0 口縁部破片／白色・やや粗い黒色粒子を含む／にぶい黄橙色 内・外面－横撫で
56	甕	口縁部破片／雲母、白・黒色粒子を含む／にぶい黄橙色 内・外面－横撫で
57	甕	口径14.8 底径5.5 器高15.8 半分欠損／白・赤色粒子を含む／にぶい橙色 口縁部内面横刷毛目、胴部撫で、口縁部～頸部外面縦刷毛目、胴部斜位に刷毛目が施されている。 底部ヘラ削り、内外面全体に煤けている。
58	甕	口径16.1 底径6.8 器高19.4 口縁部胴部一部欠損／雲母、白・黒色粒子を含む／にぶい褐色・にぶい橙色 口縁部内面横撫で、頸部内面刷毛目後ヘラ撫で、胴部撫で、口唇部外面刻目が連続している。 口縁部～頸部には斜位刷毛目が施されている。外面全体に煤けている。
59	甕	口径13.9 口縁部～胴部破片／雲母、白色粒子を含む／にぶい黄橙色 口縁部内面斜位の刷毛目、胴部内面撫で、口縁部外面横撫で。頸部～肩部には縦刷毛目、胴部には斜位刷毛目が施されている。外面全体に煤けている。
60	甕	口径21.1 口縁部～胴部破片／赤・白色粒子を含む／橙色 口縁部～胴部内面斜位刷毛目。口縁部～頸部外面、縦刷毛目、胴部斜位刷毛目が施されている。 外面全体と内面一部が煤けている。
61	甕	口径15.4 口縁部～胴部破片／雲母、白・黒色粒子を含む／にぶい黄橙色 内外面ともに刷毛目の後撫で。器面はかなりザラついて一部剥落している。
62	甕	口径18.8 口縁部～胴上部破片／雲母、白・赤色粒子を含む／にぶい橙色 口縁部と内面は刷毛目の後撫で。外面頸部以下は刷毛目が施されている。
63	甕	口径14.0 口縁部～胴部破片／雲母、白色粒子を含む／にぶい黄橙色 内外面ともに刷毛目の上を撫でられている。
64	甕	口径13.7 口縁部～胴上部破片／雲母、黒色粒子、大粒の白色粒子を含む／にぶい橙色 内面－横刷毛目の後撫で。外面－撫で
65	甕	口径17.4 口縁部破片／雲母、白・黒色粒子を含む／橙色 口縁部内面－横刷毛目。外面－刷毛目の後、撫でられている。
66	甕	口径15.0 口縁部破片／雲母、白・黒色粒子を含む／橙色 内面－磨きのような撫で。外面－刷毛目
67	甕	口径10.1 口縁部破片／雲母、白・赤・黒色粒子を含む／にぶい黄橙色 内外面ともに横撫で。
68	甕	底径7.0 底部破片／雲母、白・黒色粒子を含む／橙色 内外面ともに撫でられている。
69	甕	底径6.5 底部破片／雲母、白・黒色粒子を含む／にぶい黄橙色 内外面ともに撫でられている。胴下部の底と接する部分に押えた痕が連続する。
70	甕	底径8.5 底部破片／白・黒色粒子を含む／にぶい橙色 内面底部激しく剥落している。胴部外面刷毛目痕あり。
71	甕	底径7.1 底部破片／雲母、白・黒色粒子を含む／にぶい橙色 内面は撫で。外面は撫でと刷毛目がみえる。
72	甕	底径5.1 底部破片／雲母、白・黒色粒子を含む／橙色 みこみ部は指撫で。外面は刷毛目と指撫で。底部は撫で
73	高坏	口径19.0 口縁と底部を若干欠損／雲母、白・赤・黒色粒子を含む／にぶい黄橙色 内面は体部が撫でと刷毛目、脚部は刷毛目。外面は撫で、脚部は磨きか？円孔が３ヶみられる。

番号	器種	法量等／胎土／色調 整形・特徴・その他
74	高坏	器高11.2 口径11.8 底径15.4 ほぼ完形／細かい赤・白・黒色粒子を含む／にぶい橙色
		内外面－磨き、一部剝離あり、脚部に円孔が４ヶみられる。
75	器台	器高9.8 口径8.5 底径10.8 ほぼ完形／粗い赤色と白色粒子を含む／橙色
		内外面－撫で、脚部内面に刷毛目。円孔が４ヶみられる。
76	高坏	口径23.5 脚部欠損／雲母、白・赤色粒子を含む／にぶい黄橙色
		内外面－ヘラ撫で、一部黒変
77	高坏	口径22.5 体部破片／雲母、赤・白色粒子を含む／にぶい黄橙色
		内面－撫で、一部黒変。外面－撫で、一部磨きがみられる。
78	器台	器高8.9 口径7.5 底径12.0 5/6残／雲母、白・黒・赤色粒子を含む／にぶい黄橙色
		内面－撫で、脚部に横刷毛目あり。外面－縦方向刷毛目が目立つ、脚部に円孔が３ヶみられる。
79	器台	体下部～脚上部破片／白・黒色粒子を含む／橙色～にぶい橙色
		内面－撫で、脚部は指撫でか？。外面－撫でと刷毛目、脚部に円孔が３ヶみられる。
80	高坏	底径14.4 体下部～脚部破片／雲母、赤・白色粒子を含む／にぶい黄橙色
		内面－刷毛目後撫で。外面－撫で脚上部に剝離あり、脚部に円孔が３ヶみられる。
81	器台	体下部～脚部破片／雲母、白色粒子を含む／にぶい黄橙色
		内外面は磨きの様な撫で。脚部内面は撫で、円孔がみられる。
82	器台	底径11.0 体部～脚部破片／雲母、白・赤色粒子を含む／橙色～赤橙色
		内外面は磨きの様な撫で。脚部内面は撫で、円孔がみられる。
83	高坏	体部破片／雲母、白・赤色粒子を含む／にぶい黄橙色
		内面－磨き。外面－ヘラ削り後撫で。脚部内面に工具痕がみられる。
84	高坏？	体下部～脚上部破片／雲母、白・黒・赤色粒子を含む／にぶい黄橙色
		みこみ部は剝離により不鮮明だが、磨きか？。外面は磨きの様な撫で
85	器台	体下部～脚部破片／雲母、粗い赤色と白色粒子を含む／にぶい橙色
		内外面－撫で
86	器台	底径14.2 体部欠損／雲母、白色粒子を含む／浅黄橙色～にぶい黄橙色
		内面－撫でと横刷毛目。外面－縦刷毛目の後撫でか？一部黒変
87	器台	底径9.9 体部欠損／雲母、白・赤色粒子を含む／にぶい橙色
		内外面－撫で。脚部に直径７～８mmの円孔が２ヶづつ３ヶ所みられる
88	高坏	底径10.2 脚部破片／雲母、白・赤色粒子を含む／にぶい黄橙色
		内面－横刷毛目。外面－縦刷毛目の後磨きの様な撫で？。脚部に円孔が３ヶみられる
89	鉢	底径6.0 体下部～底部破片／雲母、白色粒子を含む／にぶい黄橙色
		内面－横刷毛目。外面－縦刷毛目の後磨きの様な撫で、底部には木葉痕の後、外周を撫でた様な痕跡がみられる
90	鉢	器高4.5 口径15.7 底径3.5 ほぼ完形／雲母、白・黒色粒子を含む／赤色
		内外面－磨き、赤彩土器
91	鉢	底径3.7 体部～底部破片／白・黒色粒子を含む／にぶい黄橙色
		内面－撫で、みこみ部付近に工具痕がみられる。外面－体部下半～底部にヘラ削りあり
92	鉢	底径2.6 体部～底部破片／雲母、白・黒色粒子を含む／内面－橙色。外面－にぶい橙色
		内外面とも撫で
93	鉢	口径17.0 口縁部～体部破片／雲母、白色粒子を含む／にぶい黄橙色
		内面－工具による横撫でか？。外面－口縁部は横撫で、体部は縦刷毛目

番号	器種	法量等／胎土／色調 整形・特徴・その他
94	鉢	底径4.8 体部～底部破片／細かい黒・赤・白色粒子を含む／にぶい黄橙色～橙色 内面－撫でと刷毛目がみられる。外面－撫で
95	鉢	底径4.3 体部～底部破片／赤・白・黒色粒子を含む／にぶい橙色 内、外面－撫でと刷毛目がみられる。底部は指撫でか？
96	鉢	体部破片／雲母、白色粒子を含む／にぶい黄橙色（外面下部赤橙色） 内面－横刷毛目。外面－撫で？
97	椀	口径6.0 破片／雲母、白・赤色粒子を含む／にぶい黄褐色 内・外面－撫で、輪積痕がみられる。外面－縦刷毛目の後撫でか？
98	手捏土器	器高2.2 底径3.3 口縁一部欠損／雲母、白・赤色粒子／にぶい橙色 やや雑な整形、輪積痕がみられる。底部には網代痕あり
99	手捏土器	底径3.1 体部～底部破片／白・赤・黒色粒子を含む／明褐灰色 内・外面－撫で
100	？	破片／雲母、白・赤・黒色粒子を含む／にぶい黄橙色 内面－撫で。外面－刷毛目、工具痕あり
101	？	破片／雲母、白色粒子を含む／内面－にぶい橙色。外面－橙色 内・外面－撫で。外面に突起あり、把手か？

〈5号周溝墓出土遺物〉（第81図）

番号	器種	法量等／胎土／色調 整形・特徴・その他
1	甕	口径14.0 口縁部破片／雲母、白色粒子を含む／にぶい褐色 内面は横。外面は縦方向に刷毛目がみられる。口唇部に刻みあり
2	壺	底径7.7 底部破片／雲母、白・赤・黒色粒子を含む／にぶい黄橙色 内面－横刷毛目の後撫で、みこみ部が黒変し剥離している。外面－縦撫で。
3	甕	底径7.6 底部破片／白・黒色粒子を含む／黄褐色 内面－剥離により不鮮明。外面－横撫で底部は網代痕あり
4	？	口縁部破片／金雲母、白・黒色粒子を含む／にぶい黄橙色 口唇部に刻み、外面はやや太い沈線が一本横走している
5	？	口縁部破片／雲母、白・赤色粒子を含む／にぶい黄橙色 内面－粗い横撫で。外面－口縁部にやや太い沈線が一本横走し、その下に八の字状の沈線文が施されている。
6	？	口縁部破片／雲母、白・赤色粒子を含む／にぶい黄橙色 内面－横撫で。外面－口縁部に粘土紐を貼付し、山形の押型文が施されている。
7	？	破片／雲母、白・赤色粒子を含む／にぶい黄橙色 内面－横撫で。外面－綾杉状の条痕文が施されている。
8	？	破片／雲母、白・黒色粒子を含む／にぶい黄橙色 内面－横撫で。外面－縦方向の条痕文が施されている。
9	？	破片／粗い白・黒色粒子が目立つ砂粒を含む／にぶい黄橙色 内面－横撫で。外面－横方向の条痕文が施されている。
10	？	破片／金雲母、白・黒色粒子を含む／にぶい黄橙色 内面－横撫で。外面－縦方向の条痕文が施されている。

番号	器種	法量等／胎土／色調 整形・特徴・その他
11	?	破片／雲母、やや粗い白・黒色粒子を含む／にぶい黄橙色 内面－横撫で。外面－上部は横方向、下部は綾杉状の条痕文が施されている。
12	?	破片／金雲母、白・黒・赤色粒子を含む／にぶい黄橙色 内面－横撫で。外面－摩滅により不鮮明だが、綾杉状の条痕文か？
13	?	破片／金雲母、白・黒色粒子を含む／にぶい黄橙色 内面－横撫で、輪積痕もみられる。外面－縦方向の条痕文
14	?	破片／雲母、白・赤色粒子を含む／にぶい黄橙色 内面－横撫で。外面－横方向の条痕文
15	?	破片／雲母、白・黒色粒子を含む／にぶい黄橙色 内面－横撫で。外面－綾杉状の条痕文
16	?	破片／雲母、白・赤色粒子を含む／にぶい黄橙色 内面－横撫で。外面－横方向の条痕文
17	?	破片／白・黒色粒子を含む／にぶい黄橙色 内面－横撫で。外面－縦方向の条痕文

〈6号周溝墓出土遺物〉（第82図）

（単位 cm）

番号	器種	法量等／胎土／色調 整形・特徴・その他
1	壺	口径19.6 口縁部片／赤・黒色粒子、長石、石英、雲母を含みやや粗い／浅黄色 内面－撫で。外面－口縁部横撫で後指頭痕、頸部撫で
2	甕	口径14.2 口縁部片／赤・白・黒色粒子、雲母、長石、角閃石を含みやや粗い／内面－にぶい橙色。外面－にぶい橙色、褐灰色 内面－撫で後磨き、口縁部刷毛目後撫で磨き。外面－ヘラ削り，口縁部刷毛目後撫で
3	台付甕	口径12.5 脚台部欠損／赤・黒色粒子、長石、雲母、小礫を含みやや粗い／内面－にぶい黄橙色・褐灰色。外面－浅黄橙色・褐灰 内面－刷毛目後撫で，胴部ヘラ撫で。外面－刷毛目後撫で，胴部ヘラ撫で
4	台付甕	底径8.5 底・脚部のみ／赤・黒色粒子、長石、雲母、石英を含みやや密／内面－褐色・明黄褐色，脚橙色。外面－明黄褐色 内面－ヘラ磨き脚部ヘラ撫で。外面－刷毛目、ヘラ削り，脚部撫で
5	台付甕	底径8.5 底・脚部のみ／長石・雲母を含みやや粗い／内面－橙色、明黄褐色。外面－にぶい黄橙色 内面－細かい刷毛目。外面－刷毛目、脚部刷毛目後撫で
6	台付甕	底径9.25 底・脚部のみ／赤・白・黒色粒子、長石、雲母、石英を含みやや粗い／にぶい黄橙色，脚内部橙色 内面－撫で脚部撫で刷毛目。外面－刷毛目撫で
7	台付甕	底径6.0 底・脚部のみ／赤色粒子、長石、雲母を含みやや密／内面－黄橙色、脚にぶい黄橙色。外面－にぶい黄橙色 内面－撫で脚部撫で刷毛目。外面－ヘラ削り刷毛目
8	高坏	口径11.9 1/5残／黒色粒子、長石、石英、雲母を含みやや密／にぶい黄橙色 内面－撫で、脚部指頭痕あり。外面－撫で刷毛目
9	高坏	底径11.1 脚部片／赤・黒色粒子、長石、雲母、小礫を含みやや粗い／にぶい黄橙色 内面－撫で、脚部ヘラ撫で。外面－ヘラ磨き
10	甕	底径6.6 底部のみ／赤色粒子、雲母、石英、長石を含みやや粗い／にぶい黄橙色 内面－撫で、脚部ヘラ削り。外面－ヘラ撫で後指撫で

〈７号周溝墓出土遺物〉（第83図）

（単位 cm）

番号	器種	法量等／胎土／色調 整形・特徴・その他
1	壺	底径12.2,1/3残／赤・白・黒色粒子、雲母、小礫を含み粗い／橙色 内面－刷毛目。外面－撫で、縄文、単節LR、単節RL ボタン状貼付文２コあり
2	壺	口径17.6,3/5残／赤・白・黒色粒子、雲母を含み密／にぶい黄橙色 内面－横撫で。外面－撫で
3	壺	口径16.2 口縁部片／赤・白・黒色粒子、雲母、小礫を含み粗い／明黄褐色 内面－ヘラ撫で、刷毛目。外面－撫で
4	壺	頸部片／赤・黒色粒子、雲母、長石、石英を含み粗い／にぶい黄橙色 内面－刷毛目後撫で、指撫で。外面－刷毛目、刷毛目後磨き
5	器台	口径7.8 2/5残／白・黒色粒子を含み密／にぶい黄褐色 内面－刷毛目、撫で。外面－磨き
6	器台	底径8.0 1/5残／赤・白・黒色粒子、雲母を含みやや粗い／黄橙色 内面－ヘラ撫で。外面－撫で 磨耗激しく細部不明，横に連続して孔あり、５個確認、８個あるのか？
7	台付甕	体下部片／白・黒色粒子、雲母を含み密／赤色 内面－ヘラ磨き。外面－ヘラ撫で、ヘラ磨き　内外赤彩されている
8	台付甕	脚台部片／赤・白・黒色粒子、雲母を含み粗い／黄橙色 内面－横刷毛目。外面－縦刷毛目
9	壺	底径6.0 底部片／赤・白・黒色粒子を含みやや粗い／明黄褐色 内外面－撫で
10	甑	底径4.0 底部片／白・黒色粒子、雲母を含み密／橙色 内面－刷毛目後ヘラ撫で。外面－刷毛目後撫で 下部から底部にかけて内外黒変
11	壺	底径5.8 底部片／白・黒色粒子、雲母を含み密／橙色 内面－刷毛目。外面－刷毛目後ヘラ撫で 内外赤彩されている。底部黒変
12	手捏土器	底径4.0 略完形／赤・白・黒色粒子、雲母を含み密／明黄褐色 内面－指頭痕あり、撫で。外面－ヘラ磨き、撫で。底部ヘラ撫で

〈３号溝出土遺物〉（第84図）

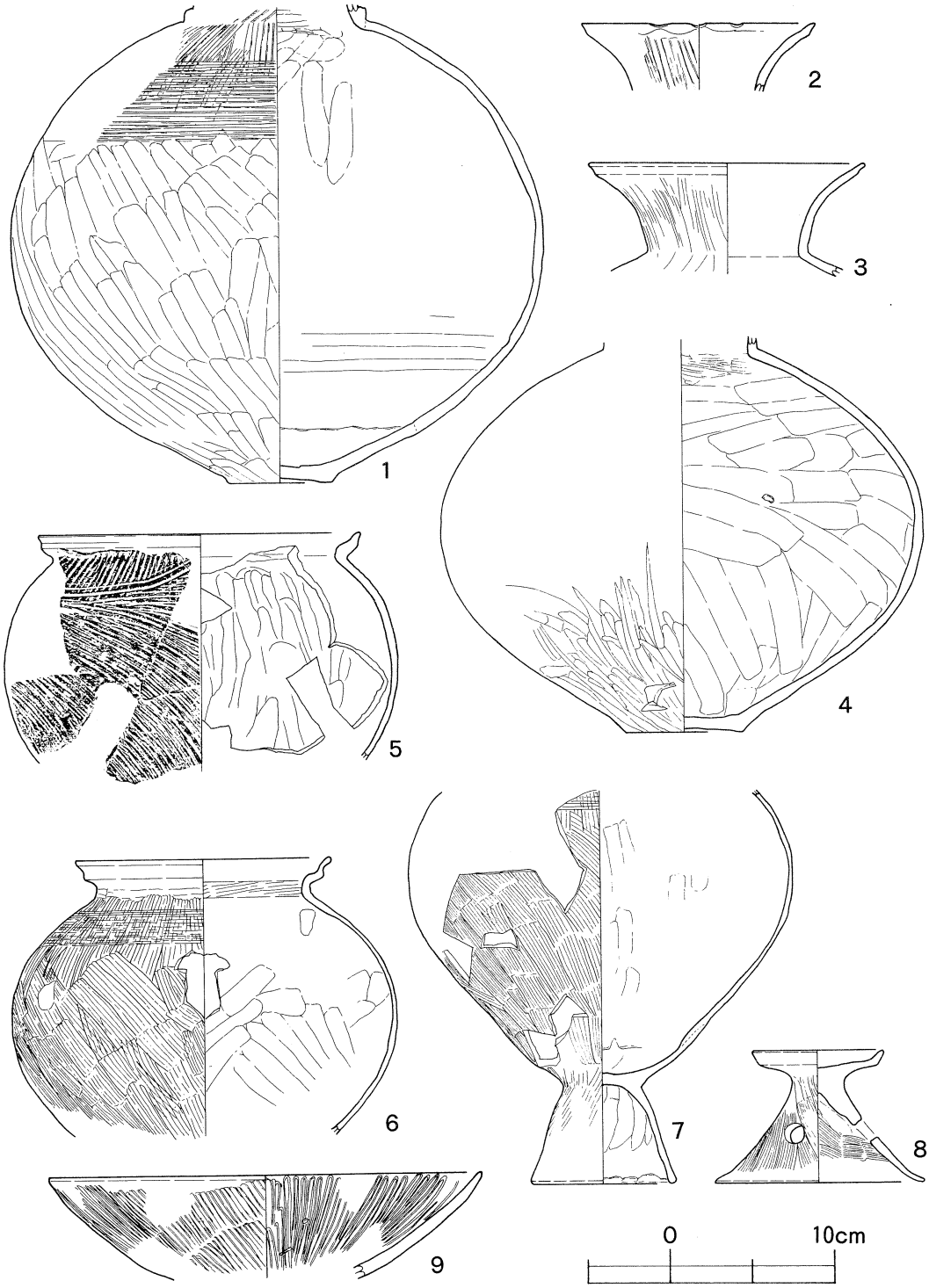
（単位 cm）

番号	器種	法量等／胎土／色調 整形・特徴・その他
1	石器	長さ14.5　巾8.0　厚さ2.0　石材　粘板岩 打製石斧

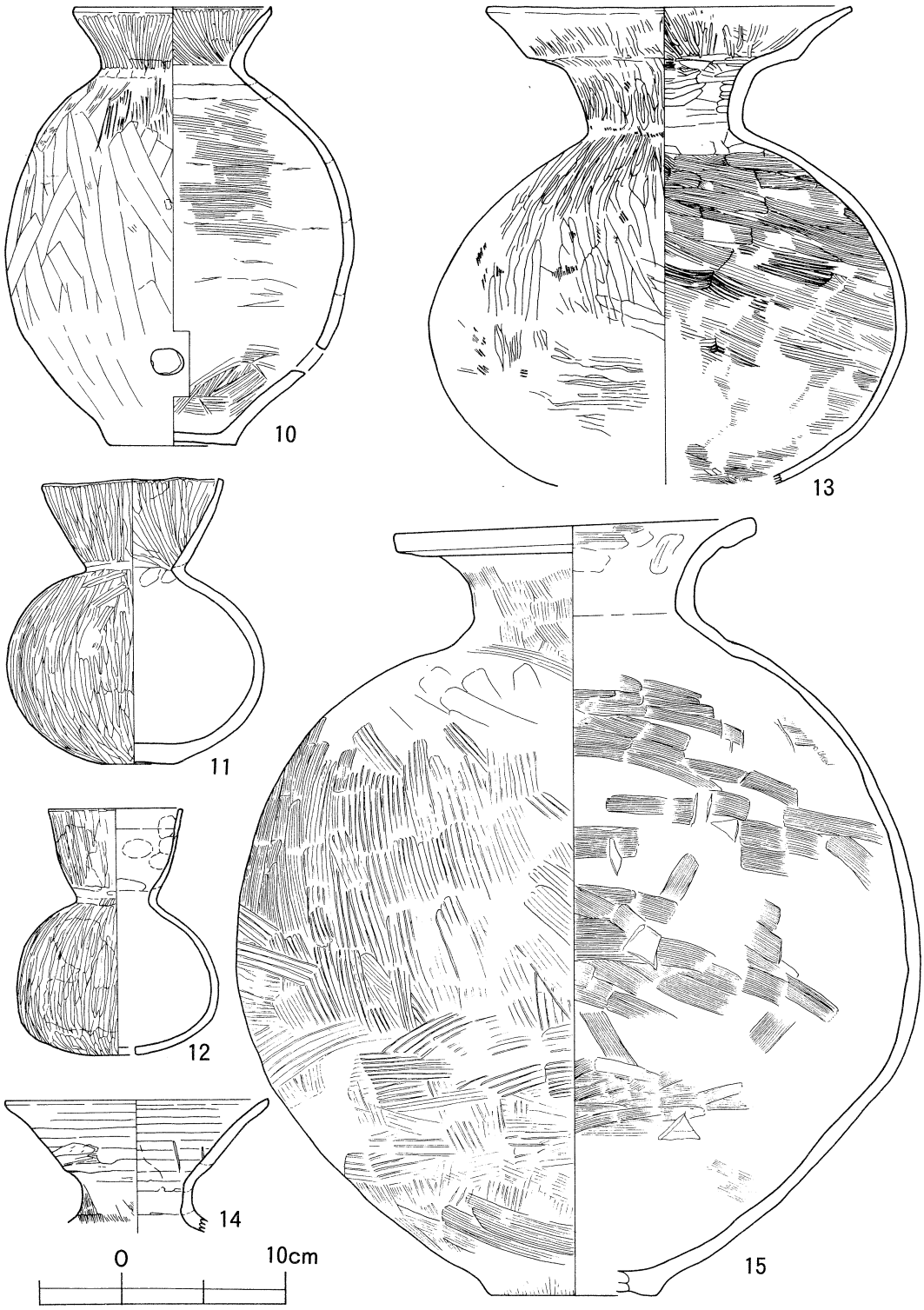
〈６号溝出土遺物〉（第85図）

（単位 cm）

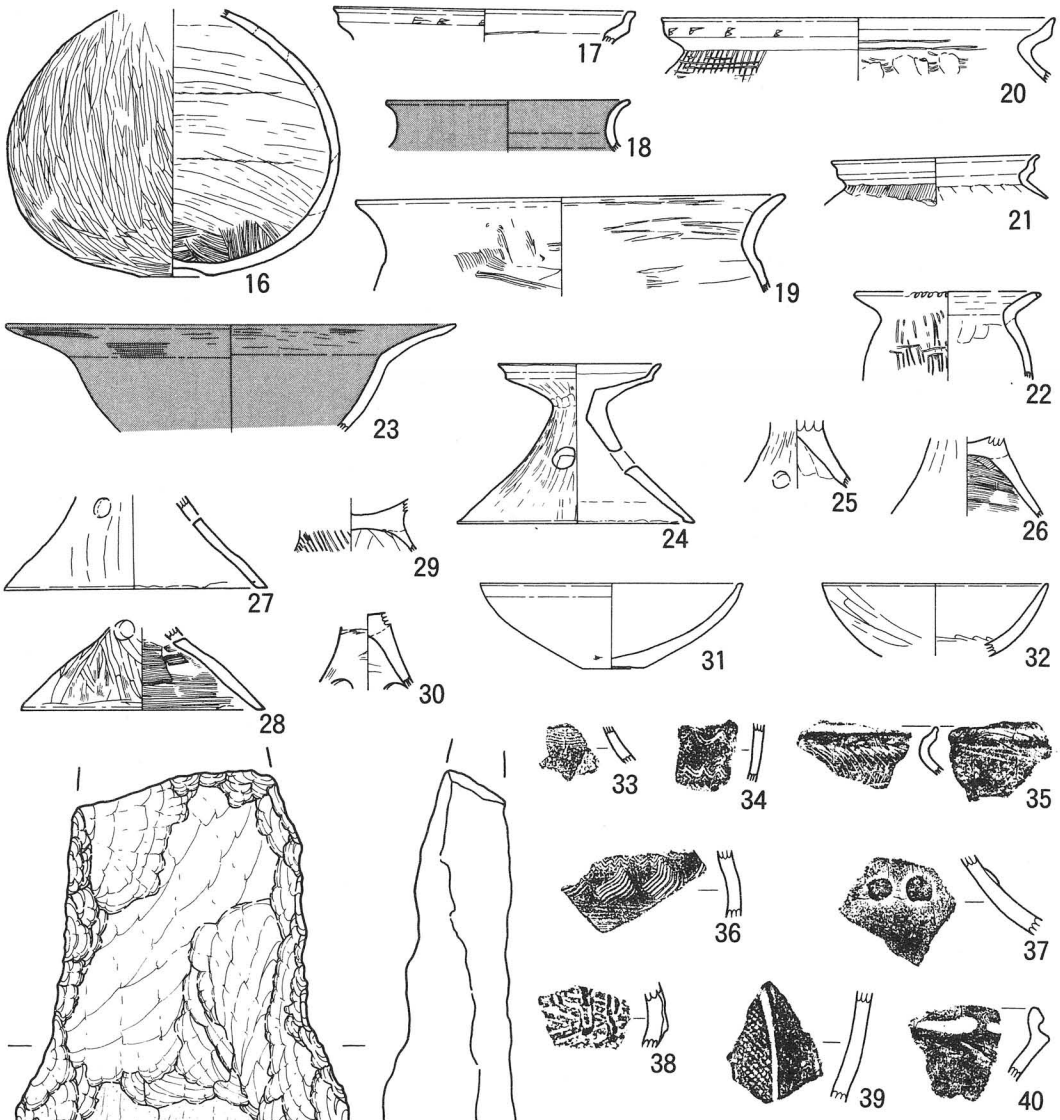
番号	器種	法量等／胎土／色調 整形・特徴・その他
1	甕	口径18.0 口縁部片／赤色粒子、長石、石英、雲母を含みやや粗い／内面－浅黄色・灰黄褐色。外面－灰黄褐色 内面－刷毛目。外面－撫で、口唇部刻み目
2	高坏？	口径15.0 口縁部片／赤・黒色粒子、石英、長石を含みやや密／内面－灰白色一部赤色。外面－橙色 内外面－撫で　内側口縁まで赤彩されている



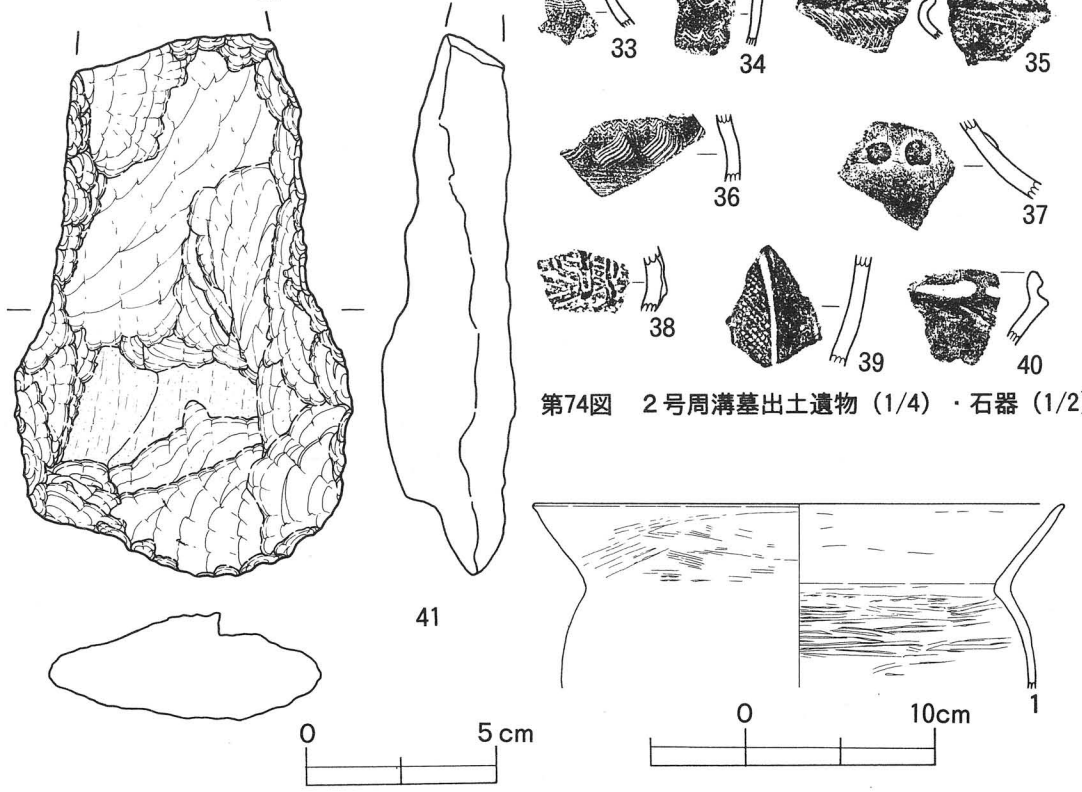
第72図　２号周溝墓出土遺物（1/4）



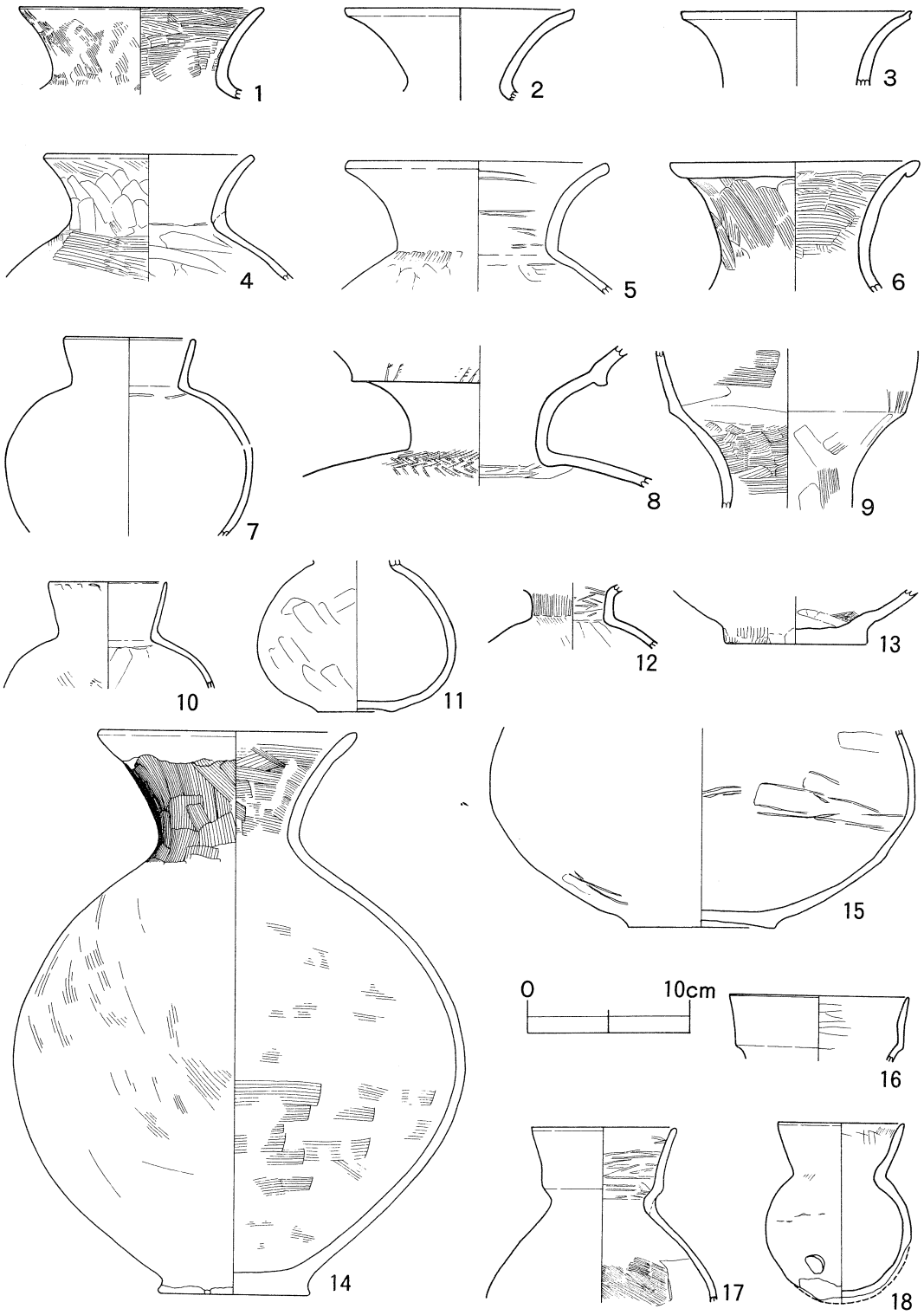
第73図　２号周溝墓出土遺物（1/4）



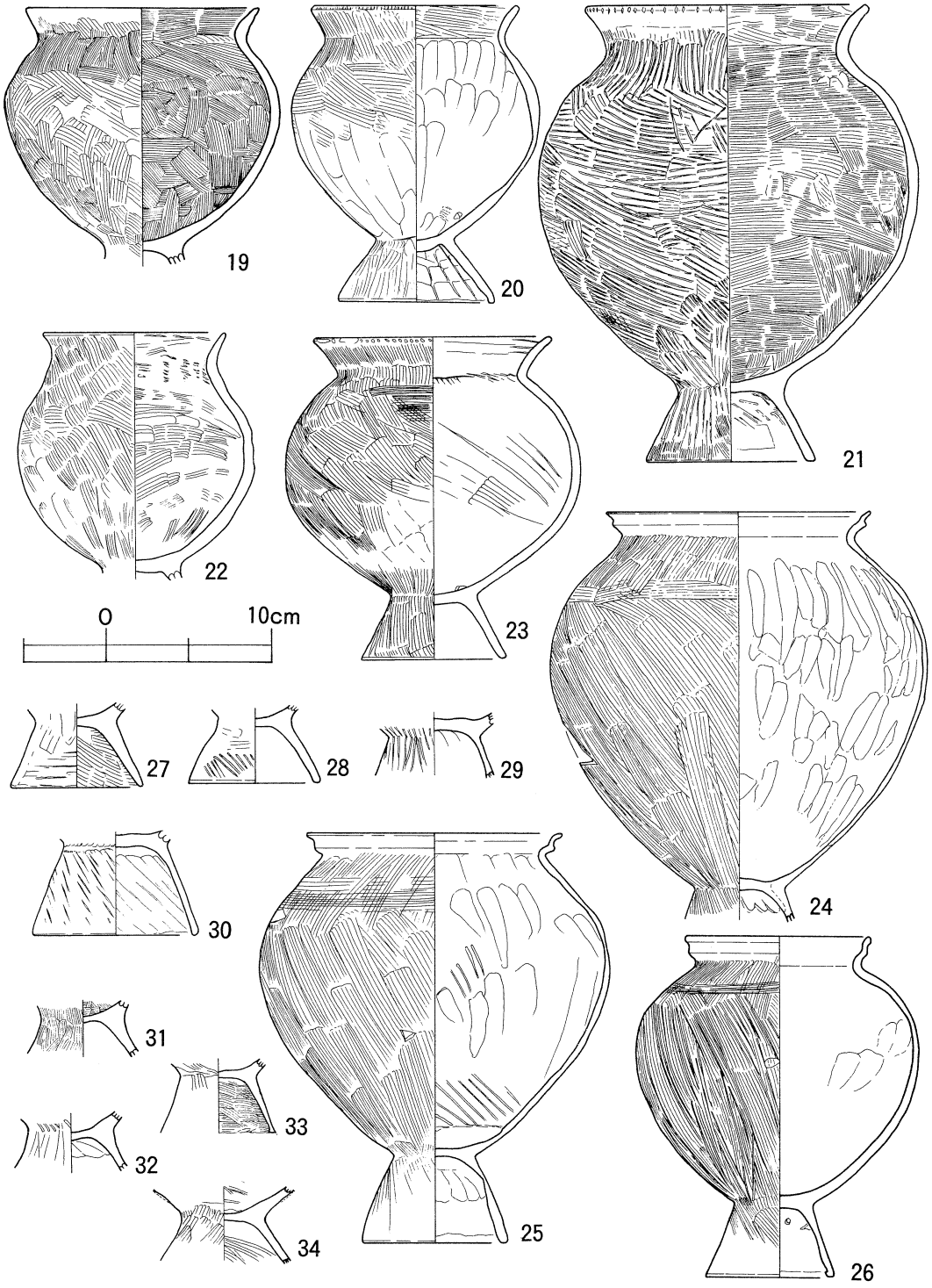
第74図　２号周溝墓出土遺物（1/4）・石器（1/2）



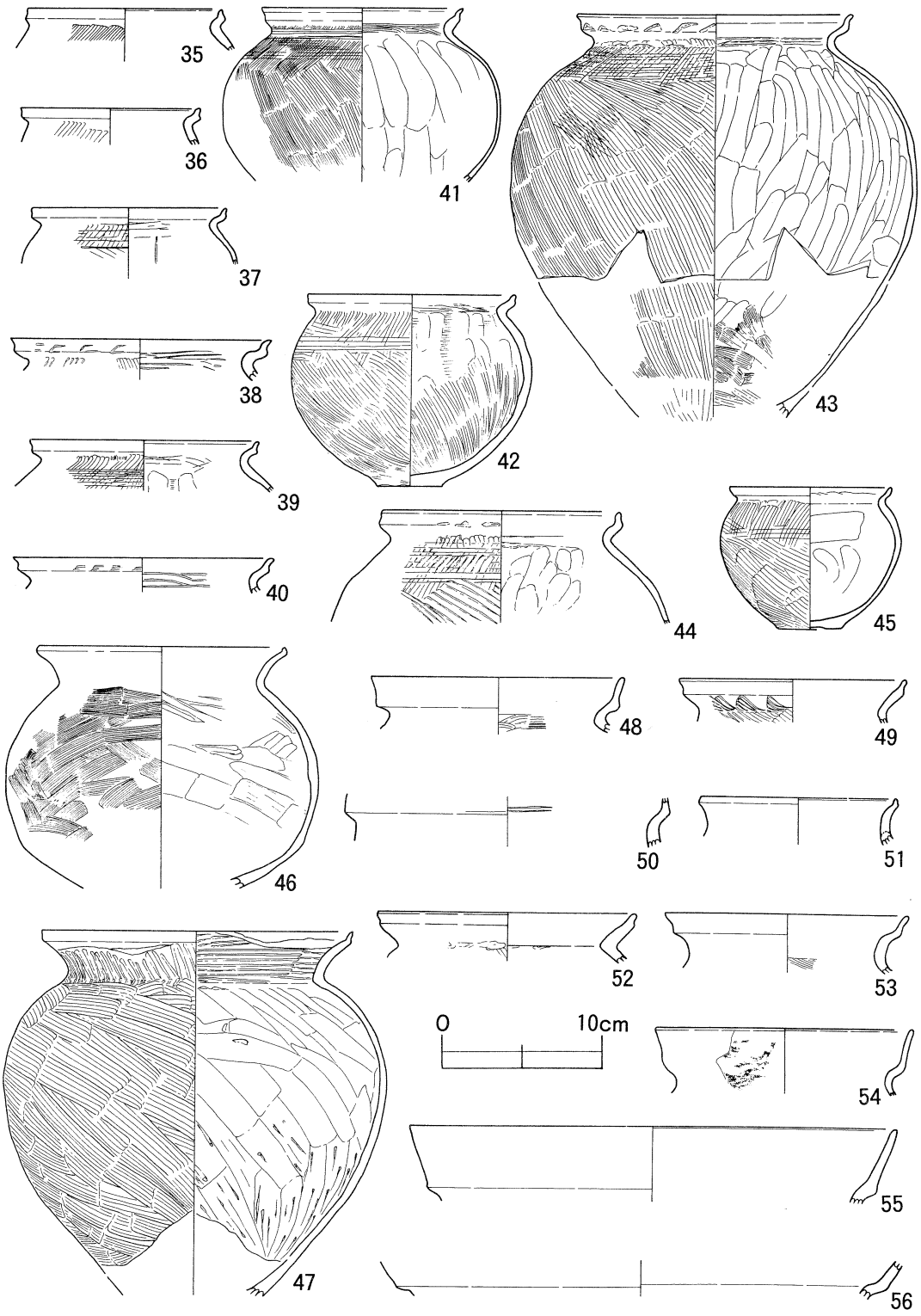
第75図　３号周溝墓出土遺物（1/4）



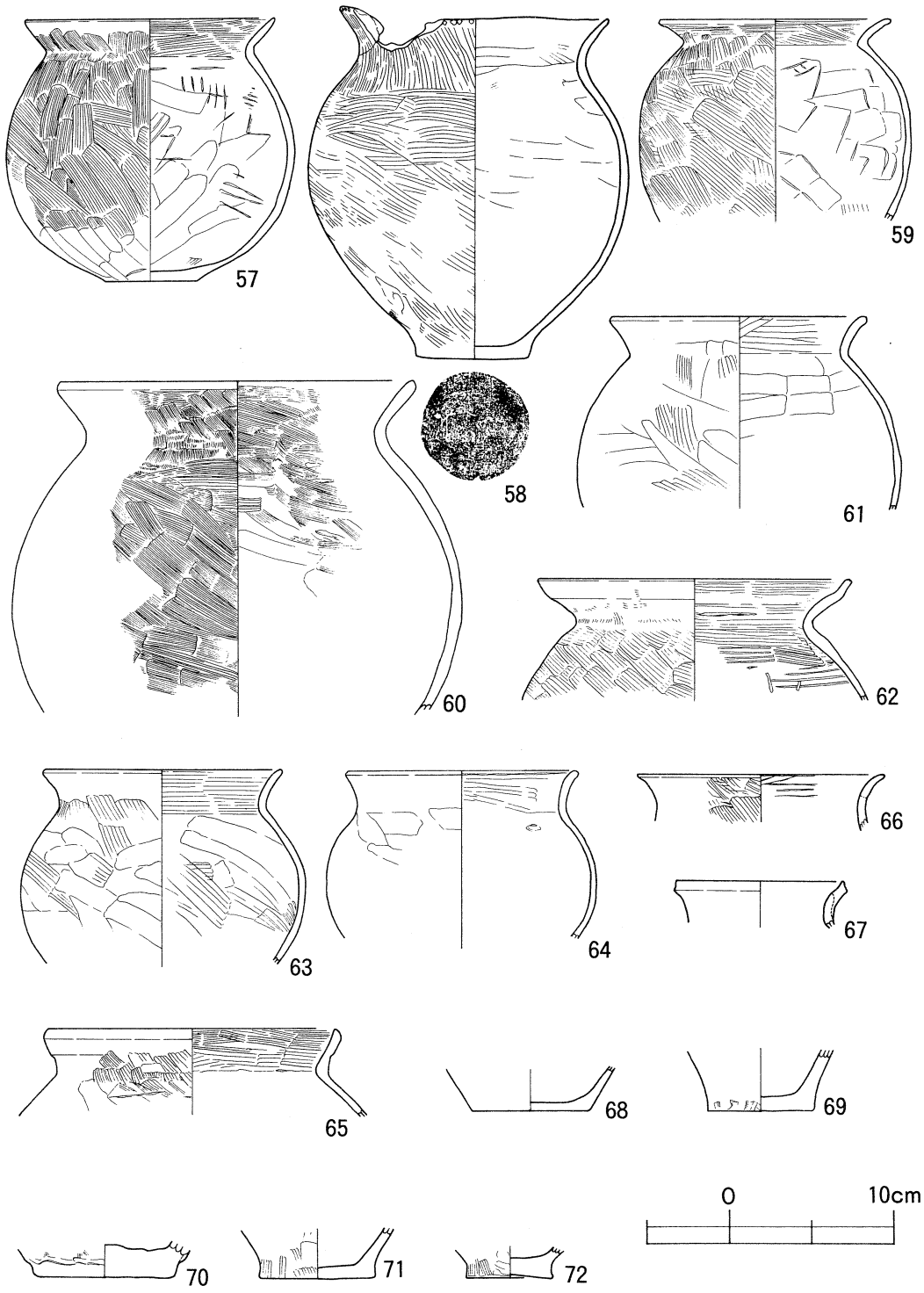
第76図　4号周溝墓出土遺物（1/4）



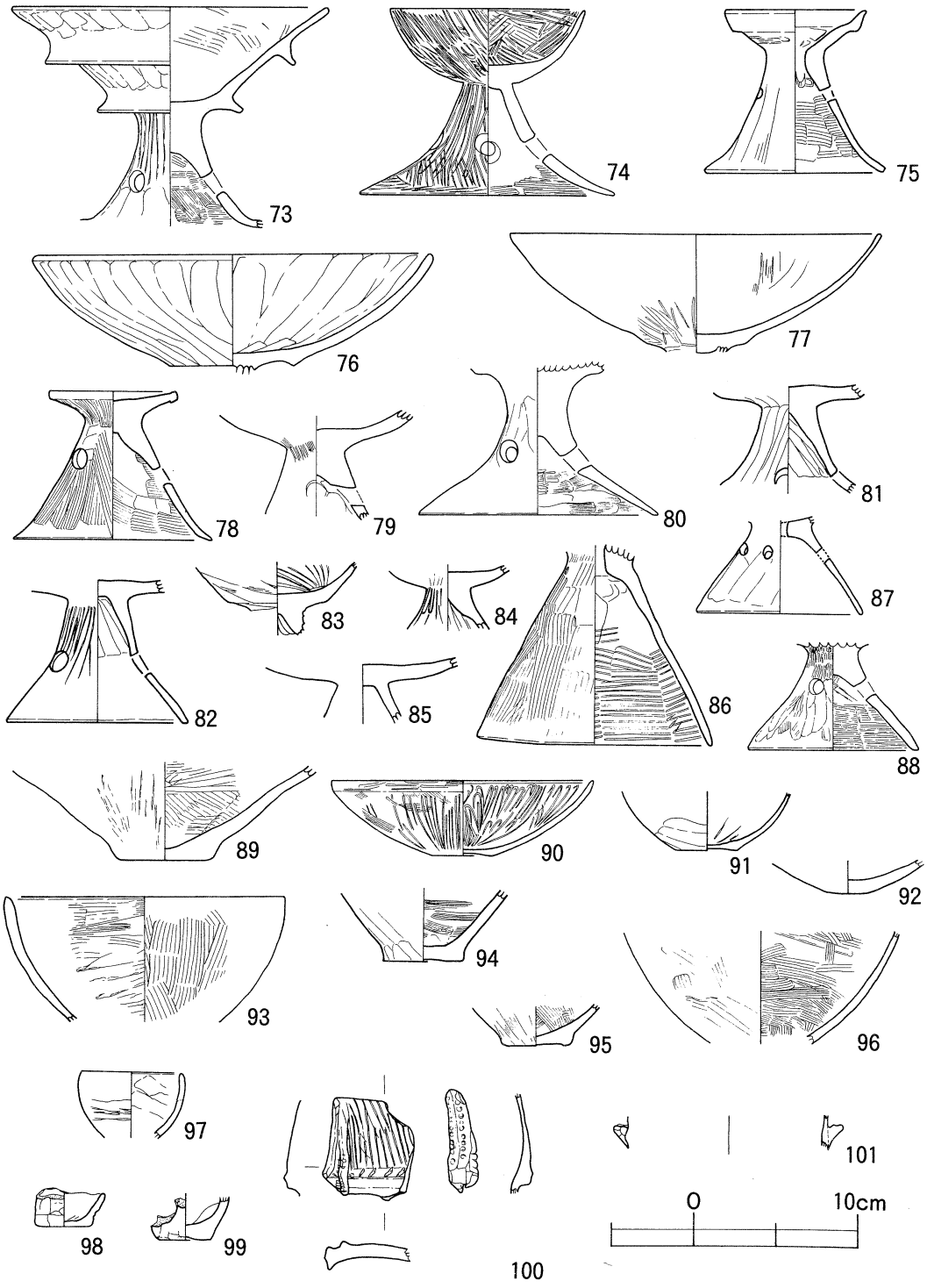
第77図　４号周溝墓出土遺物（1/4）



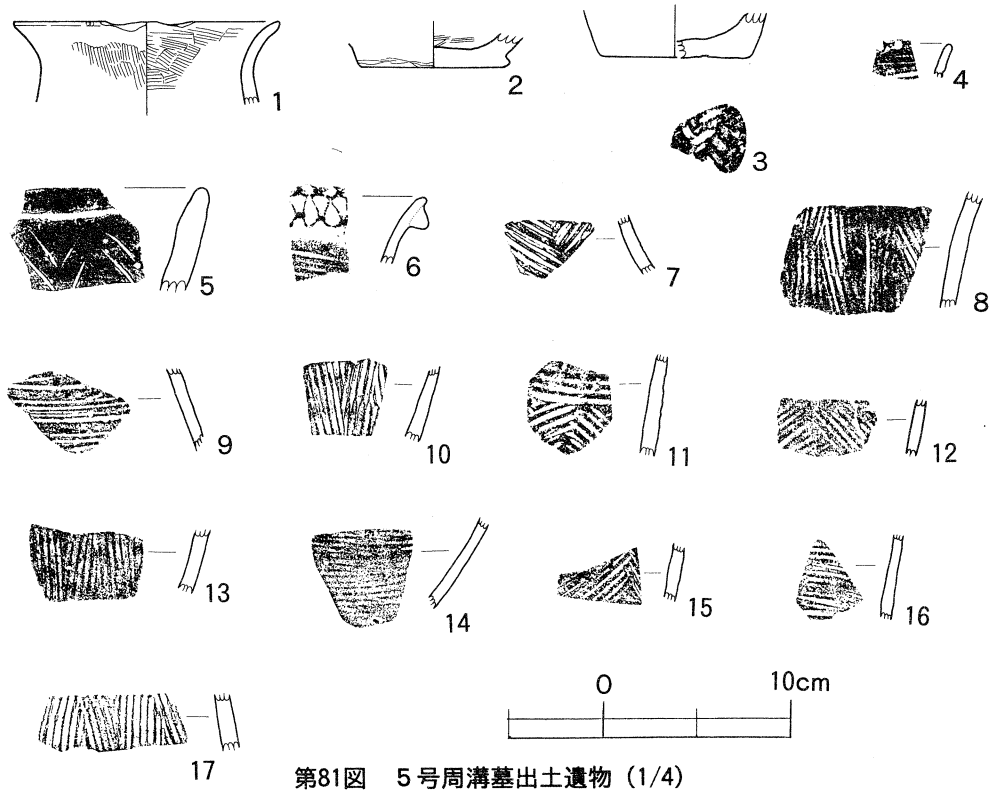
第78図　４号周溝墓出土遺物（1/4）



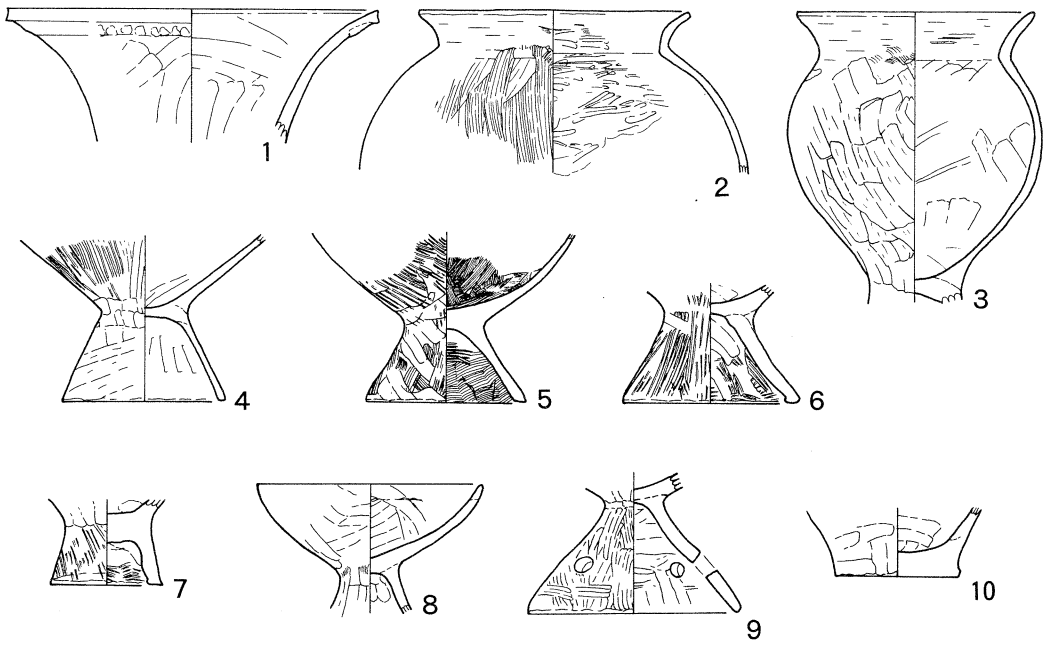
第79図　４号周溝墓出土遺物（1/4）



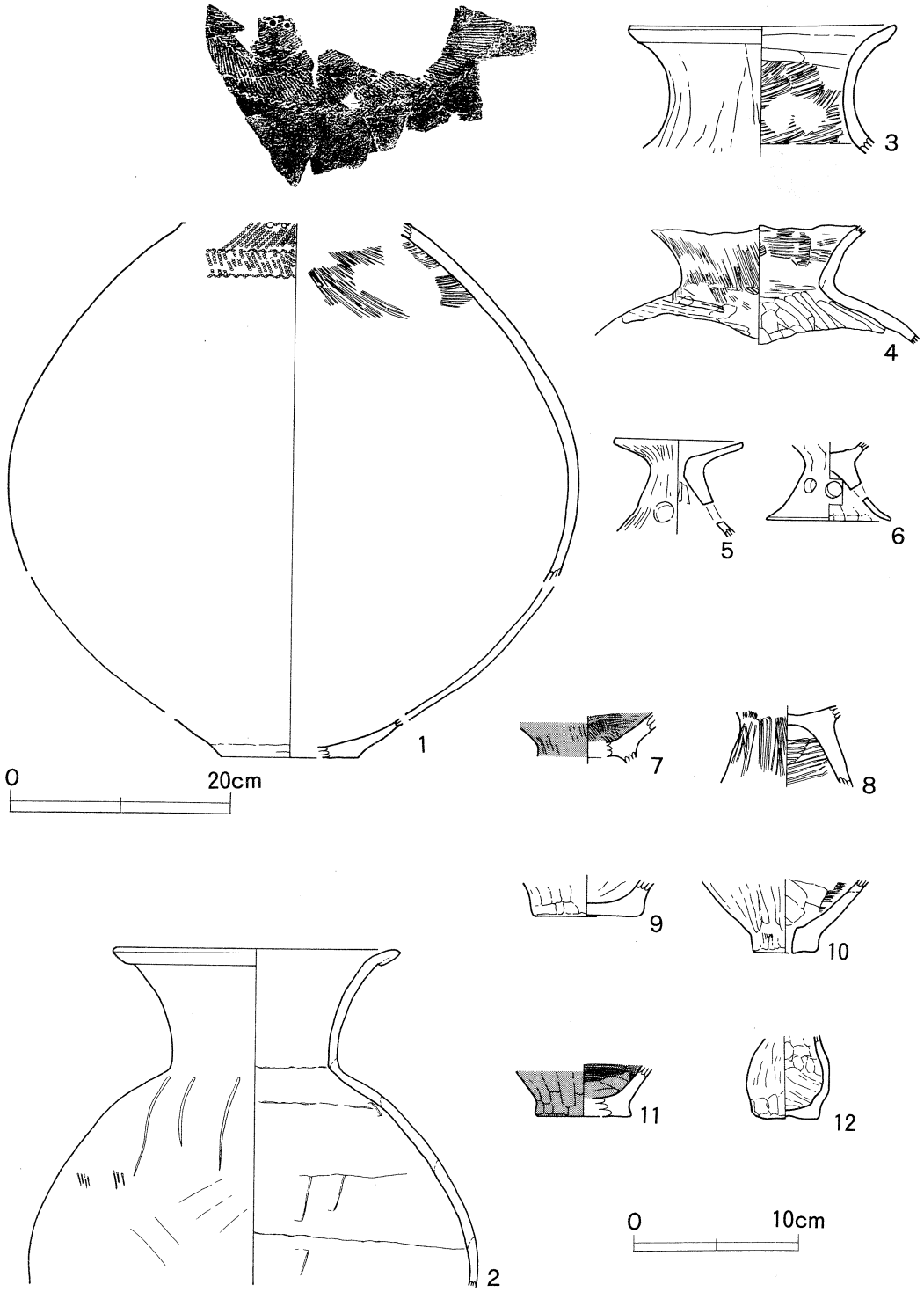
第80図　４号周溝墓出土遺物（1/4）



第81図　５号周溝墓出土遺物（1/4）



第82図　６号周溝墓出土遺物（1/4）



第83図　７号周溝墓出土遺物（1/4, 1/6）

〈7号溝出土遺物〉（第86図）

（単位 cm）

番号	器種	法量等／胎土／色調 整形・特徴・その他
1	甕	口径11.0 口縁部片／白・黒色粒子、雲母を含み密／にぶい黄橙色 内面－刷毛目、ヘラ撫で。外面－刷毛目、口縁部撫で　刻み口縁
2	甕	口径16.4 口縁部～胴部片／赤・白・黒色粒子、雲母、小礫を含み粗い／にぶい黄橙色 内面－ヘラ撫で。外面－刷毛目後撫で
3	甕	口径14.0 口縁部～胴部片／赤・白・黒色粒子、雲母を含み密／内面－明黄褐色。外面－橙色 内面－撫で、ヘラ撫で。外面－刷毛目後撫で
4	甕	口径15.4 口縁部～胴部片／白・黒色粒子、雲母、小礫を含み粗い／にぶい黄橙色 内面－口縁部横撫で、刷毛目後撫で。外面－口縁部横撫で、刷毛目
5	甕	口径22.0 口縁部片／赤・白・黒色粒子、雲母、小礫を含み密／にぶい黄橙色 内面－刷毛目。外面－刷毛目、刻み口縁かなり摩滅している
6	小型甕	口径8.0 口縁部～胴部片／赤・白・黒色粒子、雲母を含み密／にぶい黄橙色 内面－指撫で。外面－刷毛目撫で、剝落が多い
7	台付甕	底径9.0 脚台部片／白・黒色粒子、雲母を含み密／橙色 内面－ヘラ撫で。外面－刷毛目、ヘラ撫で、剝落が多い
8	高坏	口径9.6 口縁部～体部片／赤・白・黒色粒子、雲母を含み密／橙色 内面－横撫で、磨き。外面－撫で
9	高坏	坏体部下半～脚上部片／赤・白・黒色粒子、雲母を含み粗い／浅黄橙色 内面－刷毛目後撫で。外面－刷毛目後撫で
10	器台	脚部片／赤・白・黒色粒子、雲母を含み粗い／橙色 内面－ヘラ撫で。外面－ヘラ撫で 穿孔が４ケ所？に施されている
11	台付甕	底径9.0 脚台部／赤・白・黒色粒子、雲母を含み密／明黄褐色 内面－撫で。外面－刷毛目後撫で
12	台付甕	脚台部片／赤・白・黒色粒子、雲母を含み粗い／にぶい黄橙色 内面－撫で。外面－刷毛目
13	台付甕	脚台部片／赤・白・黒色粒子、雲母を含み密／明黄褐色 内面－指頭痕。外面－刷毛目後部分的に撫で
14	鉢？	底径4.6,1/5残／赤・白・黒色粒子、雲母を含み密／にぶい黄褐色 内面－指撫で。外面－ヘラ撫で
15	甑	底径3.8 底部片／赤・白・黒色粒子、雲母、小礫を含みやや粗い／橙色 内面－ヘラ撫で。外面－ヘラ削り、剝落多し
16	蓋	鈕部径4.4 鈕部片／赤・白・黒色粒子、雲母を含み密／橙色 内面－刷毛目、撫で。外面－刷毛目後撫で 中心部に穿孔あり
17	甕	口縁部片／白・黒色粒子、雲母、小礫を含み密／内面－にぶい黄橙、一部黒褐色。外面－黒褐色 内面－刷毛目。外面－刷毛目、撫で、刻み口縁

〈８号溝出土遺物〉（第87図）

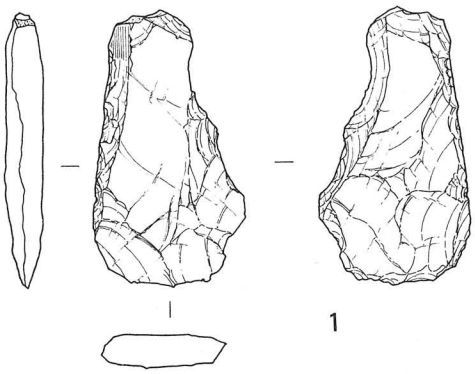
（単位 cm）

番号	器種	法量等／胎土／色調 整形・特徴・その他
1	壺？	底径5.0,1/3残／赤・白・黒色粒子、雲母、小礫を含み密／橙色
		内面－撫で。外面－刷毛目後撫で、剥離が著しい。底部はヘラ削り
2	壺	底径4.8,2/5残／赤・白・黒色粒子、雲母、小礫を含み密／内面－橙色。外面－明黄褐色
		内面－刷毛目後ヘラ磨き。外面－刷毛目後磨き。底部はヘラ削り
3	蓋	鈕部径5.2,1/5残／赤・白・黒色粒子、雲母、小礫を含み粗い／明黄褐色
		内面－指頭痕、刷毛目。外面－指頭痕、刷毛目後撫で、剥落多し
4	壺？	底径9.0 底部片／赤・白・黒色粒子、雲母、小礫を含み密／明褐色
		内面－刷毛目。外面－刷毛目、底部に木葉痕あり
5	甑	底部2.8 底部片／白・黒色粒子、雲母、小礫を含み密／にぶい黄橙色
		内面－ヘラ撫で。外面－刷毛目。底部ヘラ撫で

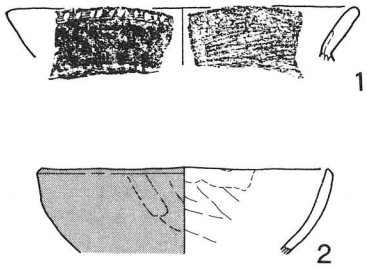
〈遺構外出土遺物〉（第88図）

（単位 cm）

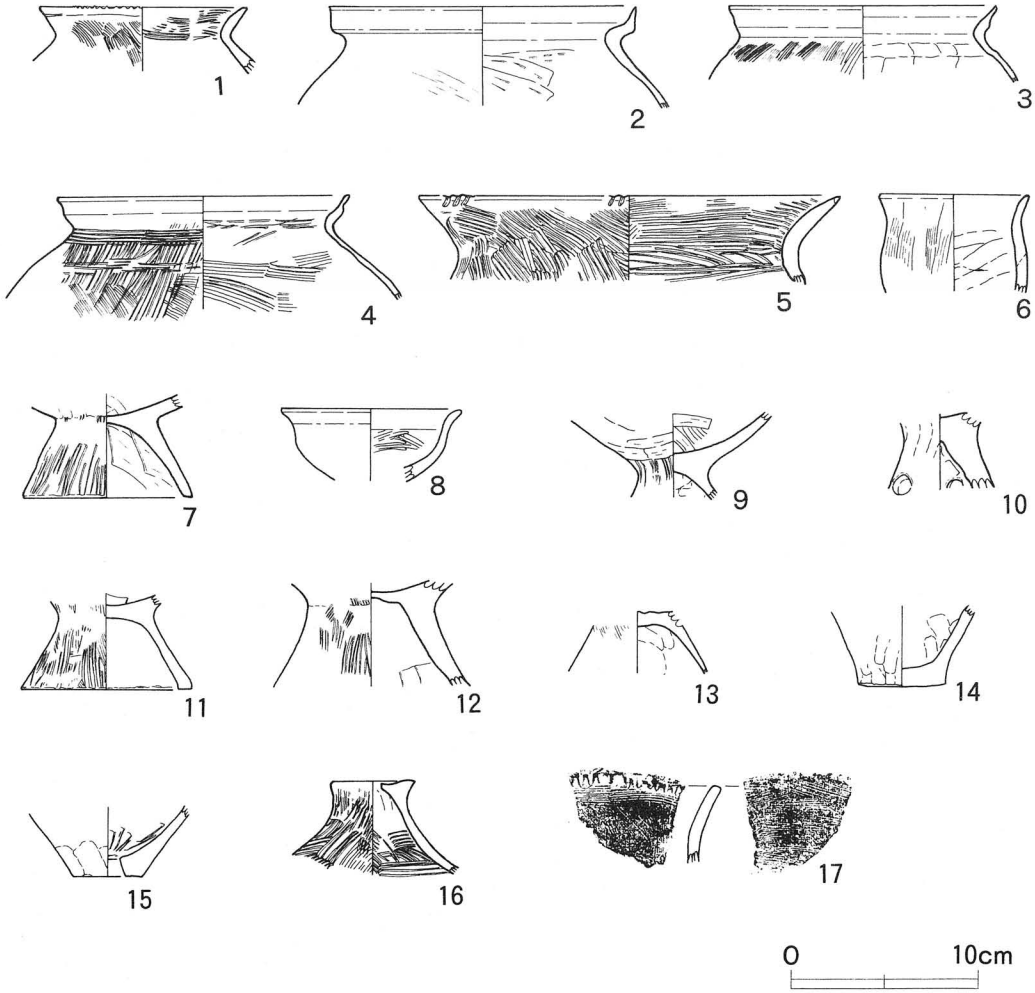
番号	器種	法量等／胎土／色調 整形・特徴・その他
1	壺	口径15.4 口縁部～胴部片／赤・白色粒子、長石、雲母、小礫を含みやや粗い／にぶい黄橙色、黒褐色
		内面－撫で。外面－口縁部撫で、指頭痕，頸部ヘラ撫で
2	壺	口縁部片／赤・白色粒子、長石、石英を含みやや粗い／にぶい橙色
		内面－刷毛目後撫で。外面－刷毛目、刷毛目後撫で
3	壺	頸部片／赤・白・黒色粒子、長石、雲母を含みやや密／にぶい黄橙色
		内面－刷毛目、撫で、指頭痕。外面－刷毛目
4	甕	口径18.8口縁部～胴部片/赤・黒色粒子、長石、雲母、小礫を含み粗い/内面－灰黄褐色。外面－にぶい黄橙色
		内面－横撫で。外面－口唇部刻み目、胴部刷毛整形後ヘラ撫で
5	高坏	坏体下部片／赤色粒子、長石を含み粗い／内面－明赤褐色。外面－明赤褐色、にぶい赤褐色
		内面－撫で。外面－撫で、整形後磨き 内、外面赤彩されている
6	甕？	底径5.4 底部2/3残／赤・白色粒子、長石、石英を含み密／橙色
		内面－刷毛目後撫で。外面－撫で、摩滅している
7	甕	口径17.6 口縁部～胴部片／砂粒を含む／橙色
		内外面－刷毛目
8	手捏土器	底径2.2,1/2残／白色粒子と少量の雲母を含む／にぶい褐色
		指頭による整形痕がみられる
9	土製品	高さ5.2 巾4.3 厚さ3.0／粗い白色粒子を含む／にぶい橙色
10	石器	石材　安山岩
		磨石
11	石器	巾4.5 厚さ1.3 石材　片岩？
		石斧



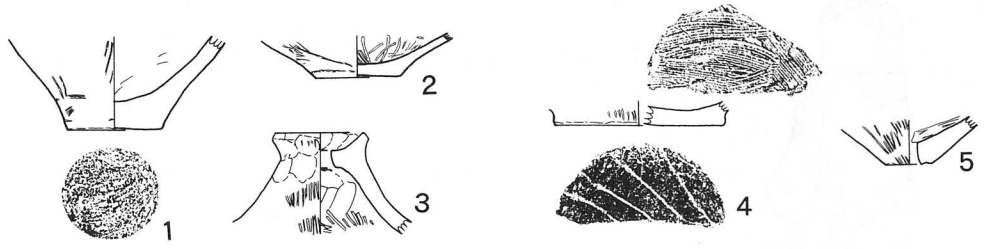
第84図　３号溝出土遺物（1/4）



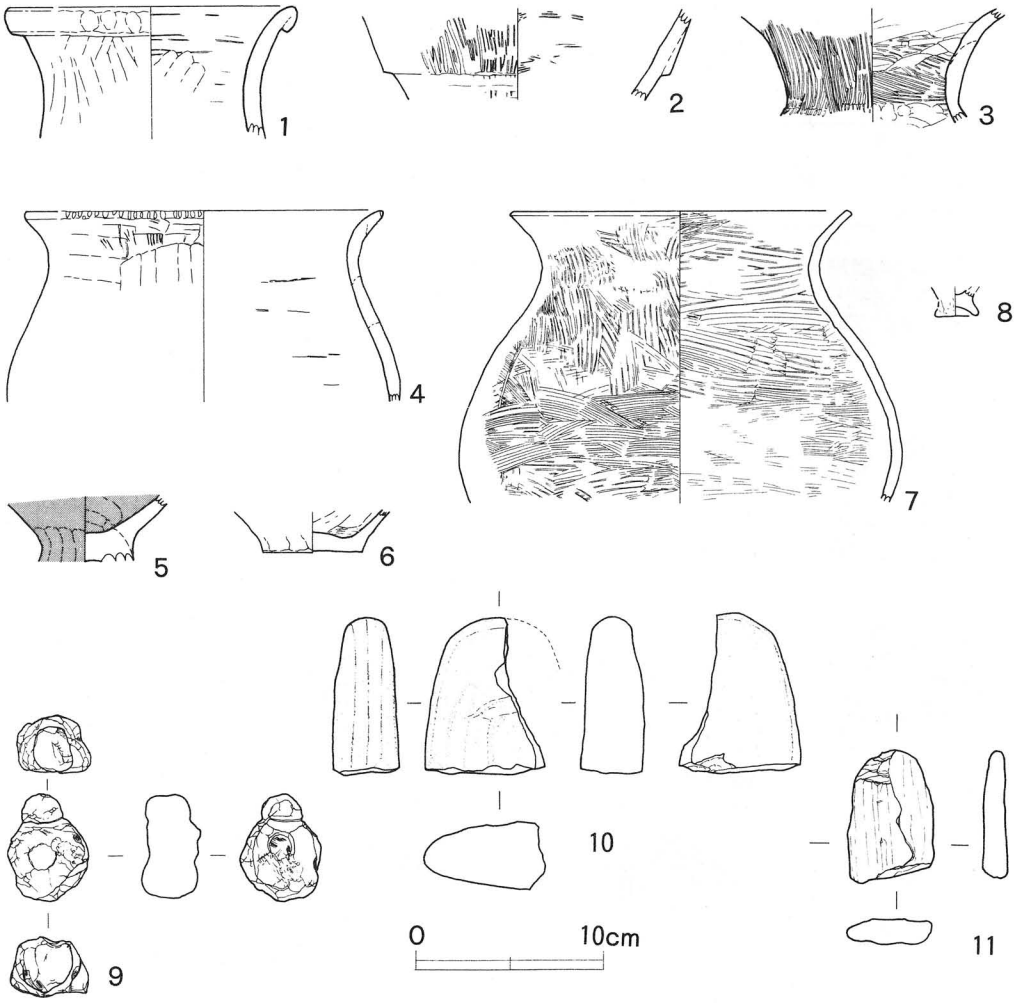
第85図　６号溝出土遺物（1/4）



第86図　７号溝出土遺物（1/4）



第87図　８号溝出土遺物（1/4）



第88図　遺構外出土遺物（1/4）

第Ⅴ章　考　　察

第１節　坂井南遺跡出土土器について

小　林　健　二

１．はじめに

坂井南遺跡は、これまで７次にわたる調査（『大原』を含む）で、古墳時代前期の集落・墓域がまとまって調査された貴重な遺跡であり、多くの良好な資料が発見され、当該期の本県を代表する遺跡となっている。

この度最終報告をまとめるにあたり、調査を担当された山下氏から出土土器に関する考察の機会を与えていただいた。ここではこれまでの調査を含めた形で出土土器の総括を行うことを目的とし、編年を試みたい。しかしそれはあくまでも「坂井南編年」として提示しておくものである。

２．山梨県域の古墳時代前期土器編年と坂井南遺跡

編年を提示する前に、これまでの本県の古墳時代前期土器編年と坂井南遺跡出土土器に関する研究について振り返っておきたい。

坂井南遺跡の土器が土器編年に登場するのは1984年のことであり、末木健・坂本美夫両氏によって、本県の古墳時代前期の土器編年が提示された[1]。この中で坂井南遺跡第１・２次調査[2]の資料が使われているが、資料的にはまだ少ないものの、当該期の土器の変遷が初めて時間軸の中に位置づけられた。しかしそれは、「Ｓ字甕＝五領式土器」という当時の編年観に捕らわれていたものであった。

1986年、中山誠二氏は末木・坂本編年を踏まえ、本県出土のＳ字甕の分類を大参分類[3]、安達分類[4]に対比させ、本県における新たな様式の設定を行い古墳出現期の土器様相を展開した[5]。そして小型精製器種が揃う「京原式」をもって古式土師器が成立するとし、それまでの関東に同調した編年とは違う、汎東日本的な位置づけを行ったことは高く評価できる。だがこのＳ字甕に関する認識が、後に筆者が大いに注目するところとなった。

この他、坂井南遺跡の土器は浜田晋介氏の論考にもＳ字甕を持つ遺跡として取り上げられている[6]。

この間、1985年には坂井南遺跡第３次調査が行われた。当該期の住居跡58軒が発見され、多くの資料が出土し、山下氏が土器編年を試みている[7]。その中でもやはりＳ字甕の型式変化を柱としているが、最も注目すべきはＳ字甕の初源的特徴を備えた赤塚次郎氏による分類Ａ類[8]の存在である[9]。折しも古墳出現期の土器研究が活発になり始めた頃で、これを契機として、その後坂井南遺跡の土器は該期の基準資料としてますます欠かすことの出来ない重要な存在となり、その後筆者も度々この遺跡の資料を取り上げることになる。

一方東海地域では、大参編年以来編年的研究は停滞していたが、1980年代後半からいくつかのシンポジウムが開催され[10]、周辺地域との併行関係がおおよそ捉えられるようになった。その反面、東日本各地での資料の激増は様々な問題点を露呈させ、東海系土器をめぐる研究はにわかに

活発化する。その間には、赤塚氏が1986年にＳ字甕の新たな分類を[11]、そして1990年には「廻間式土器」編年を発表している[12]。この中で坂井南遺跡、後田遺跡[13]出土のＳ字甕Ａ類が、第１次拡散期の中で波及することが述べられている[14]。

これにより、東日本の土器編年には「欠山式」・「元屋敷式」に代わって、「廻間式土器」が広く浸透していった。

ところで筆者は、Ｓ字甕の型式変化について「その変化が大和や東海地域、さらに上野地域などと大まかに軌を一にしている」という中山氏の指摘に対し、在地化し変容したものと大参分類、安達分類に対比させることに疑問を感じ、Ｓ字甕の詳細な検討が必要と考えた。その前提として、赤塚氏が濃尾平野のＳ字甕にＡ系統、上野・駿河のものにはＢ系統という型式変化の違いを明らかにしていたことが大きく影響しているが[15]、さらに加納俊介氏は、「地方編年の連結にＳ字甕が果たす役割が、当初期待されたようなものではけっしてありえないことだけは確かなようだ。」[16]とも述べていたのである。そして筆者は周辺地域との比較、分布の状況、淵源地である東海地域との対比、波及ルートなどを交えて検証し[17]、別稿では編年を試みた[18]。しかし、型式の細分ばかりに終始してしまい、その後の「新潟シンポ編年」の甲斐編年[19]、「庄内式土器研究会」の発表[20]を含め、これらの整合性がつかなくなってしまった。これらを打開するためには、編年の基軸となる東海系土器、特にＳ字甕の再検討が今後の大きな課題であろう。

３．出土土器の変遷

このように坂井南遺跡出土土器は、本県の土器編年の中でも占めるウエイトは大きく、改めて時間的な位置づけを行うことの意義はきわめて大きいものと思われる。そこでまず本遺跡の住居址出土土器を用いて、第１次調査からの資料を交え変遷を見ていく（第89図）。なお、今回の報告以外の住居址には第何次調査かをつけることにする。

上述したように、本遺跡出土の土器群で古墳時代前期の編年をおおむねカバー出来るものと考えるが、型式の大まかな流れについては、山下氏が第３次調査報告の中で提示したⅠ期からⅢ期までの変遷は基本的に大きく変わるものではなく、これを踏襲する。しかし土器の分類については、東海、北陸などいくつかの地域に系譜をもつ外来系土器群が存在し、今後さらに検討が必要になるが、ここでは主要な器種による変遷を、一括性の高い資料を用いて行う。また合わせて新潟シンポ編年とも対比しながら見ていくことにする。併行関係については前述した赤塚氏の一連の研究成果に基づくものとし、濃尾平野の土器様式である廻間式土器編年・松河戸式土器編年[21]に、それぞれ対比させる。

【Ⅰ期以前】

坂井南編年ではこれまでには確認されておらず、新たに設定したものである。とはいえ資料は明確ではないが、今回住居の切り合いと平面形態から判断し、８号住居址出土の高杯(１)と23号住居址出土の複合口縁の壺(32)をあてておく。新潟シンポ編年の２ａ期にあたり、韮崎市では下横屋遺跡[22]、他に中巨摩郡櫛形町六科丘遺跡[23]、南巨摩郡増穂町平野遺跡[24]がここにあ

たる。

【Ⅰ　期】

これまで３次57号住居址が報告されていたが、今回切り合い関係から12号・19号住居址も考えられる。Ｓ字甕Ａ類新段階（２・３）の波及を大きな画期とした時期であり、Ｂ類に相当するもの（４）もあり、廻間Ⅰ式４段階からⅡ式１段階にかけての第１次拡散期に相当する。椀形高杯(10)も東海系とみられ、９は小型高杯とみられる。直口縁の壺(35)についても、新しい器種とみられるが、系譜は不明である。一方では２ａ期からの在来の器種も引き続き存在する（５～８・33・34・36～38）。７・８は平底甕の可能性があり、後田遺跡でも同様の共伴が認められる。

新潟シンポ編年２ｂ期にあたり、Ｓ字甕Ａ類が近年急増している。東八代郡中道町米倉山Ｂ遺跡８号住居址では良好な資料が出土しており[25]、中巨摩郡櫛形町村前東Ａ遺跡では、本遺跡同様２ａ期から５期にかけての住居址が多数調査され、Ａ類新段階をはじめとして、パレススタイル壺（以下パレス壺）などがみられるらしい[26]。さらに中巨摩郡八田村大塚遺跡では古墳時代の住居址６軒が発見され、やはり多数の東海系土器が出土している。Ｓ字甕Ａ類新段階、有段高杯、頸部突帯と体部に櫛描文を施した加飾広口壺[27]、ヒサゴ壺を含む良好な一括資料が出土している。

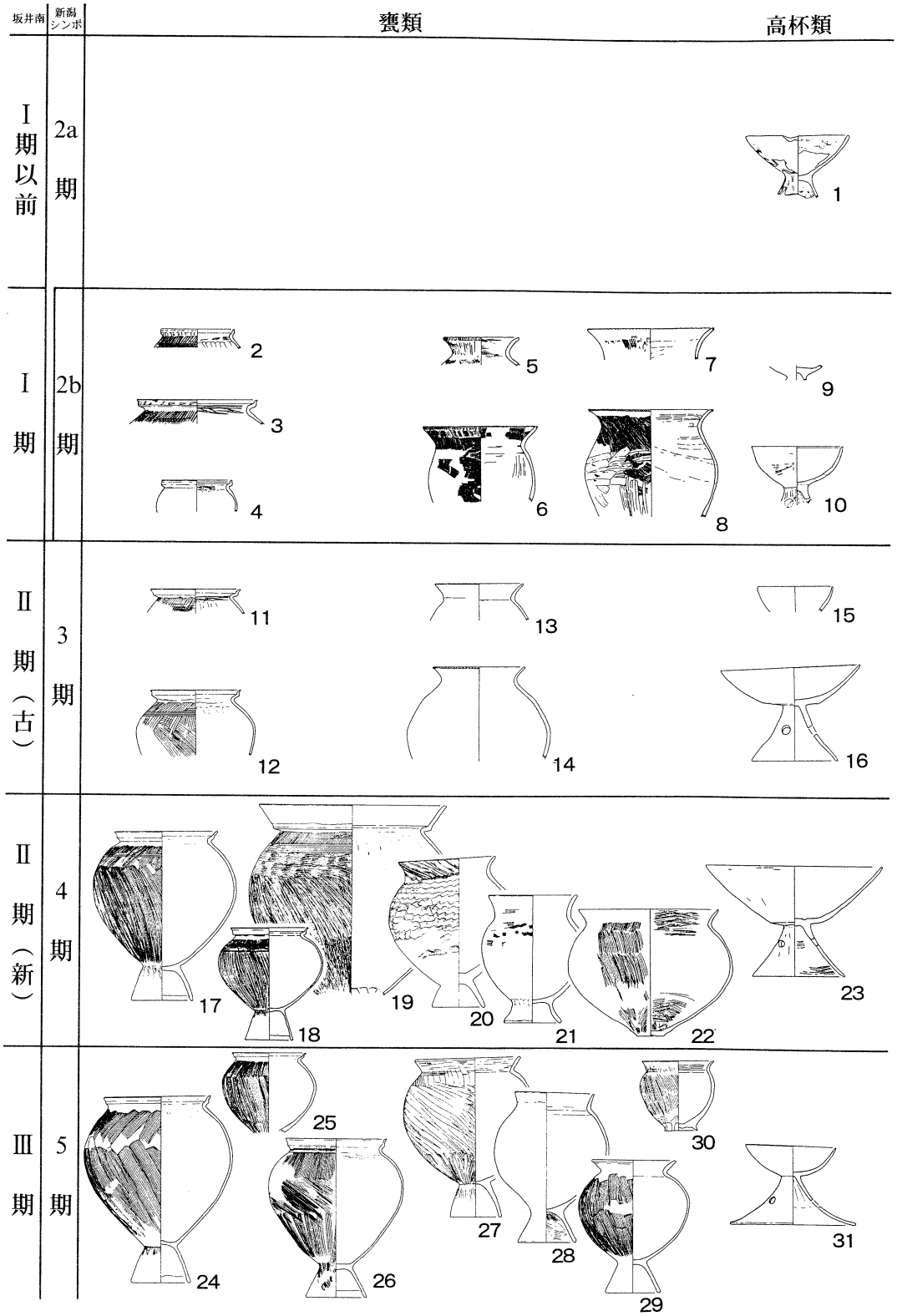
【Ⅱ　期】

新潟シンポ編年３期と４期に対比できる。Ｓ字甕のＢ類・Ｃ類に相当する型式から新旧に分けられ、古段階が３期に、新段階が４期にあてられる。

古段階はＳ字甕Ｂ類中段階(11・12)をはじめとする廻間Ⅱ式２・３段階に併行し、北陸系土器の波及が増加してくるのもこの段階である。しかし小型器台(41)・小型高杯(15)についてはⅠ期から散見出来るが少なく、本遺跡ではこれまでの調査を通じても、古段階とした３次19号住居址以外に良好な一括資料に恵まれていない[28]。県内でもほとんど確認できず、次の新段階との画期はなかなか難しい。その意味では、山下氏が行った編年は妥当なものといえる。

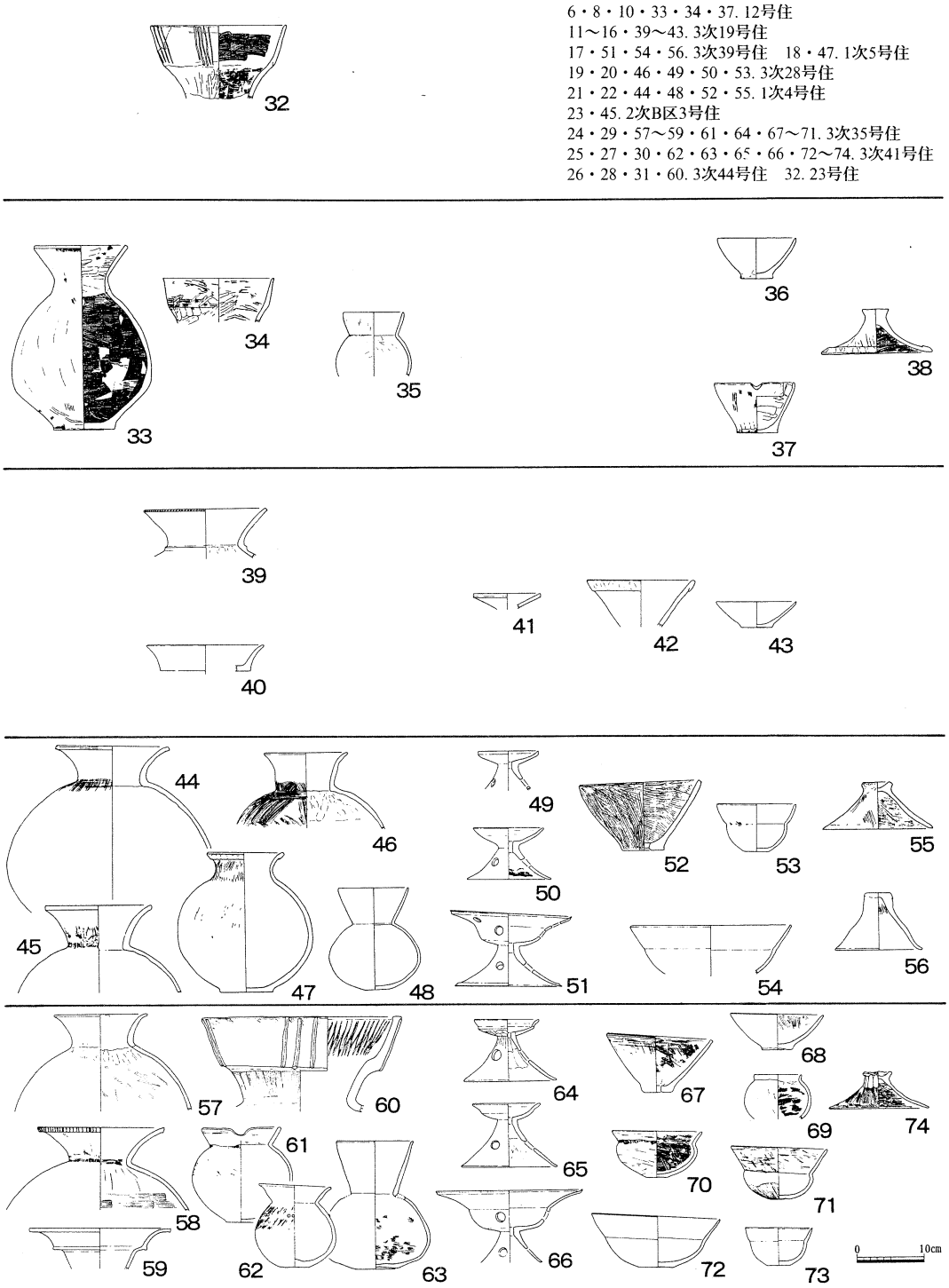
新段階は１次４号・５号住居址、２次Ｂ区３号住居址、３次28号・39号住居址をあてる。Ｓ字甕Ｂ類新段階・Ｃ類古段階に併行し、山陰系口縁をもつもの(19)もある。杯部が大きく外傾し脚部が開く有段高杯(23)を含む廻間Ⅱ式４段階からⅢ式１段階にかけての第２次拡散期にあたる。Ⅰ期・Ⅱ期古段階と波及してきたＳ字甕が甲府盆地に広く定着し始める時期であり、その一方でＳ字甕もオリジナルのものは少なくなり、独自の変化がかなり顕著になり始める。17は頸部の窄まりが小さく、口縁部も直立気味である。しかしＳ字甕以外の台付甕(20～21)も次のⅢ期まで存続し、平底甕も形態を変えながら残るようである(22)。壺の種類も増え(44～48)、小型器台(49・50)も普遍的に存在するようになる。口縁部や杯部に孔を穿ち、口縁部が強く外反する器台(51)は本県において多く見られる形態である。

この他韮崎市では久保屋敷遺跡１号住居址出土土器[29]が知られている。これについてはⅡ期


坂井南
新潟シンポ
甕類
高杯類
I期以前
2a期
I期
2b期
II期（古）
3期
II期（新）
4期
III期
5期
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31

壺類　　器台類　　鉢類・蓋

1. 8号住　2・7. 19号住
3～5・9・35・36・38. 3次57号住
6・8・10・33・34・37. 12号住
11～16・39～43. 3次19号住
17・51・54・56. 3次39号住　18・47. 1次5号住
19・20・46・49・50・53. 3次28号住
21・22・44・48・52・55. 1次4号住
23・45. 2次B区3号住
24・29・57～59・61・64・67～71. 3次35号住
25・27・30・62・63・65・66・72～74. 3次41号住
26・28・31・60. 3次44号住　32. 23号住



第89図　坂井南遺跡住居址出土土器主要器種変遷図（1／10）

古段階、新潟シンポ編年３期としていたものであるが、第２次拡散期にあたることを重視し、「庄内式土器研究会」以降は４期の基準資料とした。

【Ⅲ　期】

新潟シンポ編年の５期にあたり、３次35号・41号・44号住居址を基準資料とする。Ｓ字甕は肩部外面のヨコハケを消失し、広く定着する。口縁部の屈曲は不明瞭で、肩が張るものから次第に長胴化するものになる。頸部から大きく開く二重口縁壺(59)が散見でき、大廓系の大型壺(60)もこの時期まで残る。そして口縁部が外反する小型器台は多く、小型鉢はバリエーションに富むが、小型丸底鉢は存在しない。また屈折脚高杯も良好な資料が確認されていないが、東八代郡八代町伊ノ下遺跡[30]　塩山市西田遺跡Ｂ区２号住居址[31]では出土例があり、東海系に代わって新たな器種が出現する。これらは廻間Ⅲ式４段階から松河戸Ⅰ式１段階に併行する。

この他、今回の調査では方形周溝墓からも多くの土器が出土しているが、住居址との切り合いから築造時期はⅠ期からⅡ期のものであろう。特に多くの土器が出土した２号・４号墓では北陸系の存在がかなり目立ち(第73図14、第76図16・17、第78図48～56、第79図67)、注目される[32]。大原１号墓[33]出土のパレス壺は口縁部の垂下が消失したもので、擬凹線文も少ない。廻間Ⅱ式後半のものであり、Ⅱ期であろう。

４．Ⅰ期以前とⅠ期

以上のように、坂井南遺跡の土器編年を概観してきたが、重要なⅠ期以前とⅠ期の問題についてもう少し考えてみたい。

Ⅰ期以前とⅠ期は、新潟シンポ編年の２ａ期と２ｂ期にそれぞれ対比できるが、その違いは土器様相の違いであり、言い換えれば在来系土器をもつ集団(Ⅰ期以前・２ａ期)と外来系土器をもつ集団(Ⅰ期・２ｂ期)との違いである。住居の形態も、２ａ期までは小判形であったものが、２ｂ期以降は隅丸方形プランに変わる[34]。村前東Ａ遺跡では、東海系土器が主体となる住居があるらしい。

この様相について中山氏は、試案した弥生土器編年[35]６期の中で、駿河・西相模系と中部高地系が混在した様相を「Ａ相」とし、伊勢湾系の土器群を「Ｂ相」と説明している。６期Ａ相は新潟シンポ編年２ａ期、Ｂ相は２ｂ期にほぼ相当する。そしてＡ相の後半期にＢ相が流入し、一定期間土器様相を異にした集団が並存したとし、大様式圏の接触による現象であることを説き、当地域の大きな特徴としてきた。また筆者は東海系を「在来の集団」に対する新しい「外来の集団」と理解してきたが、実際に両者をはっきり分けられるかどうかは難しく、中部高地系平底甕と東海系Ｓ字甕が混在している後田遺跡Ｃ区５号住居址の理解が苦しくなる。さらに駿河・西相模系、中部高地系土器が「在地」・「在来」の土器なのかということも考えなければならない。

本県では近年新資料が増えつつあり、Ｓ字甕については、波及の当初から型式変化の方向が東

海のものとは異なり、きわめて短期間のうちに定着していることから、筆者はこれを「甲斐型」として変化していくものと考えている。この時期は「古墳出現期の全国的な土器交流の始まり」[36]の段階であり、強いインパクトをもった東海系の拡散があり、本県も大きな影響を受けている。この時期に２つの大きな流れが存在したことは確かであるが、それがはたして一定期間並存していたと考えられるかどうか、今後の出土資料の動向によっては状況は変わるかもしれない。そうなると中山氏の言うような「これら２つの系譜を持つ土器群は、次期になってようやく一体となって、甲斐の古式土師器の地域色を作り出していく。」ことも、考え直す必要があるかもしれない。

以上を考慮し、筆者は２ａ期と２ｂ期の間に弥生土器と土師器の境界を置くが、現状ではやはりこの２つの様相を、当該期の特徴として理解しておきたい。いずれにしても、２ａ期と２ｂ期の在り方、さらには歴史的背景については、今後さらに検討していかなければならない重要な問題である。

５．おわりに

坂井南遺跡出土の土器編年を通して、弥生時代から古墳時代への画期の問題に触れてみた。再三述べてきたように、本県では当該期の資料が確実に増えており、今後ますます目が離せない状況になってきた。今後は整理作業が進む村前東Ａ遺跡・大塚遺跡との比較によって、さらに詳細な編年の構築が可能となろう。

註

（１）　末木　健・坂本美夫　1984「Ⅸ山梨県」『古墳時代土器の研究』古墳時代土器研究会

（２）　山下孝司　1984『坂井南遺跡』韮崎市教育委員会

（３）　大参義一　1968「弥生式土器から古式土師器へ－東海地方西部の場合－」『名古屋大学文学部研究論集』ＸＬＶII

（４）　安達厚三・木下正史　1974「飛鳥地域の古式土師器」『考古学雑誌』第60巻第２号

（５）　中山誠二　1986「甲府盆地における古墳出現期の土器様相」『山梨考古学論集』Ｉ　山梨県考古学協会

（６）　浜田晋介　1988「弥生時代後期の甲府盆地－異系統土器の相互交流とその様相－」『山梨県考古学協会誌』第２号

（７）　山下孝司　1988『坂井南』韮崎市教育委員会

（８）　赤塚次郎　1986「『Ｓ字甕』覚書'85」『年報　昭和60年度』(財)愛知県埋蔵文化財センター

（９）　中山氏は三珠町一城林遺跡出土の甕を大参分類ａ類・安達分類Ｉ類としたが、実測図から見る限りはＳ字甕ではないようである。

(10)　第３回東海埋蔵文化財研究会　1986『欠山式土器とその前後』

(10) 第３回東海埋蔵文化財研究会　1986『欠山式土器とその前後』
第８回東海埋蔵文化財研究会　1991『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器』
(11) 註８に同じ。
(12) 赤塚次郎　1990「考察」『廻間遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター
(13) 山下孝司　1989『後田遺跡』韮崎市教育委員会
(14) 赤塚次郎　1991「Ｓ字甕の移動」『歴博フォーラム　邪馬台国時代の東日本』国立歴史民俗博物館編
(15) 赤塚次郎　1986「『Ｓ字甕』について」『欠山式土器とその前後』
(16) 加納俊介　1990「Ｓ字甕とＳ字甕もどき」『マージナル』№10　愛知考古学談話会
(17) 小林健二　1991「甲府盆地におけるＳ字甕の定着について」『古文化談叢』第26集　九州古文化研究会
(18) 小林健二　1993「外来系から在来系へ－甲斐のＳ字甕の変遷－」『研究紀要』９　山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
(19) 小林健二　1993「山梨県域の土器様相」『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会
(20) 小林健二　1994ａ「甲府盆地の外来系土器」『庄内式土器研究』Ⅴ　庄内式土器研究会
小林健二　1994ｂ「甲斐における庄内式併行期の土器編年」『庄内式土器研究』Ⅶ　庄内式土器研究会
(21) 赤塚次郎　1994「松河戸様式の設定」『松河戸遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター
(22) 山下孝司　1991『下横屋遺跡』韮崎市教育委員会
(23) 関根孝夫他　1985『六科丘遺跡』櫛形町教育委員会
(24) 保坂康夫　1993『平野遺跡』山梨県教育委員会
(25) 註18および
小林健二　1993「弥生土器・古式土師器について」『東山北遺跡』山梨県教育委員会
(26) 中山誠二他　1994『村前東Ａ遺跡概報１』山梨県教育委員会
中山誠二他　1995『村前東Ａ遺跡概報２』山梨県教育委員会
三田村美彦他　1996『村前東Ａ遺跡概報３』山梨県教育委員会
(27) 赤塚次郎　1995「壺を加飾する」『考古学フォーラム』７　考古学フォーラム
(28) この時期の基準資料としていた坂井南遺跡55号住居跡は、出土状況から一括資料とはいえないようである。
(29) 米田明訓・保坂康夫　1984『久保屋敷遺跡』山梨県教育委員会
(30) 渡辺礼一　1984「Ⅲ侭ノ下遺跡」『石橋条里制遺構・蔵福遺跡・侭ノ下遺跡』山梨県教育委員会
(31) 山崎金夫他　1978『西田遺跡－第１次発掘調査報告書－』山梨県教育委員会
(32) この他、幅の広い口縁部をもつ器台（第68図５・６、第80図75）も北陸系であろうか。
(33) 山下孝司　1995『坂井南（大原）遺跡』韮崎市教育委員会

(34)　中山誠二　1993「Ⅲ山梨県域における集落・墳墓の概要」『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会

(35)　中山誠二　1993「甲斐弥生土器編年の現状と課題－時間軸の設定－」『研究紀要』9　山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

(36)　加納俊介　1991「土師器の編年：東海」『古墳時代の研究6　土師器と須恵器』雄山閣出版

第２節　坂井南集落－藤井平から七里岩台地へ－

伊　藤　正　彦

１．はじめに

坂井南遺跡の調査は現在までに７次を数え、延べ調査面積約27,400㎡となる。古墳時代前期住居址98軒、方形周溝墓12基が検出され、住居址群と墓域がセットとなり古墳時代前期社会を解明する上で良好な資料となり得るものである。遺跡は韮崎市中央部に位置する韮崎台地（通称、七里岩台地）上に立地する。塩川・釜無川の両河川に挟まれた細長い台地であり、台地上には久保（窪）・沢と呼ばれる地名もあり、湧水が豊かで古くから集落が発達している。眼下の塩川右岸河岸段丘上には藤井平と呼ばれる平坦で長大な氾濫源が広がる。古く「藤井五千石」と称されたほど稲作が盛んで肥沃な穀倉地帯であるが、地形観察からは自然堤防状の微高地が所々に発達し、その間を網の目のように河川が流下する地形であり、度重なる氾濫によって現在の平坦地が形成されたことが判明している。調査により明らかとなった弥生時代後期から古墳時代前期の遺跡は前述した藤井平及び韮崎台地上に主として展開している。

２．遺跡の消長

市内でこれまでに調査により明らかとなった弥生時代後期及び古墳時代前期の遺跡を確認しておく。なお、時間軸は中山誠二・小林健二氏の業績に依った。

No.	遺跡名	弥生５期	弥生６期／古墳２期	古墳３期	古墳４期	古墳５期	遺跡立地	検出遺構
1	北下条遺跡	■					藤井平	住居址１軒
2	中田小学校遺跡		■ ▒ ▒ ▒				藤井平	住居址３軒
3	堂の前遺跡	■					藤井平	住居址４軒
4	下横屋遺跡	■	▒ ▒ ▒				藤井平	住居址８軒
5	久保屋敷遺跡				■		釜無川右岸河岸段丘上	住居址４軒
6	後田遺跡		■				藤井平	住居址２軒
7	立石遺跡					■	藤井平	住居址2軒 掘建柱建物址1棟
8	伊藤窪第2遺跡					■	韮崎台地	住居址２軒
9	宿尻遺跡					■	韮崎台地	住居址３軒
10	坂井南遺跡		■	■	■	■	韮崎台地	住居址98軒 周溝墓12基

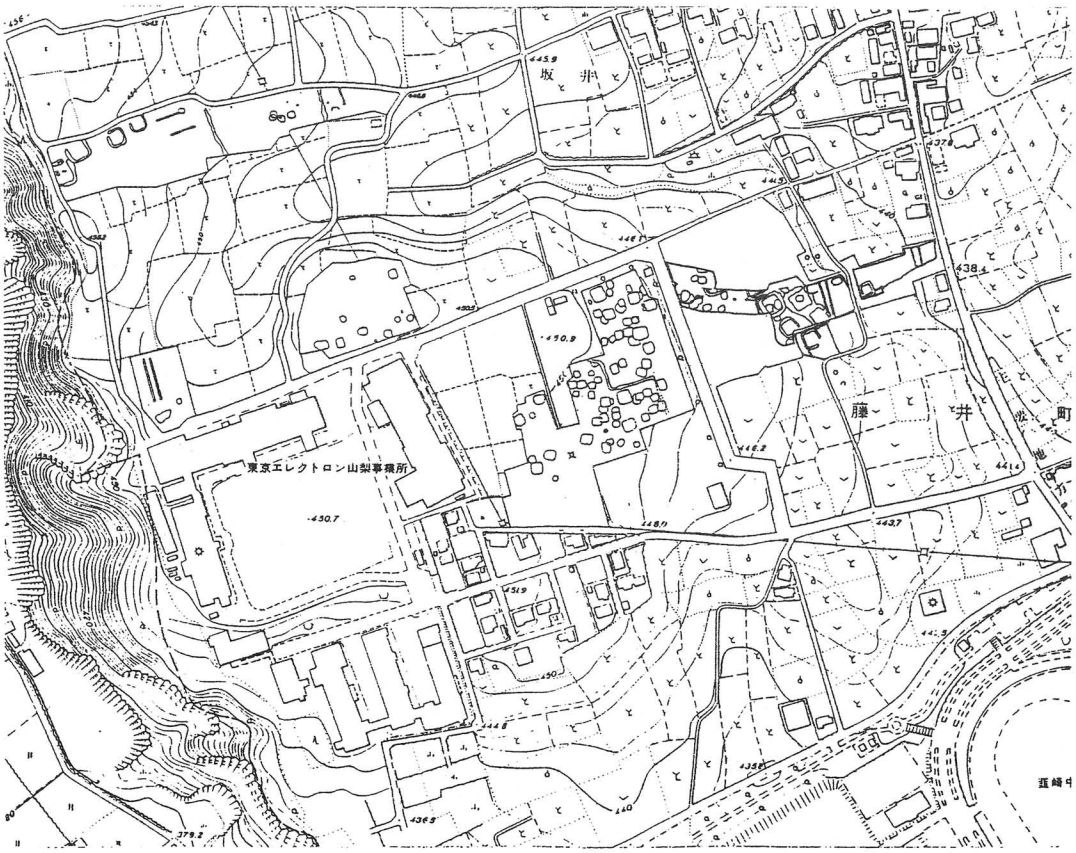
弥生時代後期、藤井平に存在した遺跡はそれ以降へ展開を見せず、一方、古墳時代２期にいたり坂井南遺跡が突如、韮崎台地上に出現する。以後、坂井南遺跡は古墳時代前期を通じて安定した経営が認められ、藤井平から台地上に生活の中心舞台を移したかのような状況となる。その他、釜無川右岸地域では久保屋敷遺跡のみで状況が摑みにくいが、坂井南遺跡で住居址も増え最も安定する時期にその存在が確認できる。坂井南遺跡で住居址が減少し、集落として衰退に向かう頃、

伊藤窪第２・宿尻遺跡が台地上に出現し、藤井平では再び立石遺跡が出現する。古墳時代前期を通じて安定した経営が認められた坂井南遺跡の消長に合わせたように、市内各地に集落が拡散し始める。

市内では弥生時代後期から古墳時代前期を通じてほぼ連続して遺跡の存在が確認できる。古墳２期を画期として、現状では藤井平から韮崎台地上への立地変化が認められ、あたかも全人口が生活の中心舞台を移したかのような状況となる。ただこの変化が住居域の移動であり、生産基盤は依然として藤井平に置いていたと考えられる。

３．方形周溝墓

1992年の第４次調査時には、それまで墓域は住居域と分離し、沢を挟んだ北側微高地上に展開するものと考えられてきたが、新たに集落の東側から方形周溝墓が５基検出された。その後、今日までその数を僅かに増やし、８基が確認されるに至った。



第90図　坂井南遺跡全体図（１／5000）

住居址との重複関係が多く認められており、出土土器からは両者の時間差はほとんど認められない。墓域設定後に居住域としての利用は考えられないため、墓域設定より前に住居址は存在したものであろう。そこには当初からの計画的な墓域・居住区の設定は窺われない。新たに確認された方形周溝墓は２列程度の列構成をとり、集落を中心として、その周辺に配列するようである。周溝を共有し、または近接して列構成をとりながら、系列的な配置が認められる。血縁的紐帯の強い集団によって累世的に造墓活動が行われたことが窺われる。

一方で従来、坂井南集落の墓域だと考えられていた北側の方形周溝墓を沢を挟んだ微高地上に占地する異なる集団の墓群と解釈する余地が生じる。時を同じく台地上に移動した藤井平の集団は、あたかも坂井南遺跡に集束したかの様相を示しつつも、その実相は集団ごと台地上に占地し、それぞれの墓域を営んでいたことになる。

４．小　結

古墳時代に至り突如とした、台地上への集落の移動には様々な要因が考えられよう。古墳出現期の人と物の動きを大きく評価し、外的な要因を重視する考え方。一方で、水田の開発と水利・灌漑など大規模な協業を通じて結束した同一流域における広範囲な集落の結びつき、更には方形周溝墓出現に見られる、他の一般構成員から乖離しつつある首長とその家族の存在など内的かつ地域的な主体性を重視する考えもありえよう。当時の不安定な自然環境と血縁的紐帯に基づく労働力編成から集落は生産域と近接し、個別分散化して存在していたものと考えられる。台地上において沢を挟んだ北側微高地上に想定した異なる集団の存在など、協業を通じて結束しつつも台地上にあって、依然として集団ごとに占地していた様相が窺える。上位集団による統一といった単純な図式ではなく、内的・外的な要因によって坂井南集落は台地上に出現し、そして廃絶していったものであろう。

参考文献

１．小林健二1993ａ「山梨県域の土器様相」『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会

２．小林健二1993ｂ「外来系から在地系へ－甲斐のＳ字甕の変遷－」『研究紀要』９山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

３．小林健二1994ａ「甲府盆地の外来系土器」『庄内式土器研究』Ⅴ

４．小林健二1994ｂ「甲斐における庄内式併行期の土器編年」『庄内式土器研究』Ⅶ

５．中山誠二1987　「弥生時代終末における上の平遺跡の集落構造」『研究紀要』４山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

６．中山誠二1992　「甲斐の方形周溝墓と前期古墳」『シンポジウム西相模の三・四世紀方形周溝墓をめぐって』東海大学校地内遺跡調査団

７．中山誠二1993ａ「（II）集落」『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会

８．中山誠二1993ｂ「甲斐弥生土器編年の現状と課題－時間軸の設定－」『研究紀要』９山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

９．橋本博文1984　「甲府盆地の古墳時代における政治過程」『甲府盆地－その歴史と地域性－』地方史研究協議会編

第３節　山梨県韮崎市坂井南遺跡の東海系文化から

赤　塚　次　郎

１．はじめに

弥生時代後期から古墳時代初頭における土器研究は、今まさに新たな方向に進行しつつあるように思われる。それは土器様式をより詳細に、あるいは厳密に規定することによって、ある特定地域の文化の特徴を鮮明にするとともに、流動性を帯びた時間に位置していることを明らかにしていく点にある。人々の日常的な交流や小地域の文化は可動的な時空に存在し、その地域の歴史を育んできた。そして文化の波及は同様に波状的でもあるが、時には歴史的な命題性を帯びた巨大な大波であり、地域文化を飲み込むほどのものである場合もあった。特定のある地域の歴史を概観すると、そこには確かに歴史の基本軸ともいえるような通時的な、一定方向からの文化的な刺激の方向性が認められる。例えば「西からの影響」ということばに代表されるもので、畿内地域からの一方的な文化流入を想定する場合に代表される。しかしながら、時にそれらの動きと大きく異なる文化の波が多様な方向から押し寄せる場合もある。また、まったく異なる方向を志向する場合もある。それは瞬間的な出来事でもあろうが、その意味する問題を正しく評価する必要もある。なぜならばその大地に大きなキズ跡を刻むことがあるからだ。つまり各時代で影響や志向する方向が振れるのであり、必ずしも一定方向といった固定されたものではない。

恒常的に吹く文化の風と、瞬間的に吹き荒れる異風とが絡み合い、豊かな地域史を形作るのであり、この視点を見据えることにより魅力ある歴史像を読み取ることができる。

ここでは山梨県韮崎市坂井南遺跡の調査成果を踏まえて、こうした視点から東海系文化を評価してみたい。なおここでいう東海とは特に記述しない限りは伊勢湾沿岸地域を意味する。

２．甲斐地域の東海系文化

甲斐地域の東海系土器についてはすでに多くの研究成果が報告されている。それに基づけばおおむね以下のようにまとめることができよう。まず現象面では東海系土器の流入は米倉山Ｂ遺跡段階からと考えられており、その後に東海系土器は急速に甲斐盆地内に定着し、新たな土器様式が誕生することになる（小林1993）。米倉山Ｂ遺跡段階で認められるものは、東海地域での廻間Ｉ式４段階からII式１段階にかけてのものであろう。特にＳ字甕にはその特徴が顕著に認められる。甲斐地域の土器編年では２期の後半から３・４期にかけてこうした東海系の文物の定着現象が見られ、甲斐地域独自の土器様式を生み出していくものと思われる。甲斐の土器様式のモデルは、濃尾平野の土器様式である廻間II式前半期の土器様式を基本にしていることは明らかである。こうした東海系土器の参入は米倉山Ｂ遺跡の事例を参照すると、廻間Ｉ式末葉段階にはすでに始まっている可能性も考えられる。すると濃尾平野から東方への拡散の中で最も早くに影響が表面化した地域と考えられる。実はこれと同じような現象が今一つある。長野県中野盆地であり、それは七瀬遺跡の発掘調査成果の中にその一端を垣間見ることができる（赤塩1994）。西暦３世紀第２四半期の中、東海系文化がまず到達した地域は、東海道筋として甲斐に、東山道筋として中野盆地ということになろうか。

やがてその東海系土器をモデルに組み立てた土器様式は再び崩れはじめる。すなわち甲斐５期になると「畿内系」土器にその役割が変化するとの指摘がなされている。そこでいう畿内系とはおそらく屈折脚高杯や小型丸底土器・器台、さらに二重口縁壷などを意味するのであろうが、これらの多くは畿内地域から、あるいは畿内地域で生み出された土器形式であるかは甚だ疑問である。屈折脚高杯・小型丸底土器の型式的な変遷は未だ明確な系列的な研究がなされてはいないし、二重口縁壷には多様な型式が存在する。したがって現状では土器様式が大きく変化する点を強調するにとどめておいたほうがよかろう。４世紀末葉に全国的に影響を与えた第３の地域をも想定しておく必要がある。

ところでこうした東海系土器の定着期間以前はどうであろうか。弥生時代後期後半（庄内併行期とは区分）、甲斐の土器様式は盆地内部の小地域単位でやや複雑な様相を見せるようである。中部高地系を主体とする県北西部、韮崎市以北と、駿河から東遠江地域の土器様式の影響を強く受けるその南部などなど、しかし甲斐盆地内にＳ字甕が散見できるようになると、ほぼ東海系土器群はそれまでの領域を無視し拡散することが指摘されている（中山1991）。弥生時代後期後半以降は基本的にはどうやら駿河湾からの南風が基軸に存在するようでもある。すると２期後半以降の東海系土器の流入の方向性は一貫した文化風の波に状して参入したものであり、こうした文化の参入の基本構造が想定できるようだ。ただ大きな違いはその風が駿河・遠江をも貫く極めて強い東海からの強風であった点である。この点こそむしろ強調されるべきであろう。東海、伊勢湾沿岸部を源とする文化の影響が、むしろ直接的な形でそこに存在する。

ではこうした東海系土器の影響、いや定着によって甲斐の文化はどのように変化していったものであろうか。この点もすでに指摘され、整理されつつある。

まず集落遺跡であるが、２ａ期には「盆地内の沖積地や谷部を臨む位置にある集落…それ以前と比較して極めて高い」地点に立地する場合が多い点や、竪穴住居の被火災住居の占める割合が高く、２期に集中する点が指摘されている（中山1993）。さらに竪穴住居のプランが小判形・隅丸方形から方形プランに２ｂ期を境に大きく変化することも報告されている（中山1993）。こうした点を総合すると明らかに、中山誠二が指摘するようにＳ字甕に代表される東海系土器の参入は文化的な大きなインパクトをもって甲斐盆地に受け入れられた点は否定できないようだ。

さて次に大変興味深い問題である墳墓についてであるが、まず注目したいのが、中道町の上の平遺跡であろう。標高330mの台地上に展開する124基の「低墳墓」が確認されている。そしてその内部は４つの群より構成されており、より広範囲な集団による経営を想定する見解が報告されている（山中1989ａ）。編年的には２・３期にかけての造営と考えられている。さて近年では盆地内部で、前方後方系に属する墳丘墓の発見が増加している。Ｂ１型と思われる墳丘墓を中心にであるが、例えば三珠町上野遺跡・姥山遺跡・甲府市榎田遺跡そして坂井南遺跡からも確認されている。その内容の特徴はまず第１に、東海地域に散見できるようなＢ１型による安定した墳墓形態をとるものは未だ確認されてはいない。つまり墳丘墓群の中にわずかに点在する。特定の階層が全て前方後方型墳丘墓である事例は確認できず、全周型の墳丘墓が主体ではあるようだ。さらに上野遺跡以外では規模的にもあまり大小の特徴は見出し難い。第２にその出現は明らかに甲

斐３期に中心を置く。おそらく廻間II式期に併行する段階と思われるが。坂井南遺跡や上野遺跡のものからＢ型墳の甲斐盆地での出現は３期、あるいは坂井南遺跡の１号墳と２号墳の在り方を踏まえると２期に遡る可能性が高いものと考えておいて間違いなかろう。すると前方後方系の墳丘墓の甲斐地域での登場も、上記した土器様式の画期と連動する動きとして解釈できる。ただし現状では墳形の激変は想定できず、単発的ではある。

甲斐盆地における２期の画期は、土器様式・集落形成・墳丘墓の形などなどの変化を伴っていることはまず間違いないものと思われる。したがって東海系土器の参入とその後の定着は、甲斐における東海系文化そのものの定着と理解しておいてよい。つまりその文化の担い手たち（一定の集団・人々）が移り住み、甲斐の風土と伝統的な社会に同化していく軌跡である。しかしながら、文化的な変革を実現しえたのは、あくまで甲斐盆地の伝統的地域社会の担い手たちであり、東海系はその契機をつくったにすぎない。

ただ１期の中にすでにその萌芽的な内容が認められるようにも思われるが、これは南からの風が吹きはじめる時期とその風に乗って東海からの強風が吹き付けた時期の違いのようにも感じられる。ではその東海系土器とはどのような波及原理をもつものなのであろうか、以下簡単にまとめておこう。

３．東海系文化の波及

ここでいう東海系とは濃尾平野低地部を中核とする伊勢湾文化を意味するものであり、駿河・東遠江地域をも包括するものではなく、除外している。２世紀中ごろを境に濃尾平野低地部の土器様式が周辺の東海地域に広く影響を与えはじめる。山中式中期から後期への移行段階である。その後、２世紀後葉になると伊勢湾には廻間様式が誕生し、より広い地域に影響を与えはじめる。と同時に墳墓においても前方後方型の墳丘墓が広く伊勢湾岸地域に定着することにもなる。各遺跡の共同体墓の中で階層的に前方後方型墳丘墓が造営されていく。また特定個人墓は弥生中期の末葉段階には、遅くても集落内から隔絶していく様子が読み取れる。そしてこうした墳丘墓の大型化は一般の集落内にも波及し、３世紀第１四半期には愛知県尾西市の西上免遺跡の事例のような40mクラスの前方後方墳を一般集落内において造営させている。こうした濃尾平野を中核とするまとまりある文化は、３世紀第２四半期の中で、日本列島に広く拡散していく瞬間を迎える。多くの人々が集団・集落から解き放たれて流動化し、東海系文化が主に東日本社会にもたらされる。（伊勢湾沿岸部の各小地域社会単位で多様であるが）その考古学的な内容は東海系土器・東海系木製品・前方後方墳などとなる。廻間II式期こそこうした動きが最も顕著に現れる。しかしながら廻間II式期には畿内地域と東海地域には極めて密接な関係が出来上がりつつある時代でもあった。（赤塚1996）

以上、東海系文化の波及はまず２世紀後半に山中式後期から廻間Ｉ式初頭にかけて濃尾平野低地部からその周辺部に影響をあたえる動きが見られる（赤塚1993）。その余波は遠江・駿河から相模・東京湾沿岸部に見い出せる。その後にこうした動きの沈静化にともなって東海から駿河湾・関東地域に独自の土器様式分布圏が表面化する。（この傾向はほぼ全国的）廻間Ｉ式４段階から

II式１段階にかけて東海系土器の第１次拡散期が開始される。この現象によりやがて東海系土器が主に東日本へ広がり、東京低地や高崎市周辺部には東海系土器そのものが定着することになる。東遠江や駿河においても同様である。したがって甲斐地域で確認できた上記の現象は第１次拡散期とした普遍化現象と考えて良いものと思われる。つまり遠江・駿河を貫いて吹き付けた強風の正体である。

前方後方墳やその後に広く定着する前方後円墳の時代への道筋はすでにこの段階、つまり３世紀第２四半期における強力な東海からのインパクトによって東日本社会に広がり、その受け皿を用意する。しかしながらすでに畿内や東海では２世紀後葉においてこうした墳丘墓の形態は定型化されているのではあるが。また環濠はすでに弥生後期初頭に廃棄され、（濃尾平野以外では後期後葉）新たな枠組みが急速に整えられつつある。集落の構造も同様であった。古墳時代への胎動は２世紀後半にはじまっている。

甲斐地域の１期はまさに山中式後期から廻間Ｉ式初頭におきた動きに呼応する新たな動きであり、２期後半期にあるＳ字甕に代表された東海系文化の流入と定着は後者である第１次拡散期そのものの影響と考えてよいものであろう。こうした段階的な変遷を経て甲斐の社会は古墳時代へと加速化する。その萌芽はすでに１段階の中にある。坂井南遺跡の成立が２期にありその後の遺跡の動向がまさしく３・４期にあると考えれば、集落の成立は東海系文化の担い手達の参画による、あるいはその動向に強く影響された伝統的社会の変革によってうみ出された集落遺跡であり、墳丘墓の造営であると思われる。

４．甲斐の古墳時代

甲斐地域の古墳時代を代表する大型古墳の造営は、主に盆地南東部に見られる。上の平遺跡を嚆矢とする、大型古墳群の造営と曽根丘陵東山・米倉山周辺は大変魅力的な地域でもある。

さて甲斐銚子塚古墳の造営に代表される甲斐地域の大型前方後円墳の造営と、最古の古墳とされる前方後方墳としての小平沢古墳、そしてＢ型墳の存在を概観してみよう。甲斐地域も他の東日本社会に基本的に見られるような前方後方墳から前方後円墳への墳形の変化が指摘され、評価をえているものと思われる。小平沢古墳は45mの前方後方墳で、主体部は不明瞭ながら斜縁二神二獣鏡と墳丘からはＳ字甕の破片が出土している。斜縁神獣鏡や獣帯鏡は、古墳時代初頭の墳墓に見られる事が多く、破砕鏡として副葬される事例が増加している。これらの諸点からは小平沢古墳が相対的に廻間III式前半期を降ることは難しい。一応ここでは廻間III式前半期でもやや古い段階に位置づけておき、西暦300年前後の年代を考えておく必要があろう。一方で甲斐銚子塚古墳は、169mという東日本社会をまさに代表する前期古墳である点は、誰しも疑う余地はない。副葬品や墳丘に使用された埴輪などから考えて、その築造を松河戸Ｉ式期前半、布留中段階新相併行期におく事が可能と思われる。こうした考え方は従来の見解とも大きく矛盾するものではない。すでに指摘されている点に基づけば、甲斐銚子塚古墳の造営は、天神山古墳や大丸山古墳がやや先行し造営されたようでもある。すると甲斐銚子塚古墳をもって当地域の大型前方後円（後方）墳の造営は基本的には終結し、大型古墳はおおむね４世紀代に集中することになる。こうし

た動向は、美濃地域最大規模の前方後円墳である昼飯大塚古墳の造営をもって、大垣市周辺の大型前方後円（後方）墳の造営がおおむね収束する事例と類似する。甲斐の大型前方後円墳の造営目的を考える上で大変興味深く、また４世紀末葉での大型古墳の収束という点は、ある程度の普遍性が考えられる。

さて小平沢古墳に代表されるような甲斐の前方後方墳が未だ増加していないのはやや不可思議でもある。なぜならば坂井南遺跡の出現と同時に東海系文化が流入していると考えれば、30m～40mクラスの典型的な前方後方墳の造営は容易に推測できるものであり、それは千葉県や長野県などの事例を出すまでもない。甲斐におけるＢ型墳の点在は、現状では集落内の共同体墓の中の一形態にすぎない。ただ上野遺跡の事例のような大型化を想定するならば、東海地域のように階層的な墳丘墓の造営状況が想定できるようでもあるが。いずれにしろ３世紀に遡る前方後方墳の存在と、集落内の墓域における前方後方型墳丘墓の増加は、東海系文化の定着を前提にすれば保証されている。東海系文化の流入により、まず特定集落内に前方後方墳（前方後方型墳丘墓）が発現し、しだいに共同体墓内に定着する。この段階では小規模な前方後方型墳丘墓である場合が多い。やがて階層的な秩序の成就の中で、特定の個人墓として隔絶した前方後方墳が造営される。35から50mの規模を有する小型の前方後方墳が普遍化する。

小平沢古墳は現状では隔絶した造営形態をとり、鏡の所有を可能にした特定の個人墓として位置づけられる。おそくとも３世紀後葉段階ではすでに政治的なまとまりが急速に整いつつある事を教えてくれる。（1997年３月 脱稿）

参　考　文　献

赤塩　仁　1994「弥生時代後期から古墳時代初頭の土器様相」『七瀬遺跡・栗林遺跡』(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書19

赤塚次郎　1996「前方後方墳の定着」『考古学研究』第43巻第２号

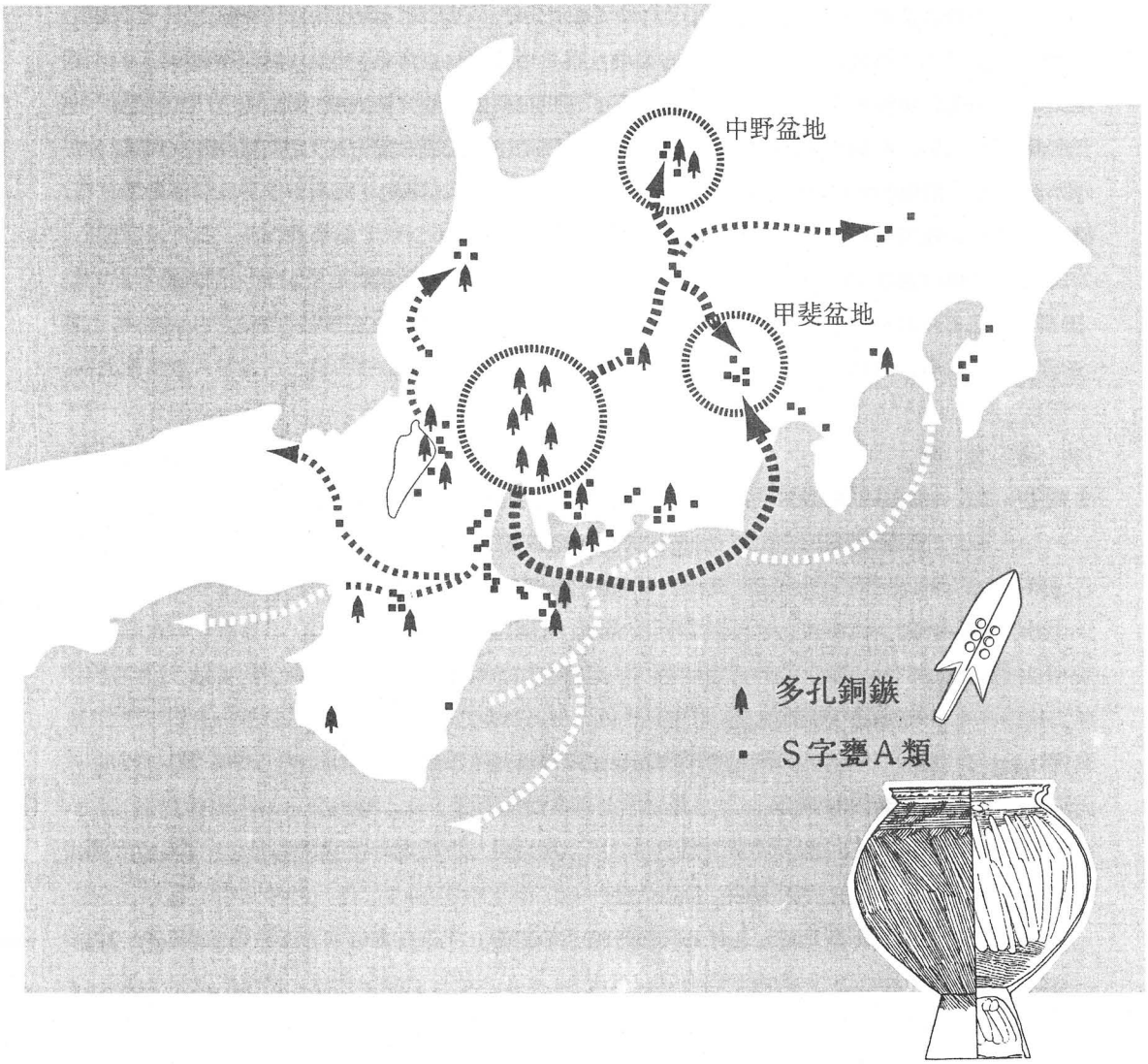
赤塚次郎　1993「山中式という名のデザイン」『考古学フォーラム』３

小林健二　1993「山梨県域の土器様相」『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会　新潟大会

中山誠二　1989「中部・関東地方の弥生集団墓の構成について」『山梨考古学論集』II山梨県考古学協会

中山誠二　1991「山梨県」『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器』第８回東海埋蔵文化財研究会　浜松大会

中山誠二　1993「山梨県域における集落・墳墓の概要」『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会　新潟大会



第91図　東海系のトレース（S字甕A類新段階と東海系銅鏃である多孔銅鏃の分布）

第Ⅵ章　ま　と　め

坂井南遺跡の発掘は、株式会社テルメックの変電所建設に伴い昭和57年(1982)に行われた調査を端緒とする。縄文時代の著名な遺跡である坂井遺跡が、本遺跡の沢を挟んだ北側に位置することから、坂井南を遺跡名としている。その後、テルメックは東京エレクトロン株式会社となるが、工場拡張や福利厚生施設建設、さらに駐車場整備に伴い昭和58年・60年に発掘調査が実施された。調査成果は、『坂井南遺跡』(1984年)・『坂井南』(1988年)の報告書にまとめられている。今回は、平成４年(1992)・５年・７年に東京エレクトロン株式会社の進入道路建設にかかり発掘調査された区域の報告となっている。坂井南遺跡の調査面積は延べ約28000㎡に及ぶ広大なものであり、６回にわたる調査のほか、個人住宅建設にかかり平成６年度に進入路東側に隣接した地点でも発掘調査を行っている。それは『坂井南（大原）遺跡』(1995年)として報告書にまとめられている。坂井南遺跡の発掘調査成果等の詳細は、本報告書やそれぞれの報告によって頂きたいが、ここでは、これまでにもたらされた坂井南遺跡の概要を述べてまとめにかえたい。

第１次調査では古墳時代前期の竪穴住居跡８軒、掘立柱建物跡２棟、特殊遺構１基が発見された。第２次調査では縄文時代中期の竪穴住居跡１軒、配石遺構１基、土坑６基、古墳時代前期の竪穴住居跡10軒、方形周溝墓４基、平安時代の竪穴住居跡７軒、土坑２基、溝状遺構３条が発見された。第３次調査では古墳時代前期の竪穴住居跡58軒、土坑２基、中世の集石土坑２基、溝状遺構１条が発見された。第４次調査では古墳時代前期の竪穴住居跡７軒、方形周溝墓５基、溝状遺構４条が発見された。第５次調査では古墳時代前期の竪穴住居跡３軒が発見された。第６次調査では古墳時代前期の竪穴住居跡13軒、方形周溝墓２基などが発見された。さらに坂井南(大原)遺跡からは、第４次調査３号周溝墓の南側周溝と方形周溝墓１基が発掘された。これらの調査では、合計で古墳時代前期の竪穴住居跡99軒、方形周溝墓12基となり、遺物も豊富な量が出土しており、当該時期の集落跡として良好な資料をもたらしている。

古墳時代竪穴住居跡の平面形は略小判形・隅円長方形・隅円方形などを呈し、基本的に四本主柱穴をもつ。規模は、最大一辺９ｍ前後、最小一辺４ｍ前後で、平均的なものは一辺５ｍ前後である。炉は枕石を伴う地床炉が主体で、埋甕炉もみられ、特殊なものとして粘土を敷いて片側に高まりをつくった炉が１例ある。内部施設としては凸堤を伴う貯蔵穴や、床面よりも一段高くなったベッド状遺構などが確認されている。一辺８ｍを越える大型の住居には周溝がめぐるものがある。方形周溝墓の規模は最大のものは一辺約18m、最小のものは一辺約９ｍ前後であり、方形の角の一箇所にブリッジをもつ形態のものが主体で、方形の一辺中央にブリッジをもつものが１例存在する。第３次調査までは、沢を挟み北側に方形周溝墓群、南側に住居群があり、集落と墓域が別々に形成されていた様相を示していたが、住居跡群の東側に調査が及んだ第４次以降では地続きに方形周溝墓が発見されており、集落と墓域のあり方に見直しが必要となっている。しかしながら東側方形周溝墓群の区域では、住居跡はその西側の住居群部分よりも希薄となり非常に少なくなるので、時間的な問題もあるが、集落がありその周囲に墓域がつくられるといった景観が想定できる。

出土した遺物は壺・台付甕・甕・高坏・器台・鉢・小型丸底土器・椀・甑・蓋・片口・手捏土器といった土器のほか、磨製石鏃・石包丁・砥石・編石といった石製品、紡錘車・小玉などの土製品があり、ガラス小玉、不明な鉄製品などがみられる。第３次調査の報告書では、Ｓ字状口縁台付甕の変遷を基軸に三段階の土器編年が提示されている。Ｓ字状口縁台付甕は濃尾平野に淵源をもつ特徴的な土器で古墳文化波及の指標のひとつとなっている。このほか外来系土器として、北陸系の甕やパレス壺と言われる東海地方西部（伊勢湾沿岸地域）に系譜がたどれる壺が出土している。

縄文時代の竪穴住居跡は径4.7mの円形で石囲炉をもち、壁際に柱穴がめぐる。中期後半の深鉢・鉢などが出土している。６基の土坑のうち３基からは中期の土器が出土している。配石遺構は、幅２m長さ６m程で、石器などが出土している。

平安時代の竪穴住居跡は、３m前後～４m前後の大きさの隅円長方形で東側にカマドをもつ。周溝・柱穴があるものもある。出土遺物は、土師器坏・甕、灰釉陶器碗・皿、鉄製紡錘車などとなっている。

中世の集石土坑は、東西約３m南北約２mの大きさで、出土遺物は、水滴・硯破片・五輪塔水輪と少ない。水滴は鉄釉で、美濃窯の大窯II期の古手で16世紀第２四半紀前半と位置付けられる。本遺構は墓壙の類であろう。

本遺跡は古墳時代前期の土器・編年・集落・墓制・祭祀等の諸研究に良好な資料をもたらしている貴重な例であり、重要な遺跡となっている。

おわりに

坂井南遺跡から発見された遺構と遺物は古墳時代の歴史を解明するうえで重要なものであるが、本報告は限られた作業のなかでなされたもので、報告部分では遺構と図面上に復元可能な遺物を抽出し呈示したにすぎない。遺構・遺物の詳細な検討等がなされず不十分な点は否めないが、本書が今後の調査・研究に資することができれば望外の喜びである。

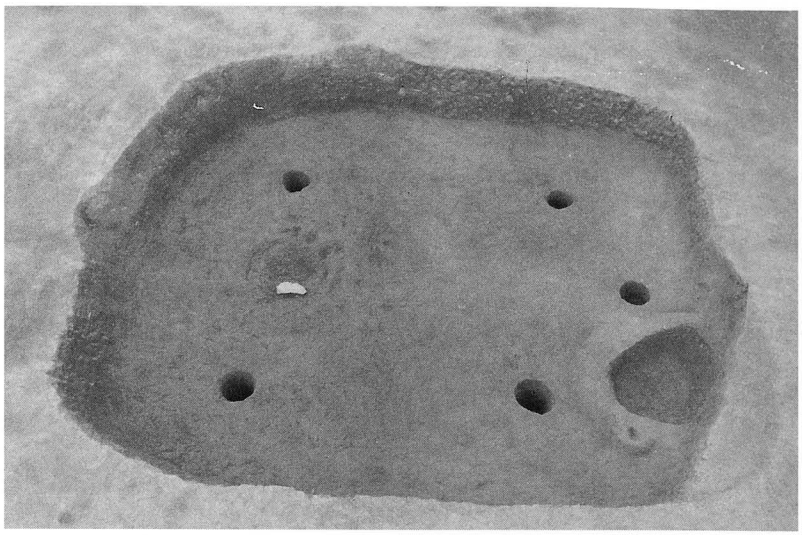
なお、東京エレクトロン株式会社による文化財保護の趣旨に対する御理解と、発掘調査における御協力によって、坂井南遺跡の発掘調査事業は無事に円滑に終了することができた。厚くお礼を申し上げる次第である。

写　真　図　版

1号住居址

2号住居址

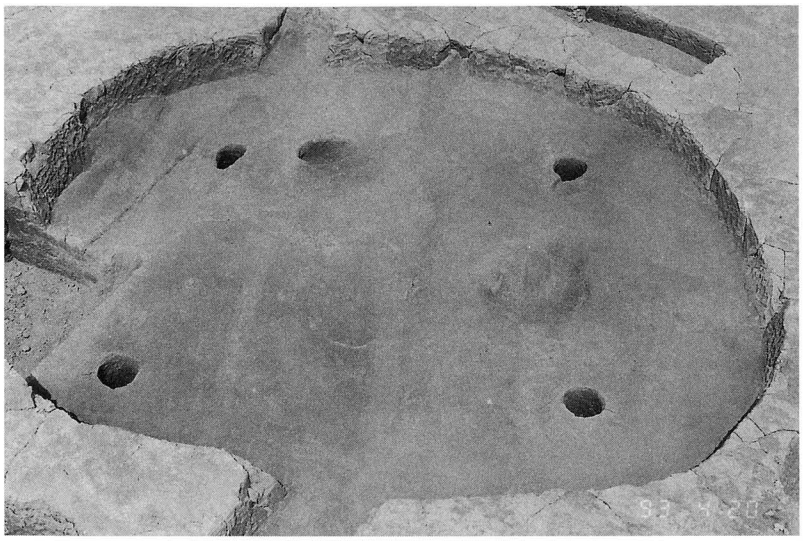
3号住居址



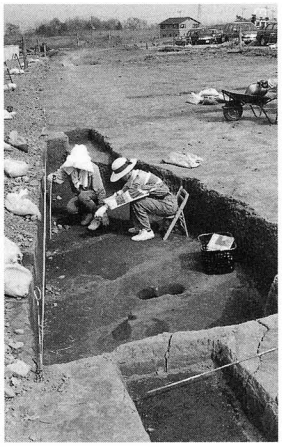
4号住居址

5号・6号住居址

7号住居址

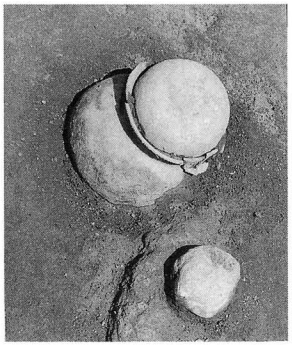


8号住居址



測量風景

9号住居址



遺物出土状態

10号住居址

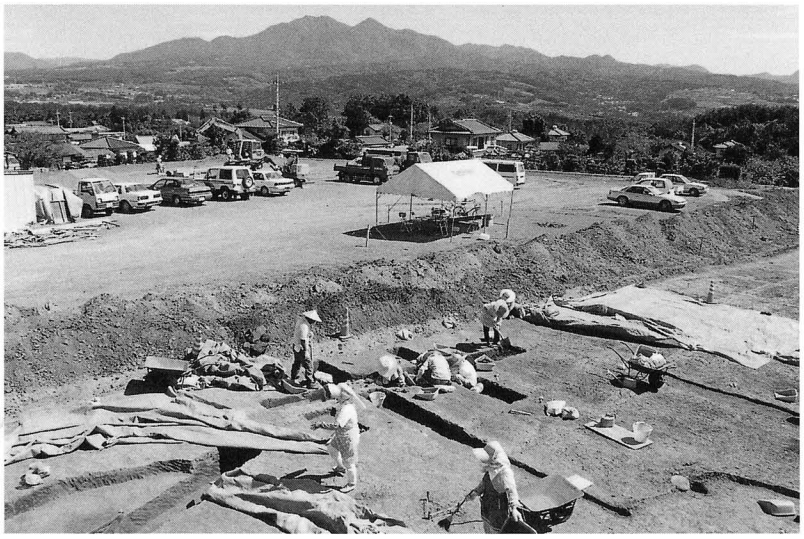
遺跡近景

11号住居址

12号住居址

12号住居址遺物出土状態

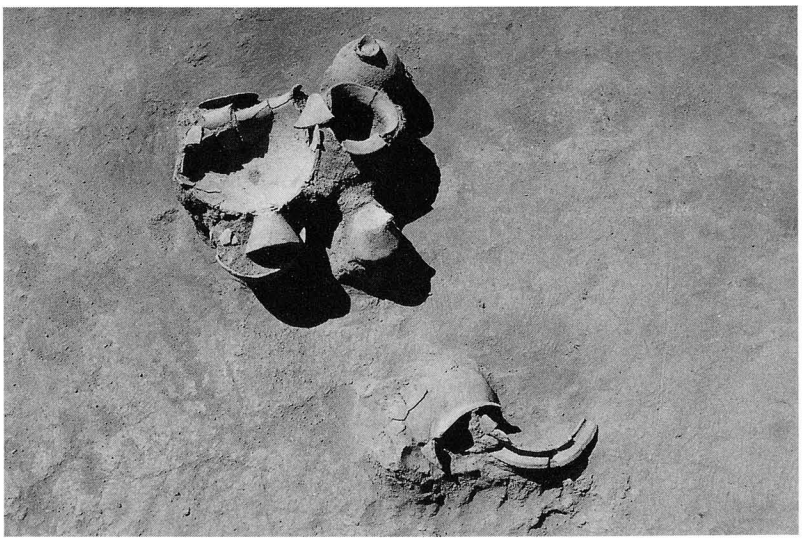
13号住居址



発掘風景

14号住居址

14号住居址遺物出土状態



14号住居址遺物出土状態

15号住居址・６号溝

16号住居址

17号住居址

18号住居址

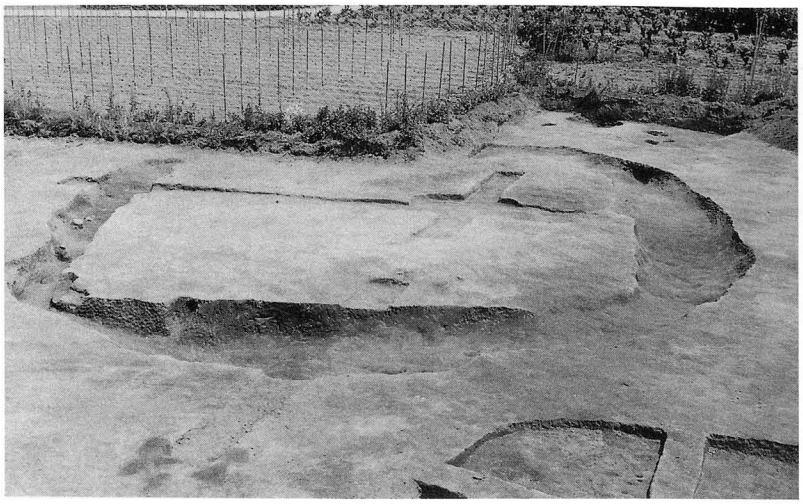
19号住居址

21号住居址

22号住居址

23号住居址

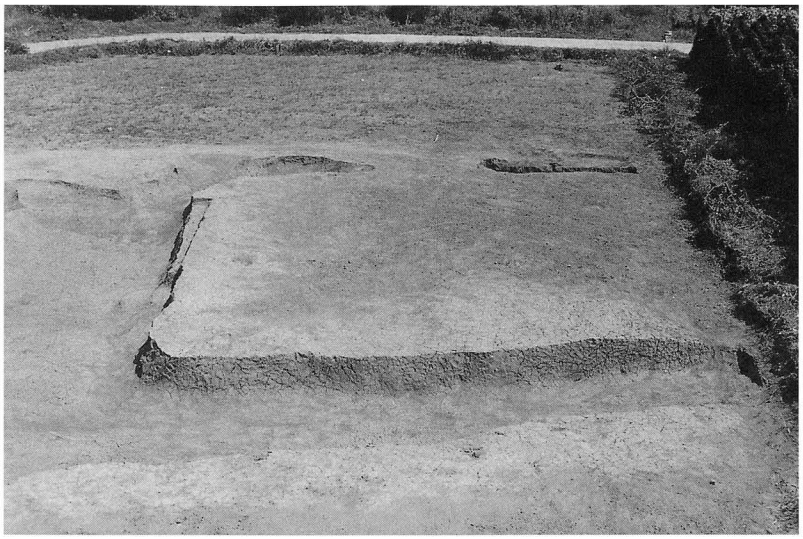
遺跡近景



1号周溝墓

2号周溝墓遺物出土状態

2号周溝墓

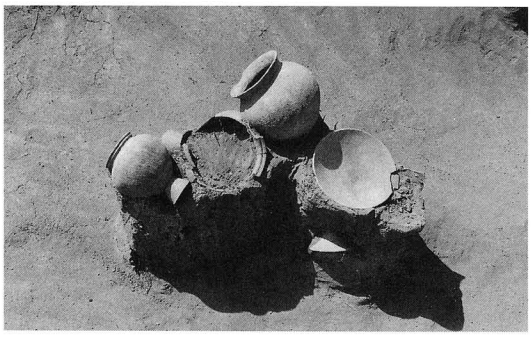


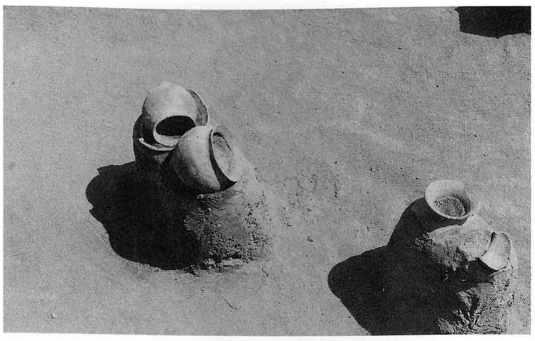
3号周溝墓

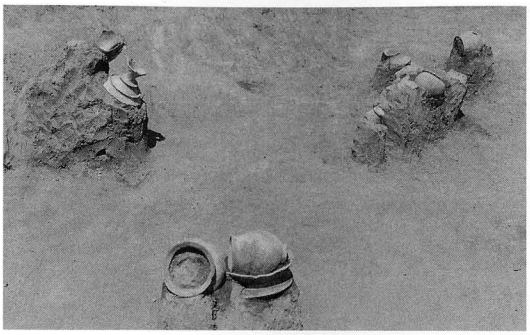
発掘風景

4号周溝墓

5号周溝墓・3号溝





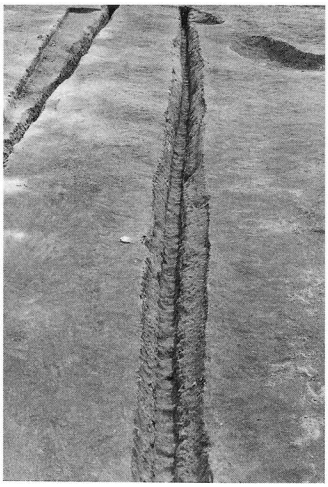


4号周溝墓遺物出土状態

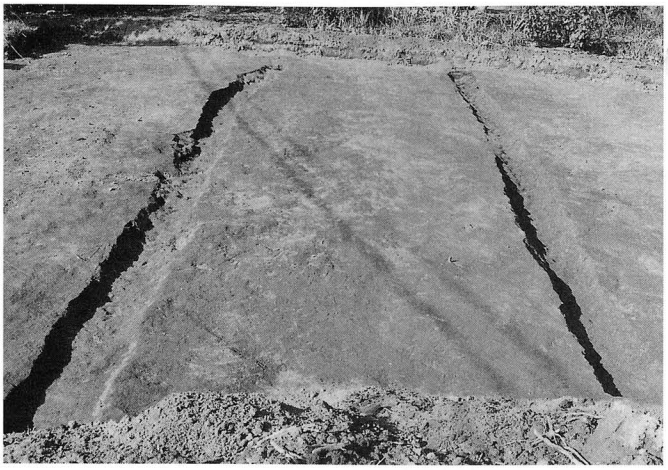
遺跡近景

6号周溝墓

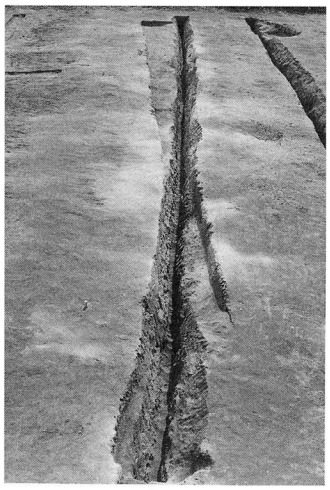
7号周溝墓・7号溝・8号溝



1号溝



4号・5号溝



2号溝

1号土坑

測量風景

5

6

7

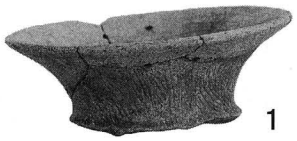
9

10

11

12

1号住居址出土遺物

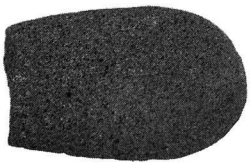

1

2号住居址出土遺物

3

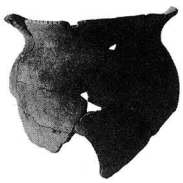
10

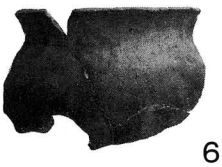
11


12

5号住居址出土遺物

1


5


6

7

19

20

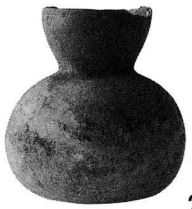
7号住居址出土遺物

3

8号住居址出土遺物

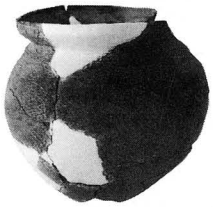
1 2 3

9号住居址出土遺物



2

3



9

11

14

15

16

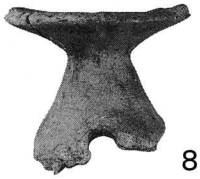
17

10号住居址出土遺物

1

2

7



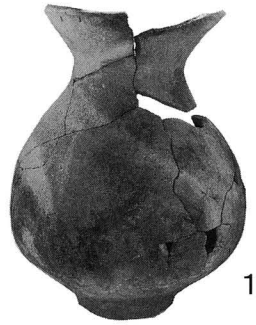
8

18

13

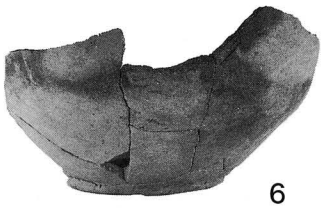
14

11号住居址出土遺物


1

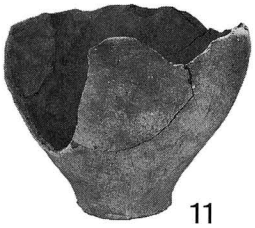
4

5

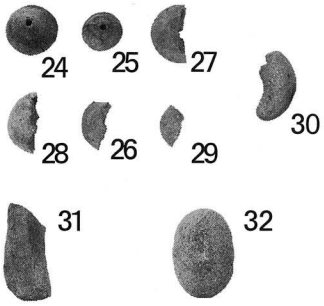

6

9

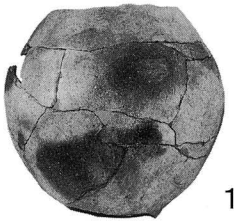
10


11

12



12号住居址出土遺物


1

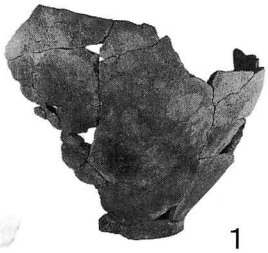
15号住居址出土遺物

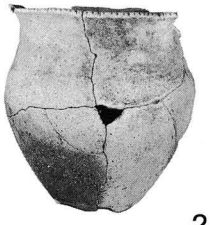
1

16号住居址出土遺物

8

17号住居址出土遺物


1

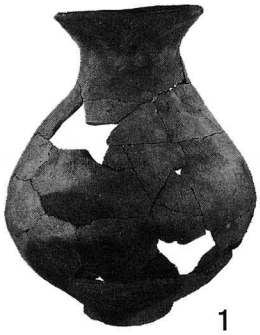

2

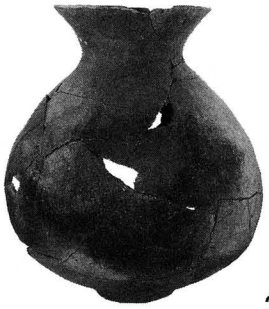
18号住居址出土遺物

4

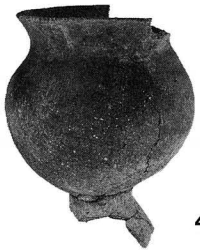
9

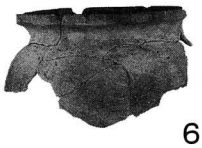
19号住居址出土遺物

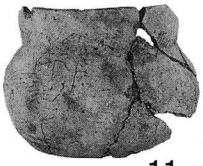

1


2

3


4


6


11

14

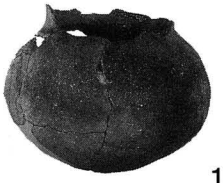
19

5

20

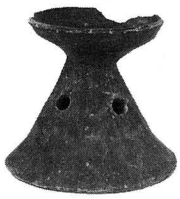
27

14号住居址出土遺物


1

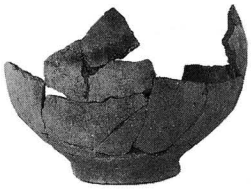
3

石器1


4

6

22号住居址出土遺物


2

23号住居址出土遺物

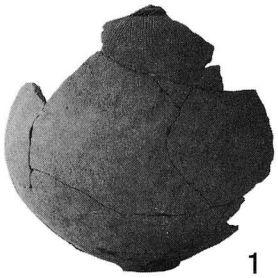
1

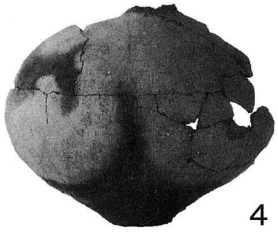
2

7

8

1号周溝墓出土遺物

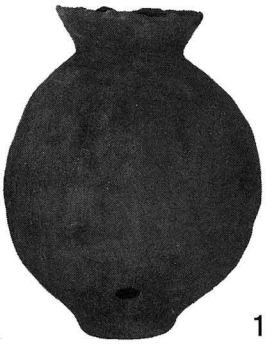

1

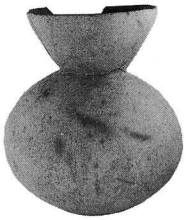

4

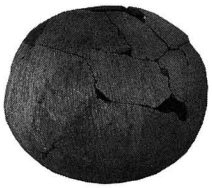
6

7

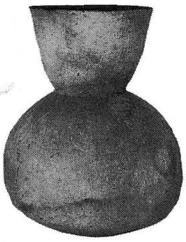
13


10


11


16

41


12

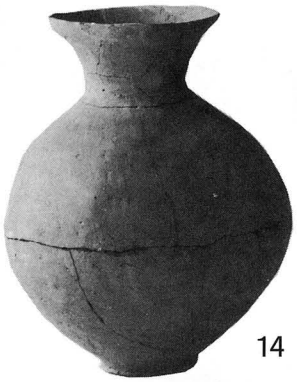
8

24

2号周溝墓出土遺物

5

11


14

17

18

19

20

22

23

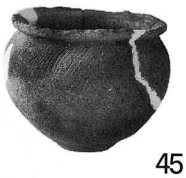
24

25

26

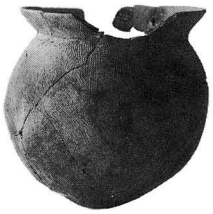
43

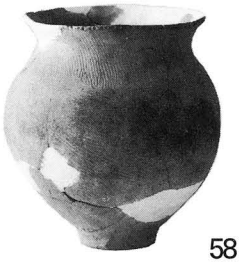
42


45

4号周溝墓出土遺物

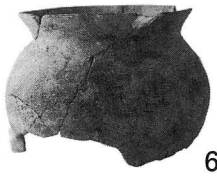
47


57


58

59

62


63

73

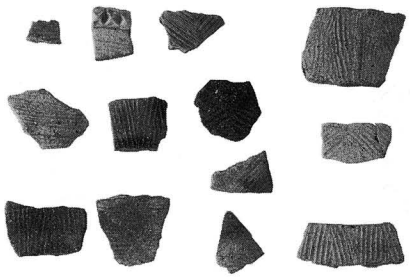
74

75

78

90

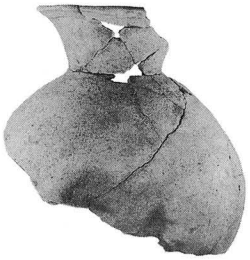
4号周溝墓出土遺物



5号周溝墓出土遺物

3

6号周溝墓出土遺物

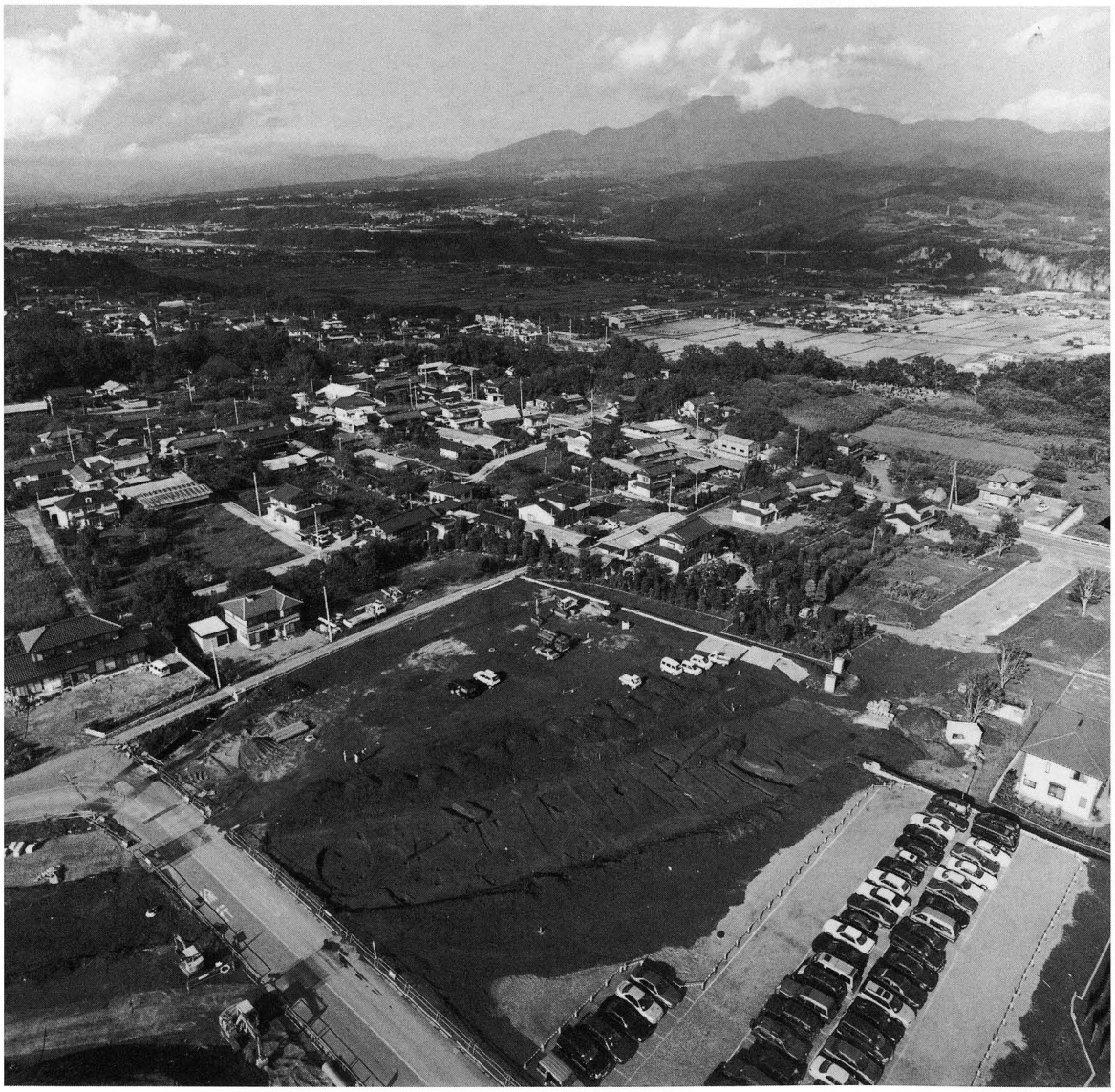

2

12

7号周溝墓出土遺物

9

遺構外出土遺物



遺跡空中写真（平成7年度）

坂井南遺跡 Ⅲ

－東京エレクトロン株式会社進入道路建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成９(1997)年３月25日印刷
平成９(1997)年３月31日発行

発　行　韮崎市教育委員会
韮崎市遺跡調査会

〒407-8501
山梨県韮崎市水神１－３－１
TEL 0551-22-1111(内250)

印　刷　有限会社 タクト